

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XVI

平成14・18年度大阪市営長吉六反住宅建設工事にかかる発掘調査報告書

2008.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XVI

平成14・18年度大阪市営長吉六反住宅建設工事にかかる発掘調査報告書

2008.3

財団法人 大阪市文化財協会



NG02－9次調査地全景(北西から)

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XVI

平成14・18年度大阪市営長吉六反住宅建設工事にかかる発掘調査報告書

2008.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は、2002年度と2006年度に行った大阪市営長吉六反住宅建設工事にかかる発掘調査の成果をまとめたものである。

長原遺跡は東西2km、南北2.5kmに及ぶ広大な遺跡であり、地点によってさまざまな表情がある。西側にある瓜破台地の縁辺には、古墳時代に小規模な古墳が200基以上も造営され、飛鳥時代以後は現代にいたる水田地帯となった。

これに対し、本書で報告する遺跡の北東部はこの時期はずっと低湿地のままであった。今回の調査でも、旧石器をはじめ人間の生活の痕跡は少なからず垣間見ることができるが、絶えず自然の河川に翻弄され、安定して人が住めるような環境ではなかったことが明らかとなつた。しかし、奈良・平安時代になると、人々は定住を試み始めた。この地に建物を建て、畠を耕し、水田を営んだのである。残念ながら、見つかった建物は短期間のうちに終わっているが、隣の調査地では鎌倉時代の耕作地が見つかり、人々の生活がこの地に根付き始めたことを窺わせる。現在では建物が並び、道路が整備されてその面影はないが、一昔前、このあたりに拡がっていた田園風景は、ここにそのルーツを見出すことができる所以である。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に当ってご尽力を賜った、大阪市都市整備局（調査当時は大阪市住宅局）、および地元住民の皆様をはじめとする関係者各位に心より感謝の意を表したい。

2008年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇田 修

例　　言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が2002年度と2006年度に実施した、大阪市住宅局(調査当時、現・都市整備局)による平野区長吉六反1丁目(NG02-9・06-2次、NGは長原遺跡を示す)の大阪市営長吉六反住宅建設工事にかかる発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局(調査当時は住宅局)が負担した。
- 一、発掘調査は、NG02-9次については、当協会調査研究部調査課長京嶋覚(当時、現・文化財研究部事業企画担当課長)の指揮のもと、同調査課調査第2係(当時、現・文化財研究部)学芸員杉本厚典が行い、のちに同課(当時、現・文化財研究部)主任学芸員松本啓子がこれを引き継いだ。またNG06-2次については、当協会文化財研究部次長南秀雄の指揮のもと、文化財研究部学芸員小田木富慈美が行った。各調査の面積・期間などは第I章第2節表2に示した。
- 一、本書の編集は、南および文化財研究部長原調査事務所長積山洋の指揮のもと、松本が行った。執筆は松本、小田木、佐藤隆(文化財研究部事業担当係長)、絹川一徳(文化財研究部長原調査事務所所長代理)、小倉徹也(文化財研究部学芸員)、張京柱(当協会研修員、韓国釜山大學校大學院生)が担当し、文末に名前を明記した。
- 一、本調査の基準点測量・写真測量はNG02-9次調査はアジア航測株式会社に、NG06-2次調査は株式会社かんこに委託した。
- 一、本書で使用した遺構写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真は写房楠華堂に撮影を委託した。
- 一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料はすべて大阪市文化財協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡　　例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語については、[趙哲済1995]に準じる。また、本書における地層名は、調査現場における層序を用いている。なお、「長原遺跡東北地区の基本層序」(六反層序と通称する)との対比は[村元健一2003a]、「長原遺跡標準層序」(長原層序と通称する)との対比は[趙哲済2001]に基づき行っており(別表1・2)、本文中では長原層序の表記には「NG」を冠している。
2. 本書における遺構名の表記には、建物はSB、柱穴および小穴はSP、土壙はSK、溝はSD、堤防および土手や畦畔はSR、その他のものはSXをそれぞれ冠している。遺構番号は溝群など例外を除いて3桁の数字で表し、最初の数字は原則として遺構の属する現場層序の地層番号を付している。一例を挙げれば、第7層層準の溝は「SD7○○○」となる。また自然流路はNRで表記している。
3. 遺物には本書での通し番号を付している。ただし、石器遺物については遺物取上げ時の各個体に付された登録番号(R番号)を使用している。
4. 水準点はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP±○m」と記した。また、座標値は「世界測地系」に基づく。
5. 本書で用いた地層の土色は[小山正忠・竹原秀雄1996]の新版標準土色帖に従った。
6. 本書で用いた土器編年と器種名については次の文献に拠った。本文中では煩雑を避けるため、これら引用文献をそのまま都度提示することは割愛している。飛鳥・奈良時代の土器:[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器:[佐藤隆1992]、[尾上実ほか1995]。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査	1
第1節 調査の経緯と調査地の位置	1
1) 長原遺跡の位置	1
2) 既往の調査	2
第2節 発掘調査の経過と概要	7
1) NG02－9次調査	7
2) NG06－2次調査	8
 第Ⅱ章 NG02－9次調査の結果	9
第1節 基本層序	9
1) 層序の概要	9
2) 各層の特徴	9
第2節 遺構と出土遺物	20
1) 旧石器～縄文時代の遺物	20
i) 石器遺物の出土状況	
ii) 石器遺物	
2) 平安時代の遺構と遺物	25
i) 第4層の遺構と遺物	
ii) 第3層の遺構と遺物	
3) 各層出土の遺物	38
i) 第6層・第5層出土遺物	
ii) 第4d層出土遺物	
iii) 第4b・c層出土遺物	
iv) 第4a層出土遺物	
v) 第3b・c層出土遺物	
vi) 第3a層出土遺物	
vii) 第2b・c層出土遺物	
viii) 出土遺物からみた各層の年代	
第3節 小結	47
 第Ⅲ章 NG06－2次調査の結果	49
第1節 基本層序	49
1) 層序の概要	49
2) 各層の特徴	49

第2節 遺構と出土遺物	52
1) 飛鳥以前の遺構	52
2) 鎌倉時代の遺構と遺物	52
i) 第4bi層上面の遺構	
ii) 第4a層上面の遺構	
iii) 鎌倉時代の遺構出土遺物	
3) 豊臣期～江戸時代の遺構	57
4) 各層の出土遺物	57
第3節 小結	59
 第IV章 遺構と遺物の検討	61
第1節 火山灰分析	61
1) はじめに	61
2) 試料と分析方法	61
3) 分析結果	62
i) V1地点	
ii) V2地点	
4) 火山灰の対比	70
i) V1地点の火山灰の対比	
ii) V2地点の火山灰の対比	
第2節 長原遺跡における始良Tn火山灰層準下位の石器群について	73
1) 対象とする石器群について	73
2) 長原遺跡90-62次調査地NG14層出土石器群について	74
i) 石器群の出土層位	
ii) 石器群の遺物分布	
iii) 石器群の概要	
3) 長原遺跡02-9次調査地出土石器群との比較	86
4) まとめ	86
第3節 平安時代前期の長原	92
1) はじめに	92
2) 平安時代Ⅱ期とは？—これまでの成果をふまえて—	92
3) 平安時代Ⅱ期の集落分布	94
4) むすびにかえて	96
 第V章 総括	97
 引用・参考文献	103
 あとがき・索引	

英文目次・要旨

原色図版目次

- 1 NG02-9次調査(1)
上：NG02-9次調査出土の石器
下：NG02-9次調査出土の平安時代の土器
- 2 NG02-9次調査(2)
NG02-9次調査南壁(第9層以下)
- 3 NG02-9次調査(3)
上：7区地震の痕跡(南壁)
中：乾痕(第14層上面)
下：生痕(南壁第10・11層)

図版目次

- 1 NG02-9次調査 地層断面
上：南壁断面1(北から、7区第6層)
中：南壁断面2(北から、7区第7層)
下：南壁断面3(北から、7区第9層以下)
- 2 NG02-9次調査 旧石器～縄文時代の遺構面
上：第15層検出状況(西から)
中：旧石器の調査(北から)
下：石器出土状況(北東から)
- 3 NG02-9次調査 平安時代の遺構(1)
上：第3層上面全景(西から)
下：第3層上面の遺構(南西から)
- 4 NG02-9次調査 平安時代の遺構(2)
上：平安時代の建物SB301(南から)
下：平安時代の建物SB302・303(南から)
- 5 NG02-9次調査 平安時代の遺構(3)
上：平安時代の水田SX301・401(南西から)
下：平安時代の水田SX302・402(南東から)
- 6 NG02-9次調査 平安時代の遺構(4)
上：建物SB301の柱穴SP313(南から)
中：建物SB301の柱穴SP332(南から)
下：建物SB301の柱穴SP326(西から)
- 7 NG02-9次調査 平安時代の遺構(5)
上：建物SB301の柱穴SP311(南から)
中：建物SB301の柱穴SP337(南から)
下：建物SB301の柱穴SP330(西から)
- 8 NG02-9次調査 平安時代の遺構(6)
上：建物SB301の柱穴SP310(南から)
中：建物SB301の柱穴SP339(南から)
下：建物SB301の柱穴SP331(西から)
- 9 NG02-9次調査 平安時代の遺構(7)
上：建物SB301の柱穴SP335(南から)
中：建物SB301の柱穴SP340(南から)
下：建物SB301の柱穴SP333(西から)
- 10 NG02-9次調査 平安時代の遺構(8)
上：建物SB302の柱穴SP353(北から)
中：建物SB302の柱穴SP354(北から)
- 11 NG02-9次調査 平安時代の遺構(9)
上：建物SB302の柱穴SP358(北から)
中：建物SB302の柱穴SP360(北から)
下：建物SB302の柱穴SP356(北から)
- 12 NG02-9次調査 平安時代の遺構(10)
上：建物SB302の柱穴SP357(北から)
中：建物SB303の柱穴SP317(北から)
下：建物SB303の柱穴SP344(北から)
- 13 NG02-9次調査 平安時代の遺構(11)
上：建物SB303の柱穴SP319(南から)
中：建物SB303の柱穴SP343(北から)
下：溝SD307(南から)
- 14 NG02-9次調査 平安時代の層中遺物出土状況
上：第3b層遺物出土状況(1)(北から)
中：第3b層遺物出土状況(2)(北から)
下：第3b層遺物出土状況(3)(北から)
- 15 NG02-9次調査 後期旧石器時代の遺物
上：NG02-9出土石器遺物(表面)
下：NG02-9出土石器遺物(裏面)
- 16 後期旧石器時代の遺物(参考資料1)
- 17 後期旧石器時代の遺物(参考資料2)
- 18 NG02-9次調査 平安時代の遺物(1)
- 19 NG02-9次調査 平安時代の遺物(2)
- 20 NG02-9・06-2次調査 平安時代の遺物(3)
- 21 NG06-2次調査 地層断面
上：調査区東壁地層断面(南西から)
下：調査区東壁NR401断面(西から)
- 22 NG06-2次調査 飛鳥・鎌倉時代の遺構
上：中央トレニチ第6層上面検出状況(北から)
下：第4bi層上面遺構検出状況(北西から)
- 23 NG06-2次調査 鎌倉・江戸時代の遺構
上：第4a層上面遺構検出状況(北から)
下：第2b層下面・第3b層上面遺構完掘状況(北から)

挿 図 目 次

図 1 長原遺跡の地区割と周辺の遺跡	1
図 2 調査地周辺の既往の調査	3
図 3 調査区および現場周辺の状況	7
図 4 西壁断面図	10
図 5 南壁断面図	12・13
図 6 地層確認トレンチの位置と断面図	14
図 7 火山灰分析用試料採取位置	18
図 8 石器遺物出土位置(1)	20
図 9 石器遺物出土位置(2)平面分布・垂直分布	22
図10 旧石器～縄文時代の石器遺物実測図	23
図11 第4層の遺構平面図	25
図12 水田平面・断面図	26
図13 出土遺物実測図(1)	27
図14 第3層の遺構平面図	28
図15 第3層の遺構配置図(1)	29
図16 堀立柱建物SB301平面・断面図	30
図17 堀立柱建物SB302と周辺柱穴平面・断面図	31
図18 堀立柱建物SB303平面・断面図	32
図19 出土遺物実測図(2)	33
図20 第3層の遺構配置図(2)	34
図21 土壙SK301・柱穴SP301平面・断面図	35
図22 出土遺物実測図(3)	36
図23 出土遺物実測図(4)	37
図24 出土遺物実測図(5)	39
図25 出土遺物実測図(6)	40
図26 出土遺物実測図(7)	41
図27 出土遺物実測図(8)	42
図28 出土遺物実測図(9)	43
図29 出土遺物実測図(10)	44
図30 出土遺物実測図(11)	45
図31 NG02-9次調査の遺構の変遷(平安時代)	48
図32 地層と遺構の関係図	49
図33 調査地断面図	51
図34 第4bi層上面の遺構平面・断面図	53
図35 第4a層上面の遺構平面・断面図	54
図36 第2b層下面の遺構平面図	55
図37 出土遺物実測図	56
図38 調査地周辺における中世の自然流路検出状況	59
図39 磯砂泥の割合と粗粒シルト以上の粒度分布ヒストグラム・累計曲線(V1地点)	62
図40 鉱物組成・火山ガラスの形態・重鉱物組成・火山ガラスの屈折率(V1地点)	64
図41 磯砂泥の割合と粗粒シルト以上の粒度分布ヒストグラム・累計曲線(V2地点)	65
図42 鉱物組成・火山ガラスの形態・重鉱物組成・火山ガラスの屈折率(V2地点)	67
図43 大阪平野中央部の上部更新統～完新統における主要5火山灰層の標準的な岩石記載的性質	69
図44 長原遺跡東北・東南地区で見つかったおもな旧石器出土地	73
図45 長原遺跡周辺の地形	73
図46 NG90-62次調査地の地層と石器の出土状況	74
図47 NG90-62次調査地の石器遺物の分布	76
図48 NG90-62次調査地の石器(1)	78
図49 NG90-62次調査地の石器(2)	81
図50 NG90-62次調査地の石器(3)	82
図51 NG90-62次調査地の石器(4)	83
図52 剥片の長幅グラフ	86
図53 長原遺跡における平安時代の土器編年	93
図54 長原遺跡の集落の変遷(平安時代)	95

表 目 次

表 1 長原遺跡東北地区におけるおもな調査	4・5
表 2 今回報告する発掘調査の期間・面積など	7
表 3 西壁断面(図4)の岩相	11
表 4 NG02-9次調査の層序表	17
表 5 火山灰の岩石記載学的性質(V1地点)	63
表 6 火山灰の岩石記載学的性質(V2地点)	66
表 7 石器遺物集計表(その1-1)	88
表 8 石器遺物集計表(その1-2)	89
表 9 石器遺物集計表(その2-1)	90
表 10 石器遺物集計表(その2-2)	91

写 真 目 次

写真 1 SP407遺物出土状況(北から)	52
-----------------------------	----

別 表 目 次

別表 1 長原遺跡東北地区の基本層序	100・101
別表 2 長原遺跡の標準層序	102

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査

第1節 調査の経緯と調査地の位置

1)長原遺跡の位置

長原遺跡は大阪市平野区長吉長原・長原東・長原西・出戸・川辺・六反に所在する、後期旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。1974年に行われた地下鉄谷町線延長工事に伴う試掘調査を嚆矢として、長原遺跡調査会・大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター(現・財団法人大阪府文化財センター)・財団法人大阪市文化財協会によって発掘調査が行われており、遺跡の範囲は東西約2km、南北約2kmに及ぶ。現在、長原遺跡は8つの地区に区分され、それぞれ北・東北・東・東

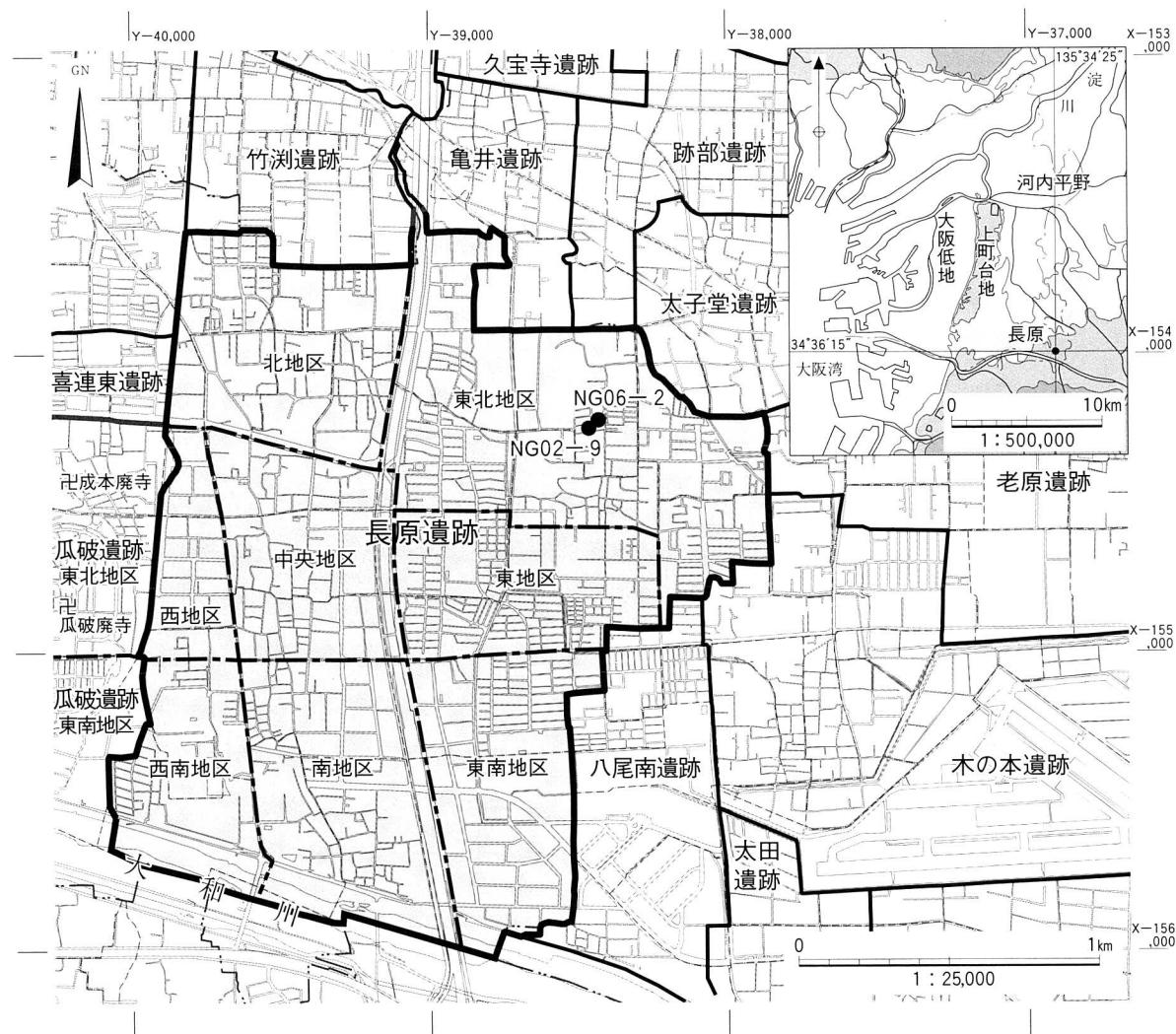


図1 長原遺跡の地区割と周辺の遺跡

南・中央・南・西・西南地区と呼称している(図1)。

本書で報告するNG02-9・06-2次調査は、大阪市営長吉六反住宅建設工事に先立って2002年度と2006年度に行った2期の調査である。両調査地はともに大阪市平野区長吉六反1丁目に所在する近接した場所にあり、長原遺跡では東北地区に位置する。東北地区は北と東で八尾市と接し、八尾市側には亀井・跡部・太子堂・老原・木の本・太田などの遺跡がある。長原遺跡の中で東北地区は低位段丘層以下が最も地中深くに埋没し、その上に沖積層が厚く堆積した地域であるが、今回報告する2つの調査地付近は東北地区の中では低位段丘層上面の標高が比較的高いところで、後期旧石器の出土も見込まれる地点であった。

2)既往の調査

長原遺跡東北地区の調査は、1978~85年に飛行場幹線特殊マンホール建設および近畿自動車道松原天理線建設工事に伴う調査が財団法人大阪文化財センターによって実施され、「城山遺跡」として報告された。その後、長原遺跡として、大阪市の下水管渠工事、電力管理設工事などに伴い、小規模な調査が断続的に行われた。1995年度以降、現在に至るまで、長原遺跡東北地区対象に行われた長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴って財団法人大阪市文化財協会により発掘調査が継続して実施されてきた(図2・表1)。

以下におもな調査成果について概略を述べる。

1983年度は、都市計画道路敷津長吉線の北側50mに位置するNG83-1次調査を行った。この調査では弥生時代前期のピット群、弥生時代中期の住居とみられる方形遺構、古墳時代中期の柱穴を含むピット群などが検出された。

1995年度は、都市計画道路長吉東部1号線予定地の北端部で調査を実施し(NG95-57次)、厚い洪水堆積層で埋まった古墳時代後期の敷葉工法によるとみられる土手状遺構や流路、飛鳥時代および平安時代の掘立柱建物などを検出した。

1996年度は、前年度調査地の南側において総延長42mにわたる調査を実施した(NG96-9次)。この調査では弥生時代後期から古墳時代初頭の水田、飛鳥時代の掘立柱建物などを検出した。また、同年度には大正川の西側に沿う都市計画道路長吉東部3号線予定地でも、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所・大阪市教育委員会文化財保護課の立会いのもと、2箇所の試掘調査を行った。その結果、古墳時代後期の厚い洪水堆積層が確認されたため、洪水層の下に存在する古墳時代以前の遺構・遺物の調査を目的として、現地表下4mまでを調査することとなり、長吉東部2号線との交差点の北側に当る部分でNG96-40・96-66次の2箇所の調査を行った。これらの調査で弥生時代後期の水田、古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物、平安時代の遺構群が検出された。

1997年度は都市計画道路長吉東部2号線予定地内のNG97-12・13・52次の3回の調査と、同長吉東部3号線予定地内のNG97-43次調査、同敷津長吉線予定地内のNG97-56次調査がある。NG97-12・52次調査地では、後期旧石器時代の石器製作址、縄文時代中期以前の流路、縄文時代中期～弥生時代前期の溝・土壙、弥生時代中期の水田、弥生時代後期～古墳時代前期の土壙・ピット、古

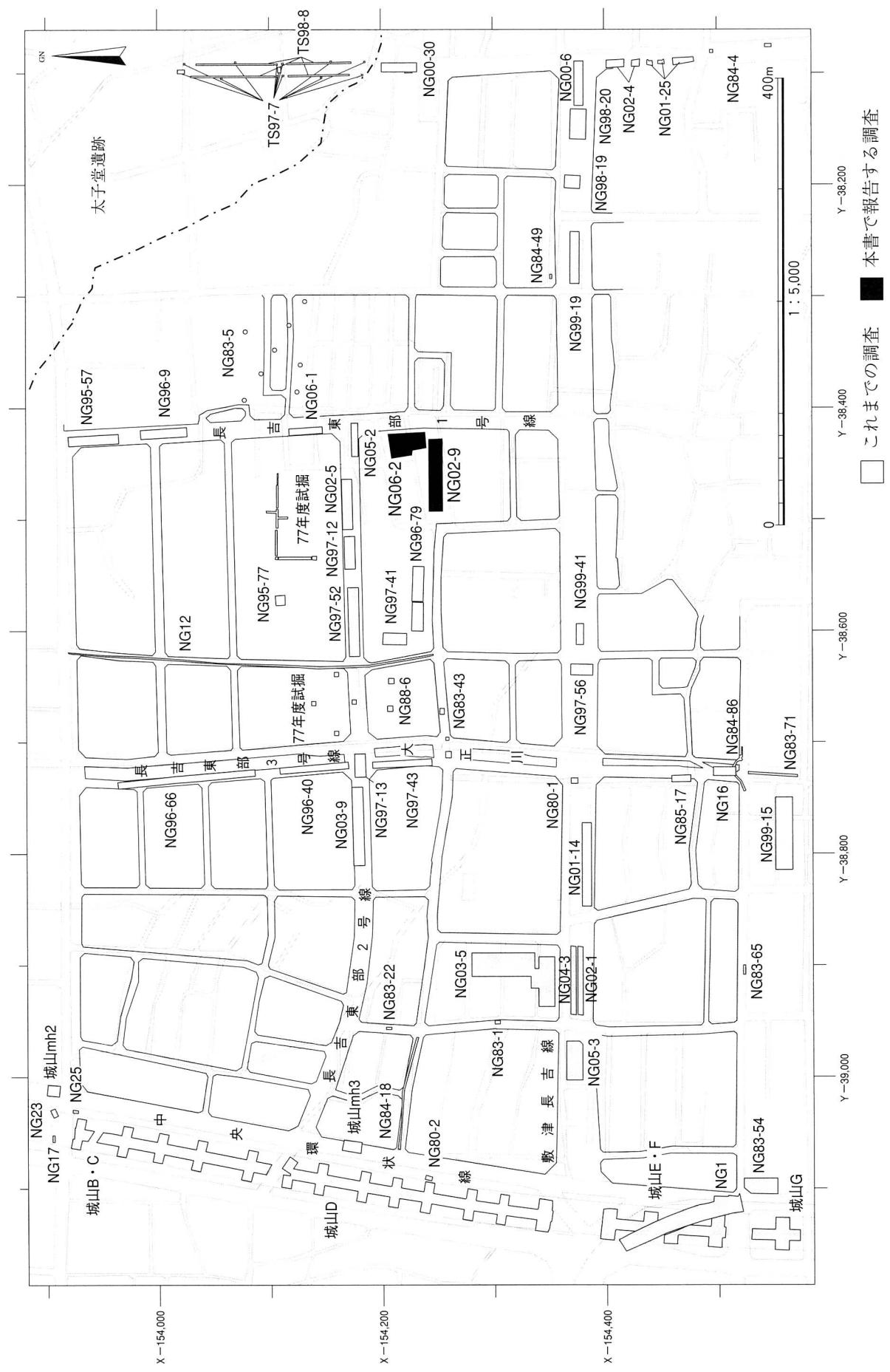


図2 調査地周辺の既往の調査

□ これまでの調査 ■ 本書で報告する調査

表1 長原遺跡東北地区におけるおもな調査(1)

調査	おもな内容	文献
城山mh2	弥生時代前～中期周溝墓状遺構、古墳	大阪文化財センター1980
城山mh3	弥生時代中期遺物、古墳時代大溝、奈良時代遺物	大阪文化財センター1980
城山B・C区	弥生時代中期方形周溝墓、古墳、飛鳥時代自然流路	大阪文化財センター1986a
城山D・E・F区	弥生時代中・後期集落、古墳時代中期水田・土壙、飛鳥～平安時代溝、中世水田	大阪文化財センター1986b
城山G区	弥生時代土壙群、飛鳥時代～中世水田	大阪文化財センター1986c
NG1	弥生時代中期溝・土壙墓、古墳時代中期溝、飛鳥時代大溝	大阪市文化財協会1978
77年度試掘	奈良時代溝	大阪市教育委員会ほか1978
NG12	飛鳥時代杭列・流路・土器溜まり、平安時代土壙	大阪市文化財協会1979a
NG16	弥生～古墳時代中期遺物、弥生時代溝、古墳時代前～中期溝・井戸	大阪市文化財協会1979b
NG17	縄文時代晚期・弥生・古墳時代後期遺物	大阪市文化財協会1979c
NG80-1	TP+7.2mで奈良時代溝、TP+6.9mで砂層(NG8層)	大阪市文化財協会1981a・2006b
NG80-2	弥生・古墳時代遺物	大阪市文化財協会1981b・2006b
NG23	弥生時代中期遺物、古墳	大阪市文化財協会1980・2006b
NG25	縄文時代晚期・弥生時代中期遺物	大阪市文化財協会1980・2006b
NG83-1	弥生時代中期住居、古墳時代中期住居	大阪市文化財協会1984a
NG83-5	TP+4.8mで砂礫層(NG8層)	大阪市文化財協会1984b・2006b
NG83-22	TP+7.6mで奈良時代包含層	大阪市文化財協会1984c
NG83-43	TP+7.8mで砂層(NG5層)	大阪市文化財協会1984d
NG83-54	TP+8.1mで砂層(NG5層か)	大阪市文化財協会1984e
NG83-63	弥生時代中期集落、弥生時代後期土器棺墓	大阪市文化財協会1984f
NG83-65	弥生時代中期遺物、古墳時代中期土壙状遺構	大阪市文化財協会1984g・2006b
NG84-4	古墳時代中期溝・土壙、飛鳥時代水田・古墳時代砂層なし	大阪市文化財協会1985a・2006b
NG84-18	TP+8.2mで泥質土層	大阪市文化財協会1985b・2006b
NG84-49	TP+7.3mで粗粒砂層(NG5層)	大阪市文化財協会1985c・2006b
NG84-86	弥生時代後期～古墳時代中期遺物、庄内期井戸・建物、古墳時代中期土壙	大阪市文化財協会1985d・2006b
NG85-17	縄文時代晚期遺物	大阪市文化財協会1986・2006b
NG88-6	TP+7.8mで砂層(飛鳥時代初頭の須恵器が出土)、飛鳥時代包含層・奈良時代溝	大阪市文化財協会1989・2006b
NG95-57	TP+8.2mで砂層(古墳時代後期中葉の須恵器が出土)、古墳時代後期柵・平安時代集落	大阪市文化財協会1998a
NG95-77	TP+8.0mで砂層(古墳時代後期前葉の須恵器が出土)、古墳時代後期柵	大阪市文化財協会1996b・2006b
NG96-9	弥生時代後期水田、TP+8.2mで砂層・飛鳥・平安時代集落	大阪市文化財協会1999
NG96-40	TP+7.5～8.2mで砂層・飛鳥～平安時代溝	大阪市文化財協会1999
NG96-66	弥生時代中期～庄内期遺物、TP+7.8mで砂層・古墳時代後期～奈良時代集落	大阪市文化財協会1999

墳時代中～後期の土手状遺構、掘立柱建物を含む飛鳥時代および平安時代の遺構群などが検出された。特筆すべきは後期旧石器時代の石器製作址で、14,000点に及ぶ剥片と、約50点のナイフ形石器や削器などの石器遺物が出土し、後期旧石器時代の石器製作技法を検討する上で重要な資料として注目された。

1998年度は都市計画道路敷津長吉線予定地内のNG98-19・20次調査がある。両調査では古墳時代中期の流路と盛土遺構を検出した。盛土遺構とその周辺から、祭祀に伴うと考えられる滑石製勾玉・白玉、土製勾玉や多量の土器が出土した。

1999年度は都市計画道路敷津長吉線予定地内のNG99-19・41次の2箇所の調査がある。NG99-41次調査では縄文時代早期の土器集中部や縄文時代中期の土壙が見つかり、NG99-19次調査では縄文時代後期の炉跡と土器集積、古墳時代から弥生時代の水田、古代から近世にかけての水田や鋤溝群などが見つかった。

2000年度には都市計画道路敷津長吉線予定地の東端でNG00-6次調査を行った。東に隣接するNG98-20次調査で見つかっている古墳時代中期の盛土遺構と一連のものと考えられる盛土遺構のほか、平安時代の流路が検出された。また、遺構には伴わないが、重弧文軒平瓦をはじめとする古代の瓦や

表1 長原遺跡東北地区におけるおもな調査(2)

調査	おもな内容	文献
NG96-79	旧石器・縄文時代遺物、弥生時代後期～庄内式期遺構、飛鳥・平安時代遺構	大阪市文化財協会1997
NG97-12	旧石器時代遺物集中部、縄文時代遺物、古墳中期時代木製品、飛鳥時代竪屋・掘立柱建物	大阪市文化財協会2000a
NG97-13	古墳時代自然流路、平安時代溝	大阪市文化財協会2000a
NG97-41	縄文時代晚期～弥生時代前期流路、弥生時代中期溝、古墳時代水田、奈良～平安時代遺構	大阪市文化財協会1998b
NG97-43	弥生時代後期溝、古墳時代自然流路、飛鳥時代溝・土壙	大阪市文化財協会2000a
NG97-52	旧石器・縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、古墳時代後期土手状遺構、飛鳥時代遺構	大阪市文化財協会2000a
NG97-56	縄文時代後期踏込み跡、平安時代土手状遺構	大阪市文化財協会2000a
NG98-19	古墳時代中期土壙状遺構・土師器・須恵器・玉類・製塙土器	大阪市文化財協会2001a
NG98-20	古墳時代中～後期流路、古墳時代中期土壙状遺構・堅穴建物、古代～中世耕地	大阪市文化財協会2001a
TS97-7	平安時代後期井戸、土壙	八尾市文化財調査研究会2000a
TS98-8	奈良～平安時代初期の小穴、中世井戸	八尾市文化財調査研究会2000b
NG99-15	縄文時代石器集中部、弥生中～後期・古墳中期集落、飛鳥時代耕地	大阪市文化財協会2002b
NG99-19	縄文時代後期土壙、弥生～古墳時代前期水田、平安時代～近世耕地	大阪市文化財協会2002a
NG99-41	後期旧石器時代遺物、縄文時代早～前期住居址、古墳時代前期水田、平安時代流路・土手	大阪市文化財協会2002a
NG00-6	古墳時代中期盛土遺構、古代溝、平安時代流路	大阪市文化財協会2003a
NG00-30	奈良時代ピット、平安時代土壙・流路	大阪市文化財協会2004a
NG01-14	古墳時代前期溝、古墳時代中期水田・溝群、飛鳥～奈良時代流路(墨画土器・獸骨出土)	大阪市文化財協会2004b
NG01-25	中世水田	大阪市文化財協会2004a
NG02-1	弥生時代中期集落、古墳時代畠状遺構、奈良時代流路	大阪市文化財協会2005a
NG02-4	古墳時代盛土、中世水田	大阪市文化財協会2004a
NG02-5	縄文時代中～後期土器、弥生時代前～中期溝・水田、古墳時代前期水田	大阪市文化財協会2005b
NG02-9	旧石器時代遺物、平安時代集落	本書
NG03-5	弥生時代中期方形周溝墓、古墳時代中期ウマの埋葬、古墳時代後期溝群	大阪市文化財協会2008a
NG03-9	弥生時代後期溝、古墳時代中・後期流路、平安時代集落	大阪市文化財協会2006a
NG04-3	弥生時代土壙・溝、古墳時代溝・飛鳥時代溝・奈良時代流路、平安時代溝・中～近世水田・島畠	大阪市文化財協会2007
NG05-2	流路、中世耕作地	大阪市文化財協会2008b
NG05-3	古代流路、古墳時代溝、弥生時代盛土・溝	大阪市文化財協会2008b
NG06-1	平安時代の耕作地	現在整理中
NG06-2	飛鳥時代の流路、中世の耕作溝	本書
NG06-3	古墳時代中期の堅穴建物	大阪市文化財協会2008a
NG06-4	弥生時代後期の堅穴建物とガラス玉	大阪市文化財協会2008a

和同開珎などの銅錢が出土した。

2001年度の都市計画道路敷津長吉線予定地内のNG01-14次調査は、古墳時代中期および平安時代後期の水田と、古墳時代後期から奈良時代にかけての流路が検出された。奈良時代の流路からは人面墨画土器・ミニチュア土器などの祭祀遺物や、ウシ・ウマの骨が大量に出土した。とりわけ大量の人面墨画土器は8世紀前半のもので、この祭祀形態の中では初期のものとして位置付けられる重要な資料である。

2002年度には都市計画道路敷津長吉線予定地内のNG02-1次調査と、都市計画道路長吉東部2号線予定地内のNG02-5次調査、そして本書で報告する大阪市営長吉六反住宅建設予定地内のNG02-9次調査がある。NG02-1次調査では、弥生時代中期の住居跡・井戸、古墳時代の溝群、飛鳥・奈良時代の流路などが見つかり、このうち飛鳥・奈良時代の流路からは人面墨画土器の破片や和同開珎が出土した。NG01-14次調査地の奈良時代の流路と一連のものと考えられる。また、NG02-5次調査では弥生時代前期～中期初頭の水田と、古墳時代前期の水田がそれぞれ見つかった。とりわけ弥生時代前期～中期初頭の水田は、長原遺跡東北地区の中ではもっとも古い時期の水田であり、付近のNG97-52次調査地でも弥生時代中期の水田が検出されていることから、長原遺跡東北地区における初期の水田は、この地域一帯に拡がっている可能性がある。

2003年度は都市計画道路長吉東部2号線予定地内のNG03-9次調査と、都市計画道路敷津長吉線の北側に隣接した位置にあるNG03-5次調査を行った。NG03-9次調査では、NG97-13・43次調査地で見つかった古墳時代中・後期の流路の続きが検出された。そして流路埋没後の平安時代には地下の伏流水に向けてここに井戸が設置されていた。NG03-5次調査では、弥生時代中期の方形周溝墓2基、古墳時代中期の溝、古墳時代後期の溝群、飛鳥時代から奈良時代前半の流路などが検出された。中でも古墳時代中期の木棺墓からは人骨ではなくウマの歯が出土しており、ウマの埋葬として注目された[辻美紀2005]。

2004年度は敷津長吉線予定地内のNG02-1の北隣でNG04-3次調査を行った。この調査では、弥生時代の溝や土壙、古墳時代の耕作溝、奈良時代の流路を検出した。おもな遺物には奈良時代の流路から出土した人面墨画土器や「十五束」と書かれた木簡などがあり、律令期の農村の様相をうかがい知る上で重要な資料となった。

2005年度には、本書で報告するNG02-9次調査地の北約70mの地点で行ったNG05-2次調査で、自然流路と中世の耕作地を検出した。

2006年度は、本書で報告するNG06-2次調査地から北へ約100mの地点で、NG06-1次調査を行い、中世の水田や人や偶蹄目の足跡、古墳時代の遺物、古代以前の地震痕跡などが見つかった。また、長吉出戸南市営住宅建設予定地内の2つの調査(NG06-3・4次)を行ない、NG06-4次調査で弥生時代後期の焼失住居やガラス玉を検出した。焼失した住居は当時の生活の様相をそのまま再現してくれる貴重な資料である。また、NG06-3次調査で古墳時代中期の竪穴建物や溝などが見つかった。この竪穴建物からは渡来人の影響をうかがわせる土器なども出土した。

これらの調査は、現地説明会や大阪歴史博物館の発掘速報展などの展覧会、各種講演会、財団法人大阪市文化財協会編集・発行の『大阪市文化財情報 葦火』などで、時宜、調査成果を公表している。また現在整理中のものを除き、表1のとおり各調査の報告書を刊行して調査成果を公表している。

(松本)

第2節 発掘調査の経過と概要

今回報告する調査は、大阪市営長吉六反住宅建設予定地で行った近接した位置にあるNG02-9次とNG06-2次の2調査である。以下にそれぞれの調査の経過と概要を記す(図3、表2)。

1) NG02-9次調査

調査地一帯は沖積地に位置しており非常に軟弱な地盤であるうえ、河川の厚い堆積層の下、現地表から約8m下あたりに旧石器時代の地面が見つかる可能性もあり、遺跡の全貌を調査するためには、シートパイルによる土留め工事を行って安全を確保する必要があった。工事車輛の通行や作業のための十分な空間を確保した上で、東西約64m、南北約12mの調査区を設定し、準備工を2003年3月10日から開始した。

準備工が完了した4月18日から重機掘削を開始した。現地表下約2.0mの近世までの地層を除去し

表2 今回報告する発掘調査の期間・面積など

調査次数	調査地番	面積	調査期間	担当者
NG02-9	平野区長吉六反1丁目	767m ²	2002年12月16日～2003年8月29日	杉本厚典、松本啓子
NG06-2	平野区長吉六反1丁目	603m ²	2007年1月9日～2007年3月23日	小田木富慈美

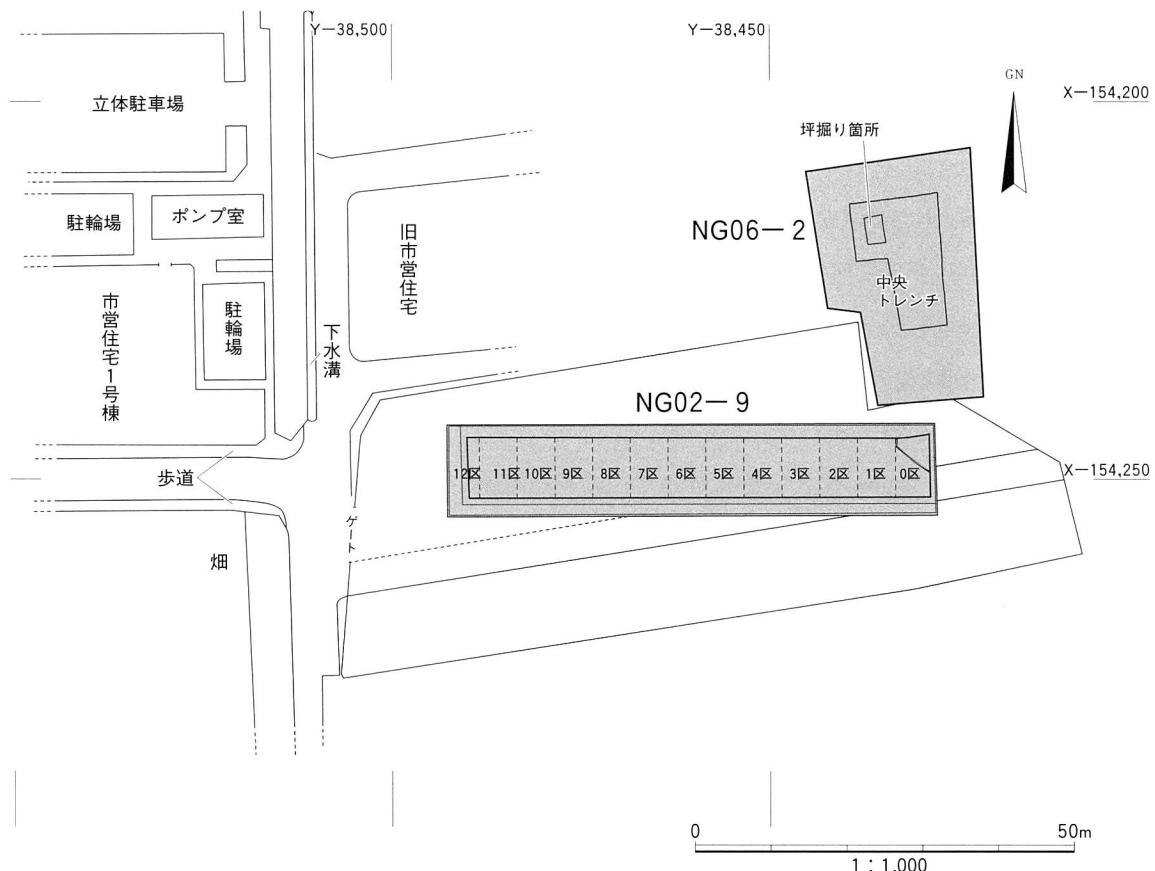


図3 調査区および現場周辺の状況

たのち、人力により第3層上面の平安時代前半の建物や耕作溝、水田といった遺構の調査を開始した。6月5日と同月10日に基準点測量を実施し、6月11日に検出遺構の写真測量を行った。第5層上面までの調査を完了したのち、6月21日から切梁を架設する土留め支保工事を行い、同月25日から第5層以下の約3.8mにも及ぶ水成層を重機により除去した。この間、壁面の保全などの安全に配慮しつつ慎重に作業を行い、断面の観察と遺物を確認しながら順次掘下げた。

途中、第9層まで掘下げた時点の7月14～16日に再度切梁を入れて土留めを補強し、第9層以下の地層を3箇所で試掘して、陸化した古土壤である第12層から第14層までのおおよその拡がりを確認した。結果、調査区の西半三分の一は各層とも東側に比べ、標高が高くなるとともに層厚が薄くなり、遺構・遺物の出土が見込めないことが判明した。そこで調査区東半三分の二に調査範囲を絞って、遺構・遺物の全容の把握に努めた。東端の試掘トレンチの第14層上面付近で石器遺物が検出されたため、碁盤目上に調査区を区切って地層を確認しつつ、石器遺物の検出を行った。7月31日にはこの面の写真測量を行った。また、年代についての情報を得るために、火山灰分析用試料を各層から採取して分析した(18頁の図7)。

8月4日に現地での調査を終えた後、引き続き埋戻し作業に入り、8月29日には機材撤去など、すべての作業を終了した。

(松本)

2) NG06－2次調査

調査地においては、市営住宅の建替工事に先立ち行われた試掘調査で、近世以前の地層の残存状況が良好であったため本調査が実施されることとなった。南西の敷地で行われたNG02－9次調査では、平安時代の居住地が確認されたほか、平安神宮火山灰層よりも下位で石器遺物が発見されている。今回の調査でも同様に平安時代の集落の検出が期待された。

調査は2007年1月9日に開始した。まず、現代盛土および現代作土を重機によって掘削し、近世の作土層以下は現地表下2.0mまでを人力で掘削した。各遺構面では平安～江戸時代の作土と耕作に伴う溝や畦畔、平安時代の自然流路などが検出され、陶磁器や土器類が出土した。これら調査区全域を対象とした面的な調査の後に、調査区の中央にトレンチを設定し、その内部で現地表下2.5mまで面的な調査を行った。この結果、下位に飛鳥時代の自然流路が存在することが判明した。湧水のためこれより下位は、トレンチの南西部で現地表下3.2mまでを坪掘りによって確認した。その間、適宜写真撮影と記録作業を行い、1月30日に基準点測量を、2月22日に写真測量を行った。

発掘調査に関する基本的な作業は3月14日に終了した。その後は埋戻しを行い、3月23日に現地での作業をすべて終了した。

(小田木)

第Ⅱ章 NG02－9次調査の結果

第1節 基本層序

1)層序の概要

調査地の現地表は西端でTP+10.0m、東端でTP+9.3mであった。平面調査は以下に述べる近世の地層である第2層を除去した第3層上面から開始し、順次、遺構面を精査して人力により掘下げた。なお、第5層以下、第11層までの河川による厚い堆積層は、遺構が検出される可能性が薄いことから、遺物の有無を確認しつつ、重機によって掘下げた。このため、第0～2層および第5～11層の記述は壁面観察をもとにしている。

2)各層の特徴(図4～7、表3・4、原色図版2・図版1)

第0層：コンクリートや碎石を含む現代の盛土層で、層厚は200cmほどである。

第1層：暗オリーブ色砂・礫混り粘土質シルトからなる現代作土層で、層厚は5～25cmである。

第2層：調査区全域に分布する近世の作土層である。大きくは3層に区分できる。第2a層は調査地全体に拡がる灰オリーブ色砂・礫混りシルトからなり、最大層厚は20cmである。第2b層は第2c層の周囲に堆積する作土層で、数回の積み直しが認められる。オリーブ褐～黄褐色の砂混り粘土質シルトを主体とする地層で、マンガンや酸化鉄の斑文が多く認められる。最大層厚は40cmある。第2c層は調査区東半で見られた島畠状の盛土である。オリーブ褐色砂混り粘土質シルトからなり、マンガン斑紋が顕著に見られた。層厚は55cm以下である。第2b・2c層から近世磁器243が出土した。長原遺跡東北地区の基本層序のRK2層と、長原遺跡標準層序のNG2層に対比される地層である。

第3層：平安時代前半の地層である。調査区の南東端・南西端に分布する水田作土の第3a層と、ほぼ中央に分布する盛土層の第3b層、両者を区切る土手状に盛った第3c層の3層に細分される。下位の第4層が調査区北半部で数10cm高くなっていて、直上には第2b層が堆積しているので、調査区北半部には第3層は分布しない。

第3a層は水田の作土層で、調査区の東端と西端に分布する。しかし、両者が直接繋がるところはないので、第3ae層と第3aw層に区分した。東側の第3ae層が灰オリーブ色砂混り粘土質シルトからなり、西側の第3aw層が灰オリーブ色砂混り粘土質シルトからなる。層中に多くの酸化鉄とマンガンの斑紋が見られた。最大層厚は第3ae層が30cm、第3aw層が40cmである。本層は第3b層の遺構と同時に機能したものである。

第3b層は灰オリーブ色砂混り粘土質シルトが主体の盛土層およびこれを耕起した作土層である。本層の上面で柱穴や土壙・水田・畠などの遺構を検出した。第3a層の範囲を除く調査区全域に分布する

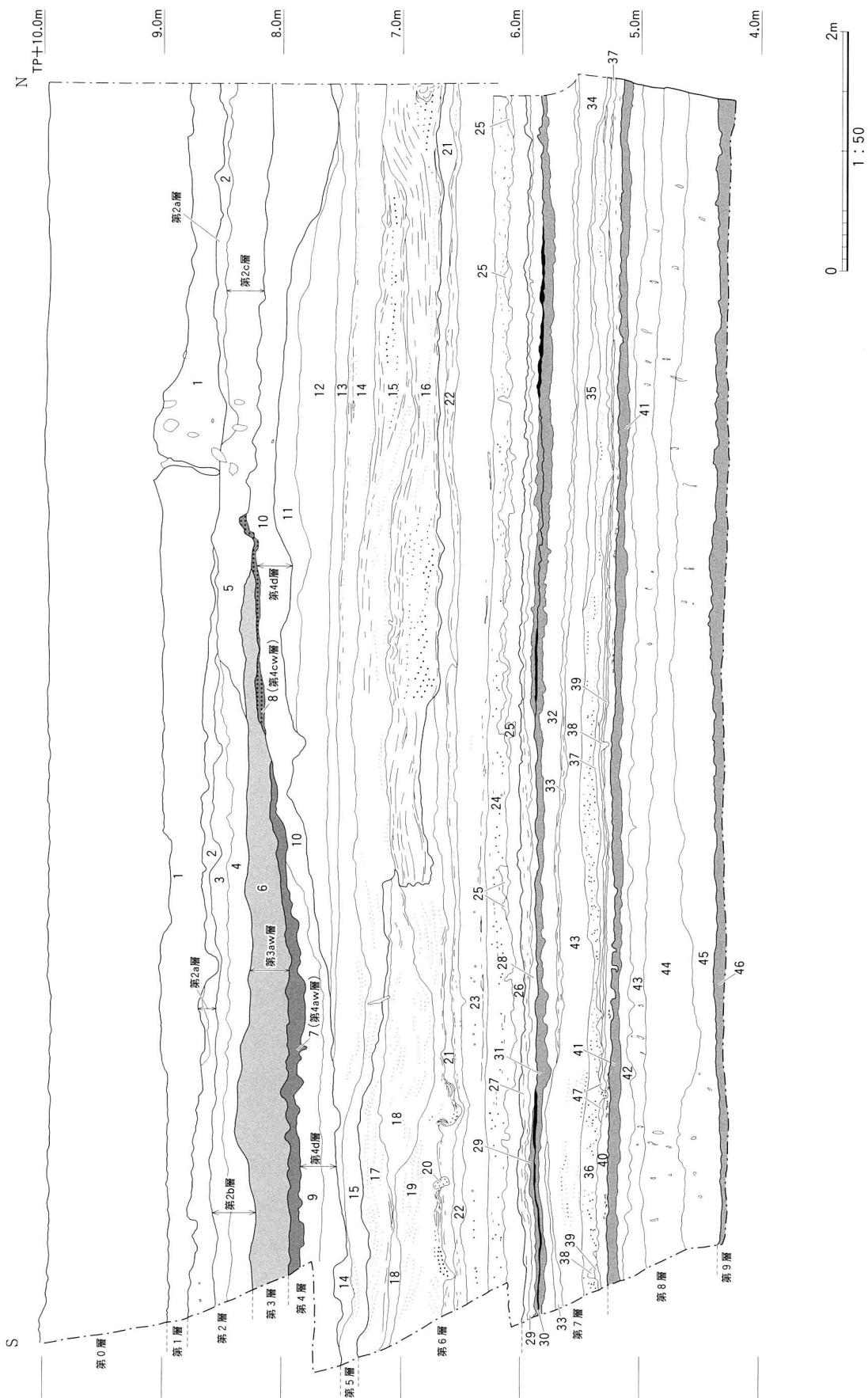


図4 西壁断面図

表3 西壁断面(図4)の岩相

1 : オリーブ灰色(10Y4/2)砂礫混り粘土質シルト[第1層]	22 : オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質粘土(木質が多い)[第6層]
2 : 暗オリーブ色(7Y4/3)粘土混り砂質シルト[第2a層]	23 : オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土[第6層]
3 : 灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト混り砂礫～砂礫混りシルト (マンガン斑紋少し)[第2b層]	24 : オリーブ黒色(7.5Y3/2)砂・粘土混りシルト(木質が多い) [第6層]
4 : 灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂混りシルト質粘土[第2b層]	25 : 暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト質粘土[第6層]
5 : 灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂混り粘土質シルト (マンガン斑紋あり)[第2c層]	26 : 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂・礫混り粘土質シルト (炭を含む)[第6層]
6 : 灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂混り粘土質シルト (マンガン斑紋多い)[第3aw層]	27 : 灰色(7.5Y4/1)砂混り粘土(炭を含む)[第7層]
7 : 灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂混りシルト質粘土 (鉄分多い)[第4aw層]	28 : 暗緑灰色(7.5GY4/1)砂混りシルト質粘土[第7層]
8 : 暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒砂混り粘土 (鉄分多い)[第4cw層]	29 : 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)砂・シルト混り粘土(炭を含む) [第7層]
9 : 灰オリーブ色(7.5Y4/2)極細粒砂混り粘土質シルト (鉄分・マンガン斑紋あり)[第4di層]	30 : 灰色(10Y4/1)粘土(水平摩擦による粘土)
10 : 暗緑灰色(10GY4/1)砂混りシルト質粘土 (鉄分を含む)[第4dii層]	31 : オリーブ黒色(10Y3/1)粘土[第7層]
11 : 暗緑灰色(10GY4/1)砂混りシルト質粘土(鉄分を含む)[第5層]	32 : 暗緑灰色(10GY4/1)砂混りシルト質粘土[第7層]
12 : 暗緑灰色(10GY3/1)シルト～粘土質シルト[第5層]	33 : 暗緑灰色(10GY4/1)粘土混りシルト[第7層]
13 : 暗緑灰色(5GY4/1)粘土混りシルト[第5層]	34 : 緑灰色(7.5GY5/1)シルト混り中～極細粒砂[第7層]
14 : 暗緑灰色(7.5GY4/1)細粒砂混りシルト質粘土[第5層]	35 : 暗緑灰色(10GY4/1)粘土混りシルト[第7層]
15 : 暗緑灰色(7.5GY4/1)粗～極細粒砂[第5層]	36 : 緑灰色(7.5GY5/1)、灰オリーブ色(7.5Y5/3)粘土混り砂礫 [第7層]
16 : 暗緑灰色(5GY4/1)粘土とオリーブ灰色(10Y5/2)粗～細粒砂 の互層[第5層]	37 : 緑灰色(7.5GY5/1)シルト質粘土[第7層]
17 : 暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト混り細粒砂[第6層]	38 : オリーブ灰色(5GY5/1)細粒砂混り粘土[第7層]
18 : 灰白色(10Y7/2)シルト[第6層]	39 : 灰色(10Y4/1)シルト混り粘土[第7層]
19 : オリーブ灰色(5GY5/1)粗粒～細粒砂[第6層]	40 : オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土[第7層]
20 : 暗緑灰色(7.5GY4/1)中粒砂(生痕?)	41 : 黒色(7.5Y2/1)粘土(炭粒が多く入る)[第8層]
21 : オリーブ黒色(7.5Y3/2)炭混り粘土質シルト[第6層]	42 : オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土[第8層]
	43 : 灰色(5Y4/1)シルト混り粘土[第8層]
	44 : 暗緑灰色(7.5GY4/1)細粒砂混りシルト[第8層]
	45 : 暗緑灰色(10GY4/1)シルト質粘土[第8層]
	46 : 黒色(5Y2/1)シルト質粘土[第9層]

地層である。耕起された作土層は随分こなれている。この状況は畠の畝間が密集する中央部において顕著であった。第3b層下面の畝間は第4層上面を削込んでいる。第3b層の最大層厚は30cmであるが、本層上面で検出した柱穴の残存状況からみて、本来、本層は30cm以上あったはずである。したがって本層上面の生活面はすでに失われていることになる。

第3c層は東西それぞれの第3a層の外側にある盛土層である。東側の第3ae層周辺の盛土が第3ce層で、にぶい黄褐色砂混り粘土を主体とする最大層厚20cmの盛土である。土手あるいは畦のような状態で南北方向に残るが、調査区中央あたりから北側は薄くなっていた。また、西側の第3aw層周辺の盛土が第3cw層で、灰オリーブ色シルト混り粘土が主体の盛土である。最大層厚は30cmで、やはり北に向って薄くなっている、西壁では第3cw層は見られなかった。

平安時代前半の遺物が第3層各層から出土しているので、第3層は長原遺跡東北地区の基本層序のRK4C層と、長原遺跡標準層序のNG4C層に対比される地層である。

第4層：作土層および水成層である。第3a層と同様に南東部と南西部に分布する水田作土の第4a層、ほぼ中央に分布する盛土の第4b層、水田の周囲を土手状に盛った第4c層、そしてこれらの下に、第4b・4c層の母材となった河成層の第4d層がある。第4d層上面の標高は、北半部は総じて高くTP+8.3m、南半部は南西端と南東端でもっとも低く、TP+7.8m、中央部でTP+8.1mである。北半部は第4d層の直上に第2層が堆積している。

第4a層も第3a層と同様に水田の作土層で、調査区東西両端に分かれて分布する。東端の第4ae層と西端の第4aw層に区分した。第4ae層はオリーブ褐色砂混り粘土層で、最大層厚は35cmである。第4aw層は灰オリーブ色砂・礫混り粘土層で、最大層厚は20cmである。

第4b層は調査区中央部の灰オリーブ色砂混り粘土質シルトを主体とした盛土層で、第3b層同様に畠の作土になっている。最大層厚は20cmあるが、上位の第3b層堆積時に削られ、失われているところ

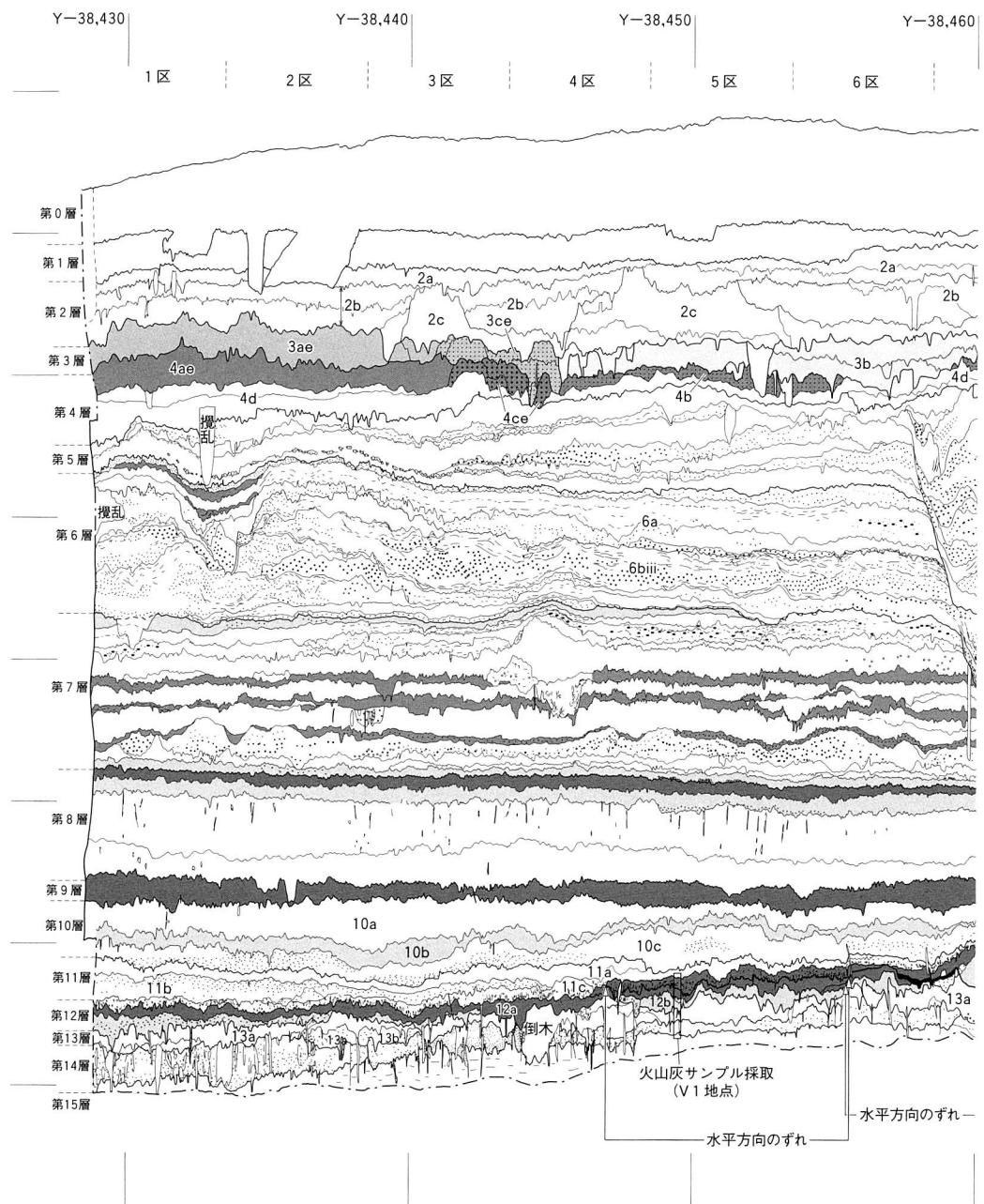


図5 南壁断面図(1)

ろもある。本第4b層の歓間が見つかった。本層は下面に歓間を伴っていた。

第4c層は第3c層と同様に水田に伴う盛土で、調査区南東部と南西部に分布する。黄褐色砂混りシルト質粘土の第4ce層と、灰オリーブ色砂・礫混りシルトの第4cw層に分かれる。ともにマンガンや酸化鉄の斑紋が見られた。最大層厚は第4ce層が10cm、第4cw層が20cmであった。第4c層はどちらも北に向って薄くなり、調査区北部では見られない。しかし、第4cw層が西壁中央に厚さ5~10cm、幅約1.8mにわたって残っており、第4aw層の周囲に分布したことがわかる。また、第4ce層も上位水田作土の第3ae層除去後の底面に、帯状にマンガンと酸化鉄の沈着部分(図11)があり、盛土(第4ce層)の痕跡と考えた。

第4d層は調査区全域で見られた水成の粘土層で、上部と下部に区分できる。

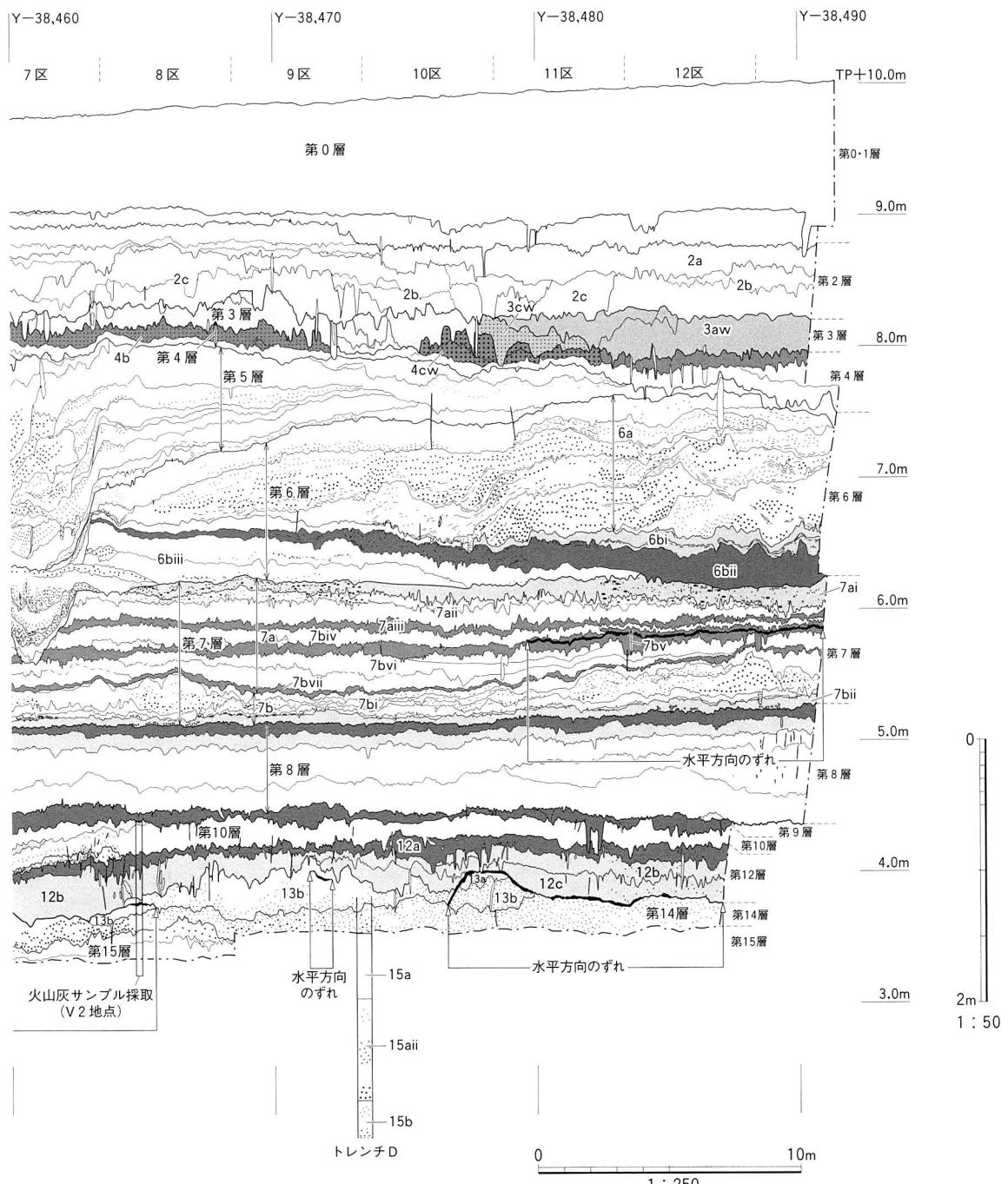


図5 南壁断面図(2)

第4d層は上面から0～20cmの間に、灰オリーブ色極細粒砂混りシルト質粘土の人為的な攪乱を受けている部分がある(第4di層)。第4di層の下は暗緑灰色砂混りシルト質粘土の水成層(第4dii層)である。調査区北半部と南半部の中央で下位の第5層が盛り上がっているため、第4d層の層厚は調査区内でかなりのばらつきがある。北西部がもっとも厚く、55cmある。また、もっとも薄いところは調査区南半部中央で、もともと第4d層が薄い上に第4b層段階の耕作によって削られているため、層厚5cmほどの第4dii層しか残っていなかった。

第4dii層から奈良～平安時代の遺物が出土し、これ以外の第4層から平安時代前半の遺物が出土し

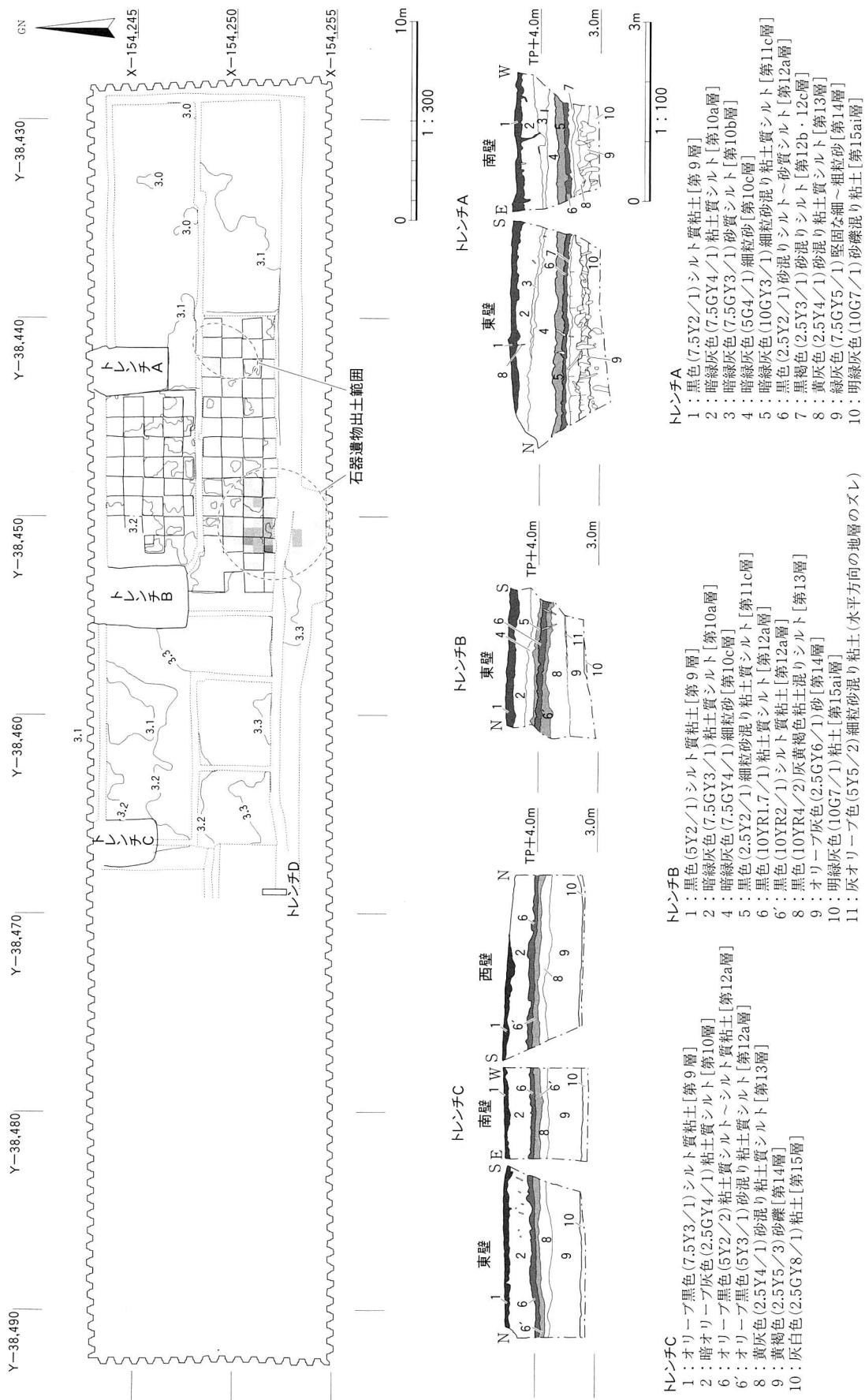


図 6 地層確認トレンチの位置と断面図

たので、第4層は長原遺跡東北地区の基本層序のRK4C層と、長原遺跡標準層序のNG4C層に対比できる。

第5層：本層以下第11層までの間は水成層である。

第5層は暗緑灰色砂混り粘土質シルトが主体の流路充てん堆積層で、層厚5～10cm程度の細粒～粗粒砂層が数層挟まり、斜交ラミナが顕著に観察された。本層は粗粒～細粒砂を多く含んで下位の第6層をおおよそ南北方向に大きく侵食している。この部分は南壁で幅約5m、西壁では斜交して、8.5m以上の幅である。第5層の層厚は第6層を侵食している南壁中央が最大で、170cmある。侵食された箇所以外では層厚は最大110cmあるが、調査区の西端と東端に向って本層は徐々に薄くなり、東端では層厚約20cmに、また西端では層厚5cm未満になる。

本層から平安時代初頭の遺物が出土した。須恵器蓋79と土師器皿78、砥石80を図示した。本層は長原遺跡東北地区の基本層序のRK4C層と、長原遺跡の標準層序のNG4C層に対比できる。

第6層：本層も第5層と同様の河川による堆積層で、最大層厚は160cmある。本層の上部と下部では岩相がやや異なっており、上部を第6a層、下部を第6b層とした。

第6a層は最大層厚110cmほどになる、オリーブ灰色の粗粒～細粒砂が混る暗オリーブ灰色極細粒砂混り粘土質シルトが主体の地層で、西端ではシルトよりも粗粒～細粒砂が主体の地層となる。調査区東端の砂層から奈良時代の須恵器鉢77が出土した。

第6a層は奈良～平安時代初頭の地層で、長原遺跡東北地区の基本層序のRK4C～5層と長原遺跡の標準層序のNG4C～5層に対比できる。

第6b層は3層に分かれる湿地性堆積層である。上部は層厚20cmのオリーブ黒色シルト質粘土層(第6bi層)で、その下に木質や炭が多く混るオリーブ黒色の均質な粘土(第6bii層)が堆積する。最大層厚は35cmある。第6b層最下部は灰白色粗粒～細粒砂・シルト層(第6biii層)で、最大層厚は90cmである。第6bii層の木質はほとんどが葦などの植物遺体である。第6b層から遺物が出土していないので断定はできないが、周辺の調査の層相や標高などの比較により、第6b層は長原遺跡東北地区の基本層序のRK5～9層のいずれか、そして長原標準層序NG5～8層のうちのいずれかの地層である。

第7層：ほぼ水平に堆積した湿地性堆積層で、層厚は110cmある。大きくは第7a層と第7b層の2つに分かれる。両層とも出土遺物はないので断定できないが、岩相や近隣調査の類似地層の標高などから、長原遺跡東北地区の基本層序のRK5～9層・長原標準層序NG5～8層のそれぞれいずれかの地層である。

第7a層は、上半部の層厚70cmの間に堆積する粘土・シルトを主体とする地層で、暗色化した粘土と暗オリーブ色の粘土質シルト～シルト質粘土の互層になっている。この中に4条の暗色化した粘土層がある。このうち、最上部の暗色帶である第7ai層は西半部で観察された。オリーブ黒色砂・粘土混りシルト層で、植物遺体が多く入る。その下の3条の暗色帶(第7aiii・7av・7avii層)はいずれも均質な粘土層である。このうち、第7av層のオリーブ黒色粘土層には、厚さ4cm未満の灰色に変色する帶がある。この帶は南壁西端約10mの間と西壁で顕著に観察された。水平ずれ断層により横すべりした断層面から腐植が溶脱してきた暗色帶である。地震により生じたものである。

第7b層は、第7層下半部の40cmほどの間に堆積した地層で、2層に区分できる。オリーブ黒色シルト質粘土の第7bii層の上に、第7bi層の暗オリーブ灰色シルト～粗粒砂が堆積する。第7bii層の下部は下位の第8層の黒色粘土を巻上げている状況が観察された。このため、本来は第7bi層に近い色調であったのが暗色化したものである。

第8層：層厚80cmの暗緑灰～灰色粘土またはシルト質粘土の湿地性堆積層で、生痕が層中のところどころに見られる。生痕は大きいもので、径1.0cm、長さ6.0cmの、細長い鉛直方向の灰色粘土として観察された。最上部の層厚10cmほどの間は、暗色化して黒色粘土となる。出土遺物はないが、周辺の調査の岩相や近隣調査の類似地層の標高等の比較により、第8層は長原遺跡東北地区の基本層序のRK5～9層と、長原標準層序NG5～8層のそれぞれいずれかの地層である。

第9層：均質な黒～オリーブ黒色シルト質粘土の湿地性堆積層である。最大層厚は25cmある。出土遺物はないが、岩相や近隣調査の類似地層の標高からみて、長原遺跡東北地区の基本層序のRK10層と、長原遺跡標準層序のNG9層に対比される地層である。

第10層：調査区東半で最大層厚60cmの湿地性堆積層である。上部の第10a層は灰色細粒砂混りシルト質粘土層で、層厚は最大35cmある。第8層で見られたような生痕があった。下部の第10c層は層厚最大30cmの暗緑灰色シルト混り細粒砂層で、これと第10a層との間には最大層厚20cmの暗オリーブ灰色細粒砂混り粘土質シルトの第10b層が挟在する。第10層は西へ側方変化して薄くなり、西端では層厚10cmのオリーブ黒色粘土混りシルト～極細粒砂となる。出土遺物はないが、岩相や近隣調査の類似地層の標高からみて、長原遺跡東北地区の基本層序のRK11層と、長原標準層序のNG10・11層に対比される地層である。

第11層：調査区東半で観察された湿地性堆積層である。上から第11a層、第11b層、第11c層の3層に分けられる。第11a層は層厚20cmの暗緑灰色細粒砂混りシルト層、第11b層は層厚30cmの緑灰色細粒砂～シルト層、第11c層は層厚20cmの暗オリーブ灰色砂混りシルト質粘土層である。第11c層の下半部で、下位の第12層の黒色粘土が巻上がっている状況が観察された。第11c層がやや暗色化して見えるのはこのためと考えられる。東端から約5mの地点で、第11b層と第11c層の境目から第11層と第12層の境界にかけて灰白色粘土の帶が見られた。地震による地層の水平方向のずれと考えられる。出土遺物はないが、岩相や近隣調査の類似地層の標高からみて、第11層は第10層と同様に長原遺跡東北地区の基本層序のRK11層と、長原標準層序のNG10・11層に対比される地層である。

第12層：暗色化した地層で、古土壤である。本層以下に遺構・遺物が検出される可能性を探るために、試掘を行ったところ、調査区の東部で古土壤が確認できたため、平面的な調査は古土壤の分布範囲を重点的に行った。また、本層以下、第15層までの間で火山灰分析を行い、時期の定点を探った(図7)。なお、火山灰分析については、第Ⅳ章第1節で詳しく述べる。

第12a層は黒色極細粒砂混りシルト質粘土～粘土質シルト層で、有機物を多く含む暗色帶である。調査区中央の本層中にも第7a層と同様の灰白色に変色した水平方向の帶が顕著に観察された。地震の影響である。この粘土の帶は特に西半で顕著に観察され、下位の第12c層や第13層に及んでいる。第12a層の層厚は5～10cmほどであるが、粘土の薄層が顕著に観察される。中央部から西半にかけては、

表4 NG02-9次調査の層序表

現場層序	細分	盛土・作土 ・暗色帯等	最大層厚 (cm)	層相	備考	主な遺物	時期	長原標準層序
第0層			200	コンクリート・碎石・土 現代盛土				NG 0層
第1層			25	暗オリーブ色(5Y4/4)砂・礫混り 粘土質シルト	現代作土		現代	NG 1層
第2層	2a		20	灰オリーブ色(5Y5/3)砂・礫混りシルト	作土		近世	NG 2層
	2b		40	オリーブ褐色(2.5Y4/3)～黄褐色(2.5Y6/6) の砂混り粘土質シルト	作土	近世磁器	近世	NG 2層
	2c		55	オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂混り粘土質シルト	盛土	近世陶器	近世	NG 2層
第3層	3a	3ae	30	灰オリーブ色(5Y5/3)砂混り粘土質シルト	東水田作土	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
		3aw	40	灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂混り粘土質シルト	西水田作土	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
	3b		30	灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂混り粘土質シルト	盛土、上面で建物・ 溝・土壌、下面で溝	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
	3c	3ce	20	にぶい黄褐色(10YR4/3)砂混り粘土	東水田盛土	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
		3cw	30	灰オリーブ色(5Y5/2)シルト混り粘土	西水田盛土	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
第4層	4a	4ae	35	オリーブ褐色(2.5Y4/2)砂混り粘土	東水田作土	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
		4aw	20	灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂・礫混り粘土	西水田作土	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
	4b		20	灰オリーブ色(5Y4/2)砂混り粘土質シルト	盛土、下面で溝	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
	4c	4ce	10	黄褐色(10YR5/8)砂混りシルト質粘土	東水田盛土	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
		4cw	20	灰オリーブ色(5Y4/2)砂・礫混りシルト	西水田盛土	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
	4d	4di	20	灰オリーブ色(7.5Y4/2)極細粒砂混りシルト質 粘土層	擾乱を受けた水成層	土師器・須恵器 ・黒色土器	平安時代前半	NG4C層
第5層			55	暗緑灰色(7.5GY4/1)砂混りシルト質粘土	水成層	土師器・須恵器	平安時代前半	NG4C層
			170	暗緑灰色(7.5GY4/1)砂混り粘土質シルト・砂 シルト・砂	水成層	土師器	平安時代初頭	NG4C層
第6層	6a		110	暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒砂混り粘土質 シルト・砂	水成層	土師器	奈良～平安時代	NG4C～5層
	6b	6bi	20	オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質粘土	水成層			NG 5～8層
		6bii	35	オリーブ黒色(10Y3/1)粘土	木質が多く入る水成層			NG 5～8層
第7層		6biii	90	灰白色(10Y7/2)粗粒～細粒砂・シルト	水成層			NG 5～8層
	7a	7ai	20	オリーブ黒色(7.5Y3/2)砂・粘土混りシルト	水成層			NG 5～8層
		7aii	25	灰色(10Y4/1)砂混り粘土質シルト	水成層			NG 5～8層
		7atii	10	灰色(7.5Y4/1)砂混り粘土	水成層			NG 5～8層
		7aiiv	12	灰色(5Y4/1)砂混り粘土質シルト	水成層			NG 5～8層
		7av	20	オリーブ黒色(10Y3/1)粘土	オリーブ黒色 (10Y3/1)粘土			NG 5～8層
		7avi	30	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂・シルト混り 粘土	水成層			NG 5～8層
		7avii	8	灰色(10Y4/1)砂混りシルト質粘土	水成層			NG 5～8層
	7b	7bi	35	暗オリーブ灰色(5GY4/1)細～粗粒砂	水成層			NG 5～8層
		7bii	10	オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土	水成層			NG 5～8層
第8層			10	黒色(7.5Y2/1)粘土	水成層			NG 5～8層
			12	暗緑灰色(10GY4/1)～灰色(5Y4/1)粘土・ シルト質粘土	水成層			NG 5～8層
			48	灰色(7.5Y5/1)極細粒砂混り粘土質シルト	水成層、生痕			NG 5～8層
			35	暗緑灰色(10GY4/1)極細粒砂混り粘土質 シルト	水成層			NG 5～8層
第9層			25	黒色(5Y2/1)～オリーブ黒色(7.5Y3/1) シルト質粘土	水成層			NG 9層
第10層	10a		35	灰色(7.5Y4/1)細粒砂混りシルト質粘土	水成層			NG10・11層
	10b		20	暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細粒砂混り粘土質 シルト	水成層			NG10・11層
	10c		30	暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト混り細粒砂	水成層			NG10・11層
第11層	11a		20	暗緑灰色(10GY4/1)細粒砂混りシルト	水成層			NG10・11層
	11b		30	綠灰色(7.5GY5/1)細粒砂～シルト	水成層、地震による 擾乱			NG10・11層
	11c		20	暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂混りシルト質粘土	水成層、地震による 擾乱			NG10・11層
第12層	12a		20	黒色(2.5GY2/1)極細粒砂混りシルト質粘土 ～粘土質シルト	地震の摩擦粘土に より分断			NG12A・B層
	12b		20	オリーブ黒色(5Y3/6)砂・礫混り粘土	地震による擾乱		K-A-h A.T	NG12B・C～13A層 NG13B層
	12c		40	灰オリーブ色(5Y4/2)砂混り粘土質シルト	西半のみ。生痕、地震 による擾乱			NG13B～13C層
第13層	13a		45	灰オリーブ色(5Y5/2)極細粒砂混り粘土質 シルト	風倒木、地震による 擾乱			NG13～14層
	13b		25	暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂混りシルト	西半に地震による擾乱 乾痕、石器遺物			NG13～14層
	13c		30以上	明オリーブ灰色(5GY7/1)細粒～粗粒砂	西半のみ 乾痕、石器遺物			NG13～14層
第14層			35	淡黄色(2.5Y8/3)砂混り粘土質シルト		乾痕、石器遺物		NG14層
第15層	15a	15ai	50	明緑灰色(10G7/1)砂礫混り粘土～シルト	上方に細粒化			NG15層
		15a ii	80	淡緑灰色極細粒～細粒砂	上方に細粒化			
	15b		30以上	灰色細粒～中粒砂	2回、上方に細粒化			

この粘土も含めて層厚が厚くなる(約20cm)ところや、第12a層がたわんで見えるところがある。これは、堆積時の状況だけでなく、灰白色粘土の帶が生じたのと同様に、地震など、水平方向の力の影響もあったものと考えられる。岩相や近隣調査の類似地層の標高と、火山灰分析の結果からみて、第12a層は長原遺跡東北地区基本層序のRK12層A・Bと、長原標準層序のNG12層A・Bに対比される地層である。

第12b層はオリーブ黒色砂・礫混り粘土層である。最大層厚は20cmで、中央～西半が厚く、東半は薄くなっている。中央部の本層の厚い部分と下位にある第13b層との境界付近に地震の影響による灰白色粘土の帶が観察された。しかし、この部分を除くと、下位層との境界線はあまり明瞭ではなく、現地調査時点では、岩相や近隣調査の類似地層の標高から、長原遺跡東北地区基本層序のRK12C～13層と、長原標準層序のNG12C～13層の上部を含む地層と考えた。火山灰分析の結果から、第12b層の上半はNG12B・C層～NG13A層に、下半はNG13B層に対比できることが判明した。また、第12b層以下の地層でも生痕が見られた。最大のもので径12cm、長さ35cmあり、細長い棒状または楔状に灰褐色砂混り粘土が充填していた。

第12c層は灰オリーブ色砂混り粘土質シルトで、調査区西半のみで見られた。層厚は西端で20cmであるが、中央部では40cmの厚さとなるところがある。この厚くなった第12c層付近では、第13層との

境界に地震によって生じた水平方向の灰白色粘土の帶が観察された。

第12c層は岩相や近隣調査の類似地層の標高、火山灰分析の結果から、長原遺跡東北地区基本層序のRK13B～13C層と、長原標準層序のNG13B～13C層に対比される。

第13層：本層では上面からの乾痕が見られた。本層は3層に細分される。下位の第14層との境界付近以下から石器遺物が出土した。調査時点では、標高や岩相から長原遺跡東北地区基本層序のRK13～14層と、長原標準層序のNG13～14層に対比できると考えた。

第13a層は灰オリーブ色極細粒砂混り粘土質シルト層で、層厚は15cm程であるが、中央部では45cmの厚さとなるところがある。木の根の影響である。火山灰分析の結果、第13a層は長原遺跡東北地区基本層序のRK13B～13C層と、長原標準

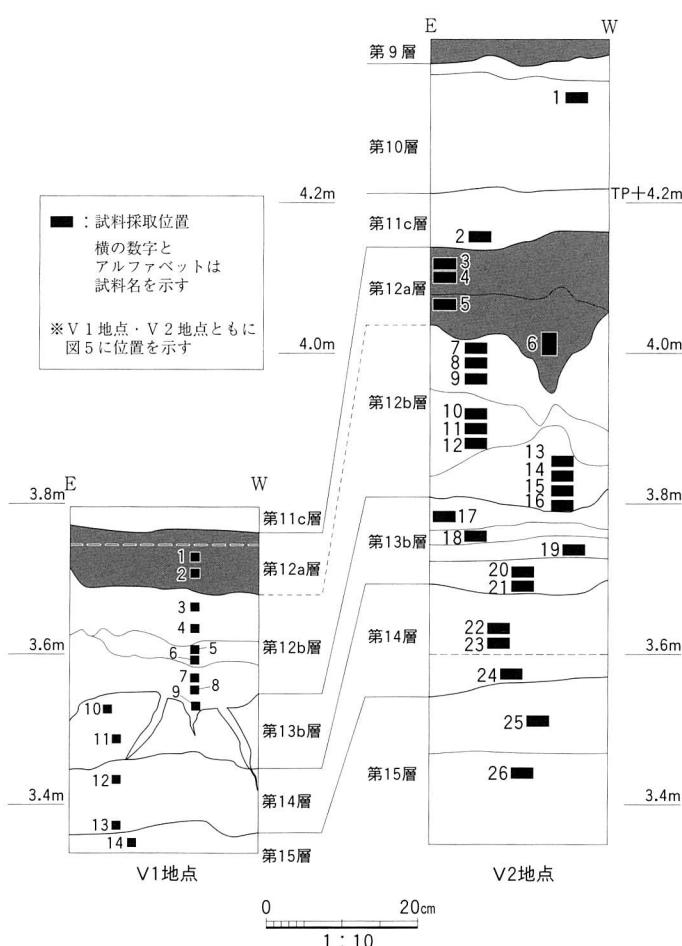


図7 火山灰分析用試料採取位置

層序のNG13B～13C層に対比される。

第13b層は暗灰黄色極細粒砂混りシルト層で、層厚は25cmである。東半から中央部にかけては第13c層がなく、第13b層は第14層の直上に堆積している。第14層との境界付近で石器遺物が出土した。火山灰分析の結果、第13b層は長原遺跡東北地区の基本層序のRK13～14層と、長原標準層序のNG13～14層に対比される。

第13c層は西半のみに堆積する明オリーブ灰色細粒～粗粒砂層で、層厚は30cm以上ある。

第14層：固く締まった淡黄色砂混り粘土質シルト層で、北半部では粘土混りの細粒～粗粒砂になる(図5・6、トレントA・B・C)。南半部における淡黄色砂混り粘土質シルトの分布範囲は、調査区の西から三分の二の範囲で、西部では粘土混りの細粒～粗粒砂になる。本層上面の標高はTP+3.2～3.8mで北西に向って高くなる。本層上面で乾痕や木の根の痕跡などが見られ、上面は陸化している。本層は石器遺物がもっとも多く出土した地層で、観察できた範囲での層厚は最大35cmである。石器遺物が出土したのは調査区中央からやや東に寄ったところの南壁際で、南北約2.5m、東西約2.0mの範囲で(図6)、本層の粘土質シルトが約5cmの厚さで堆積していた。この範囲とその周辺の上面の標高はTP+3.45mで、ほぼ平坦であった。岩相や近隣調査の類似地層の標高、火山灰分析の結果から、本層は長原遺跡東北地区基本層序のRK14層と、長原標準層序のNG14層に対比される地層である。

第15層：長原遺跡東北地区基本層序のRK15層と、長原標準層序のNG15層に対比される低位段丘構成層の下部で、本層から出土した遺物はない。調査区の東端から2/3までの範囲で本層と上位の第14層との境界を検出したが、本層の下部については安全のため掘削していない。そこで西壁際から約17mの地点の南壁際を重機で深掘りして下の状況を探った(図5・6のトレントD)。トレントD地点で本層上面の標高はTP+3.5mで、そこから下へ160cm以上続く。西へ向って本層は徐々に高くなつていて、調査区東端はTP+3.0mである。

本層上部の第15a層は上部に向って細粒化しており、上面から約50cmの間は明緑灰色砂・礫混り粘土～シルトのよく締まった固い地層(第15ai層)で、その下の約80cmは淡緑灰色極細粒～細粒砂層である。第15a層上面で乾痕が見られた。第15b層は灰色細粒～中粒砂で、少なくとも2回の上方への細粒化が認められた。

(松本)

第2節 遺構と出土遺物

1) 旧石器～縄文時代の遺物

NG02-9次調査では石器遺物が出土した。第12層上面から下の地層を3地点で試掘した際(図6)、東端のトレンチAの第13層と第14層の境界でサヌカイト剥片02AE646が出土した。ついで南壁際に側溝を入れたところ、中央よりやや東に寄った地点の同様の層準でサヌカイト剥片02AE647が出土した。前項の層序のところでも述べたように、第12～14層は西に向って薄くなり、遺構や遺物の出土が見込めないことから、調査範囲を東端から三分の二の間に限定し、碁盤目状に1m四方のグリッドを設定して、地層を確認しながら、市松模様にグリッドを少しづつ掘下げて、石器遺物と遺構の検出に努めた(図6・8)。結果、遺構は検出されなかったものの、側溝出土の02AE647を含め、11点の

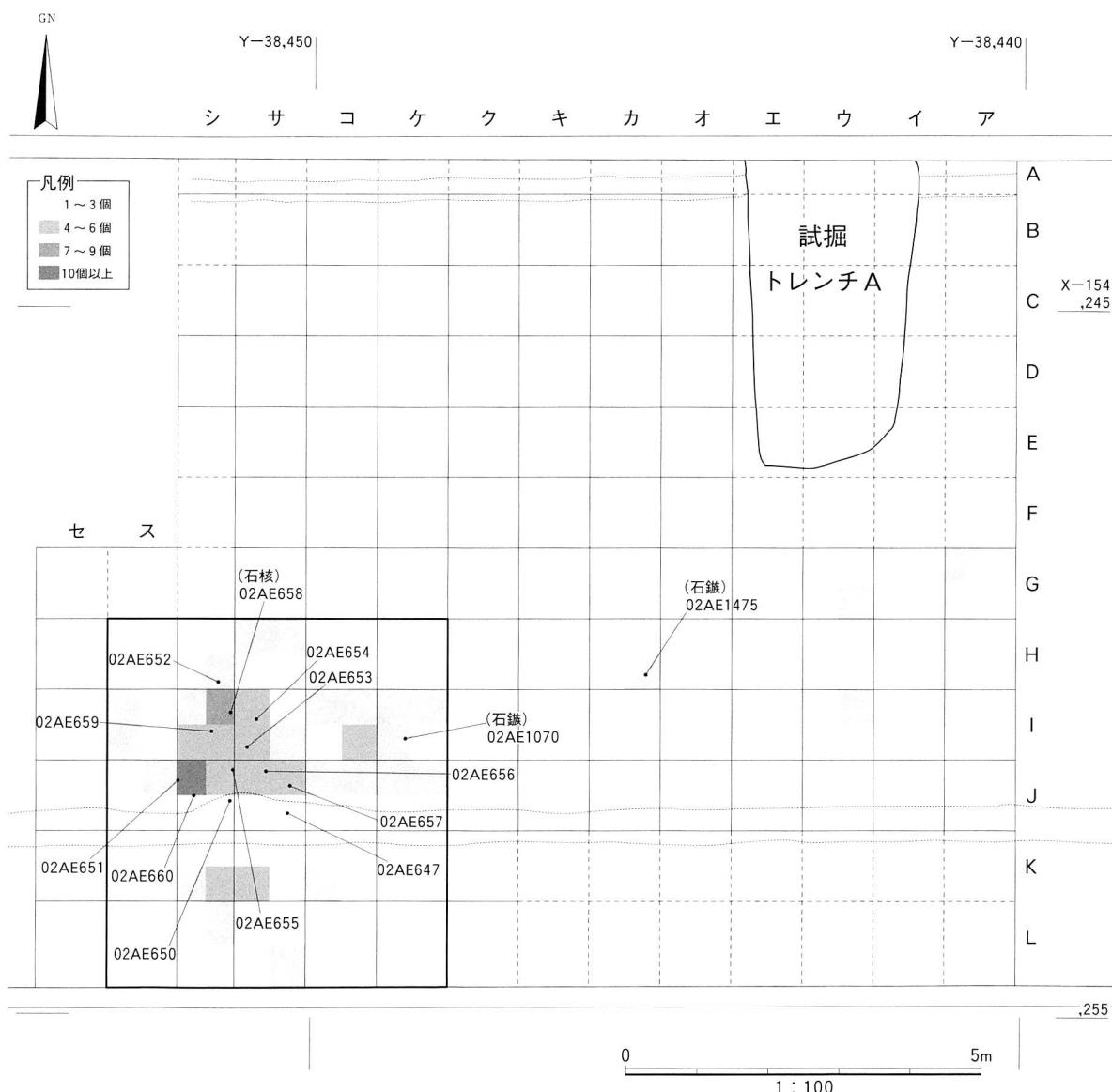


図8 石器遺物出土位置(1)

剥片と石核1点が出土した。

また、各グリッドの掘削土は、すべて層準を記録した袋に詰めて持ち帰り、後日篩に掛けて洗浄し、遺物の有無を再度調べた。その結果、サヌカイトを石材とする石器遺物91点(89点の剥片と石鏃2点)が見つかった。

i) 石器遺物の出土状況(図6・8・9、原色図版2・図版2)

大半の石器遺物は、調査区の中央よりやや東寄りの南壁際の東西約1.6m、南北約2.5mの範囲(図7のシ-H～J、サ-I・Jの5グリッド)からの出土である。図9にこの範囲の石器遺物の平面分布垂直分布を示した。02AE655は第13b層、他は第14層以下から出土している。02AE654・656・657・659は第15層の高さに分布するが、乾痕に落込むなど、原位置を動いているものである。

また、北東のトレンチAの02AE646以外に、東端側溝でサヌカイト剥片02AE670が見つかった。このほか、持ち帰った掘削土の中から見つかった石器遺物は石鏃02AE1070・1475と他はすべて微細な剥片であった。これら石器遺物の分布は、図8の網掛け部分で示した。大半のものは第14層からの出土であるが、一部のものは第14層との境界付近の第15層から出土した。

ii) 石器遺物(図10、原色図版1・図版15)

調査区の西側では、剥片8点と石核1点で構成される石器遺物の集中が認められた。出土した地層は第13層と平安神宮火山灰(AT:始良Tn火山灰)降灰層準の下位に当る第14層で、大半が第14層から出土していることから、これらの石器遺物は始良Tn火山灰の降灰以前で後期旧石器時代前半に属するものとみられる。石材はすべてサヌカイトである。

剥片(図10、図版15)

剥片については、長幅の比率によって単純に3類に分けておく。すなわち、幅が長さより大きなものを横長剥片、長さが幅の2倍以上のものを縦長剥片とし、長さが幅の2倍に満たない剥片(横長剥片を除く)は、広義の剥片と区別するため短形剥片とする。なお、剥片の計測は[竹岡1989]で提示された方法2(同書39頁・43頁)による。

02AE659は加工痕がある剥片で、横長剥片を素材とする。完形で長さ3.95cm、幅5.55cm、厚さ1.20cm、重さ28.9gである。打面は複数の剥離面で構成される。背面の大半は石核の素材面である平坦で单一の剥離痕が認められ、打面側には剥片剥離軸と同方向の小さな剥離痕が集中して残されている。また、末端右辺は礫面が大きく付着する。右辺の主剥離面側にも石核素材面のポジティヴな剥離面がそのまま残されていることから、大型の板状剥片を強く打撃して、大ぶりな剥片を剥離する意図があつたのかもしれない。加工痕は左辺の直線的な側縁に背面側からやや不連続に細部調整を施したもので、鋸歯状に仕上げられている。

02AE647・650・651・654・670はいずれも横長剥片である。

02AE647は完形で長さ3.25cm、幅4.75cm、厚さ0.75cm、重さ10.9gである。打面は2面の剥離面で構成される。背面には剥片剥離軸と同方向の複数の剥離痕が認められる。背面末端には石核の素材面であるポジティヴな剥離面が残されており、この剥片が剥離された石核が剥片素材であったことがわかる。また、打面縁部には背面側から剥離された先行の剥離痕が残されていることから、打面と作

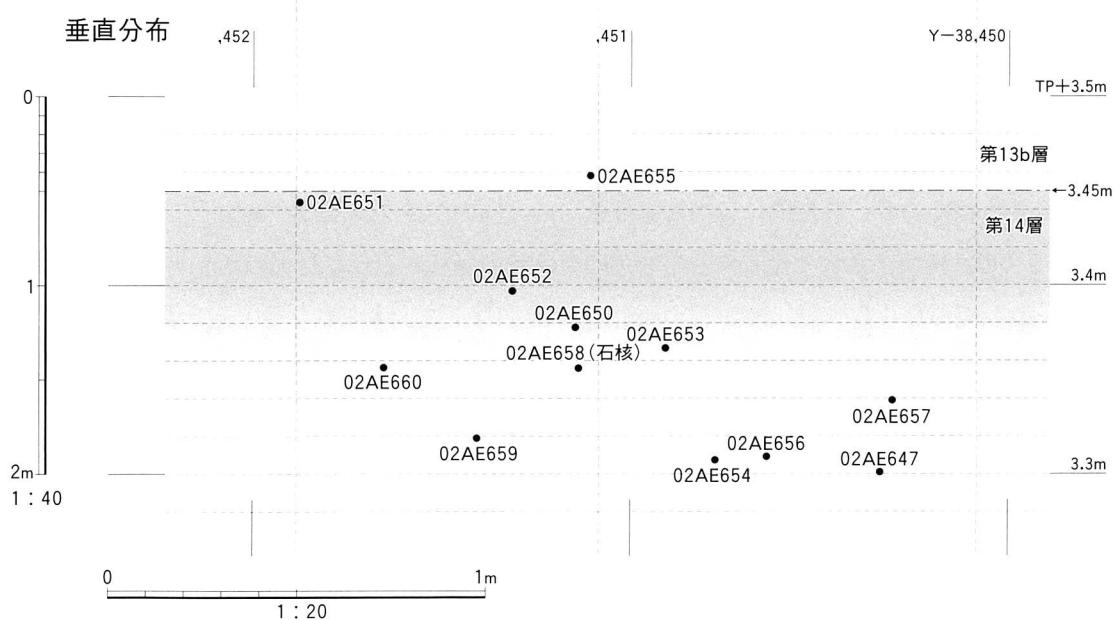
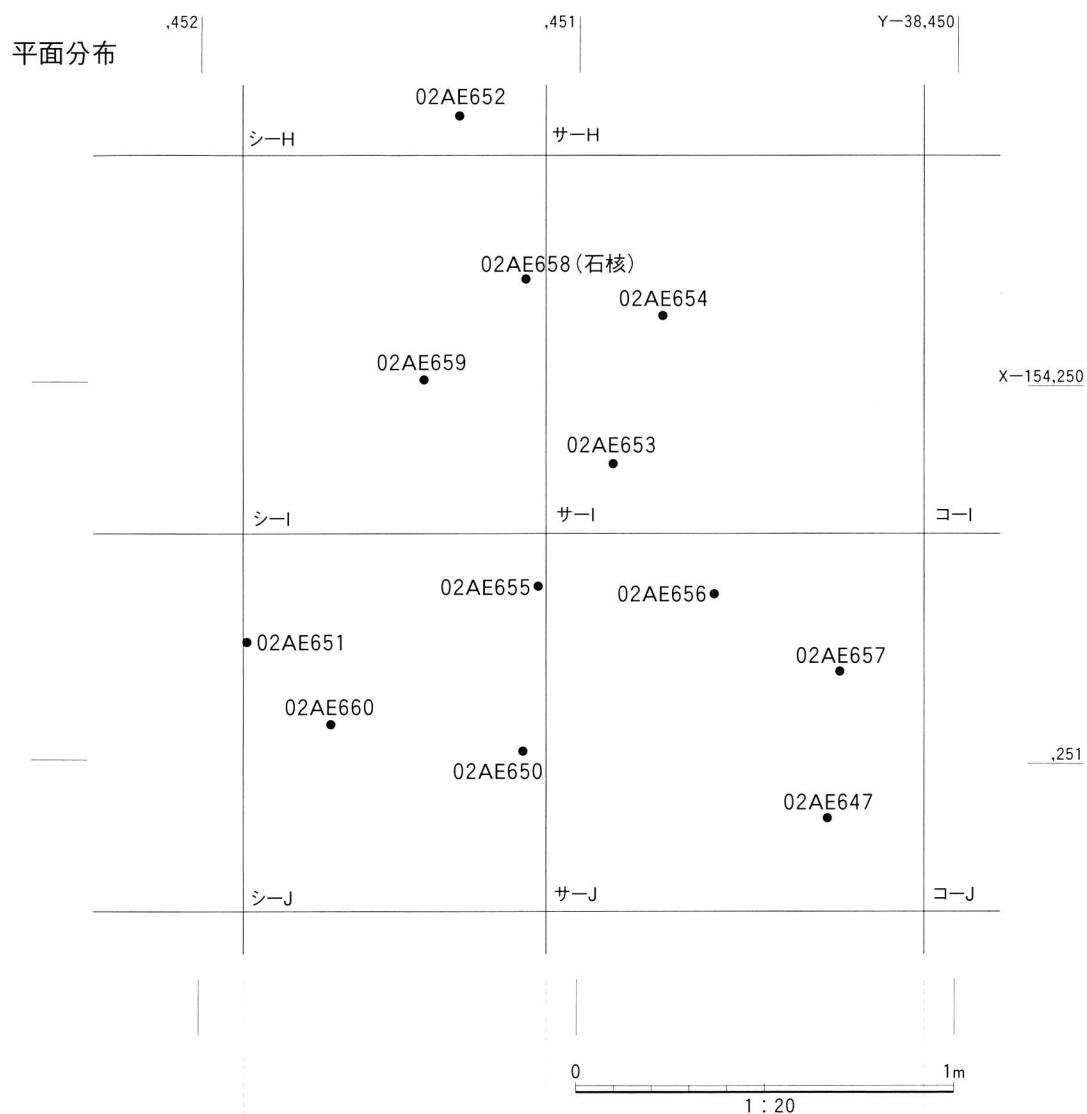


図9 石器遺物出土位置(2)平面分布・垂直分布

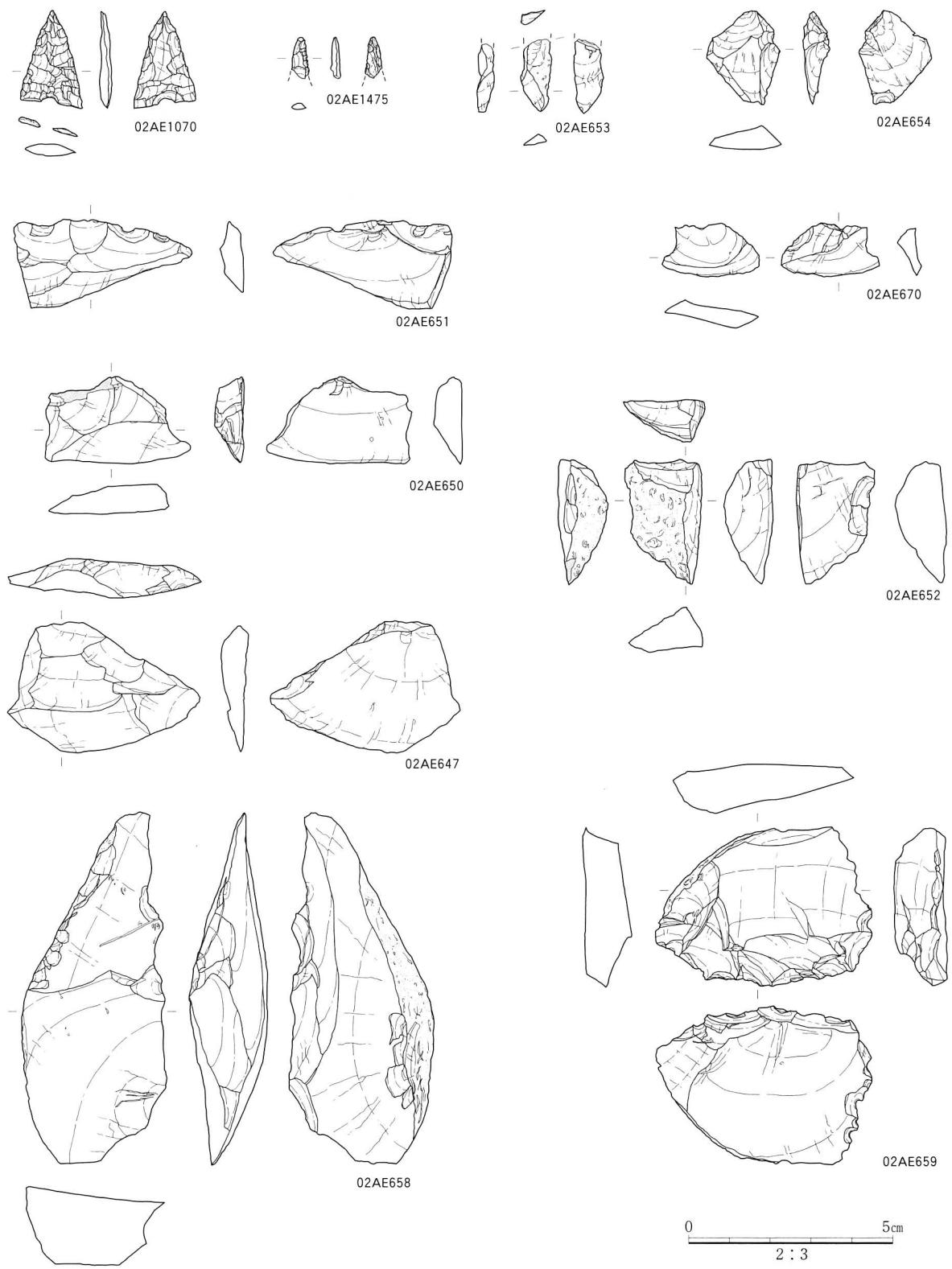


図10 旧石器～縄文時代の石器遺物実測図

業面を入れ替えながら剥片剥離を行う交互剥離技術が行われたものとみられる。

02AE650は打面の左辺を新欠により若干失っている。長さ2.20cm、幅3.65cm、厚さ0.70cm、重さ5.6gであるが、完形値とみてよい。打面は複数の剥離面で構成される。背面右辺と末端には石核の素材

面である剥離面が認められる。いずれも平坦でポジティヴ・ネガティヴ面のいずれか判別しがたいが、末端のものは左辺端部でゆるやかに内湾することからネガティヴ面とみなしうる。02AE647と同様の剥片剥離技術によって剥離されたと推定される。

02AE651は完形で長さ2.25cm、幅4.30cm、厚さ0.60cm、重さ4.7gである。打面は単剥離面である。背面には剥片剥離軸と同方向の複数の剥離痕が認められ、末端には石核素材面の平坦な剥離面が残されている。剥離された石核は剥片素材であったとみられる。なお、打面縁の右辺端部には表裏に微細な剥離痕がまとまって認められるが、これらは剥片剥離に先行して残されたものである。

02AE654は完形で長さ1.85cm、幅2.00cm、0.55cm、重さ1.4gである。打面は単剥離面がわずかに残る線状打面である。背面は末端側に石核素材面である平坦な剥離面が大きく残され、左右辺には打点からそれぞれ45度程度振れた斜め方向からの剥離痕が認められる。石核調整時に剥離された剥片とみられる。

02AE670は第13b層から出土した。完形で長さ2.00cm、幅2.35cm、厚さ0.60cm、重さ1.1gである。打面は単剥離面である。背面は剥片剥離軸と同方向の剥離痕と石核素材面であるポジティヴな剥離面の2面で構成される。打面部が厚く残された形状から、石核調整時に剥離された剥片とみられる。

02AE646・652はいずれも短形剥片である。

02AE646は完形で長さ2.30cm、幅1.60cm、厚さ0.45cm、重さ1.2gである。点状打面で、背面は多方向で複数の剥離痕から構成される。調整剥片とみられる。

02AE652は14層から出土した。打点で縦割れを起こしており、右辺側が欠損する。残存部で長さ3.15cm、幅1.50cm、厚さ1.15cm、重さ5.9gである。打面形状は不明である。分厚く背面に大きく礫面を残していることから、石核整形など初期段階で剥離された剥片とみられる。

02AE653は小型の縦長剥片で調整剥片とみられる。長さ1.75cm、幅0.75cm、厚さ0.30cm、重さ0.4gである。

石核(図8～10、図版15)

02AE658は並列剥離技術による石核である。素材は分厚い大型剥片であり、その末端側の縁辺から剥離作業が行われている。打面は大型剥片の背面側に設定されているが、事前の調整は施されていない。縁辺に沿って複数枚の剥片が剥離されているが、形状は一定していない。剥離作業もそれほど進行しない段階で終了している。長さ3.55cm 幅8.85cm、高さ1.80cm、重さ50.1gである。

石鏸(図8・10、図版15)

調査区西側において第14層より2点の石鏸が出土した。いずれもサヌカイト製で縄文時代のものとみられる。

02AE1070は細長の凹基無茎式石鏸で、逆刺部分が欠損する。薄い剥片を素材としており、円縁から深形の剥離が丁寧に加えられている。裏面側に素材面が残っている。長さ2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.35cm、重さ0.8gである。

02AE1475は石鏸先端部とみられる。残存部で長さ1.05cm、幅0.4cm、厚さ0.2cm、重さ0.1gである。

(松本・絹川・張)

2) 平安時代の遺構と遺物

第3層の上面から第4d層の上面までの間で平安時代前半の遺構や遺物が見つかった。

おもな遺構と遺物について述べる。

i) 第4層の遺構と遺物(図11・12)

層序の項でも述べたように、第4d層の厚い自然堆積層以下の地層には人の居住痕跡はない。しかし、第4d層上部に至って初めて人の手による開墾が行われるようになった。その証拠となるのが、第4b層の作土と第4c層の盛土である。第4c層の盛土は水田に伴うもので、調査区の東西両端で検出した。また、第4b層下面で溝を検出した。第4b層の畠の痕跡である。いずれも出土遺物からみて、平安時代前半の遺構と考えられる。

a. 水田SX401・402(図11・12、図版5)

第4c層の盛土を伴う第4層上面の水田は、東端にあるSX401と西端のSX402がある。これらはともに後述の第3層段階の水田SX301・302とほぼ同じ位置にある。そして第4d層の上面が北に向って高くなることもあって、第3層段階、またはさらにのちの第2層段階に大きく削られてしまったため、盛土(第4c層)は一部に残るか、その痕跡をとどめる程度しか残っていない。

東水田SX401は、水田の西端外側の盛土(第4ce層)が残存しており、北側の盛土は失われていた。盛土の幅は約3.0m、高さは約0.3mある。上位の水田SX301の底面で確認した幅1.5mほどで東西方向に帯状に拡がるマンガンと酸化鉄の斑紋の範囲が、SX401の盛土(畦または土手)の痕跡と推定される。SX401の作付け面の規模、すなわち第4ae層の拡がりは、東西13m以上、南北4m以上あ

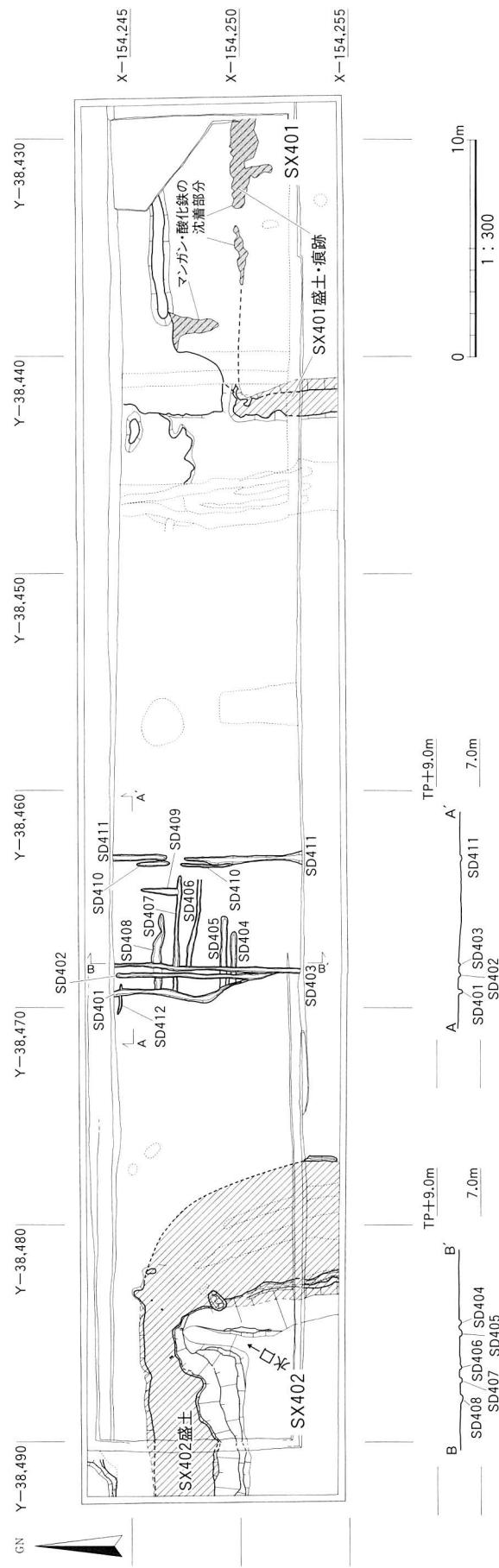


図11 第4層の遺構平面図

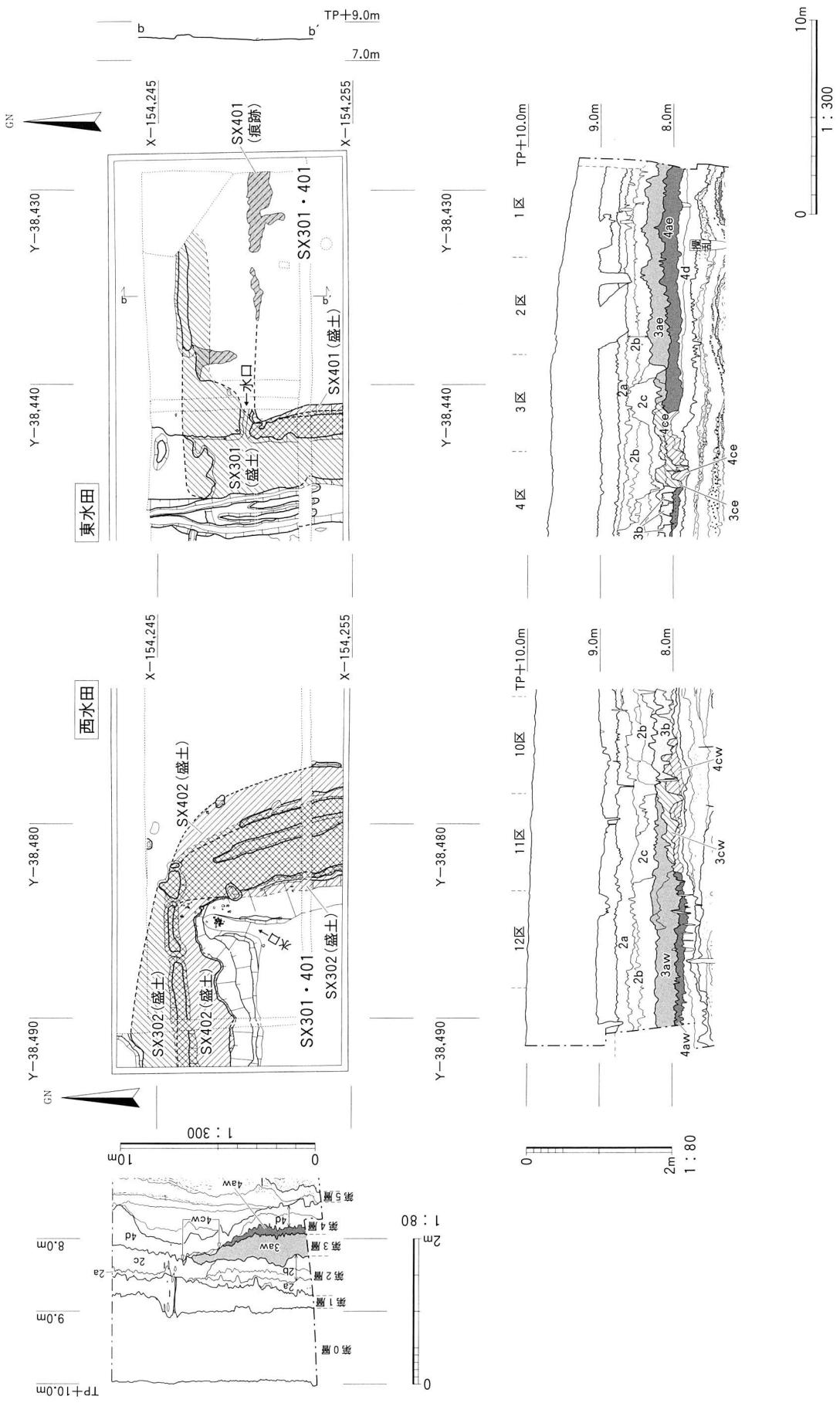


図12 水田平面・断面図

り、東側・南側の調査区外へと拡がっている。また、作土(第4ae層)は約0.3mの深さで残っているが、作土上面と残存する盛土の最高所とはほとんど高低差がない。これは上位にあるSX301を造る際に上面が削られたためである。

西水田SX402は、幅3～5m程度の盛土(図4・5・12の第4cw層)をL字状に積み、土手または畦にした水田で、盛土の高さは残りのよい南壁で0.45m、西壁で0.10mある。SX401の作付け面の規模(第4aw層の拡がり)は、東西10m以上、南北6m以上あり、西側・南側の調査区外へと拡がっている。作土(第4aw層)は約0.2mの深さで残っており、残存する盛土の最高所から約0.5mの高低差となる。北東隅に北側からSX402内に向けて下端幅で約0.6mの溝が設けられている。導水用の水口であろう。

b. 溝SD401～412(図11・13)

上記の水田SX401・402の間で調査区中央よりやや東に寄った位置に、第4b層を除去したのちに溝が見つかった。東西方向のSD404～408・412と南北方向のSD401～403・409～411である。残りのよいものでも幅は0.25mで、深さは0.19m未満である。浅くなつて途切れているものもある。溝の中は第4b層で埋まっており、水の流れた痕跡も水の溜った痕跡も認められなかった。第4b層は客土されたのちに畠の作土になっているので、これらは畠の畝間の下部が溝状に第4d層上面に残ったものと考えられる。南北方向の溝のうちに東西方向の溝が掘られているが、遺物による時期差はない。

図化した遺物はSD401から出土し
た4点で、土師器碗A1・皿B2・線刻
のある細片3、緑釉陶器皿4がある(図
13)。3の線刻は判読できなかった。4
の釉は淡緑色を呈し、素地はやや軟質
である。これらの遺物から、遺構の年
代は平安時代Ⅱ期と考えられる。

ii) 第3層の遺構と遺物

第3層上面は本調査の中で遺構がもっとも密に見つかった面である(図14)。遺構には掘立柱建物・柱穴・小穴・土壙・畠(耕作溝)・水田があり、平面的な分布は、東西両端に水田、これらに隣接して柱穴、中央部に耕作溝が配置される。小穴は水田北側の地面が高くなった部分にそれぞれ分布する。

層序でも述べたように、調査区の東西両端では土手状に盛土(図5・12の第3c層)して水田を営み、中央では第3b層を盛って整地し、ここを耕して畠が作られた。畠は何度も繰り返し耕されたため、第3b層が作土となって、これで埋まる畝間もあれば、第3b層の上面で輪郭を確認できた畝間もある。しかし、作付け部分はすでに失われているので、畝間のみを第3層上面と下面で溝状に検出した。このため、畠については上記第4層の遺構と同様に、溝の項目で耕作溝として記述する。

掘立柱建物や柱穴は、畠(耕作溝)が繰り返し営まれた期間内に造られたもので、少なくとも最終段階の耕作溝群よりは建物や柱穴のほうが古い。しかし、これらの遺構はいずれも平安時代前半に属するものである。

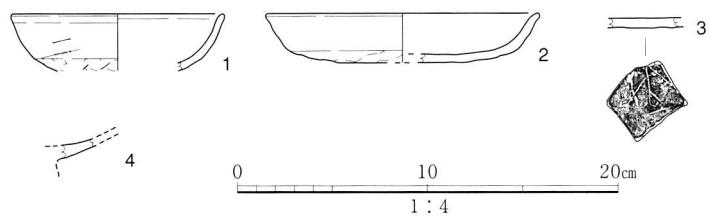
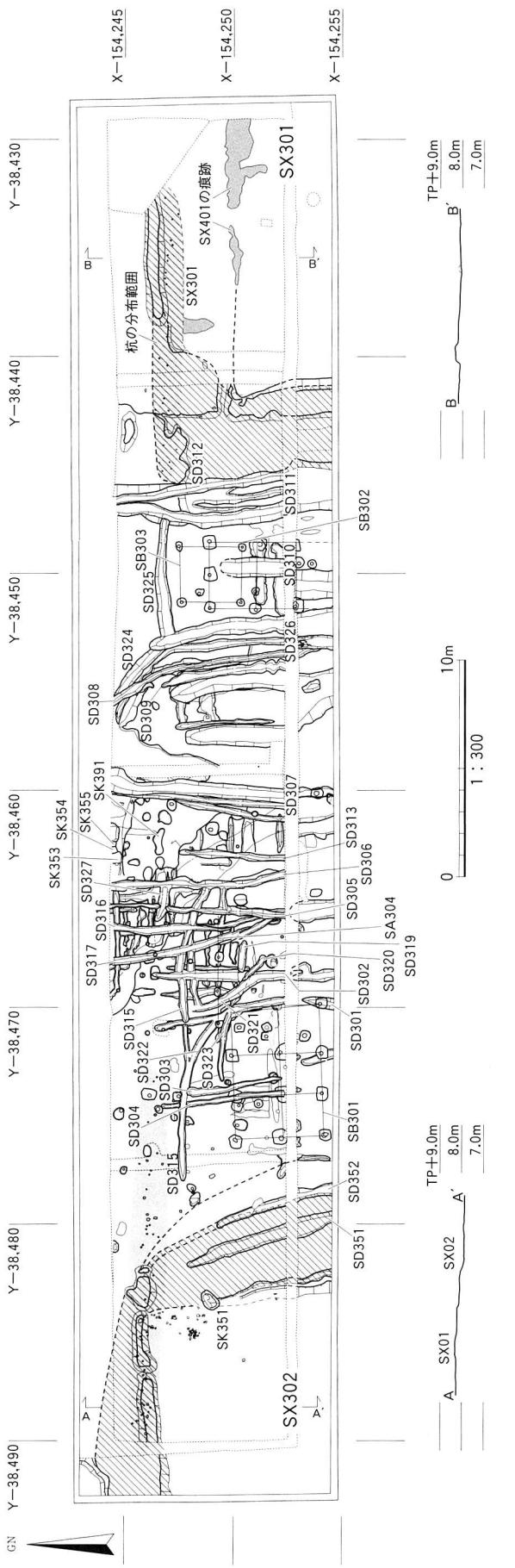


図13 出土遺物実測図(1)

SD401(1～4)



a. 水田(図12・14、図版5)

第3層上面でSX301・302の2面の水田が見つかった。どちらも前述のSX401・402とほぼ同じ位置に設けられていて、東端がSX301と西端がSX302である。のちの第2層段階に大きく削られてしまったため、各水田の盛土(図5・12の第3c層)は一部に残るか、その痕跡をとどめる程度しか残っていない。

東水田SX301は、水田の西端の畦に当る盛土(第3ce層)が残存している。盛土の幅は約4.0m、高さは約0.3mで、南北方向に積んでいる。また、北側に第4d層が頭を出して東西に長い帯状の高まりとなる部分があって、これと南北方向の盛土がSX301の畦畔になるものと考えられる。SX301の作付け面の規模、つまり作土(図5・12の第3ae層)の拡がりは東西13m以上、南北7m以上あり、東側・南側の調査区外へと拡がっている。SX301は下位にある水田SX401よりも少し北側に位置をずらして設置されたことになる。この作土は約0.3mの深さで残り、上位にある第2層か、第2層までに上面が削られたため、作土上面と残存する盛土の最高所とはほとんど高低差がない。盛土北部のちょうど土手がL字に曲がり始めるところに幅0.4mほどの東西溝が盛土を掘込んで設置されている。SX301に導水する水口であろう。

西水田SX302は、幅3~4m程度の盛土(図5・12の第3cw層)をL字状に積んで畦畔とした水田である。盛土は南壁で約0.3mの高さがあるが、西壁には見られない。SX302の作付け面の規模(図5・12の第3aw層の拡がり)は、東西10m以上、南北8m以上で、西側・南側の調査区外へと拡がっている。SX301と同様に、下位の水田SX402よりも少し北側に位置が移動する。この作土は約0.4mの深さで残り、SX301

と同様に、作土上面と残存する盛土の最高所とはほとんど高低差がない。

b. 掘立柱建物と柱穴・小穴(図14~19、

原色図版1、図版4・6~13・18)

柱穴や小穴は後述の水田を除く調査区全域で多数見つかった。

このうち掘立柱建物を構成する柱穴は東側水田SX301の西側と西側水田SX302の東側に分布する。SX302の東側で掘立柱建物SB301と柱列SA304が、またSX301の西側で掘立柱建物SB302・303が見つかった。このほかにも多数の柱穴があるが、うまく組み合うものはない。総じて柱穴の残りが悪く、失われた柱穴も多いためと考えられる。

SB301は北西隅から順にSP313・311・310・335・332・337・339・340・326・330・331・333の12基の柱穴で構成される、総柱の掘立柱建物である。東西3間(約6.0m)、南北2間(約4.1m)の東西に長い建物で、東でやや北に振っている。柱穴は平面が隅丸方形または長方形のものが多く、六角形や円形に近い形状のものもある。柱穴の規模にもばらつきがあり、東西方向でみた場合、0.42~0.82m、南北方向で0.55~0.68mと長短がある。深さは残りのよいものでも0.15mしかなく、0.04mしか残っていないものもある。東側柱列は柱の痕跡を直線で結ぶと北東隅のSP335がうまく並ばない。しかし、この柱穴は深さが0.10mしか残っていない。平面の形状が歪で、しかも東が一段高い二段掘りの状態になっているので、この柱穴は2基の柱穴が重なりあって、新しいほうの柱穴の柱が見えているのかもしれない。そうであれば、SP340・333と組む柱穴はSP335の東端の一段高くなっている部分が掘

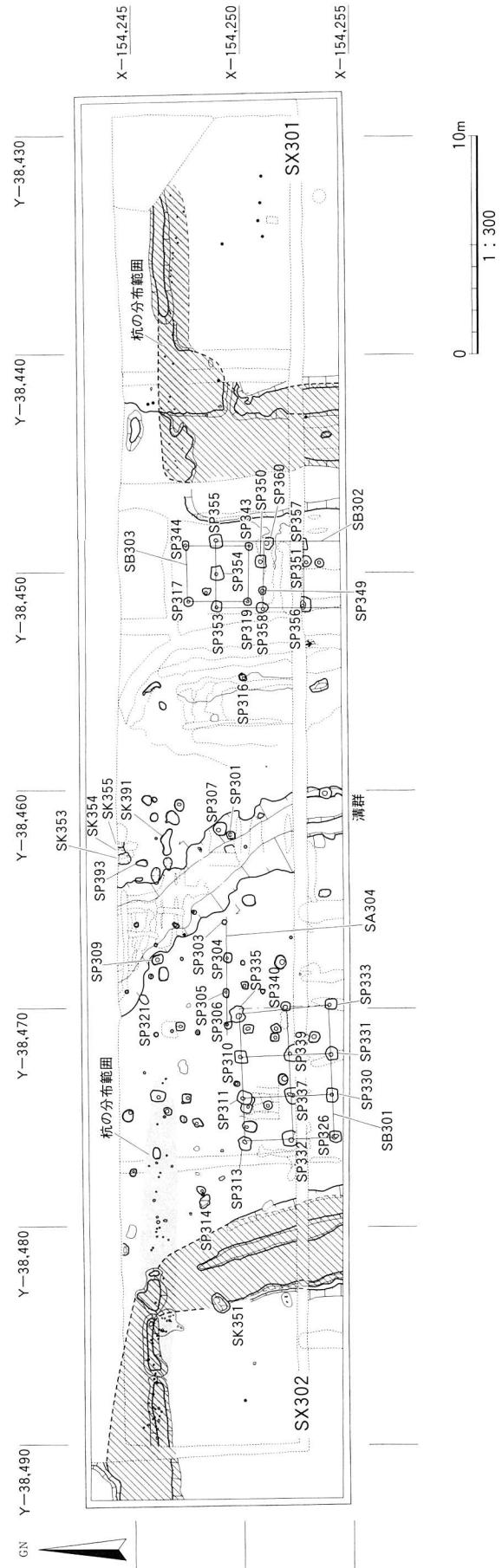


図15 第3層の遺構配置図(1)

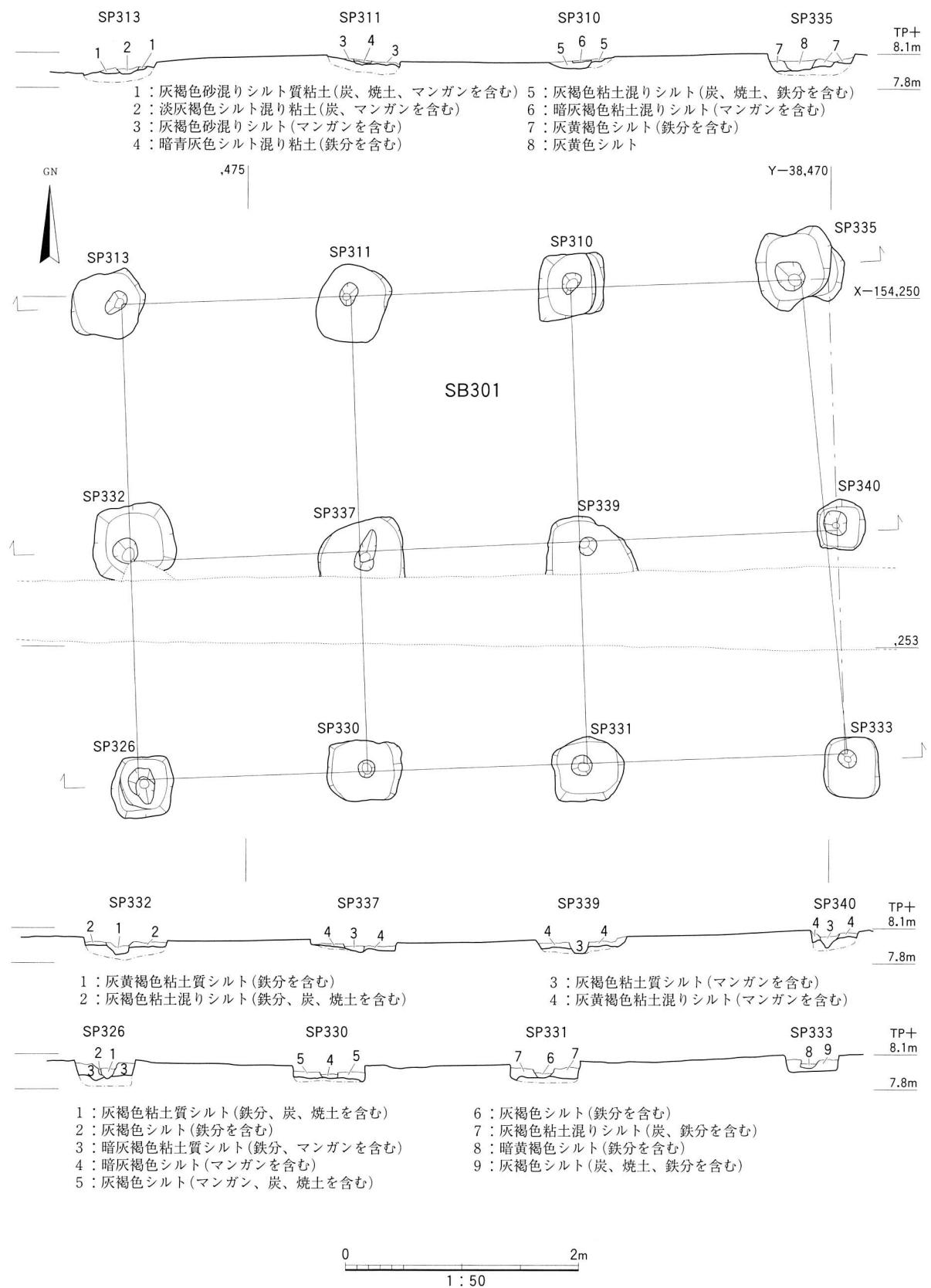


図16 掘立柱建物SB301平面・断面図

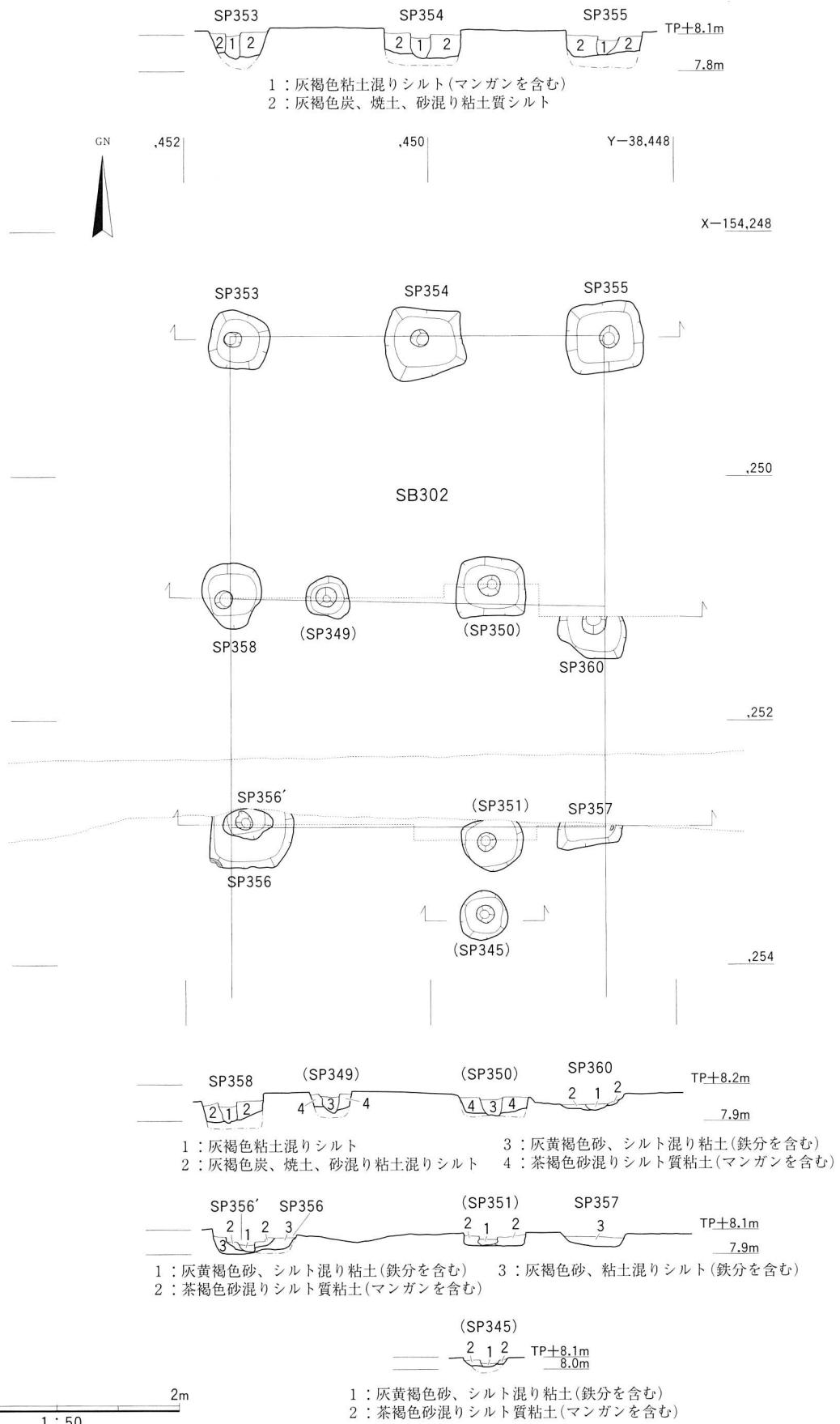


図17 掘立柱建物SB302と周辺柱穴平面・断面図

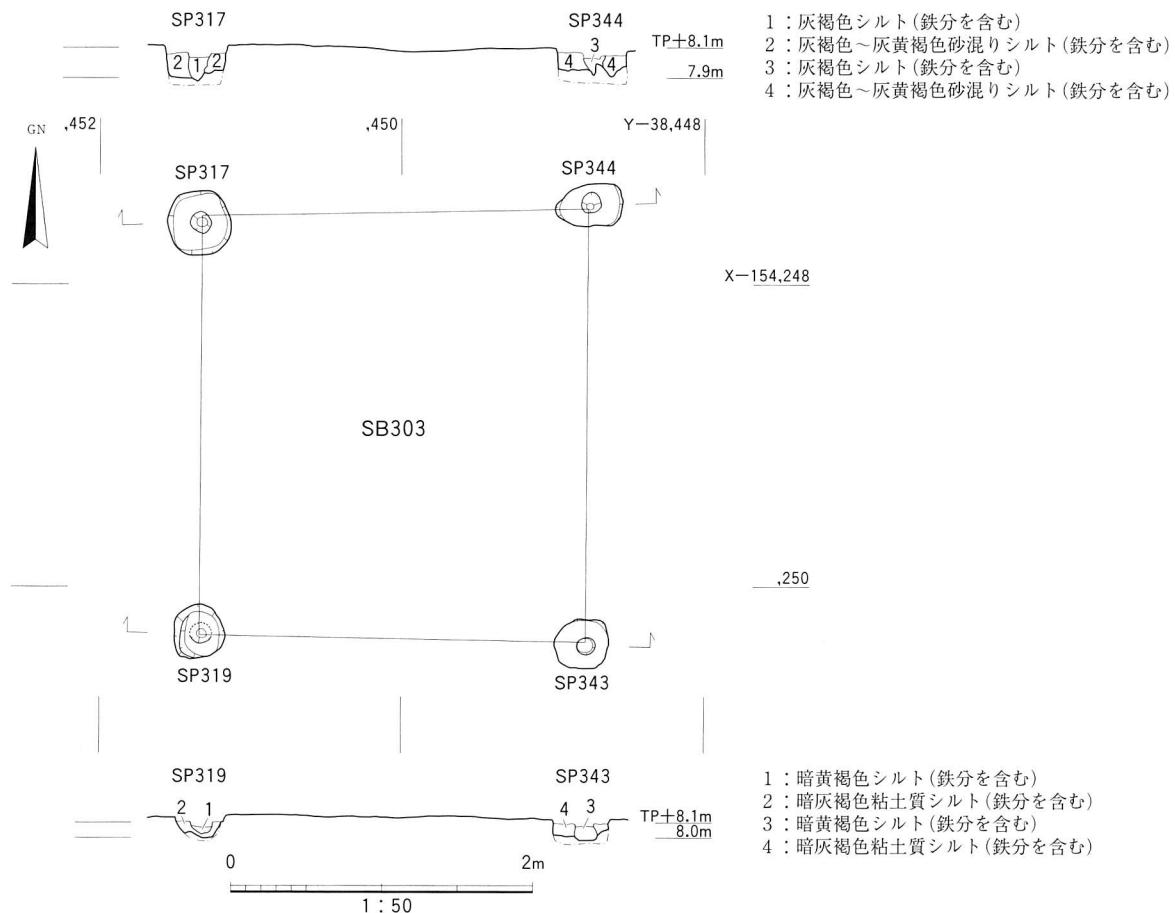


図18 掘立柱建物SB303平面・断面図

形となる柱穴となり、ほぼ一直線に並ぶ。SP339も東西幅が広く形が歪な柱穴であるので、同様に2基が重なりあっている可能性がある。柱の痕跡でみると、直径0.10mの断面円形の柱である。

SB301は検出された南側柱がいずれも調査区の南端にあり、他の柱穴と構造や規模に差がないため、建物はさらに南側の調査区外へと展開する可能性もある。SP335を溝SD301・323が壊している。

SB302は北西隅から順に、SP353・354・355・358・360・356・357の7基の柱穴で構成される南北に長い掘立柱建物で、南側は調査区外へと延びる。東西3間(約3.1m)、南北2間(約4.0m)以上の規模で、ほぼ正南北に配置された建物である。北側の東西に並ぶ柱は1.5mの等間隔で配置されるのに対し、南北に並ぶ柱の間隔は1.8～2.3mとややばらつきがある。柱穴の形状は一辺が0.48～0.68mの隅丸方形か円形で、SB301と同様に残りが悪く、0.10～0.22mの深さしか残っていなかった。SP356は2基の柱が重なっていて、篠いほうの柱穴がSB302の柱穴と考えられる。柱の痕跡でみると、直径0.10mの断面円形の柱である。北側柱は3基の柱穴で構成され、南側柱も3基の柱穴があつたものとみられるが、現状では該当する柱穴がない。また、SB302が調査区の南端に位置することからみても、SB302は調査区外に展開するものと考えられる。

SB303はSP317・344・319・343の4基の柱穴で構成される掘立柱建物で、ほぼ正南北に配置されている。各柱間の距離は、東西方向の距離が2.55m、南北は西側が2.76m、東側が2.85mである。柱穴の形状は円形または橢円形で、東西が0.34～0.45m、南北が0.28～0.42m、深さは0.10～0.22mで

ある。柱痕跡からみて、直径0.12m未満の柱と考えられる。SB302と一部が重なるため、同時併存はしていないが、柱穴どうしの重なりがないので、前後関係はわからない。

SA304はSP303・304・305・306の4基の柱穴で構成される柱列である。SB301の北約0.5mの位置にあって、1.55mの間隔ではほぼ正東西に並ぶ。柱穴の形状は、東西0.30~0.40m、南北0.30~0.42mの楕円形または隅丸長方形で、直径0.10mの柱痕跡がある。ただ、SP303だけは直径0.20mの円形の小穴のみが検出され、柱間も1.60mとやや長い。深さは0.06~0.10m残っていたにすぎない。

このほかにも図21のSP301のように明らかに柱穴とわかる遺構も多数見つかったが、平面の配置でみて、うまく組み合うものがない。総じて残りが悪く、失われた柱穴も多いためと考えられる。

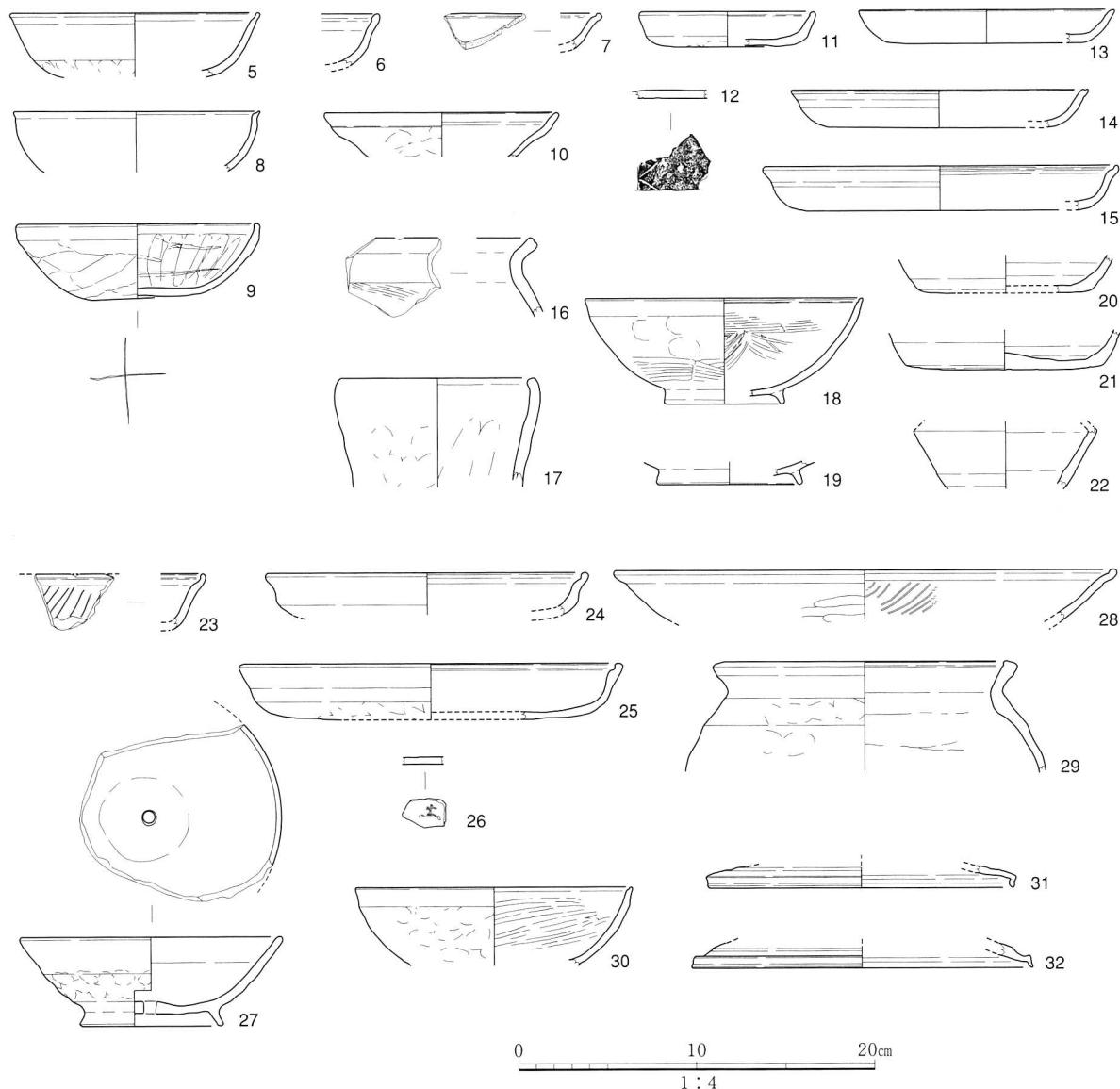


図19 出土遺物実測図(2)

SP301(6・7・20・21)、SP307掘形(12・14・15)、SP309(13)、SP311(11)、SP314(10・16・18・19)、SP316(22)、SP356(9)、SP360(17)、SP393(5・8)、SK351(29・30)、SK353(24・25・28)、SK354(26・32)、SK355(31)、SK391(23・27)

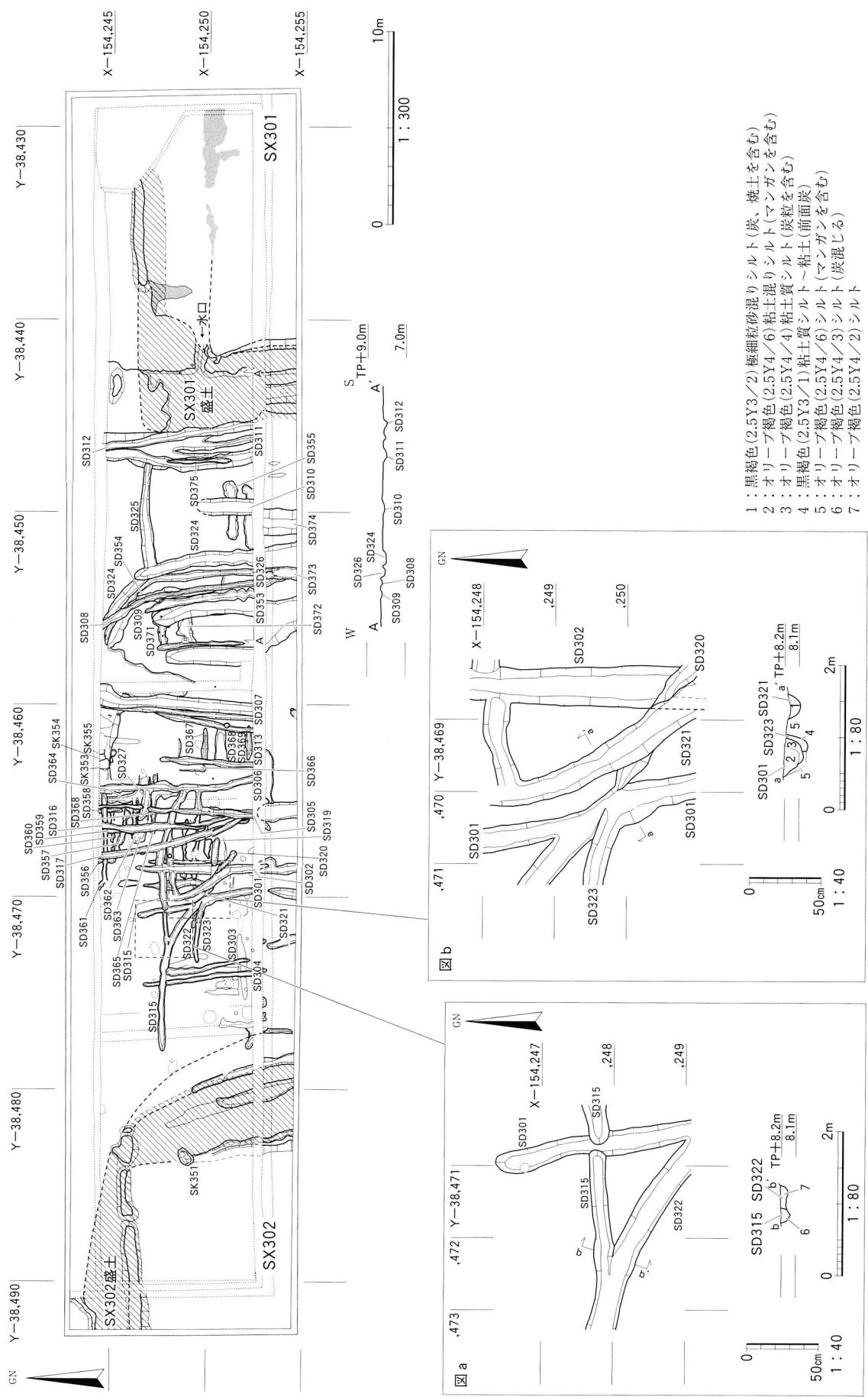


図20 第3層の遺構配置図(2)

直径が0.08m未満の小穴は、深さ0.05mほどの規模で、調査区の北半部の東半と西半に多数分布する(図15の網かけ部分)。どちらの地区も第3層が見られず、下位の第4層が高くなつて地面となるところにあたり、地面の高まりが東西に帶状に続く部分である。これらは杭跡とみられ、その分布の延長線上にはSP309などの柱穴がある。あるいはこれら柱穴と組み合つて柵などの区画施設を構成していたのかもしれない。小穴から出土した遺物はない。

柱穴から出土した遺物は図19の5~22である。6・7・20・21はSP301で、そのうち6・20は掘形から出土した。5・8はSP393、10・16・18・19はSP314、12・14・15はSP307の掘形、13はSP309、11はSP311、22はSP316、9(図版18)はSP356、17はSP360から出土した。

遺物はすべて土器で、土師器杯A5・6・椀A8~10・皿A7・15・皿B13・14・小皿11・線刻のある細片12・甕B16、須恵器杯A20・21・小型広口壺22、黒色土器A類椀18・19、製塩土器17(図版20)がある。12の線刻は9と同様に「十」の可能性がある。

以上の遺物は平安時代Ⅰ期からⅡ期にかけてのものである。

c. 土壙(図14・15・19・21)

調査区北端で見つかった土壙SK353~355は同じ土(暗青灰色シルト)で埋まつていて、東西幅はSK353が約0.3m、SK354・355が約0.5m、南北長はSK353が0.5m以上、SK354が0.4m以上、SK355が0.3m以上あり、深さはいずれも約0.2mである。

SK351は西側水田SX302の盛土の北側に位置する平面が橢円形の土壙で、底一面に炭を多く含む粘土質シルトが最大0.1mの厚さで堆積していた。長径が0.92m、短径が0.73m、深さは0.19mである。

以上の土壙から出土した遺物は図19の23~32である。29・30はSK351、24・25・28はSK353、

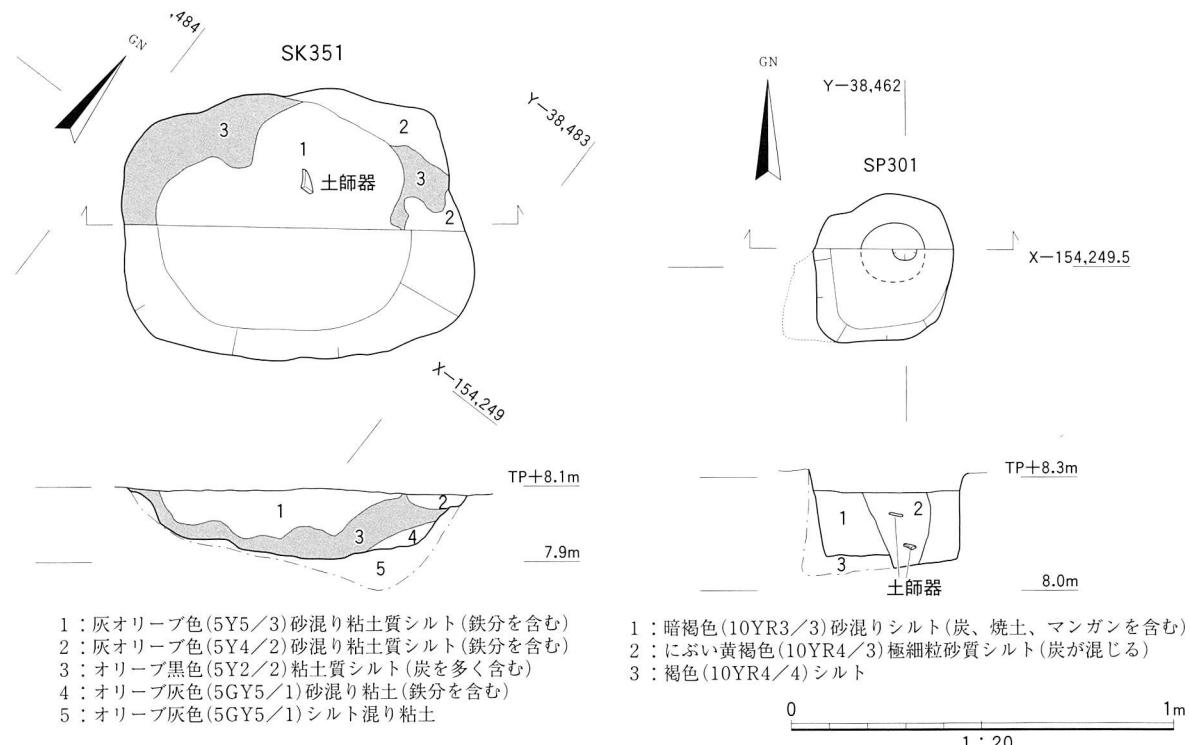


図21 土壙SK301・柱穴SP301平面・断面図

26・32はSK354、31はSK355、23・27はSK391から出土した。

遺物には土師器杯A23・皿A24・25・墨書のある細片26・椀B27・高杯28・甕A29、須恵器杯B蓋31・32、黒色土器A類碗30がある。23の内面には斜放射状に1段の暗文が認められる。24は皿Aとしては口縁部径が小さいが、細片のため計測値はやや確実性を欠いている。26の墨書は「大」であろう。27の底部は穿孔されている。

以上の遺物のうち、23・28・31は奈良時代に遡るもので、他は平安時代Ⅰ期からⅡ期に位置づけられる。

d. 溝(図14・15・20・22・23)

溝は調査区の中央部で密に見つかった。

南北方向・東西方向の直線的な溝や、大きく弧を描くものなど、さまざまなものがある。幅も0.2~0.8mとばらつきがあり、深さは最大0.3mである。埋土は灰褐~暗黄褐色の粘土質シルト~シルト質粘土で、これに砂粒や炭などが含まれる。何度も掘返されて埋戻された土である。溝の中には、排水路のような水が流れた痕跡は見られず、畠の畝間が溝状に残ったものと考えられる。これらのうち、南北方向の溝は東西方向のものに比べて新しい傾向がある。

上部の溝を除去すると、その下にそれ以前の溝が密集して見つかり、まるで幅の広い(約3.2m)大きな溝が設置されていたかのように見えるところがある(図15)。この中に東西方向・南北方向の幅0.3m未満の細い溝が縦横に掘られていた。この大きな溝状部分の深さは、0.18mほどであるが、第3b層が薄くなっているところでは、底は第4b層にまで達している。

見つかった溝のうち、SD351・352は西側水田SX302の南北方向の盛土に沿って掘られており、畦畔の側溝の機能も併せもっていた可能性がある。幅0.4~0.6mで、SD351が約7m、SD352が約6m検出された。埋土はともに灰褐色極細粒砂混りシルトである。

また、SD311も東側水田SX301の盛土に沿って設置されており、幅2.4mの間にいくつもの細い溝が重なって掘られている。溝群全体で深さは最大0.30mある。灰褐色極細粒砂混りシルトで埋まって

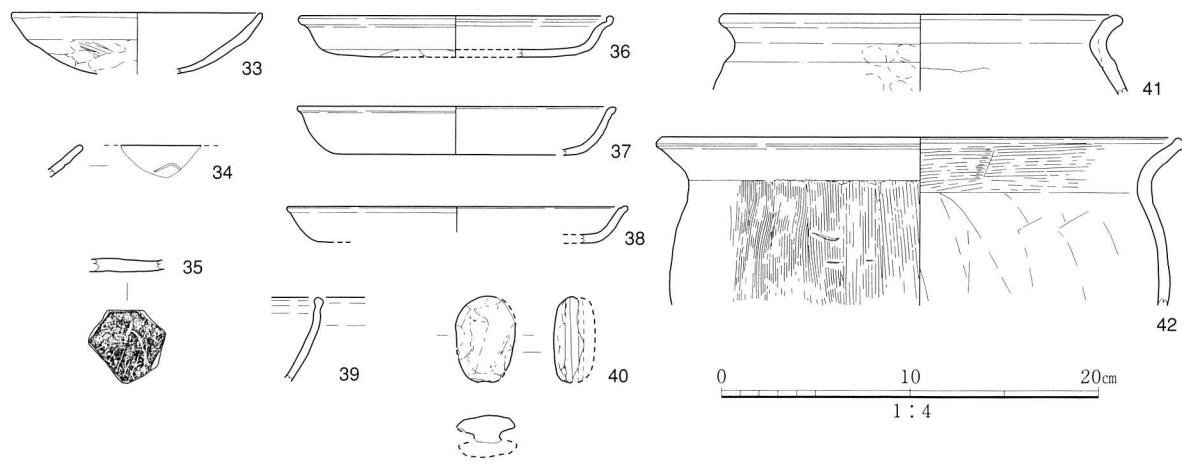


図22 出土遺物実測図(3)

SD351(36)、SD352(41)、SD353(33)、SD355(35)、SD363(40)、SD364(37)、SD365(39)、SD366(35)、SD371(42・38)、SD372(34)

いた。畦畔の側溝の機能も併せもっていたものとみられる。

以上の溝から出土した遺物を図22・23に示した。

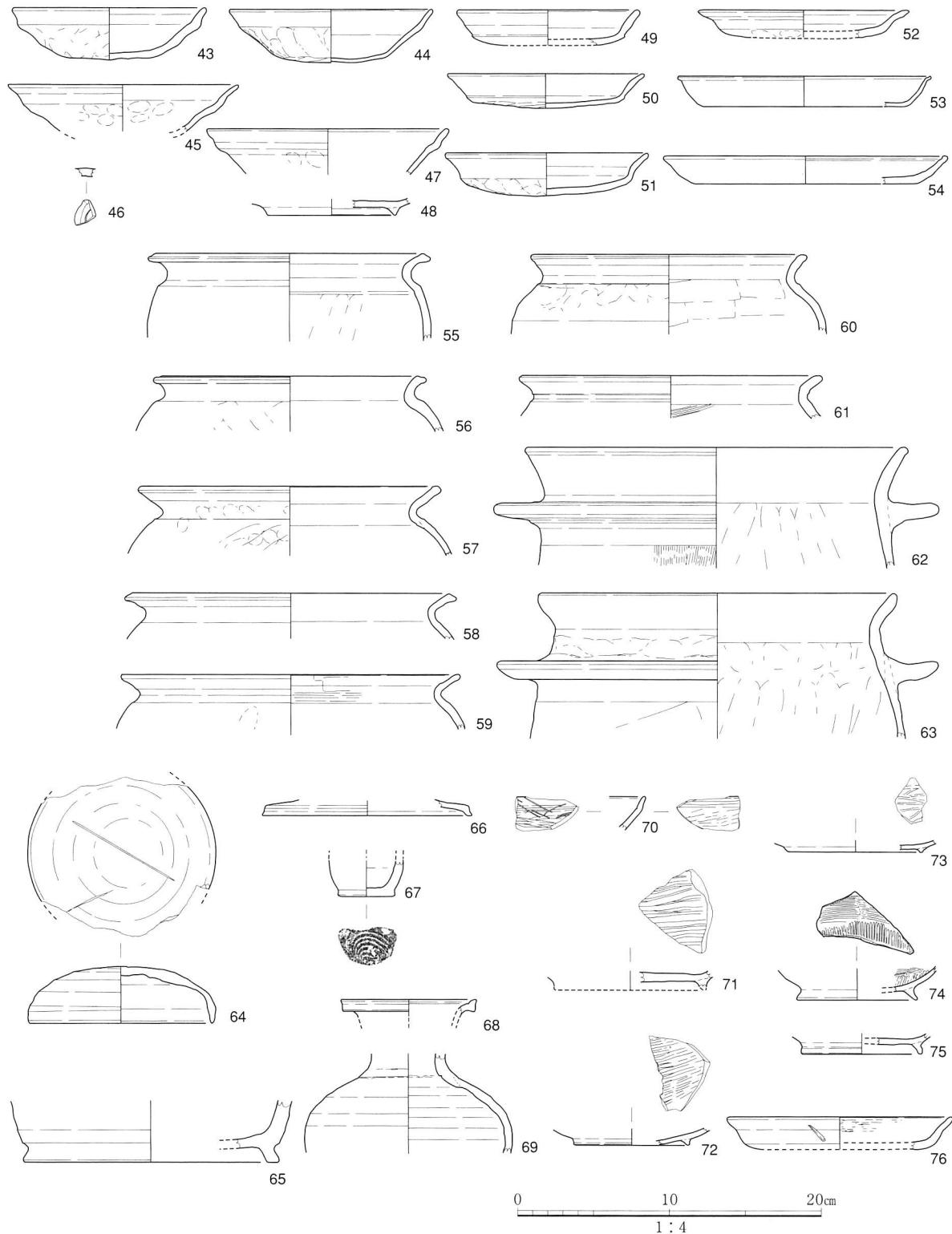


図23 出土遺物実測図(4)

SD301(43)、SD302(46・70)、SD305(58)、SD306(55・74)、SD307(56・59・67・76)、SD309(71)、SD311(53・54・62・65・66)、SD313(44・49・50)、SD317(48)、SD322(60・69)、SD323(51・68・73)、SD324(57・64)、SD325(45・47・52・61・63・75)、SD326(72)、

第3b層下面検出の溝から出土した遺物は図22のとおりである。36はSD351、41はSD352、33はSD353、40はSD363、37はSD364、39はSD365、35はSD366、42・38はSD371、34はSD372から出土した。

遺物には土師器椀A33・皿B36～38・線刻のある細片34・35・鉢39・甕A42・甕B41のほか土錘40がある。36は皿Aの口縁端部の形態をもっているが、口縁部径が小さいため皿Bに含めた。34の線刻は一部しか残っていない。35の線刻は判読できていない。平安時代Ⅰ期からⅡ期にかけてのものである。

また、第3b層上面検出の溝からは図23の遺物が出土した。43はSD301、46・70はSD302、58はSD305、55・74はSD306、56・59・67・76はSD307、71はSD309、53・54・62・65・66はSD311、44・49・50はSD313、48はSD317、60・69はSD322、51・68・73はSD323、57・64はSD324、45・47・52・61・63・75はSD325、72はSD326から出土した。

遺物はすべて土器で、土師器椀A43・44・椀B45・47・48・皿A54・皿B49～53・線刻のある細片46・甕B55～61・羽釜62・63、須恵器杯H蓋64・杯B蓋66・小壺67・長頸壺68・69・鉢65、黒色土器A類椀70～75・皿76である。62・63はいずれも生駒西麓産の胎土をもつ羽釜であるが、63は体部が口縁部径に比べてふくらみ、鍔の付く位置が下がっている。後述する第4d層から出土した88(39頁－図24)とよく似ており、形態や技法からは奈良～平安時代Ⅰ期に位置づけられる62よりも後出して平安時代Ⅲ期の球形の体部をもつ羽釜へつながるものと考えられる。資料が少ない段階で見通しを述べるのは早計かもしれないが、典型的な生駒西麓産の胎土に見える62や第3b・c層出土の184(42頁－図27)と比較すると、63・184はやや淡い褐色を呈しており、まったく別の胎土であると認識できる平安時代Ⅲ期の羽釜との中間的な特徴をもつ。時代の変化にともなって粘土を採掘する地域が移っていたことを示している可能性もある。

67の底部には糸切り痕が残る。69はなだらかにカーブする肩部で、頸部と体部の接合は2段構成である。黒色土器A類椀の高台は、71～73のような断面三角形の低いものから74・75のような発達して高くなったものまで見られる。

以上の遺物は、飛鳥時代に遡る64を除けば、一部に平安時代Ⅰ期のものを含みながら、平安時代Ⅱ期を主体とするものであるといえよう。

3) 各層出土の遺物

ここでは各層から出土した遺物のうち、先に報告した旧石器～縄文時代の遺物を除いた、飛鳥～江戸時代のものを報告する。

i) 第6層・第5層出土遺物(図24)

水成層であるこれらの層のうち、第6層からは須恵器鉢77が出土した。鉄鉢形である。奈良時代から平安時代Ⅰ期にかけてのものである。第5層からは土師器皿A78、須恵器杯B蓋79、砥石80が出土した。78は細片のため口縁部径は計測できなかった。78・79は平安時代Ⅰ期に属する。80は凝灰岩製である。

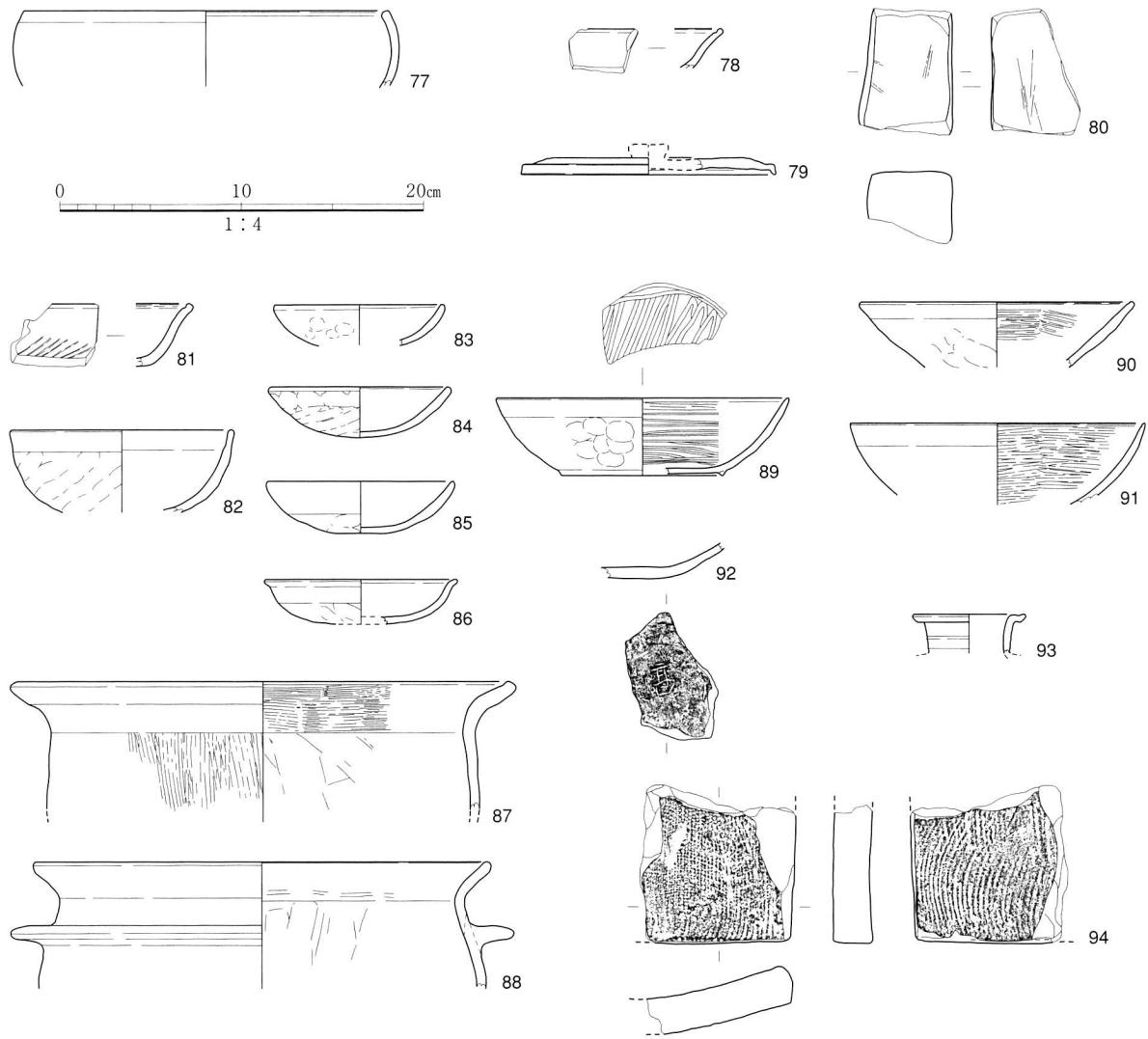


図24 出土遺物実測図(5)

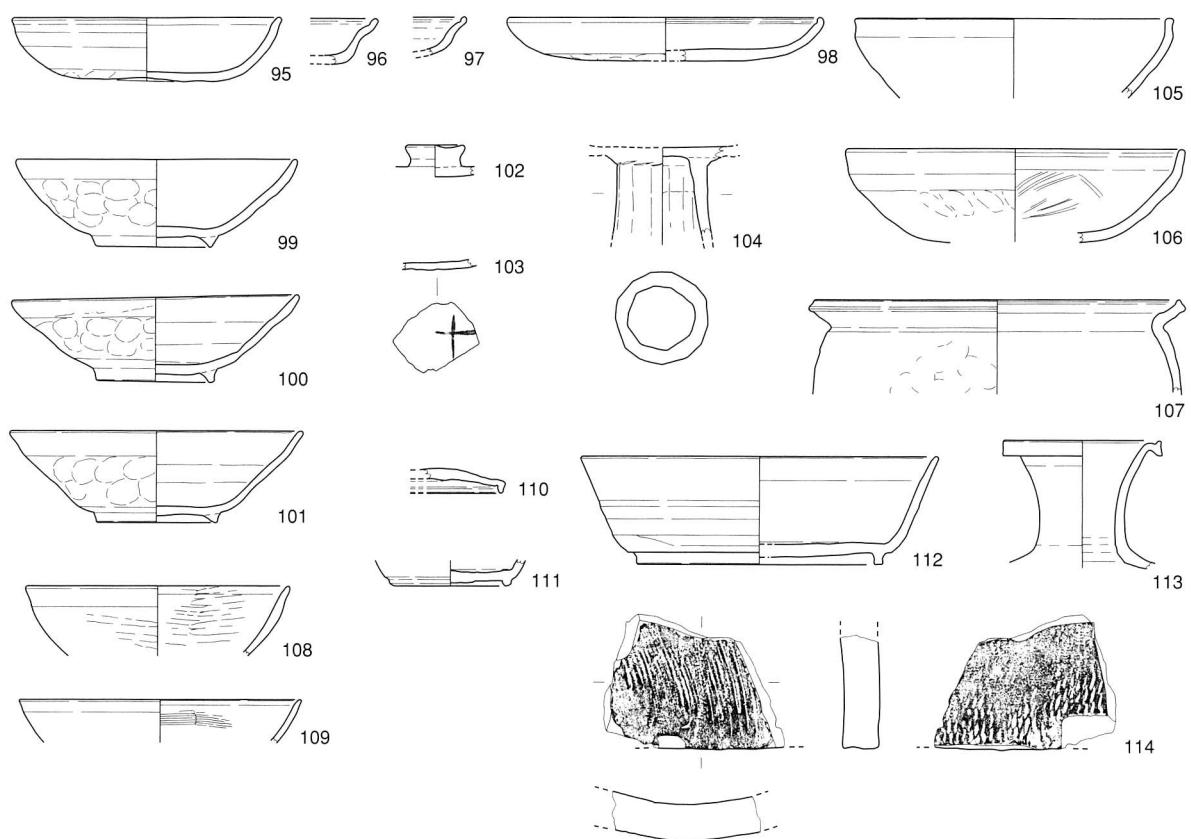
第6層(77)、第5層(78~80)、第4d層(81~94)

ii) 第4d層出土遺物(図24、原色図版1、図版18・20)

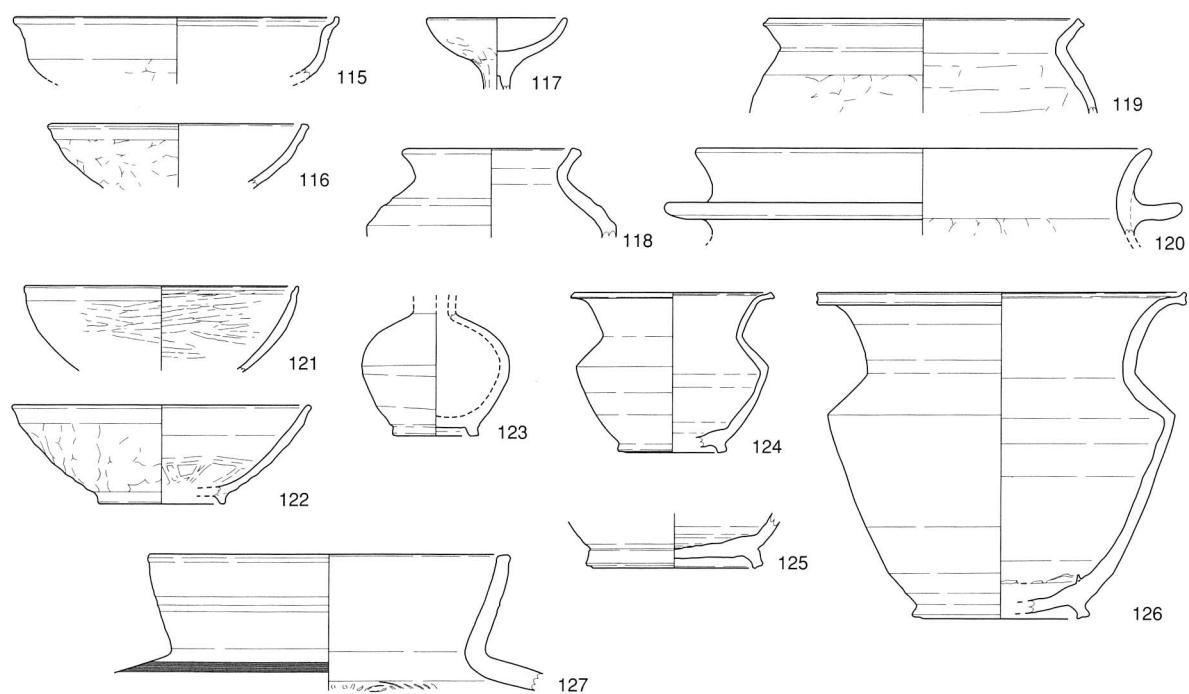
水成層である本層からは、土師器杯A81・椀A82・小皿83~86・甕A87・羽釜88、黒色土器A類椀89~92、須恵器小壺93、平瓦94が出土した。81には内面に斜放射状に1段の暗文が認められる。83~86の外側調整は口縁端部のみヨコナデで、以下はユビオサエによる。88は生駒西麓産の胎土を用いている。先述のように平安時代Ⅱ期に属する羽釜である。92は高台が付かない椀の底部で、「高」の線刻がある(図版18)。93は通有の小壺より頸部径が大きい。94の凸面は縄タタキ成形で、消されずに残った糸切痕が見える。凹面は布目である。

iii) 第4b・c層出土遺物(図25、原色図版1、図版18・19)

第4c層は水田の周囲を画した盛土層で、第4b層はそうした区画の内部を畠として耕作した際の作土層である。部分的には識別できた箇所もあるが、第4c層の盛土が耕作期間中に何度も行われている可能性もあり、両層の先後関係は単純ではない。よって、ここでは両層から出土した遺物を一括して報告する。



第4b・c層出土の遺物



第4a層出土の遺物

0 10 20cm
1 : 4

図25 出土遺物実測図(6)
第4b・c層(95~114)、第4a層(115~127)

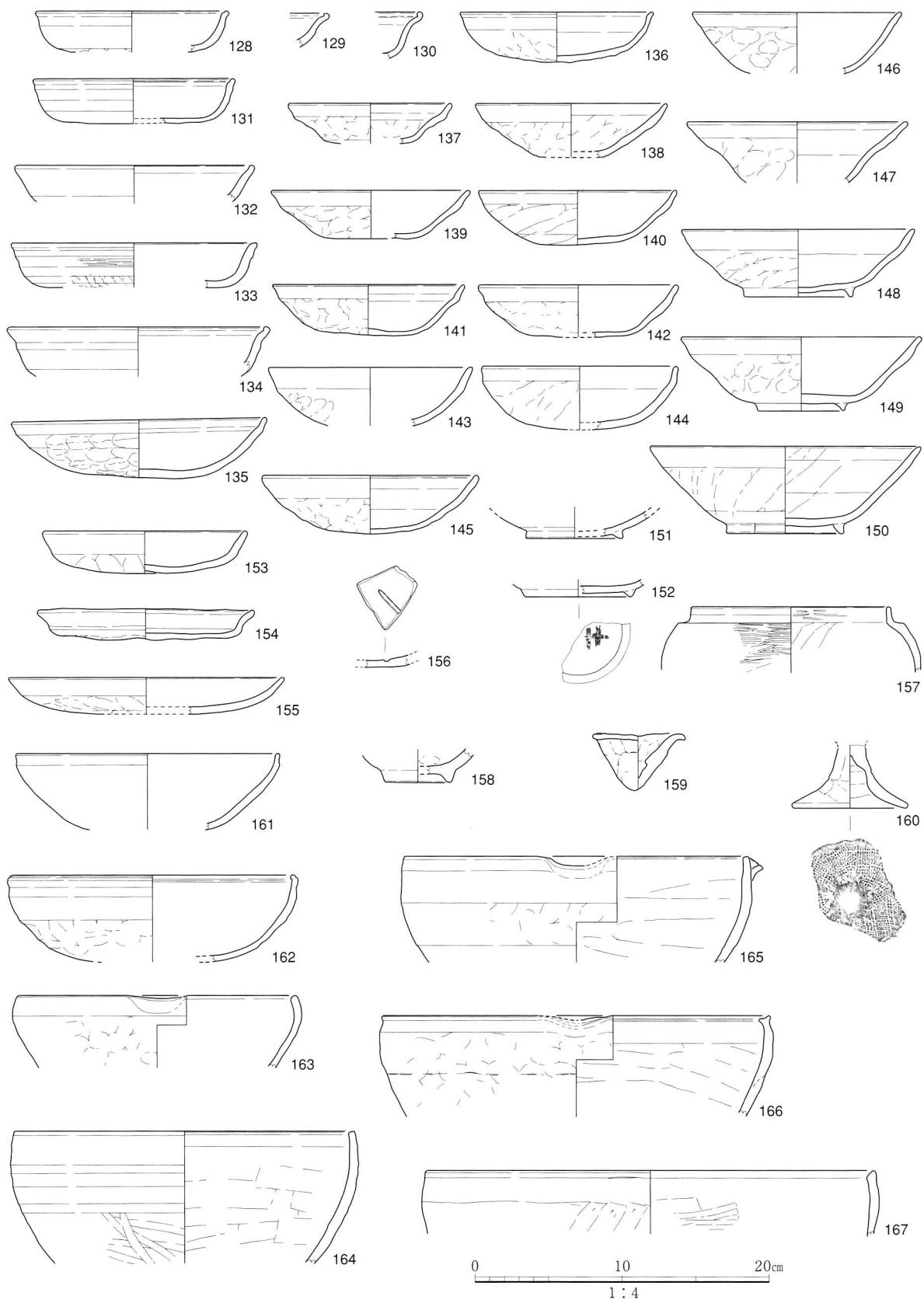


図26 出土遺物実測図(7)

第3b・c層(128~167)

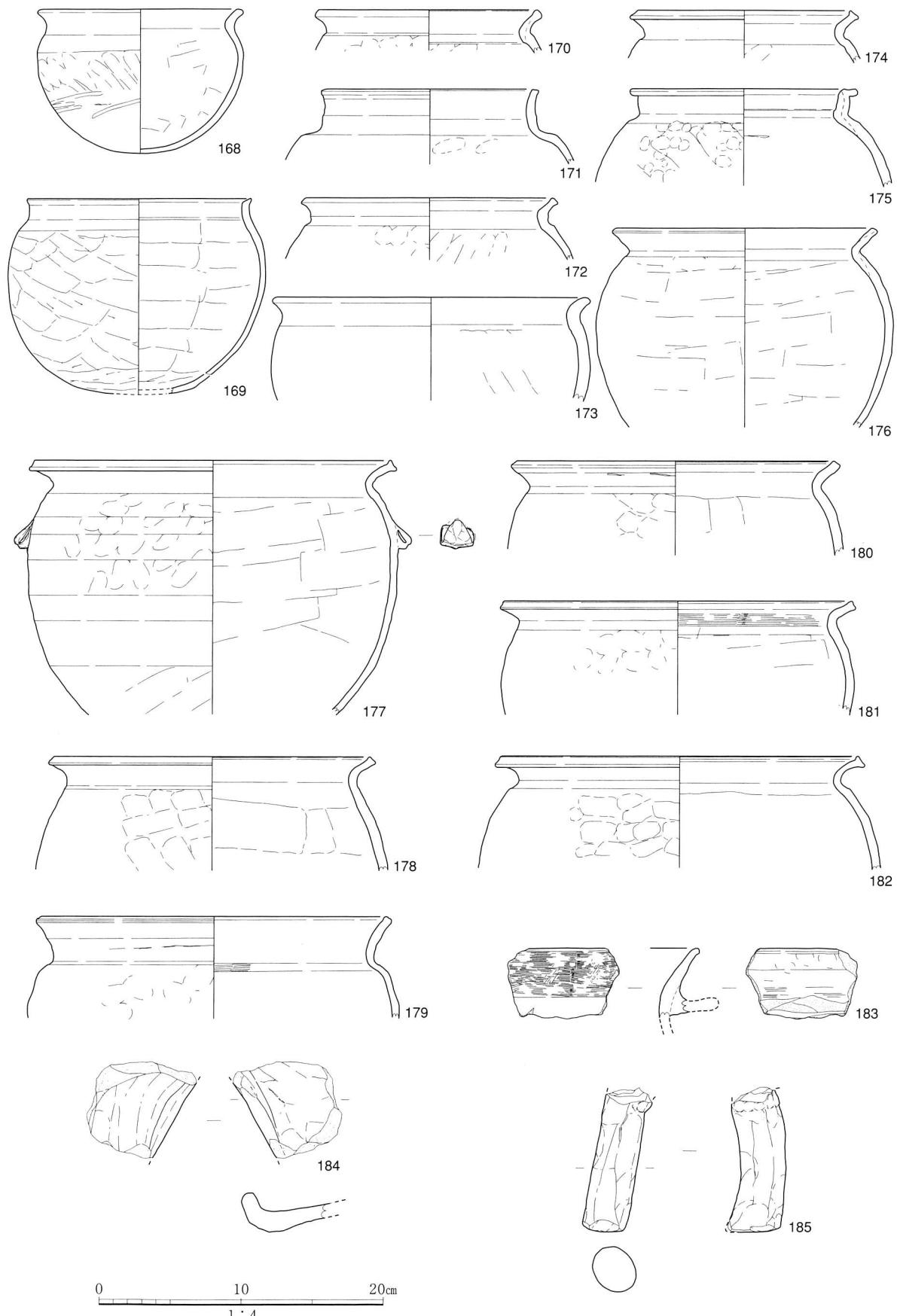


図27 出土遺物実測図(8)

第3b・c層(168~185)

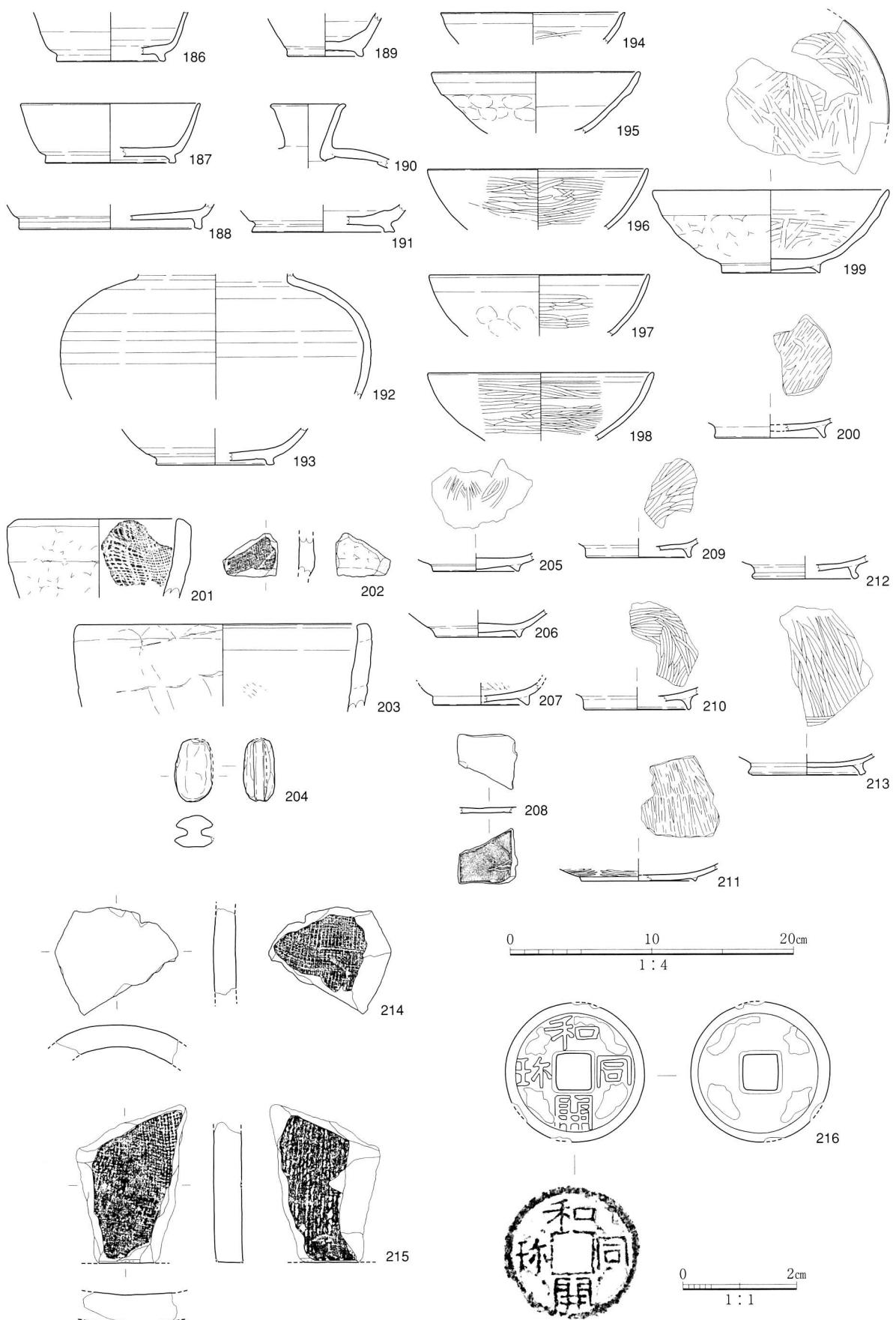


図28 出土遺物実測図(9)

第3b・c層(186~216)

土師器杯A96・皿A97・皿B98・椀A95・椀B99~101・蓋102・墨書のある細片103・高杯104・鉢105・106・甕A107、黒色土器A類椀108・109、須恵器杯B111・112・同蓋110・長頸壺113、平瓦114がある。103の墨書は「十」である(図版18)。104の脚部は粘土紐巻き上げによって成形する。107は体部の調整にハケメを用いていないが、口縁端部の形態からもともとはハケメ調整であった甕Aの後出するタイプと考えた。113の頸部と体部の接合は2段構成である。104・112については奈良時代に遡るものと考えられる。

iv) 第4a層出土遺物(図25)

水田の作土である本層から、土師器杯A115・椀A116・小型高杯117・壺118・甕B119・羽釜120、黒色土器A類椀121・122、須恵器小壺123・小型広口壺124・壺または鉢の底部125・広口壺126・甕127が出土した。118の調整は甕Bと同様であるが、口縁部がすぼまる形態なので壺に分類した。

v) 第3b・c層出土遺物(図26~28、原色図版1、図版14・18~20)

第3c層は第4c層と同様に水田と畠地を画する盛土層で、第3b層は第4b層と同じく畠の作土層である。ここも両層の遺物を一括して報告する。

図26は土師器のうち、杯A128・130~134、杯135、椀A136~145、椀B146~152、皿A129・155、皿B153・154、線刻のある細片156、短頸壺157、小型椀158、ミニチュア鍋159、高杯160、鉢161~167を図示した。

135は大型の椀、または浅い鉢にも見えるが、併行する時期の平安京の杯に似た形態であるため、

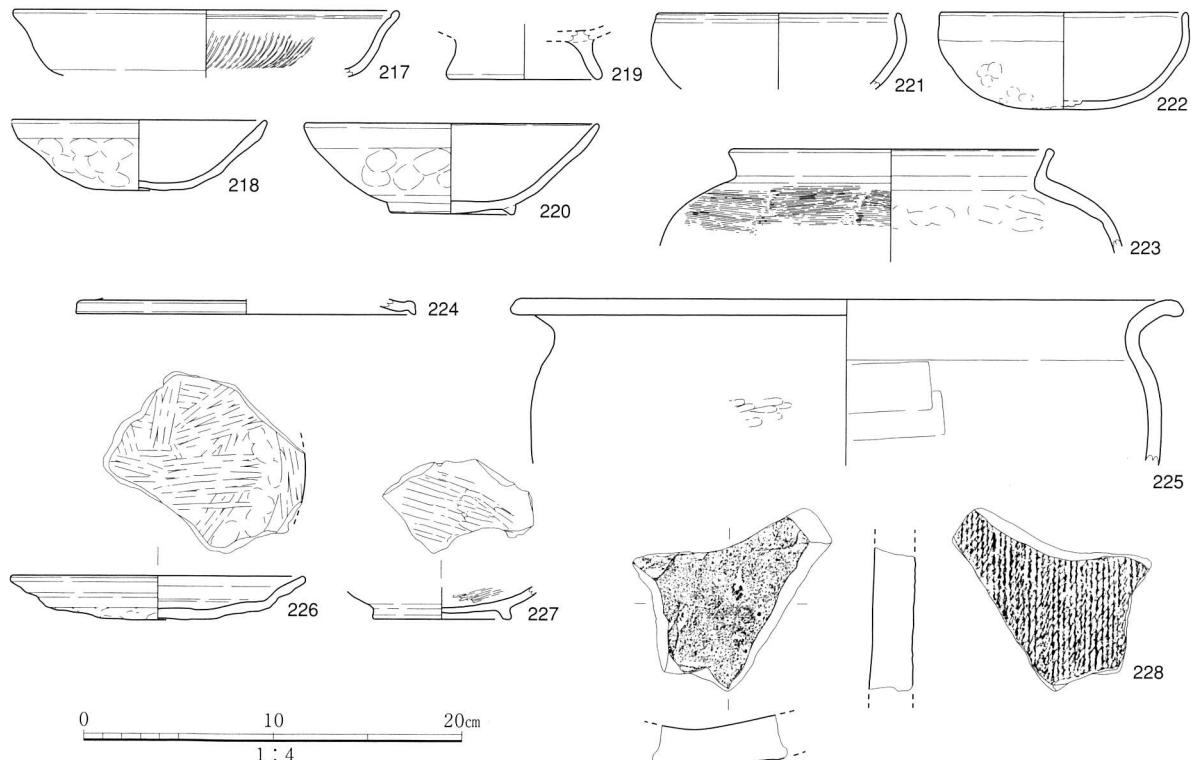


図29 出土遺物実測図(10)

第3a層(217~228)

とりあえず杯に分類しておく。152の墨書は「廿」であろう(図版18)。156の刻線は内面にあるため、意図的に施されたものかどうかは疑わしい。160は脚裾部の内面に布目のある高杯で、飛鳥時代に遡るものである。

図27は土師器のうち、甕A 170・172・174・177・178・180~182、甕B 168・169・171・173・175・176・179、羽釜183、竈184、脚付鉢185である。

甕Aと甕Bの識別は、前者については口縁端部がやや内側につまみ出すような形態で、わずかにハケメ調整が認められることによる。後者については口縁端部を外方へつまみ出す形態で、中・南河内によく見られる胎土をもつことによる。177の体部には形骸化した把手が付く。185は脚部のみが遺存する。類例が長岡京跡や大坂城跡下層に見られる。

図28は土師器以外の遺物を掲載した。須恵器杯B 186~188・壺189・短頸壺192・平瓶190・鉢か壺の底部191、灰釉陶器椀193、黒色土器A類椀194~200・205~207・209~211・線刻のある細片208、黒色土器B類椀212・213、製塩土器201~203、土錘204、丸瓦214・平瓦、和同開珎216(図版18)がある。製塩土器はこのほかにも本層から多数、破片が見つかっている(図版20)。

190は飛鳥時代に遡る。193は内面に降灰による薄緑色の釉が掛かる(図版19)。平安京ではⅡ期古段階ごろ(9世紀中葉~第3四半期)の遺物群の中に見られるタイプである。製塩土器の内面には布目が残り、拓本を掲載しなかった203にも粗い布目が見られる。208の線刻は判読できなかった。

vi) 第3a層出土遺物(図29、図版19)

水田の作土である本層からは、土師器杯A 217・椀A 218・椀B 220・台付皿219・鉢221・222・短

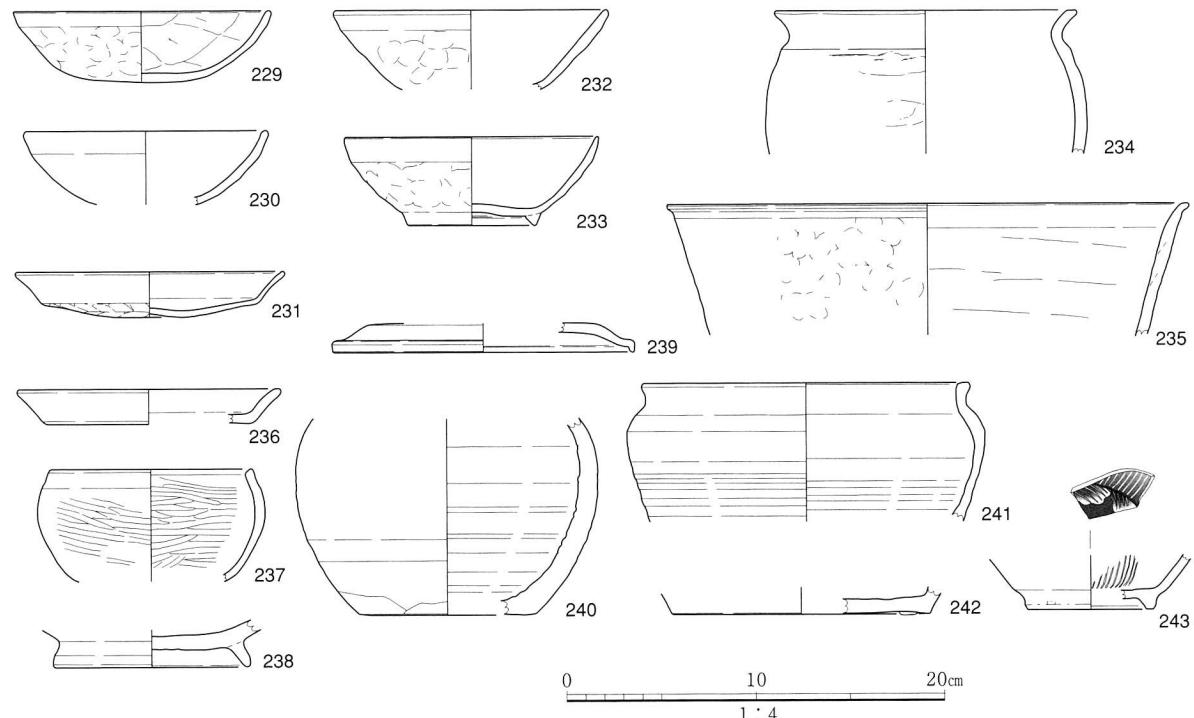


図30 出土遺物実測図(11)

第2c層(229~231・233~235・237・238・240~242)、第2b層(232・236・239・243)

頸壺223・甕B225、須恵器杯B蓋224、黒色土器A類椀227・皿226、平瓦228が出土した。

217の内面には斜放射状に1段の暗文があり、223とともに奈良時代に遡る。219は平安時代Ⅲ期以降に見られるものである。

vii) 第2b・c層出土遺物(図30、原色図版1、図版14・19)

島畠の作土と考えられる第2c層からは、土師器椀A229・230・皿B231・椀B233・甕B234・甕235、黒色土器A類鉢237・238、須恵器壺240・鉢241・242が出土した。また、水田の作土である第2b層からは、土師器椀B232、黒色土器A類皿236、須恵器杯B蓋239、肥前磁器243が出土した。240は平底の壺である。本層準の時期は243により江戸時代に降るものと考えられ、それ以外の遺物はいずれも下位層の遺物が混入したものである。

viii) 出土遺物からみた各層の年代

各層から出土した遺物については以上のとおりである。これらの遺物の年代観をもとに各層の年代についてまとめておく。

第6層は須恵器鉢77が1点出土したのみである。土師器皿A78や須恵器杯B蓋79が出土した第5層が平安時代Ⅰ期と考えられるので、下位の第6層はそれ以前の奈良時代を含めた年代幅で捉えておきたい。

第4d層は奈良時代に遡る土師器杯A81を含むものの、椀A82・小皿83～86などのユビオサエ調整主体の土師器食器類や、黒色土器A類椀89～92から平安時代Ⅱ期の前半に相当すると考えられる。羽釜88は、奈良時代の羽釜から平安時代Ⅲ期に見られる体部球形の羽釜の間に位置づけられる資料として重要である。

第4b・c層は、奈良時代に遡る土師器高杯104・須恵器杯B112を除けば、一部、平安時代Ⅰ期の資料を含むが平安時代Ⅱ期の前半が主体とみてよい。同層準の水田作土である第4a層もほぼ同じ様相である。

第3b・c層は、主体を占める資料は下位の第4層と同様であるが、土師器椀A137のように口縁部径の小さなものが見られること、黒色土器の椀の多くが平底部分の多い杯形の形態から底部の狭い椀形の形態になっていること、両面黒色化したB類が現れていることなどの点が新しい要素として挙げられる。平安時代Ⅱ期でも後半から平安時代Ⅲ期にかけての年代が考えられる。また、同層準の水田作土である第3a層でも土師器台付皿219があり、年代に矛盾はない。

第2b・c層の出土遺物は下位層に含まれていたものが大半であるが、近世の磁器碗243から江戸時代に相当する地層である。243は三田青磁とみられる。

1992年に行った平安時代の土器編年[佐藤1992]では、平安時代Ⅱ期の細分について、土師器椀A・皿Bの変化を基軸に古・中・新の3段階を設定したが、伴出する土師器椀Bや黒色土器椀の具体的な資料がとぼしく、その点は課題として残されていた。今回を含めて、それ以後の調査でも良好な一括資料は得られていない。本報告では、一定の存続期間が想定できる地層の年代について、各個体に対する細かな年代付けは意味がないと考えて「前半」「後半」という大きなイメージで捉えておくが、ある程度の流れは説明できたかと思われる。

(松本・佐藤)

第3節 小結

NG02－9次調査では後期旧石器時代から江戸時代までの遺構や遺物を検出した。以下に主な成果を概括する。

本調査区で最初に人の活動痕跡が認められるのは第14層の段階である。サヌカイトの剥片や石核など、石器遺物が出土した。第IV章の考察で詳しく述べるが、第14層を含む上下各層の火山灰の分析により、この第14層が平安神宮火山灰(AT：姶良Tn火山灰)の降灰層準よりも下であることがわかつた。平安神宮火山灰は今から2万5千年(暦年較正年代でいえば2万8千年、本書ではこの年代を使用)くらい前の鹿児島・姶良火山の噴火によって堆積したものであるから、確実にこの時期か、それ以前に遡る後期旧石器時代の石器遺物資料と判明したのである。

その後、本調査区は長い期間水没して人の住めるような環境ではなく、次に人の活動痕跡が見られるのは、平安時代になってからである。奈良時代の後半以降に川の流れが緩やかになって地面が顔を出すようになると、人々はここに土を盛り、畠を耕し、水田を営むようになった(第4層)。平安時代Ⅱ期前半、9世紀ごろのことである。この上にさらに土を盛り、水田や畠は継続して営まれた(第3層)。平安時代Ⅱ期の後半～Ⅲ期にかけて、つまり10世紀ごろのことである。この間、ここに建物を建てて水田・畠を営んでいる時期もあるが、常に河川の氾濫に翻弄される地域であったせいか、建物は短期間のうちに放棄され、ふたたび田や畠の拡がる田園地帯となった。出土遺物からは、人々が土器に入った塩を調達し、文字も銅錢も使っていたなど、当時の生活の一端を読み取ることができる。

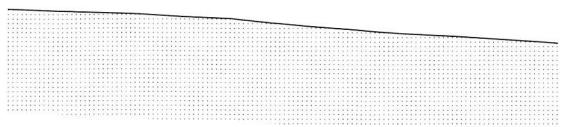
しかし、本調査区では次の時代の平安時代Ⅲ期(11世紀)以降の遺構や遺物はほとんど出土せず、次に人々がこの地で活動するのは、江戸時代(第2層)まで待たなければならない。

次章で述べるNG06－2次調査で、鎌倉～室町時代の遺構や遺物が見つかったのに対し、本調査区では第3層を覆う第2層からも鎌倉時代や室町時代の遺物が出土しなかったことから、平安時代Ⅲ期以降、集落の中心は別の地域へ移動したものと考えられる。

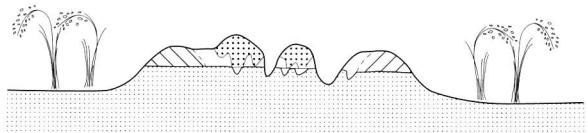
次頁の図31に簡単に平安時代の状況をまとめたので参照されたい。

(松本)

① 第4d層



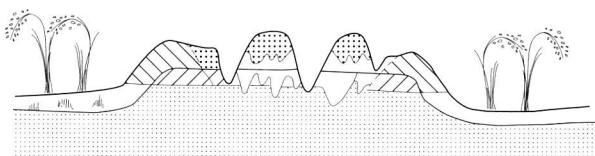
② 第4b・c層



① 河川にシルト・粘土が厚く堆積し……

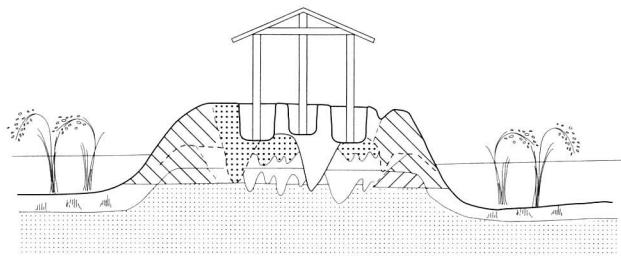
② 土を盛って水田を造り、高くなった地面で畠を耕す。

③ 第3b・c層(1)



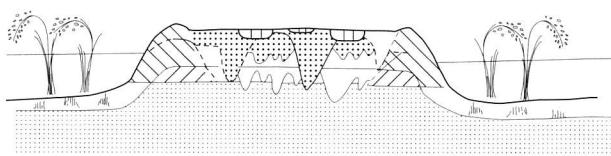
③ また土を盛って水田を造り直し、畠を耕す。

④ 第3b・c層(2)



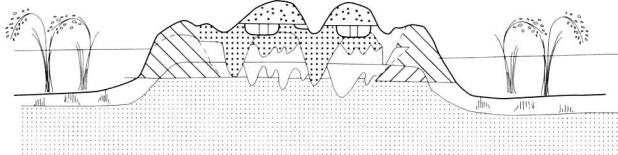
④ 土を盛って畠を覆い、建物を建てる。
(同時に畠も水田も営んでいる、はず)

⑤ 第3b・c層(3)



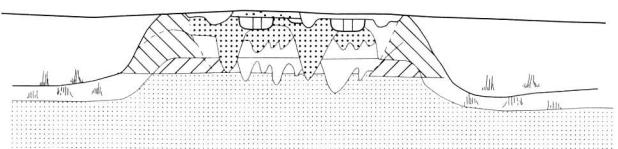
⑤ 建物は使われなくなり、地面も削られて……

⑥ 第3b・c層(3')



⑥ 畠が造られ、水田も引き続き営まれる。

⑦ 第2b・c層



⑦ いつしか、水田も畠も営まれなくなり、集落はほかの地へ移り、江戸時代に大きく地面が削られて、痕跡だけが地中に残る。

図31 NG02-9次調査の遺構の変遷(平安時代)

第Ⅲ章 NG06－2次調査の結果

第1節 基本層序

1)層序の概要

本調査地では現代盛土および近～現代の作土を除去すると、これより下位に近世以前の各層が良好な状態で堆積していた(図32・33、図版21)。現地表は南東がTP+9.7mと最も低く、これ以外の地点ではTP+9.8mでほぼ平坦な地形であった。以下の地層をみると、室町時代以降と考えられる第3層より上位では、現在までほぼ大きな地形の変化は認められない。第4層の段階では調査区の北半に自然流路があり、北側が一段低くなる地形であったと思われる。第6層上面はTP+7.4～7.3mで、調査区の中央部には周囲より約0.1m低くなる窪みが存在するものの、おおむね平坦な地形であった。第7層よりも下位の層準については、自然流路の埋土と思われ、調査区全域が流路に当っていたとみられる。ただし、湧水のため、TP+6.5mよりも下位の堆積状況は確認しえなかった。なお、これら各層からの出土遺物については、次節で詳細を報告する(図37)。

2)各層の特徴

以下で各層の特徴とおもな出土遺物について述べる(図32・33・37、図版21)。

現代盛土層：層厚80cmで、旧市営住宅の建築工事に伴う整地層である。

第1層：層厚10～20cmの黒褐色粗粒砂質シルト～中粒砂質シルト層で、旧市営住宅建築以前の作土層である。上面および下面では畝間を含め、耕作に伴う溝が多数検出された。出土遺物は近～現代の国産陶磁器・土器類および瓦類である。

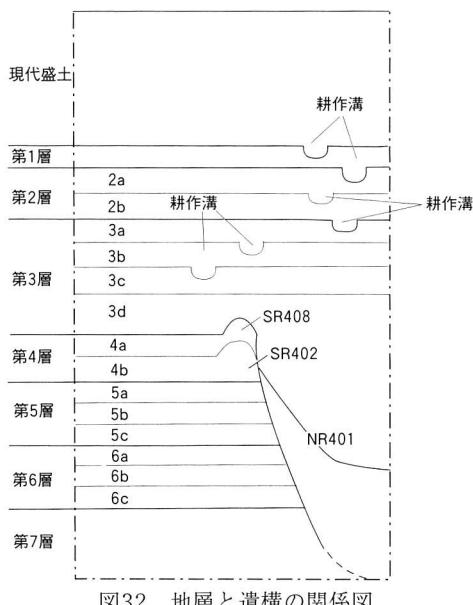


図32 地層と遺構の関係図

第2層：含礫オリーブ灰色中粒砂質シルト～灰オリーブ色粘土質シルト層で、層厚は30cmである。本層は作土層で、第2a・2b層の2層に細分された。下面ではそれぞれ耕作に伴う溝が検出された。出土遺物は中国産青花・青磁のほか、江戸時代の肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃陶器・丹波焼・備前焼・関西系陶器・その他の国産陶器・土器類、古代～中世の土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器および近世の瓦である。このことから本層は長原遺跡東北地区の基本層序におけるRK 2層に相当し、長原遺跡の標準層序ではNG 2層に比定される。

第3層：暗オリーブ～オリーブ褐色の粘土質シルト～粗粒砂層で、層厚は30～160cm以上である。本層は、第3a～d層の4層に細分された。第3a層は調査区内に部分的に堆積する水成層である。第3b層は全域に分布する作土層で、上面および下面では耕作溝が確認された。第3c層は基本的に水成層であるが、部分的に耕起されている。下面では耕作痕跡が確認された。第3d層は粗粒砂～礫で、水成層である。調査区の北で確認された自然流路を埋積している。第3層からの出土遺物は、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・緑釉陶器のほか加工木である。これらの遺物は一部古代に遡るものも含むがおおむね鎌倉～室町時代の年代を示す。本層はRK 3～4層に相当し、NG 3～4A層に比定される。

第4層：間に部分的に薄い中粒～細粒砂の水成層を挟んで第4a・4b層の2層に大別される。第4a層はにぶい黄褐色シルト質粘土層で、厚5～10cmの作土層である。第4b層はさらに水成層の4bi層と作土層の4bii層に細分される。第4bi層はオリーブ褐色中粒～細粒砂層で、層厚は5～10cm、第4bii層は暗オリーブ褐色粘土層で、層厚は20～30cmである。第4bii層上面から第4a層上面にかけては、第3c・3d層で最終的に埋没する東西方向の自然流路NR401が確認された。この南肩に沿って東西方向の土手状の盛土SR402・408が検出された。本層からは土師器・須恵器・瓦器が出土しており、RK 4層に相当するとみられる。なお、本層より下位では特に調査区の南西部で遺物の出土量が多くなっていると思われる。

第5層：オリーブ黒～暗オリーブ灰色シルト質粘土～粘土層で、第5a～5c層の3層に細分された。本層は水成層で、部分的に植物遺体のラミナが認められる。層厚は30～40cmである。本層の出土遺物は平安時代初頭以前と考えられる土師器・須恵器のほか弥生土器であり、RK4C～5層に相当するとみられる。

第6層：灰～オリーブ黒色の細粒砂～粘土層で、第6a～6c層の3層に細分される。第6a層は細粒砂からなる水成層である。第6b・6c層は土壤化が進んでいる。本層の出土遺物は、古代以前の土師器・須恵器である。RK 5～6層に相当するとみられる。

第7層：灰～オリーブ黒色の砂礫層で、層厚は60cm以上を測る水成層である。本層からは飛鳥時代の須恵器杯が出土しており、RK 6～7層に相当するとみられる。北西で行われたNG02－5次調査地では、飛鳥時代の自然流路NR801が検出されており[大阪市文化財協会2005a]、この埋土となる水成層の層厚は200～220cmであった。本層はこの南北方向の流路の埋土と思われ、同様の層厚となることが予想される。



第2節 遺構と出土遺物

1)飛鳥時代以前の遺構

調査区の中央に設定したトレンチ断面で、第7層の水成層で埋まる自然流路を確認した。この流路は堆積物の向きから、南北方向であったとみられる。ただし、規模は確認できなかった。出土遺物は須恵器杯1点のみである(図37-250)。この流路は、北西で行われたNG02-5次調査地で確認されたNR801や、第Ⅱ章第1節で述べたNG02-9次調査の自然流路と同様に、飛鳥時代に埋没する流路の1つであろう。

2)鎌倉時代の遺構と遺物

i)第4bi層上面の遺構(図34、図版21・22)

第4b層上面から第4a層上面にかけて調査区の北端で東西方向の自然流路NR401が検出された(図34、図版21・23)。流路は西へ向って流れしており、最終的に第3d・3c層で埋没している。幅は9.0m以上、深さは0.3m以内であった。自然流路の中からは比較的多くの遺物が出土している。この自然流路はNG97-52次調査で確認されたNR401およびNG96-66次調査で確認されたNR4B01につながるものと思われる。

第4bi層上面では土手状の盛土SR402をはじめ、浅い溝や土壙状の遺構が確認された。SR402はNR401の南肩で流路に沿って検出されている。このことから、単なる水田の畦畔ではなく、河川の増水に備えた簡単な堤としての性格をもつものと考えられる。周辺では、杭などを用いた施設は特に認められなかった。下端の幅0.7m、高さは0.2mである(図35下段の断面図)。SR402の南では溝状の窪みSX403が確認された。SX403は幅0.4~1.0m、深さ0.1mで、埋土はオリーブ褐色中粒~細粒砂の水成層である。SX404はSR402の上で検出された浅い窪みで、埋土はシルトの偽礫を含むオリーブ褐色細粒砂である。SR402に伴う施設であった可能性があるが、性格は不明である。SX405は東西4.0m、南北2.2mの不整長方形を呈する浅い窪みで、出土遺物はない。埋土は褐色細粒砂混りシルトで、

下面では鋤痕跡が認められた。耕作に関わる遺構であろう。SX406は調査区の南部で検出された浅い段状の遺構である。段差は0.05mで、北に向って低くなっている。畦畔ないしは溝の痕跡の可能性がある。また、SR402の北肩ではSP407が認められた。SP407は直径0.2m、深さ0.1mを測る。埋土はオリーブ褐色細粒砂~暗灰黄色粘土質シルトで、土師器皿244が出土した(写真1)。

ii)第4a層上面の遺構(図35、図版23)

第4a層上面では自然流路NR401と、この南で東西



写真1 SP407遺物出土状況(北から)

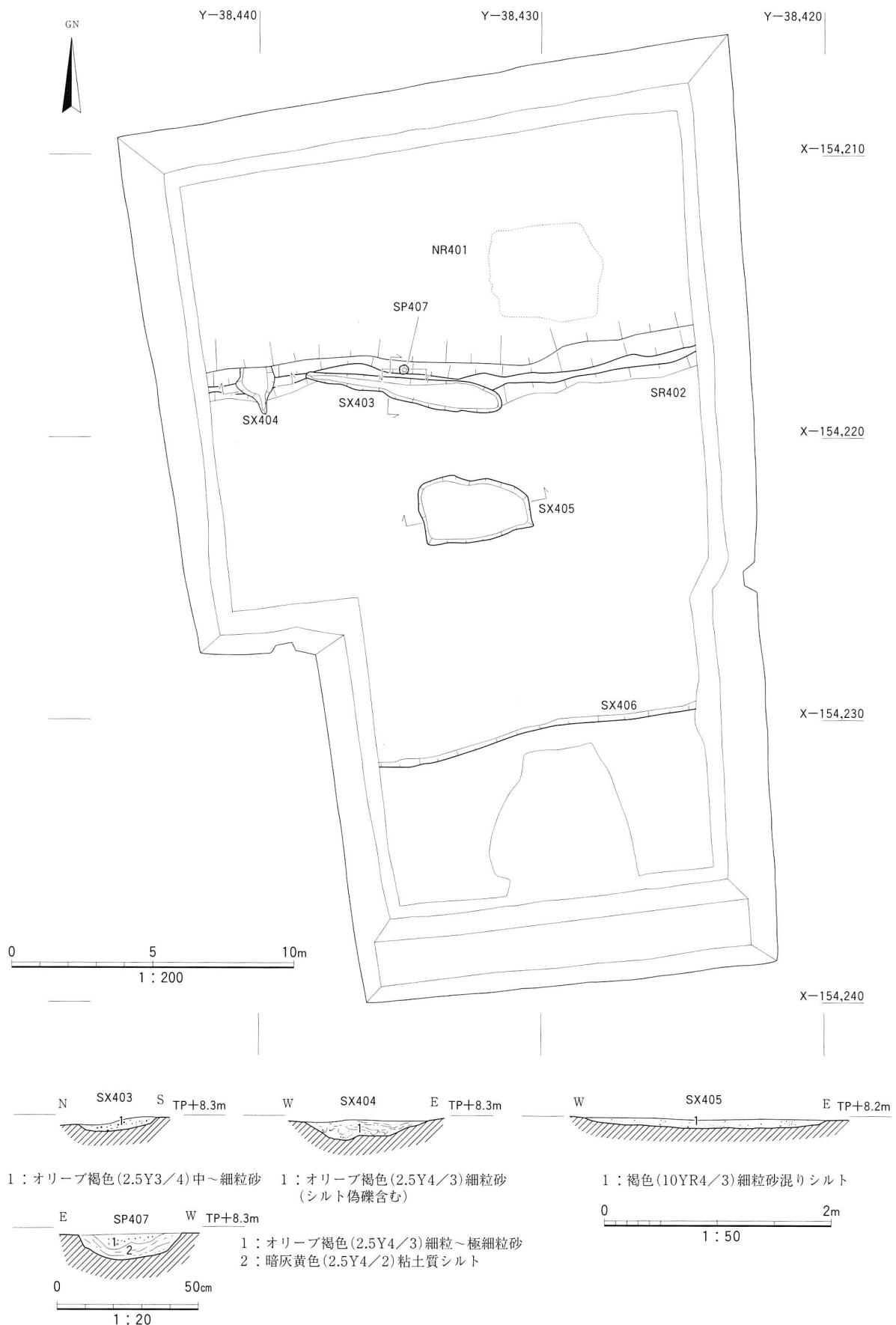


図34 第4bi層上面の遺構平面・断面図

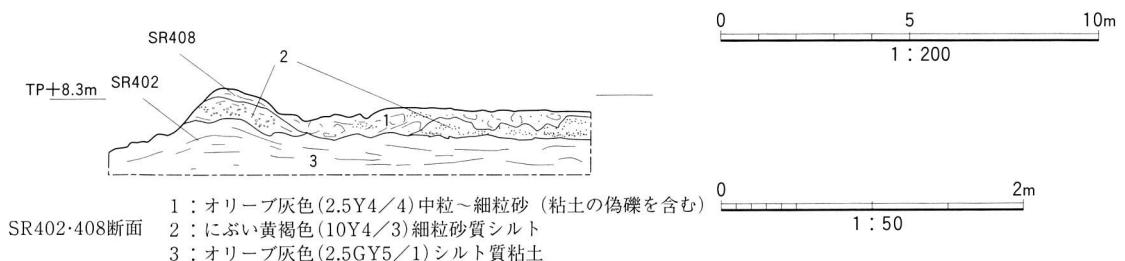
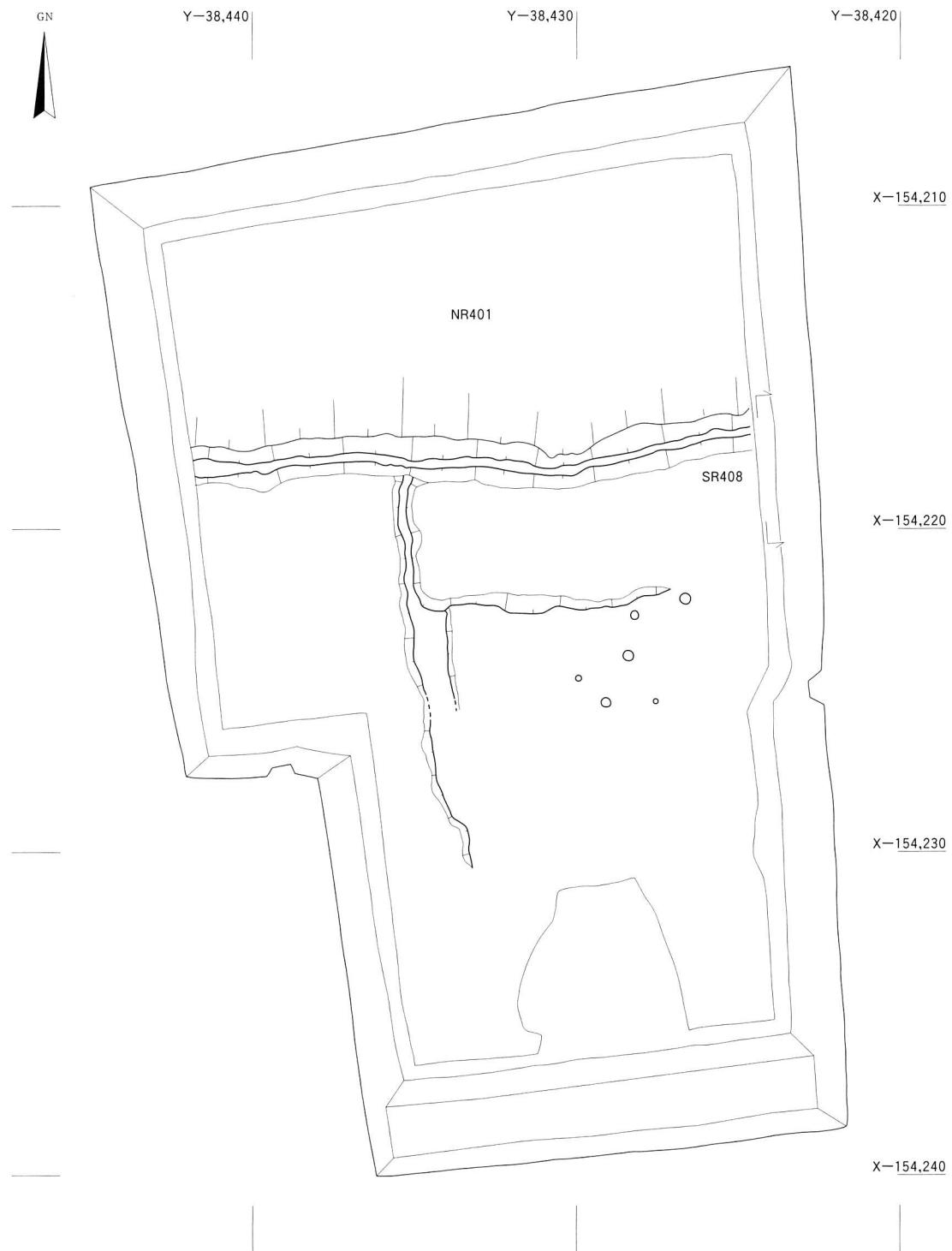


図35 第4a層上面の遺構平面・断面図

方向のSR408が確認された(図35、図版23)。SR408は高さ0.2m、下端での幅は0.6mであり、第4bi層上面で検出されたSR402の上に築かれている。SR402と同様の性格をもつと思われるが、護岸の杭や水口などの施設は認められなかった。SR408の南には南北方向の畦畔状の高まりが認められた。ただしこの高さは0.05m程度で、上部を覆う水成層の第3d層がほとんど存在していないため、畦畔と断定することはできなかった。

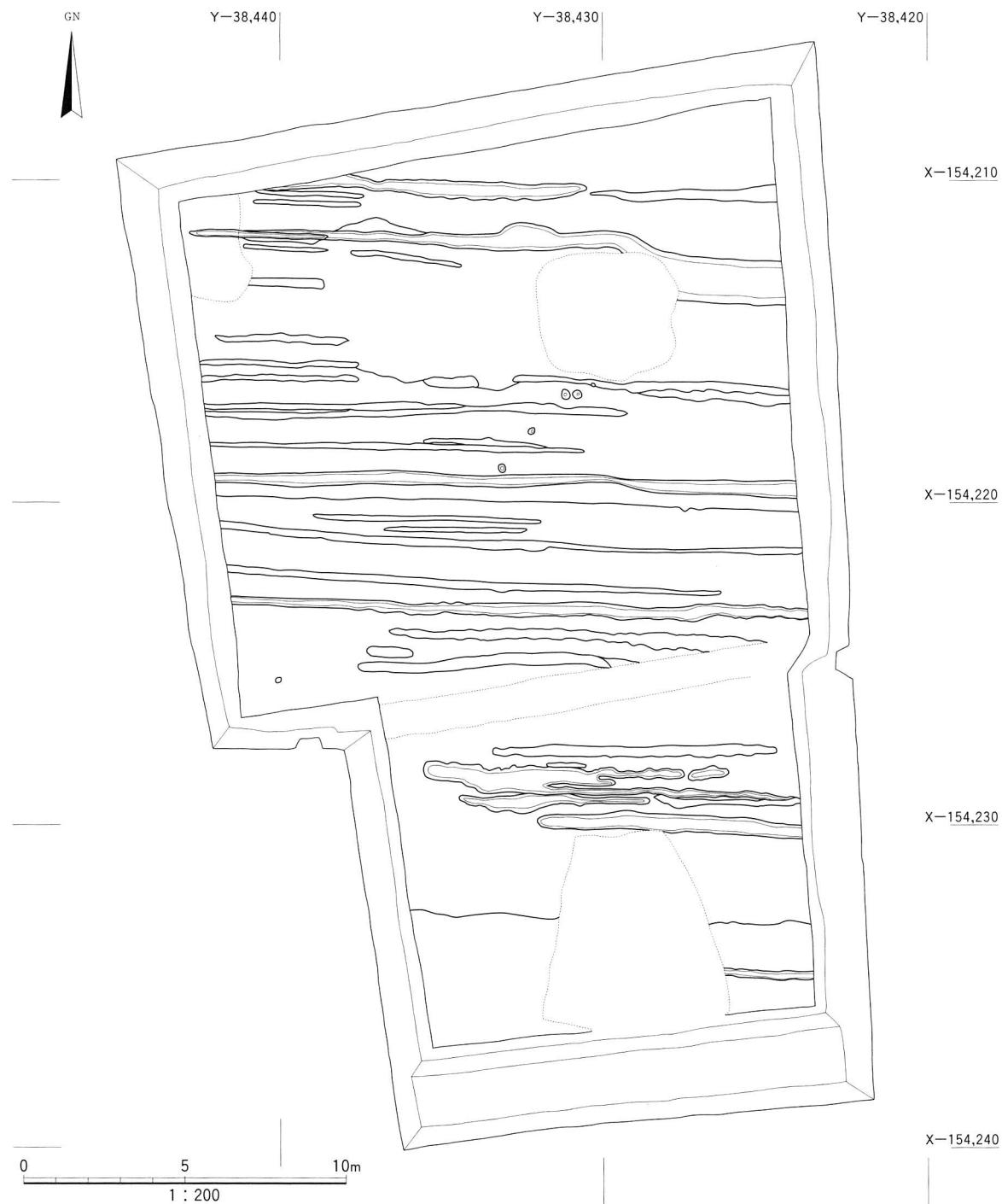


図36 第2b層下面の遺構平面図

iii) 鎌倉時代の遺構出土遺物(図37、図版20)

遺構からの出土遺物はわずかである。244はSP407から出土した土師器皿で、ほぼ完形に復元された。口縁部外面は二段のヨコナデを施し、端部は軽くつまんで仕上げている。精良な胎土であり、内面のナデは丁寧である。平安時代IV期に属し、12世紀のものであろう。245～249・270・271はNR401から出土した。245・247は土師器皿である。245は小皿で口縁部外面には粗いヨコナデを施し、端部

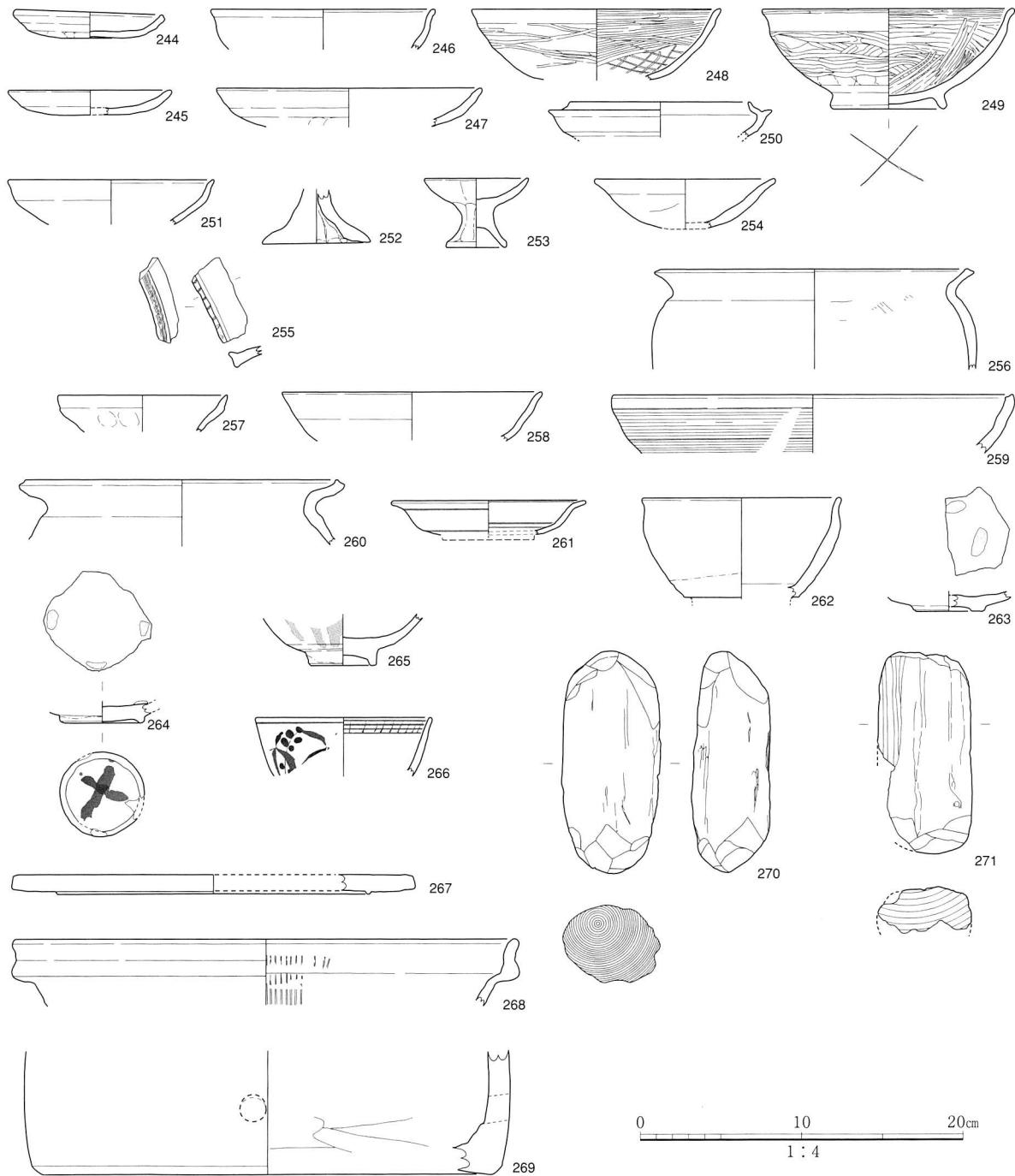


図37 出土遺物実測図

SP407(244)、NR401(245～249、270・271)、第7層(250)、第6層(251)、第5層(252～254)、第5層～第4b層下部(255～258)、第4a層(259)、第3b層(260)、第2b層(261～263)、第2a層(264～269)

外面は外方につまんでいる。胎土には雲母やシャモット・砂粒を含む。247は口径約16cmの皿で、口縁部外面には2段のヨコナデを施す。胎土は精良で、焼成は堅緻である。これらは平安時代IV期、12世紀のものであろう。246は土師器杯である。口縁端部を外反させ、内面にはごく浅い沈線が巡る。奈良時代のもので下位層からの混入品であろう。248・249は瓦器椀である。248は内面に斜格子状の暗文を施し、外面のヘラミガキは雑である。249は内面に平行線状の暗文を施している。外面のヘラミガキはていねいで、口縁部外面の横方向のナデの上下端にもヘラミガキが及んでいる。底部外面には焼成後に先の尖った工具で「×」または「十」印を刻んでいる。NG02-9次調査では「十」と墨書された土器片が多数検出されている。時期は若干降るが、本例もこれに関連するものかもしれない。これらは248がI-3～II-1期、249がI-2期に属し、11世紀末～12世紀初頭と思われる。270・271は加工木である。長さ約15～16cmの材の両端を丸く加工している。用途は不明である。

3) 豊臣期～江戸時代の遺構

第2b層下面では東西方向の耕作に伴う溝を多数検出した(図36、図版23)。これらの中には、幅が0.3m前後の溝と、幅0.1m前後の浅い溝がある。浅い溝は下面で鋤痕跡が認められるものが多い。幅広の溝は4～5mの間隔を開けて掘削されている。なお、これらの溝は正東西方向よりもやや西で北へ振れる方向をもっている。

また、第2a層下面でも同じ方向の耕作に伴う溝が多数検出されている。以上、近世においては調査地は耕作地として利用されていたと思われる。

4) 各層の出土遺物(図37)

250は第7層から出土した須恵器杯H身である。かえりは短く、底部外面には回転ヘラケズリを施している。飛鳥時代前半のものである。

251は第6層から出土した土師器杯である。口縁端部をつまんで外反させている。磨滅のため内面の暗文の有無は不明である。飛鳥時代であろう。

252～254は第5層から出土した。252・253は土師器の小型高杯である。252は脚部が大きく広がり、内外面ともに粗いユビナデで仕上げている。253は脚部がさほど広がらず、脚部外面を縦方向にナデで仕上げている。これらは飛鳥時代のものであろう。254は土師器椀である。口縁部外面には1段のヨコナデを施し、体部下半はユビオサエ痕と粘土紐の接合痕を残す。平安時代前半と思われる。

255～258は第5～4b層下部から出土した。255は弥生土器手焙形土器の蔽い部と思われる。口縁部外面にはキザミメを施し、端部には櫛描波状文を巡らせている。弥生時代後期であろう。下位層からの混入品と思われる。256～258は土師器である。256は甕である。口頸部は短く外反し、端部をつまんでいる。体部内面の調整はハケの後ユビナデを行っている。257は椀である。口縁部は強めのヨコナデによって屈曲させており、ヨコナデよりも下部にはユビオサエが残る。258は皿である。精良な胎土をもち焼成は良好である。これらの土師器は平安時代II期に属し、10世紀頃のものであろう。

259は第4a層から出土した須恵器鉢である。体部外面をカキメによって仕上げている。

260は第3b層から出土した土師器甕である。口縁端部には面を持ち、内外面をユビナデで仕上げている。平安時代初頭と思われ、下位層からの混入品であろう。

261～263は第2b層から出土した。261は漳州窯産青花皿である。底部を欠失しており、見込みの文様は不明である。内外面には圈線を巡らす。262は瀬戸美濃陶器天目碗である。内外面には鉄釉を施す。口径は約12cmで、比較的大ぶりである。263は肥前陶器皿である。内面には砂目痕が残る。胎土は灰白色で、砂粒をほとんど含まない。これらは17世紀初頭～前半のものであろう。

264～269は第2a層から出土した。264は肥前陶器皿である。内面には胎土目痕が残る。底部外面には「十？」の墨書を有する。265は肥前陶器碗である。全体に透明釉を施した後、白色の釉薬を掛けている。266は肥前磁器と思われる碗である。口縁部内面には格子状の文様を巡らす。267は備前焼で、蓋であろう。268は丹波焼擂鉢である。269は産地不明陶器で、器種は不明である。鉄釉を内外面に塗布しており、底部付近には穿孔がある。これらの陶磁器類は、264が17世紀初頭、265・268が17世紀後半～18世紀初頭、266・269は19世紀前半に属すると思われる。

第3節 小結

今回の調査は、南西で行われたNG02-9次調査で検出されたものと同様に、平安時代の遺構の検出を目的としたものであった。しかし、建物跡等は検出されず、飛鳥時代の流路と中世～近世にかけての作土層、自然流路が検出された。以下では周辺の調査成果と合わせて、調査地における地形と土地利用の変遷についてまとめておきたい。

調査地では、飛鳥時代以前の自然流路の氾濫による堆積が一段落したのち、暗色帶である第6層が形成される。第6層上面の標高はTP+7.3～7.4mである。一方、北西に50m離れた地点で行われたNG02-5次調査では、RK6層に相当する飛鳥時代の第7層上面はTP+8.0～8.2mで、調査地よりも約1m近く高くなっている[大阪市文化財協会2005a]。出土遺物量も今回の調査よりもはるかに多かった。長原遺跡北部周辺の古地形復元によると、調査地は出戸自然堤防の東の六反出戸低地に位置している[高橋工1999a]。また、第6層の上位に堆積した第5層および第4bii層の下部もシルト～粘土からなる湿地状の堆積層であった。このことから、調査地は飛鳥～平安時代前半までは低湿地であり、居住には適さなかったとみられる。

調査地が耕作地となるのは第4bii層の段階以降であるが、北半には自然流路NR401が西に向って流れしており、この氾濫の危険にさらされていたと思われる。第4bi層はこの自然流路の氾濫堆積物とみられ、SR402・408は洪水の影響を防ぐための土手の機能をもっていたと考えられよう。調査地全体はNR401を含めて第3d・3c層の氾濫堆積物で埋まり、ほぼ平坦な地形となった。

なお、この流路はNG97-52次調査で確認されたNR401・NR402(図38)およびNG96-66次調査で確認されたNR4B01に方向が類似している[大阪市文化財協会1999・2000a]。調査区付近の流路は、幾度かの氾濫によって、川筋を変えながら北西へ向って流れしており、今回検出した流路もこれら

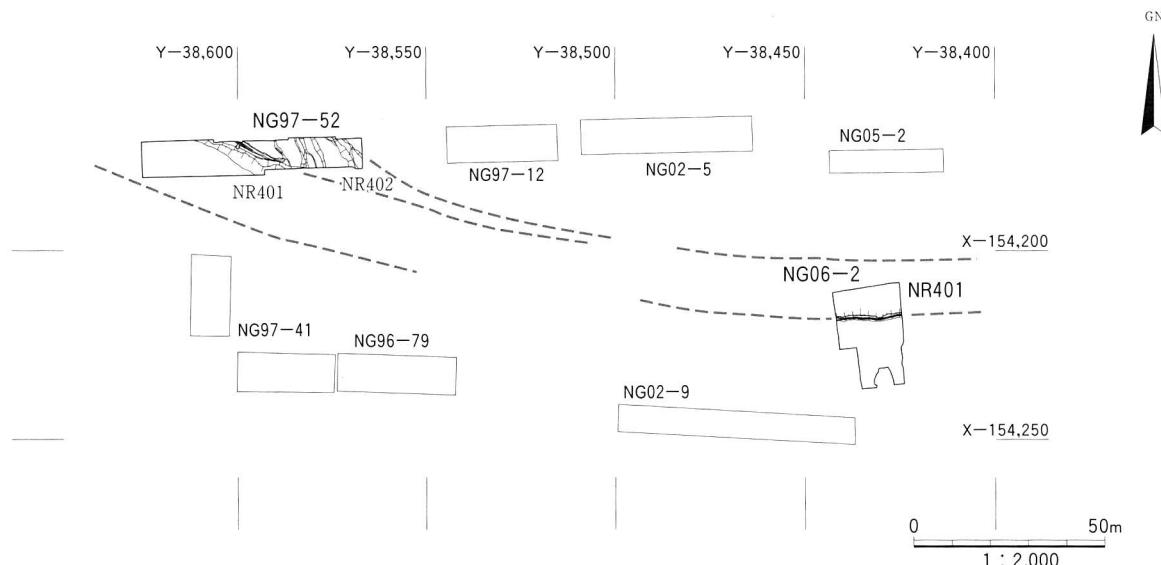


図38 調査地周辺における中世の自然流路検出状況

のうちいずれかとなろう。なお、出土遺物の時期からみると、NR401は11～12世紀とされるNR402と同一の流路であった可能性がある。

当地は第3c層の堆積によってほぼ平坦になった後は、連綿と耕作地として利用されていたと思われる。ただし作土を観察すると、近世段階においても、河川の洪水によって運ばれたと思われる砂層が部分的に認められる。このことから、中世以降は現代までの間、調査地が可耕地である一方で、比較的低湿であり、河川の氾濫の影響を受けやすい立地環境にあったことが推測される。

(小田木)

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

第1節 火山灰分析

1)はじめに

前述のように第14層からまとまって旧石器遺物が出土した。その出土層準の手がかりを得るために、現地で椀がけによって火山灰の有無を確かめたところ、上位の第12b層上部に褐色透明の火山ガラスが認められ、第12b層下部には無色透明扁平型の火山ガラスが多量に含まれていた。このことから、それぞれ横大路火山灰層(約7,300年前)と平安神宮火山灰層(約28,000年前)ではないかと考えられ、旧石器遺物出土層準を明らかにする目的で火山灰分析を実施した(後述のV1地点試料)。また、調査区西側では地震によるとみられる地層の水平な「ずれ」が認められた。調査区の東西間における層序対比を確かなものにするために、合わせて火山灰分析を実施した(後述のV2地点試料)。

2)試料と分析方法

分析に用いた試料はV1・V2の2地点(図5・7)で採取した、それぞれ14試料と23試料の合計37試料である。V1地点の試料は旧石器遺物出土地点に近接した南壁面で、V2地点の試料は上述の地層の「ずれ」が認められた調査区西側の南壁面から採取したものである。なお、現場における試料の採取に当っては、層理面や岩相の差異に留意して行った。

分析に用いた試料の処理方法は、基本的に[吉川ほか1986]に従った。試料を水洗・篩別して中粒シルト以下の泥分を除去し、乾燥の後、礫・砂・粗粒シルトの篩別を行い、各粒径試料の重量を測定した。これら試料のうち、 $3.0\phi \sim 4.0\phi$ の極細粒砂サイズの試料を用いてプレパラートを作成し、偏光顕微鏡(倍率:100倍)によって鉱物・岩片等の粒子を200粒以上同定して数えた。鉱物組成は、新鮮な鉱物と風化変質した鉱物・岩片などを区別しながら、新鮮な鉱物について火山ガラス・長石・石英・重鉱物の割合を求めた。火山ガラスは無色透明・褐色透明を区別し、重鉱物は角閃石類・斜方輝石・単斜輝石・黒雲母・ジルコン・アパタイトや磁鉄鉱などの不透明鉱物を同定した上で合算して求めた。さらに、鉱物組成ダイアグラムを検討して、火山灰層準や火山ガラス等の火碎物が濃集している可能性のある試料については、火山ガラスの形態および重鉱物組成を新鮮・風化を区別しながら各200粒以上数え、火山ガラスの屈折率を20粒以上数えた。

火山ガラスの形態に当っては、[吉川1976]の分類に従って行った。また、火山ガラスの屈折率は[吉川ほか1986]の位相差偏向顕微鏡を用いた分散法に拠って行った。なお、鉱物の新鮮・風化判定に当っては、角閃石や斜方輝石などの有色鉱物を判定する場合は、自形・半自形はもとより、他形でも結晶面が判定できる鉱物を新鮮と判定し、劈開面すら判定できないものを風化とした。また、長石

や石英などの無色鉱物の場合はオープンニコルおよびクロスニコルの偏光顕微鏡観察において、気泡や汚れ・くすみが無いか、もしくは少ないものを新鮮と判定し、そうでないものを風化とした。

3) 分析結果

i) V1地点

粒度分析の結果については、礫・砂・泥の割合と粗粒シルト以上の粒度分布ヒストグラム・累計曲線を図39に示す。

全般的に泥・砂が主体で、礫(-1 phi以上)は試料V1-02~04・07・08・10・13・14に極微量含まれるのみであった。以下、地層の累重に従って下位から順に記述することにする。試料V1-14・13では泥の割合が高く、V1-12は砂が他に比べて高くなる。V1-11~10では泥・砂の割合に変化はほとんどないが、V1-10にわずかに礫が含まれていた。V1-08~05にはわずかな上方粗粒化の傾向が認められ、V1-04・03では泥・砂の割合に変化はほとんどないが、わずかに礫が含まれており、V1-02~01にはやや上方細粒化の傾向が見られた。

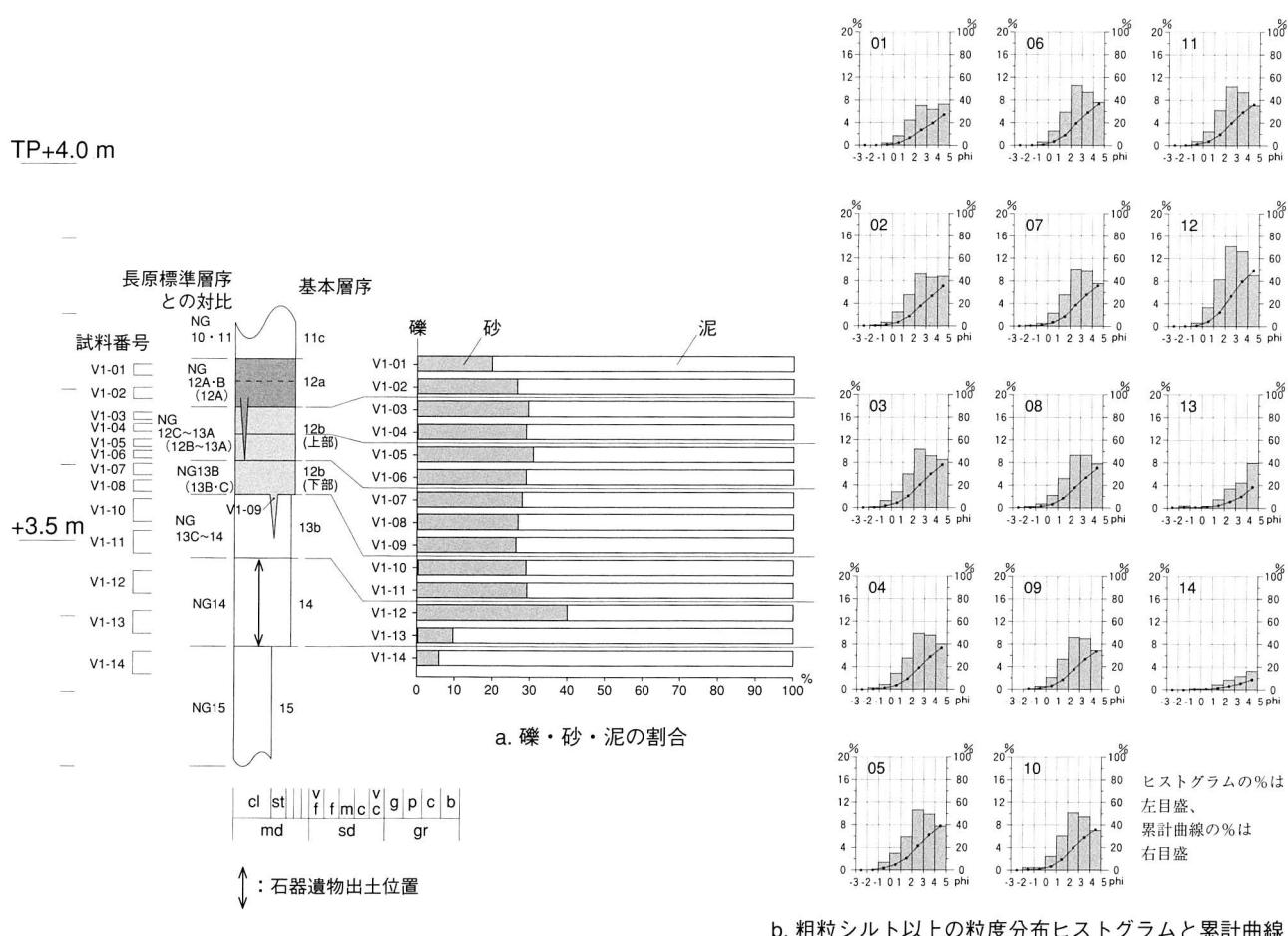


図39 磫砂泥の割合と粗粒シルト以上の粒度分布ヒストグラム・累計曲線(V1地点)

火山灰分析の結果については、火山灰の岩石記載学的性質を表5に、鉱物組成を図40aに、火山ガラスの形態を図40bに、重鉱物組成を図40cに、火山ガラスの屈折率を図40dに示す。

新鮮な鉱物と風化した鉱物・岩片の割合は、試料V1-10~01で新鮮な鉱物が多く、20%以上を占めた。鉱物組成において、火山ガラスはV1-11~01が高率であり、特にV1-09~06と03で高い。長石はV1-10・07・04・01が他に比べて高率であった。石英は極少量含まれていたが、V1-14~11・07では認められなかった。重鉱物は少量であるが、V1-10~07とV1-04・03がやや高い。

火山ガラスの形態は鉱物組成で火山ガラス・長石・重鉱物の比較的多い、試料V1-10~07・04・03で実施した。いずれも扁平型火山ガラス(Ha・Hb)が70%以上と高率であるが、V1-07・03は中

表5 火山灰の岩石記載学的性質(V1地点)

試料 No.	鉱物組成(%)						新鮮風化 (%)	火山ガラスの形態(%)									
	G1	b.G1	Fl	Qz	Hm	O		新鮮	風化	Ha	Hb	b.Ha	b.Hb	Ca	Cb	Ta	Tb
V1-01	19.8	0	73.7	2.8	3.7	0	32.3	67.7									
V1-02	17.5	0	75.8	2.6	4.1	0	27.9	72.1									
V1-03	30.5	0.6	63.4	1.6	3.9	0	40.3	59.7	19.0	52.8	0.5	0.5	25.0	2.3	0	0	0
V1-04	27.2	0.3	64.9	1.6	6.0	0	40.5	59.5	27.5	50.5	0	0.5	21.1	0.5	0	0	0
V1-05	28.0	0.3	66.8	1.2	3.7	0	35.2	64.8									
V1-06	36.1	0.4	60.7	1.0	1.8	0	41.1	58.9									
V1-07	30.8	0.3	64.6	0	4.3	0	39.7	60.3	22.6	47.6	0	0.5	25.5	3.4	0	0.5	0
V1-08	36.1	0.2	56.6	1.6	5.2	0.2	44.5	55.5	22.8	51.3	0	0.3	23.5	2.0	0	0	0
V1-09	32.4	0.7	58.4	1.4	7.1	0	42.3	57.7	24.1	52.7	0.9	0	21.4	0.9	0	0	0
V1-10	21.5	0	70.2	3.1	4.9	0	33.0	67.0	17.7	65.0	0	0	17.3	0	0	0	0
V1-11	15.1	0	81.4	0	3.5	0	18.6	81.4									
V1-12	0.9	0	96.0	0	3.1	0	4.8	95.2									
V1-13	1.3	0	98.3	0	0.4	0	5.3	94.7									
V1-14	0.8	0	96.8	0	1.2	1.2	2.4	97.6									

試料 No.	火山ガラスの屈折率(n)	重鉱物組成(%)										
		Am	w.Am	b.Ho	Opx	w.Opx	Cpx	w.Cpx	Bi	Zr	Ap	Opq
V1-03	1.496-1.499(1.498-1.499), 1.508-1.513(1.511)	78.9	10.5	0	5.3	0	0	0	0	0	0	5.3
V1-04	1.495-1.504(1.499), 1.509-1.510	85.0	1.5	0	6.0	3.0	0	0	1.5	0	0	3.0
V1-05	1.496-1.499, 1.503											
V1-06	1.496, 1.498-1.501											
V1-07		72.6	6.3	0.5	13.2	0.5	0.5	0	0	0.5	0.5	5.4
V1-08	1.496-1.501(1.499)	77.5	3.0	1.5	9.0	0	2.5	0	0	0	2.5	4.0
V1-09		71.0	5.2	6.4	6.9	0.6	0.6	0	0	0.6	1.2	7.5
V1-10		79.2	5.8	3.3	3.3	1.7	0.9	2.5	0	0	0	3.3

鉱物組成：G1：火山ガラス、b.G1：褐色火山ガラス、Fl：長石、Qz：石英、Hm：重鉱物、O：その他、+：微量含む

ガラスの形態：Ha・Hb：扁平型、b.Ha・b.Hb：褐色扁平型、Ca・Cb：中間型、Ta・Tb：多孔質型、O：その他の型

重鉱物組成：f.Am：新鮮角閃石類、w.Am：風化角閃石類、b.Ho：褐色普通角閃石、f.Opx：新鮮斜方輝石、w.Opx：風化斜方輝石、

f.Cpx：新鮮単斜輝石、w.Cpx：風化単斜輝石、Bi：黒雲母、Zr：ジルコン、Ap：燐灰石、Opq：不透明鉱物

火山ガラスの屈折率欄の()内はモード値を示す。

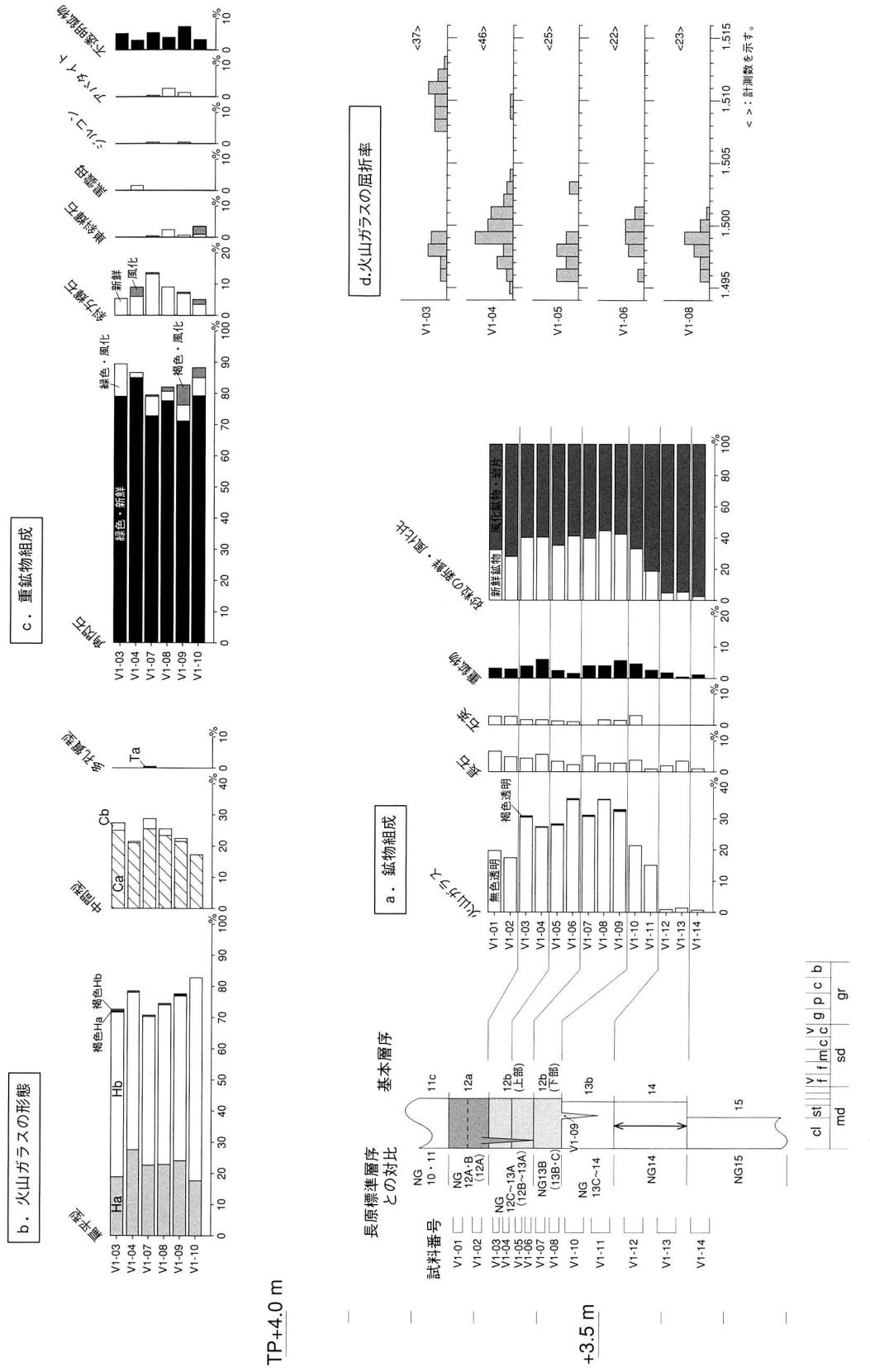


図40 鉱物組成・火山ガラスの形態・重鉱物組成・火山ガラスの屈折率 (V1地点)

間型火山ガラス(Ca・Cb)が30%近くあり、多孔質型火山ガラス(Ta・Tb)のうち、Tb型が極少量含まれていた。また、褐色透明ガラスが少量ではあるがV1-09～03に含まれていた。

重鉱物組成は火山ガラスの形態分類と同様に試料V1-10～07・04・03で実施した。その全てにお

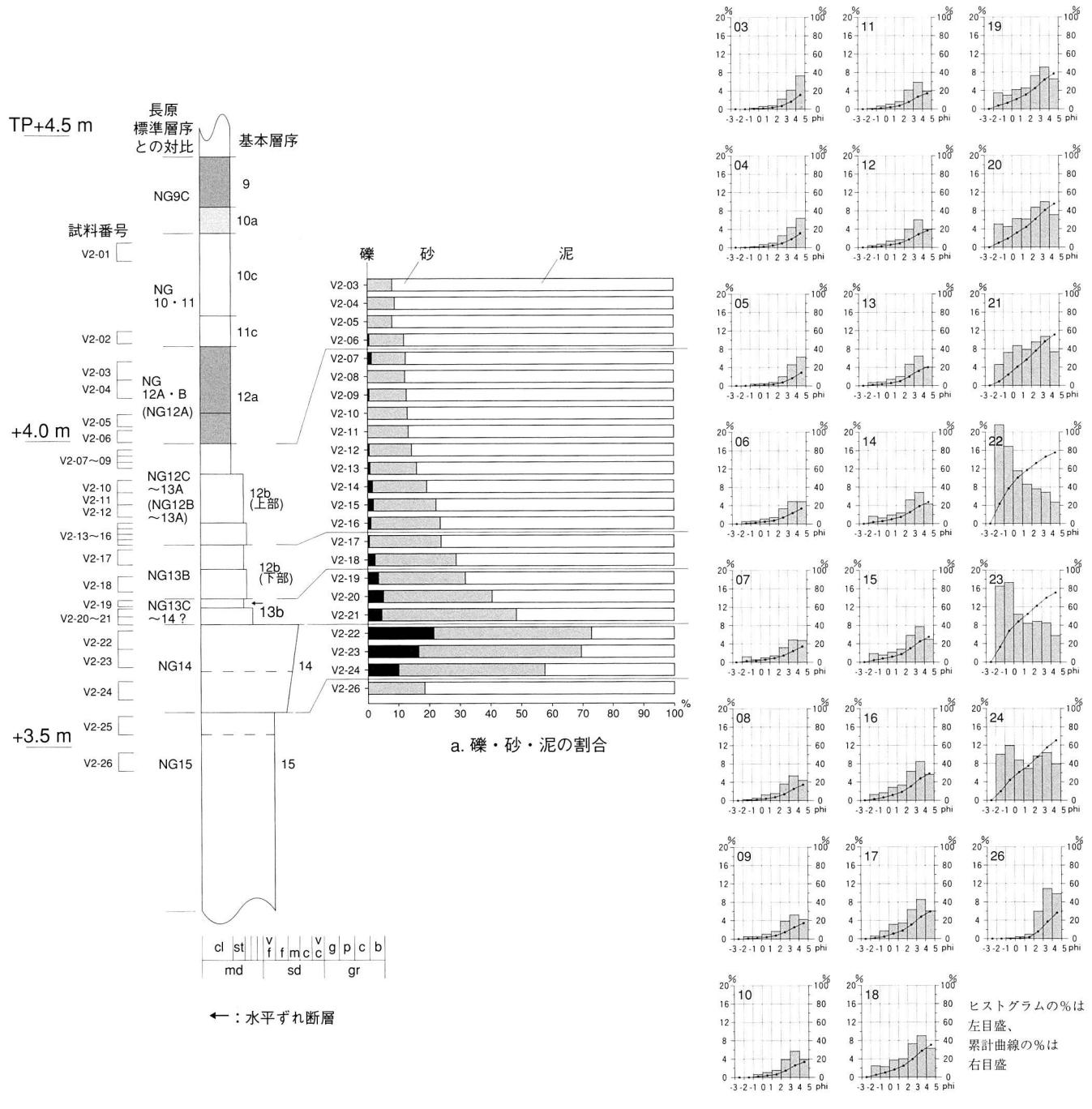


図41 磯砂泥の割合と粗粒シルト以上の粒度分布ヒストグラム・累計曲線(V2地点)

表6 火山灰の岩石記載学的性質(V2地点)

試料 No.	鉱物組成(%)						新鮮風化 (%)	火山ガラスの形態(%)									
	Gl	b.Gl	Fl	Qz	Hm	O		新鮮	風化	Ha	Hb	b.Ha	b.Hb	Ca	Cb	Ta	Tb
V2-03	21.0	1.1	64.1	2.1	11.7	0	43.8	56.2	26.7	62.4	1.8	2.7	5.9	0.5	0	0	0
V2-04	35.2	0.4	55.0	0.4	8.6	0.4	51.5	48.5	21.4	61.6	0.9	1.8	12.5	1.8	0	0	0
V2-05	16.4	0.9	70.8	0.5	11.4	0	35.2	64.8	32.8	55.0	0.4	2.3	8.7	0.4	0.4	0	0
V2-06	29.9	+	57.8	0.8	11.5	0	54.5	45.5	29.1	59.9	0.5	0.8	8.9	0.8	0	0	0
V2-07	16.3	+	67.4	2.2	14.1	0	47.5	52.5	23.3	66.7	0	0.9	8.7	0	0.4	0	0
V2-08	22.0	+	55.6	2.4	20.0	0	56.4	43.6	32.4	56.5	0.4	0	10.3	0	0.4	0	0
V2-09	24.5	0	59.8	2.8	12.9	0	52.2	47.8	34.6	48.3	0	0	15.6	0.6	0.9	0	0
V2-10	18.0	0	64.3	2.8	14.9	0	42.2	57.8	37.1	53.3	0	0	9.6	0	0	0	0
V2-11	16.0	0	68.1	2.7	13.2	0	41.4	58.6	28.5	52.8	0	0	18.2	0.5	0	0	0
V2-12	16.7	0	63.9	0.8	18.2	0.4	52.3	47.7	31.5	60.3	0	0	8.2	0	0	0	0
V2-13	20.5	0	64.0	2.0	13.5	0	46.5	53.5	32.1	58.0	0	0	9.4	0.5	0	0	0
V2-14	30.2	0	58.6	1.8	9.0	0.4	49.5	50.5									
V2-15	26.0	0	63.5	2.1	8.1	0.3	46.1	53.9									
V2-16	30.1	0	62.8	1.3	5.1	0.7	45.3	54.7	30.0	61.3	0	0	8.7	0	0	0	0
V2-17	34.2	0	58.8	1.7	5.3	0	45.2	54.8	38.0	60.1	0	0	1.9	0	0	0	0
V2-18	38.1	0	56.9	1.6	3.4	0	47.2	52.8	30.0	64.0	0	0	6.0	0	0	0	0
V2-19	32.9	0	62.2	1.7	3.2	0	42.1	57.9	30.5	63.0	0	0	5.6	0.9	0	0	0
V2-20	27.1	0	67.2	1.7	4.0	0	34.5	65.5									
V2-21	25.6	0	71.0	1.7	1.7	0	31.3	68.7									
V2-22	5.5	0	89.8	2.2	2.5	0	11.1	88.9									
V2-23	3.9	0	94.5	0.8	0.4	0.4	5.8	94.2									
V2-24	0.8	0	93.9	2.6	2.3	0.4	7.5	92.5									
V2-26	0	0	96.5	2.3	0.8	0.4	4.2	95.8									

試料 No.	火山ガラスの屈折率(n)	重鉱物組成(%)													
		Am	w.Am	b.Ho	Opx	w.Opx	Cpx	w.Cpx	Bi	Zr	Ap	Opx			
V2-03		77.4	2.0	1.0	5.4	0.5	2.9	0	0	0	0	10.8			
V2-04	1.498-1.500		,1.507-1.511		76.5	2.0	0	5.5	0	5.0	0	0.5	0	0.5	10.0
V2-05					77.3	4.8	1.3	2.2	0.4	2.2	0.4	0	0.9	0.9	9.6
V2-06	1.496-1.497,1.499-1.501(1.499),1.504,1.509-1.510				84.6	1.4	2.3	1.8	0.9	1.8	0	0	0.4	0.9	5.9
V2-07					88.7	1.8	0.9	4.5	0.9	0	0	0	0	0.9	2.3
V2-08	1.495-1.502(1.499)				84.4	1.3	1.3	2.5	0	0.5	0	0	0	0.5	9.5
V2-09					90.1	1.0	3.5	1.5	0	0	0	0	0.5	0	3.5
V2-10					87.3	1.0	0.3	2.5	0.5	0.5	0	0	0.3	0.8	6.8
V2-11					89.2	0	0.4	3.7	0.4	1.5	0	0.4	0	0.7	3.7
V2-12	1.496-1.500(1.498)				86.0	1.5	1.9	4.4	1.1	0.4	0	0	0	0.2	4.5
V2-13					81.5	2.8	1.3	4.5	1.5	1.3	0	0	0	0.3	6.8
V2-14	1.497-1.501(1.498)														
V2-15															
V2-16					72.7	5.0	0.5	8.9	0.5	2.0	0	0	0	1.5	8.9
V2-17					71.8	2.9	1.2	10.4	3.7	2.1	0	0	0	0.8	7.1
V2-18	1.497-1.500(1.499)				67.4	7.2	0.7	14.9	2.5	1.1	0.4	0.4	0	2.5	2.9
V2-19					64.8	9.0	0	17.6	2.4	1.0	0	0.3	0.8	0.3	3.8

凡例は表5に同じ

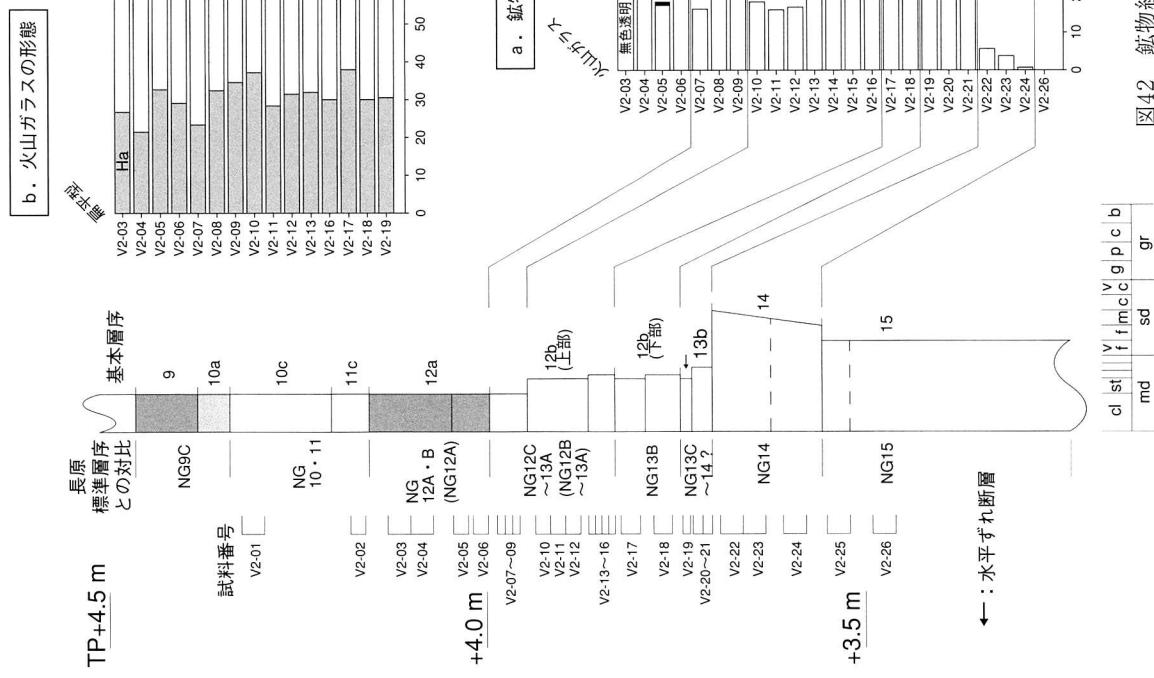


図42 錦物組成・火山ガラスの形態・重錦物組成・火山ガラスの屈折率(V2地点)

cl st v f fm c c g p c b
md sd gr

← : 水平ずれ断層

いて角閃石が高率であり、新鮮で緑色のものがほとんどを占め、褐色のものが極少量含まれていた。V1-07では斜方輝石が比較的多く含まれていた。

火山ガラスの屈折率は鉱物組成で火山ガラスが多い、試料V1-08・06～03で実施した。V1-08では $n = 1.496 \sim 1.501$ (モード1.499)であった。V1-06は $n = 1.496$ と $1.498 \sim 1.501$ 、V1-05は $n = 1.496 \sim 1.499$ と 1.503 であった。V1-04は $n = 1.495 \sim 1.504$ (1.499)で、少量ではあるが、1.509、1.510のガラスが認められた。V1-03では $n = 1.508 \sim 1.513$ と $1.496 \sim 1.499$ (1.511と1.498～1.499)であった。

ii) V2地点

V2地点における粒度分析については、礫・砂・泥の割合と粗粒シルト以上の粒度分布ヒストグラム・累計曲線を図41に示す。

礫・砂・泥の割合ではその傾向が、試料V2-21から上位とV2-22より下位で異なっていた。V2-21から上位では上方細粒化の傾向が、V2-22より下位では上方粗粒化の傾向が顕著に認められた。以下、細かく見ると、試料V2-26では泥の割合が高く、礫が含まれないのに対して、V2-24では礫・砂ともに割合が顕著に高くなる。V2-24～22は上方粗粒化し、V2-22とV2-21では礫・砂・泥の割合が全く異なる堆積の不連続が認められた。V2-21～17はほぼ上方細粒化するが、V2-17・16で礫の割合が高くなる。V2-15～10では礫・砂・泥の割合から見ても上方細粒化する。V2-10からV2-09にかけて礫の割合が高くなり、V2-08で礫・砂の割合は低くなり、V2-07では礫の割合が高くなる。V2-07からV2-06にかけて礫の割合は低くなり、V2-05～03ではV2-04で砂の割合がやや高くなる。粗粒シルト以上の粒径分布ヒストグラムでも上述と同様の傾向がみられた。

火山灰分析については、火山灰の岩石記載学的性質を表6に、鉱物組成を図42aに、火山ガラスの形態分類組成を図42bに、重鉱物組成を図42cに、火山ガラスの屈折率を図42dに示す。

新鮮な鉱物と風化した鉱物・岩片の割合では、試料V2-21から上位で新鮮な鉱物の割合が多くなる。鉱物組成において、火山ガラスはV2-21より上位で高率であり、特にV2-18・14・09・06・04ではその上下試料に比べてやや高い。長石はV2-19から上位へ徐々に高くなり、V2-12で高率で、V2-09～06でもやや高率であった。石英は極少量ではあるが、全ての試料に含まれていた。重鉱物はV2-26～18で低く、V2-17より上位で漸移的に高率となる。特にV2-12とV2-08およびその上位層準でやや高くなる。

火山ガラスの形態分類は重鉱物組成の火山ガラス・長石・重鉱物の割合を比較し、試料V2-19～16とV2-13～03で実施した。いずれの試料も扁平型火山ガラスが80%以上と高く、特にV2-19～16・13・12・10で90%以上と高率であった。V2-13～04で中間型火山ガラスが10%前後とやや高く、中でもV2-11・09・04ではその上下層準に比べて高率であった。また、褐色透明ガラスが極少量ではあるがV2-08～03に含まれており、特にV2-05～03では2%以上と他に比べてやや高かった。

重鉱物組成は火山ガラスの形態分類と同様に試料V2-19～16とV2-13～03で実施した。全体として角閃石が高率であり、新鮮で緑色のものがほとんどを占め、褐色のものが極少量含まれていた。試料V2-16より下位ではその上位に比べて含有率が低下し、風化した角閃石が増加する。斜方輝石も

V2-16より下位で増加し、風化・融食したものも比較的多く含まれていた。

火山ガラスの屈折率は試料V2-18・14・12・08・06・04で実施した。V2-18では $n = 1.497 \sim 1.500$ (モード1.499)であった。V2-14では $n = 1.497 \sim 1.501$ (1.498)、V2-12は $n = 1.496 \sim 1.500$ (1.498)、V2-08は $n = 1.495 \sim 1.502$ (1.499)であった。V2-06では $n = 1.496 \sim 1.497$ 、 $1.499 \sim 1.501$ 、 1.504 、

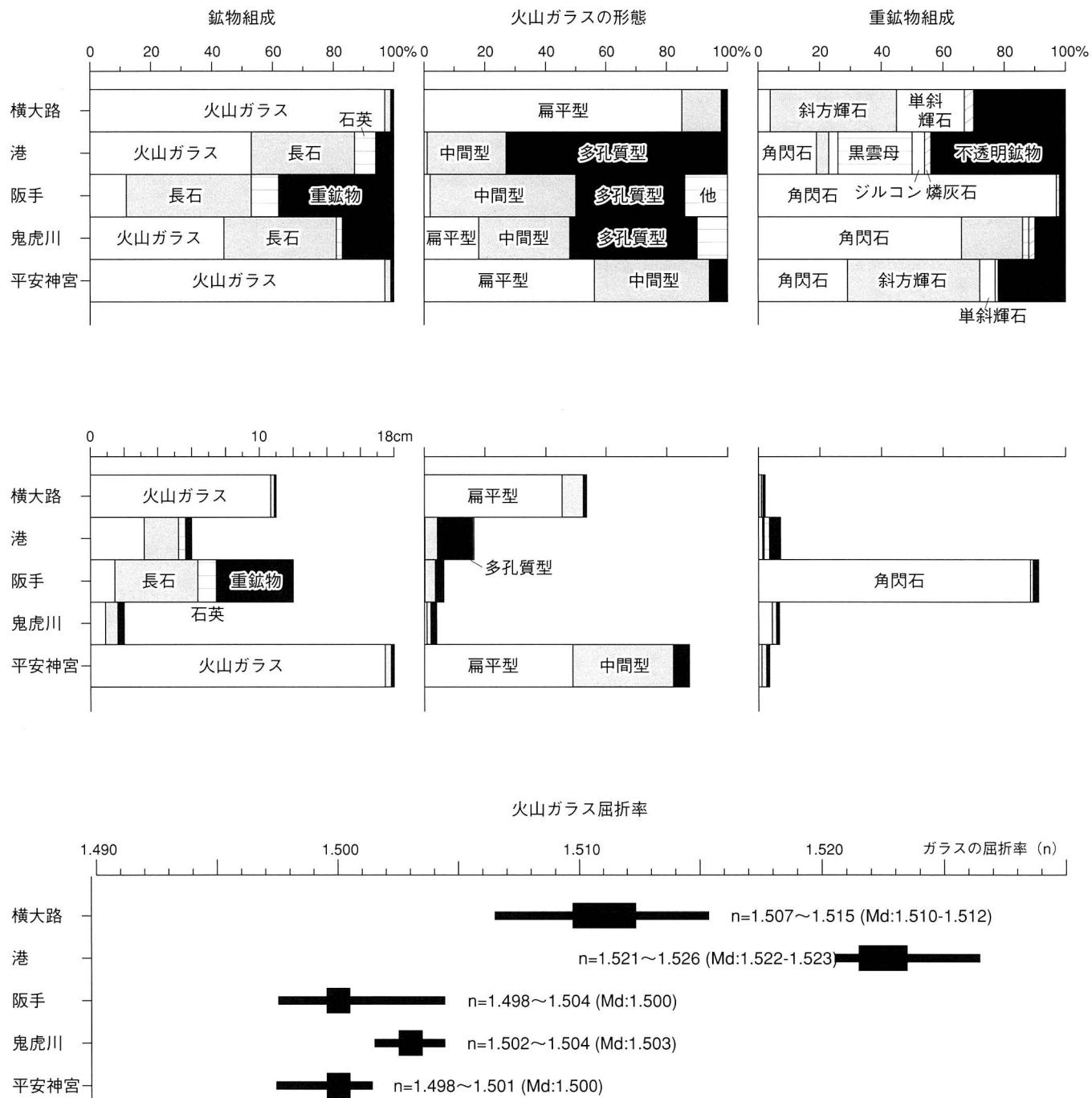


図43 大阪平野中央部の上部更新統～完新統における主要5火山灰層の標準的な岩石記載的性質

[吉川ほか1986]をもとに作成した趙哲済原図を引用

上段：各火山灰層の百分率表示、中段：層厚比に基づく降灰量に近似な相対比、下段：各火山灰層の火山ガラス屈折率

および1.509～1.510とばらつきがあるものの、モードは1.499にある。V2-04では $n = 1.507 \sim 1.511$ (1.509)、少量ではあるが1.498～1.500のガラスも認められた。

4) 火山灰の対比

[吉川ほか1986]に基づいて大阪平野中央部～奈良盆地の上部更新統～完新統における主要な5つの火山灰層の岩石記載的性質をまとめたものを図43(趙哲済原図)(註)に示す。図43の上段は火山灰の鉱物組成や火山ガラスの形態、重鉱物組成を百分率で示したものである。百分率による表記は一般的なもので、純粹な火山灰の岩石記載的性質を比較する際に有効である。しかし、土壤中に含まれるような火山灰は、火山灰の堆積後に再移動・再堆積し、または生物擾乱をはじめとする攪乱作用を受けている。図43の中段の左図は、図43の上段の左図(鉱物組成)に示した百分率を大阪平野中央部における降灰量に換算して示したものである。この図から、平安神宮火山灰層と横大路火山灰層の火山ガラスが後期更新世～完新世に降灰した火山ガラスの大半を占めることが分かる。同様に、長石や角閃石の大半が阪手火山灰層のものであり、中間型火山ガラスの大半が平安神宮火山灰層のものであると言える。したがって、これらが再移動・再堆積したり、生物擾乱などを受けた場合には、百分率とは異なった組成を示す可能性のあることを考慮しなければならない。そして、このような地層中の火山灰層準を認定する際には、実際の降灰量を考慮することが有効である[趙2007]。図43の下段の図はそれぞれの火山ガラスの屈折率を示したもので、平安神宮火山灰層は $n = 1.498 \sim 1.501$ (モード1.500)、鬼虎川火山灰層は $n = 1.502 \sim 1.504$ (1.503)、阪手火山灰層は $n = 1.498 \sim 1.504$ (1.500)、港火山灰層は $n = 1.521 \sim 1.526$ (1.522～1.523)、横大路火山灰層が $n = 1.507 \sim 1.515$ (1.510～1.512)である。なお、平安神宮火山灰層は広域火山灰である姶良Tn火山灰(AT)と、港火山灰層は篠陵隠岐火山灰(U-Oki)と、横大路火山灰層は鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)と対比されている[吉川・井内1991]。

本調査地における火山灰も土壤中に含まれていることから、上述のように実際の降灰量を考慮する必要がある。これらを考え合わせて、以下に、それぞれの地点における火山灰の対比を行う。

i) V1地点の火山灰の対比

図43と図42に示す各試料とを比較すると、V1地点における各試料のうち、試料V1-08では鉱物組成において火山ガラスが最も多く、火山ガラスの形態が無色透明で扁平型であり、屈折率が $n = 1.497 \sim 1.501$ 、そのモードが1.499であることなどが平安神宮火山灰層と類似しており、同一の火山灰層であると考えられる。なお、重鉱物組成で角閃石が非常に多いことは、阪手火山灰層等の生物擾乱による混入と考えられる。

試料V1-06では鉱物組成において火山ガラスがV1-08と同じ程度と多く、重鉱物が少ないと、屈折率が $n = 1.496$ 、 $1.498 \sim 1.501$ であることなどは平安神宮火山灰層と類似するが、屈折率にモードが認められないことから、平安神宮火山灰層等からの混入あるいは二次堆積と考えられる。

試料V1-04は鉱物組成で重鉱物の含有率がその上下の層準に比べてやや高いが、屈折率が $n = 1.495 \sim 1.504$ の一群と極少量ではあるが1.509、1.510に見られることから、平安神宮火山灰層と横大路火

山灰層からの混入があると考えられる。

試料V1-03では鉱物組成で火山ガラスの含有率がその上下の層準に比べて高く、褐色火山ガラスを含むこと、屈折率に $n = 1.508 \sim 1.513$ (モード1.511)が認められることから横大路火山灰層の降灰層準に近いと考えられる。しかし、屈折率に $n = 1.496 \sim 1.499$ (モード1.498-1.499)が認められること、重鉱物組成で角閃石の含有率が高いことから、平安神宮火山灰層や阪手火山灰層等からの混入があると考えられる。

以上のことから、長原遺跡の標準層序とは、下位から第12b層下部がNG13B層、もしくはNG13B・C層、第12b層上部がNG13A～12C層、もしくはNG13A～12B層にそれぞれ対比され、旧石器の出土層準は平安神宮火山灰層の下位で、NG13C層から14層に対比される地層と推定される。

ii) V2地点の火山灰の対比

V2地点における各試料のうち、試料V2-18は鉱物組成で火山ガラスの含有率が最も高く、火山ガラスの形態が無色透明で扁平型であり、屈折率が $n = 1.497 \sim 1.500$ 、そのモードが1.499であることなどが平安神宮火山灰層と類似しており、同一の火山灰層であると考えられる。

試料V2-14は火山ガラス屈折率が $n = 1.497 \sim 1.501$ 、モードが1.498にあり、上下の試料に比べて火山ガラスの含有率が高いが、試料V2-18に比べると火山ガラスの含有率が低く、平安神宮火山灰層の二次堆積もしくは混入であると考えられる。

試料V2-12は鉱物組成で長石と重鉱物の含有率が高いが、火山ガラスの形態は無色透明で扁平型を主体とし、火山ガラス屈折率が $n = 1.496 \sim 1.500$ 、モード1.498であることから、平安神宮火山灰層や阪手火山灰層等からの混入であると考えられる。

試料V2-08は鉱物組成で重鉱物の含有率が最も高く、長石もやや高いが、火山ガラスの形態は無色透明で扁平型を主体とし、褐色扁平ガラスが含まれること、火山ガラス屈折率が $n = 1.495 \sim 1.502$ 、モード1.499であることから、阪手火山灰層や平安神宮火山灰層および横大路火山灰層からの混入があると考えられる。

試料V2-06は鉱物組成で火山ガラスの含有率がその上下の試料に比べて高いが、屈折率が $n = 1.496 \sim 1.497$ 、 $1.499 \sim 1.501$ 、 1.504 、および $1.509 \sim 1.510$ とばらつきがあり、火山ガラスの形態で褐色扁平ガラスが含まれることから、平安神宮火山灰層と阪手火山灰層等からの混入があると考えられる。

試料V2-04は鉱物組成で火山ガラスの含有率が非常に高く、火山ガラスの形態で褐色扁平ガラスが含まれること、屈折率が $n = 1.507 \sim 1.511$ 、モード1.509、重鉱物組成で斜方輝石が下位に比べて増加することから、横大路火山灰層の降灰層準に近いと考えられる。しかし、屈折率に $n = 1.498 \sim 1.500$ が見られ、重鉱物組成で角閃石が高率であることから、平安神宮火山灰層や阪手火山灰等からの混入があると考えられる。

以上のことから、長原遺跡の標準層序とは、下位から第12b層下部がNG13B層、第12b層上部がNG13A～12C層、もしくはNG13A～12B層にそれぞれ対比されると考えられる。

地層の水平な「ずれ」については粒度分析結果からみて、上下の試料に不連続が認められないことから、本地点では地層をほとんど乱すことなく非常にシャープにずれていると考えられる。 (小倉)

註) [趙2007]では、図43の上・中段について記したように述べられている。下段については、その後加筆されたものであるため、ここでは趙哲済原図として掲載した。

第2節 長原遺跡における始良Tn火山灰層準下位の石器群について

1) 対象とする石器群について

河内平野南部に位置する長原遺跡は、瓜破台地の東縁部から東側の沖積平野にまたがる大規模な複合遺跡である。その遺跡範囲は広く、東西・南北ともに2kmに及んでいる。そのうち旧石器時代の石器遺物や石器製作跡が集中して見つかるのは東南地区の平野区長吉川辺3丁目周辺であり、これまで後期旧石器時代後半期のナイフ形石器を中心とした石器群が複数箇所で出土している(図44)。一帯は中位段丘面である瓜破台地の東側縁辺にあたり、この付近から段丘面は東や北東に向って緩やかな斜面となって沖積平野の中に埋没している(図45)。旧石器包含層が残されているのは、こうした沖積地の中に埋没した中位段丘の上位に低位段丘構成層が堆積した場所で、その埋没深度も比較的浅く、現地表の標高が約12mであるのに対し、旧石器包含層は10m前後である。

長原遺跡東南地区で出土した石器群は、東側に隣接する八尾南遺跡と同様、後期旧石器時代後半期が中心であったが、1990年に行われたNG90-62次調査地では、大阪平野ではじめて広域分布火山灰との関係を層位的に確認できた後期旧石器時代前半期の石器群が出土している(註1)。出土層準は始良Tn火山灰(註2)の降灰層準より下位の地層である(図46)。サヌカイト製の台形石器などを伴っており、後期旧石器時代前半期の中でも古い様相を示す。近畿地方中央部においてナイフ形石器が成立する以前の石器群であり、かつ瀬戸内技法が成立する以前の石器群として評価されている。

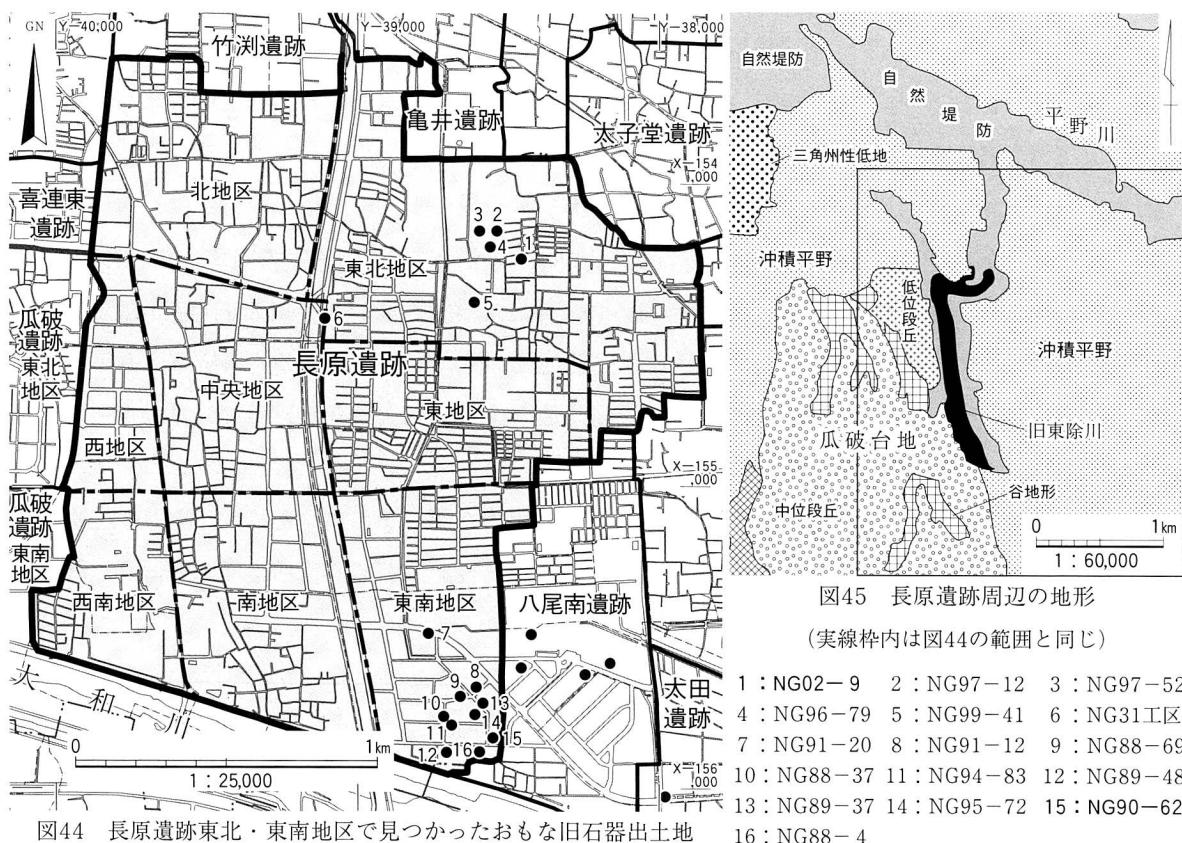




図46 NG90-62次調査地の地層と石器の出土状況

1990年代後半に入ると、平野区長吉川辺一帯の北方に位置し、沖積層が厚く堆積する長原遺跡東北地区において発掘調査が頻繁に行われるようになつた。一部は地表下8mまでを対象として発掘調査が行われるようになり、深く埋没した低位段丘面から旧石器の発見が相次いだ。今回報告したNG02-9次調査地のほか、NG96-79・97-12・97-52・99-41次調査地など、上位に沖積層が厚く堆積した低位段丘構成層から後期旧石器時代の石器遺物や石器製作跡が見つかっている。特に

NG97-12次調査地から出土した石器群は瀬戸内技法と石刃技法が共伴していた。隣接するNG96-79・97-52次調査地から見つかった石器遺物の出土状況から、この石器群の出土層準は[町田・新井2003]により三瓶浮布火山灰に比定されている阪手火山灰の下位であり、始良Tn火山灰の上位に位置づけることができた(註3)。後期旧石器時代後半期で最終氷期最寒冷期頃の石器群とみられ、豊富な接合資料の存在から、二上山産サヌカイト原産地の周辺における遺跡の石材消費の実態を示した好例として注目された[大阪市文化財協会2000a]。

前章において報告したNG02-9次調査地では、厚い沖積層の下位に堆積した低位段丘構成層の中に旧石器包含層が良好に残されていた。特に始良Tn火山灰(以下AT火山灰と省略する)の濃集層準が石器遺物の出土層の上位である第12b層下部において確認できたため、出土した石器群はAT火山灰の降灰以前のものであることが明らかとなった。長原遺跡では、AT火山灰の降灰層準より下位から出土した石器群と明確に認定できた石器群は、上述したNG90-62次調査地以外には見つかっておらず、今回のNG02-9次調査地の事例が2例目となる。

そこで、今回、NG02-9次調査で出土した石器群の性格を明らかにするため、NG90-62次調査地から出土した石器群と比較検討を行い、長原遺跡における後期旧石器時代前半期の石器群の様相について述べておく。

2)長原遺跡90-62次調査地NG14層出土石器群について

i)石器群の出土層位

長原遺跡ではこれまでの発掘調査にもとづき標準層序が設定されており、現代の盛土であるNG0

層から中位段丘構成層上部のNG19層に至る地層が確認されている[大阪市文化財協会2001b]。このうち、旧石器遺物が包含されているのは、沖積層下部から低位段丘構成層に分類されるNG13～14層である。ここでは、旧石器時代の出土遺物に関わるNG13～14層の層相と石器群の年代を決定するうえで重要な広域分布火山灰との関係について概略を述べておく。なお、長原遺跡の標準層序については102頁の別表2を参照していただきたい。

NG13A層は長原遺跡東南地区を模式地とする地層で、NG13Ai層とNG13Aii層に細分される。NG13Ai層は暗灰色火山灰質細粒シルト層、NG13Aii層は暗灰色ないし灰黄色火山灰質細粒シルトで、このうちNG13Aii層には条件が良い場所では中間型～多孔質型の火山ガラスと角閃石・長石が多い阪手火山灰がレンズ状に挟まれている。阪手火山灰は[町田・新井2003]により島根県三瓶火山起源の三瓶浮布火山灰に比定されている(ただし、鳥取県大山系の火山灰であるという説もある)。また、阪手火山灰の年代は福井県水月湖の年縞堆積物により約21,000年前の年代が出されている[福沢1995](註4)。なお、長原遺跡の東南地区や八尾南遺跡から出土した旧石器の多くはNG13層から出土しているが、NG13A層かNG13B層か不明なものが多い。

NG13B層も東南地区を模式地とする地層で、NG13Bi層とNG13Bii層に細分される。NG13Bi層は黄褐色～灰黄色シルト質粘土～粘土質シルトからなる部分的な暗色帶構成層で、NG96-79・97-52次調査地ではこの層から石器遺物が出土している。また、これらの調査地に隣接したNG97-12次調査地の石器群もこの時期に比定されている。NG13Bii層は無色透明の扁平型ガラスである始良Tn火山灰が含まれる。

NG13C層は下位層の最上部が土壤化したもので、一部は湿地堆積層を形成している。NG13B層とともに暗色帶構成層である。

NG14層は上部が灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土で下部が灰色砂礫～砂質シルトからなる小谷を埋めた堆積層である。東南地区の模式地では層厚は20～80cmになる。NG90-62次調査地の石器群は本層の下底付近で出土した(図46)。

NG15層は低位段丘を構成する砂礫層で、緑灰色の砂礫が優勢な河成堆積層である。本層の下底部のラミナ面からはナウマンゾウの足跡化石が見つかっている。

NG16～19層は中位段丘構成層であり、砂・礫優勢の砂泥互層が堆積している。NG16・17層からはナウマンゾウの足跡化石が、NG17Bii層からはナウマンゾウの臼歯片がそれぞれ見つかっている。

ii) 石器群の遺物分布(図47)

NG90-62次調査地のNG14層出土石器群は遺物集中部を伴って出土した。遺物集中部は大きく3箇所あり、調査区中央の北東～南西方向に延びる低地部を中心に分布している。北西側の微高地において搬入礫を含んだ約50点、中央の低地部北側で10数点、北東～南西方向の低地部に沿った東側の斜面部で約60点の石器遺物が出土している。それぞれの集中部には相互に接合関係が見られることから、単一時期の石器群とみなすことができる。また、北西側の集中部を含めて、調査区の北壁ぎわになると石器遺物の分布が希薄になっていることから、おおむね石器群の分布は調査区の中におさまるものとみられる。

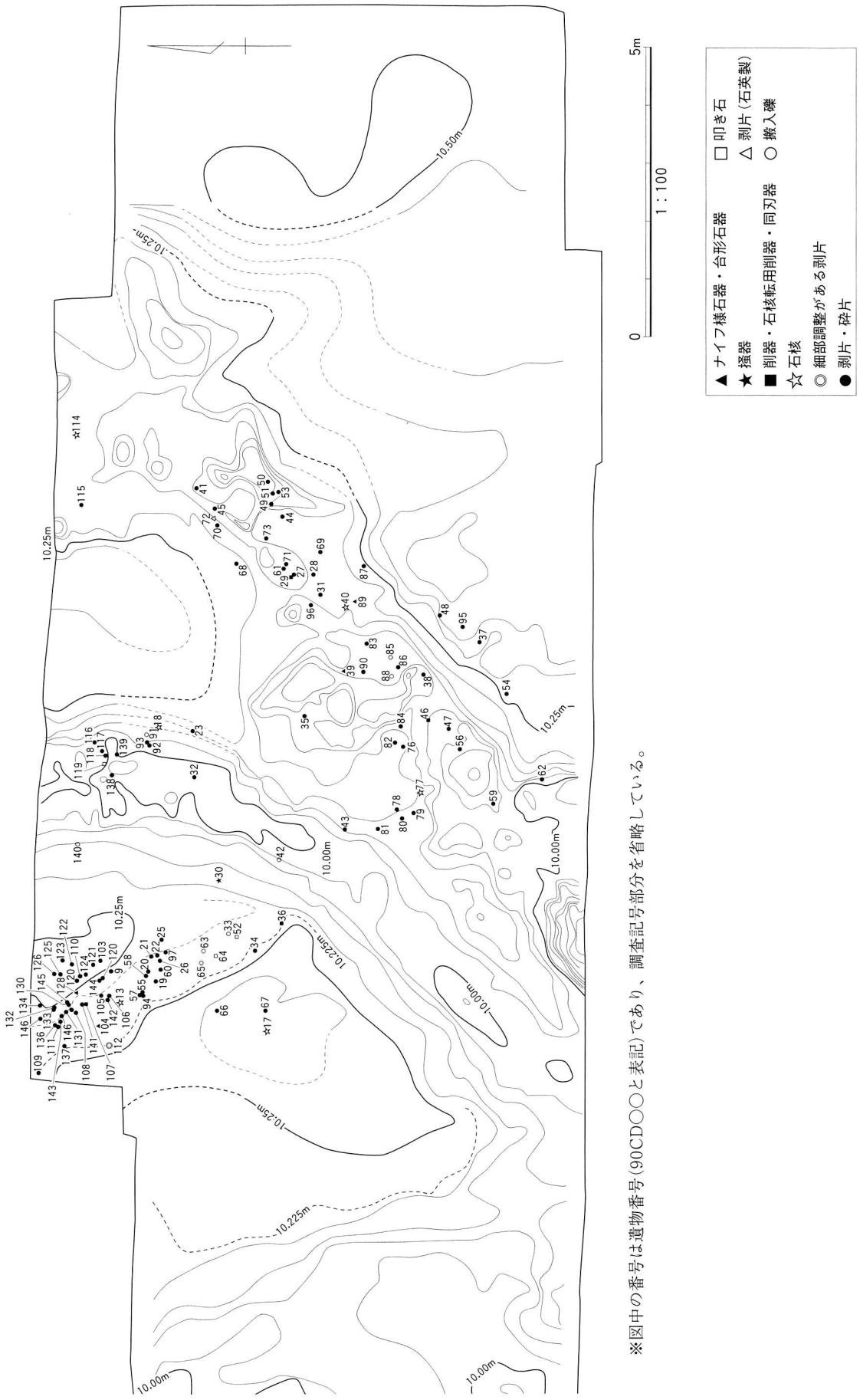


図47 NG90-62次調査地の石器遺物の分布

iii) 石器群の概要

NG90-62次調査地のNG14層からは、11点の搬入礫を除いて109点の石器遺物(接合後の実数。遺物点数は116点)が出土した。その内訳はナイフ様石器2点、台形石器2点、搔器1点、削器1点、石核転用削器3点、細部調整痕のある剥片1点、石核転用刃器(石核利用後、縁辺がそのまま刃部として使用されたもの)1点、微細剥離痕のある剥片1点、石核5点(接合後の実数。遺物点数は6点)、剥片・碎片91点(接合後の実数。遺物点数は94点)、叩き石1点(接合後の実数。遺物点数は4点)である。礫岩製叩き石と石英製剥片1点、搬入礫を除き、すべてサヌカイト製である。以下、各器種の概要を述べておく。

a) ナイフ様石器(図48、図版16)

NG90-62次調査地のNG14層出土石器群の石器には、剥片の縁辺を刃部とする斜刃の小型剥片石器が2点認められた。しかし、これらの石器にはナイフ形石器に特有の刃潰し加工や背部加工といった急斜な角度による整形剥離が認められず、いずれも細部調整は不規則で部分的な加工に留まっていた。こうした定義上はナイフ形石器に分類できないものの、剥片の鋭利な縁辺を刃部とし、他の部位に不規則な細部調整や折断を施した石器を「ナイフ様石器」と呼ぶこととする[旧石器文化談話会編2007]。

90CD39(図48)はやや厚みのある横長剥片を素材とする。長さ3.07cm、幅1.20cm、厚さ0.70cm、重さ2.1gである。剥片の側辺にあたる尖鋭な縁辺をそのまま先端に利用している。腹面の左辺上半には主剥離面に先行する剥離痕が残されていることから、素材剥片は打面と作業面を入れ替える交互剥離によって得られたものとみられる。細部調整は基部側の両側縁に主として腹面側から施されているが、縁辺を打ち潰したような微細な剥離痕と敲打によってできた細かなクラックがあわせて認められた。こうした整形方法はナイフ形石器の刃潰し加工とはまったく異なるものである。

90CD104(図48)は横長剥片を素材とする。長さ3.69cm、幅1.58cm、厚さ0.58cm、重さ2.5gである。90CD39と同様に細部調整は基部側に施され、剥片の縁辺がそのまま先端として利用されている。素材剥片の剥離は、腹面の打面側に主剥離面に先行する剥離痕が残されていることから、交互剥離によるものとみられる。細部調整は背面の基部側の左辺に主として背面側から施されている。わずかに対向剥離が認められるが、おそらく挟み打ちによるものであろう。こうした整形方法もやはり通常のナイフ形石器のものとは異なっている。

b) 台形石器(図48、図版16)

後期旧石器時代前半期の石器群にみられる不定形で部分的な加工が施された小型剥片石器は一般に台形様石器と呼ばれている。この台形様石器の定義については、ナイフ形石器との分離に主眼が置かれていたため、その対象とする範囲は包括的なものとなっている[佐藤宏之1988]。そこで、[旧石器文化談話会編2007]に従い、平面形が台形を呈し、石器の主軸に対して直交する一端に刃部を設け、第一次剥離で得られた素材の鋭い縁辺を刃部とした剥片石器を「台形石器」とし、形態がより不整形で二次加工も不規則かつ部分的に折断が多用されたものを「台形様石器」に分類しておく。

NG90-62次調査地のNG14層からは、台形石器に該当するものが2点認められた。

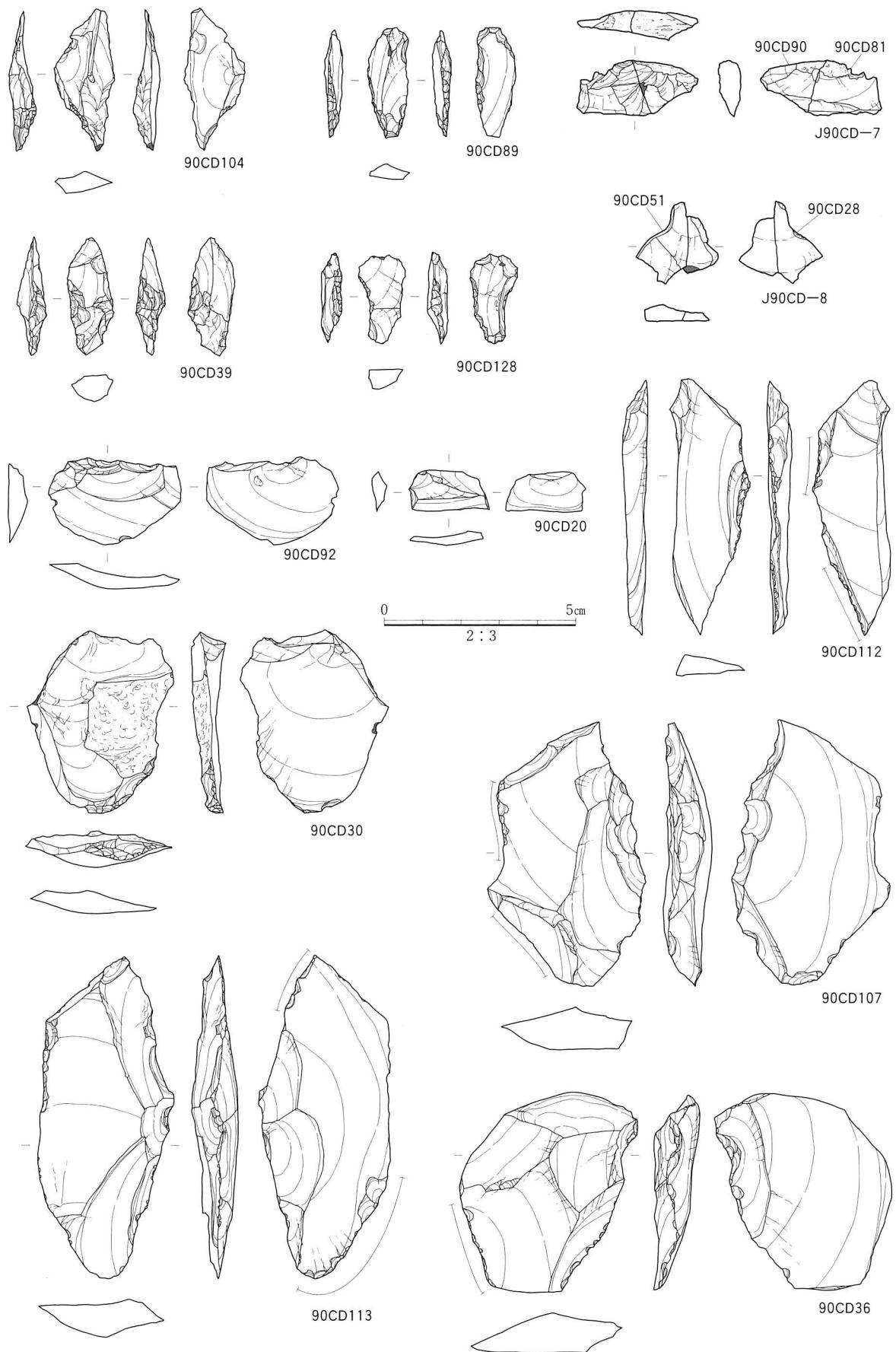


図48 NG90-62次調査地の石器(1)

90CD89(図48)は横長剥片を素材とする。長さ2.86cm、幅1.06cm、厚さ0.39cm、重さ1.3gである。刃部が主軸に対して厳密には直交していないが、先端に設定されたことは明確であり、細部調整が両側縁に施されていることから、ナイフ様石器ではなく台形石器として分類した。背面は主剥離面に先行するネガティヴ面と石核底面にあたる平坦なポジティヴ面の2面で構成されており、剥片素材の石核から剥離された有底の横長剥片を用いている。連続して整った細部調整が両側縁に施されており、背面右辺は背面側から左辺は腹面側から錯向剥離が行われている。先端部の腹面側には平坦で細かな剥離痕が認められるが、刃縁の調整あるいは使用の過程で形成されたものであろう。

90CD128(図48)は小形の横長剥片を素材とし、平面形は台形を呈する。長さ2.34cm、幅1.25cm、厚さ0.50cm、重さ1.5gである。背面は2面の剥離痕で構成されている。素材剥片の打面部は折り取られたものとみられ、腹面の右辺にはその際の折断面が残されている。この折断面の腹面側の稜上には細かいクラックが残されていることから、挟み打ちをするように折り取られた可能性がある。細部調整は両側縁とともに背面側から急斜な角度で連続して施されている。先端部に新欠がわずかにある。

以上のようにNG14層から出土した小型の剥片石器には、ナイフ様石器2点と台形石器2点がそれぞれ認められる。ナイフ様石器とした90CD39・104は不規則で部分的な整形加工に留まっており、その調整方法はナイフ形石器の刃潰し加工や背部加工とは異なっている。また、剥片の尖った縁辺をそのまま先端部とし、基部の両側縁に細部調整を施している。こうした技術形態は、後期旧石器時代前半期に台形石器とともに出現するペン先形ナイフ形石器と共通した要素をもつ。

一方で、ナイフ様石器と台形石器は素材剥片の大きさや形状が共通しており、両者の素材剥片の獲得は同一の剥離技術を土台にしていたものとみられる。90CD89にみられる背面の剥離面構成は、これらが剥片素材の石核から剥離された有底の横長剥片であったことを示しているが、石核底面の付着がそれほど意識されていたとは思えない。なお、NG90-62次調査地の石器群にみられる剥片剥離技術については後述する。

c) 搾器(図48、図版16)

1点のみ認められた。90CD30は短形剥片を素材とする。長さ4.79cm、幅3.91cm、厚さ0.65cm、重さ11.8gである。背面の右辺側には大きく礫面が残る。刃部は剥片末端に設定され、右辺側に急斜度の細部調整が弧状となるように施されているが、その範囲は部分的である。

d) 削器(図48、図版16)

1点のみ認められた。90CD107はやや厚手で大型の横長剥片を素材とする。長さ4.09cm、幅6.88cm、厚さ1.01cm、重さ29.7gである。背面は素材剥片の主剥離面に先行する複数のネガティヴ面で構成される。刃部の細部調整は素材剥片の打面を除去するように、背面側から横位に連続して急斜度な剥離が加えられている。各剥離痕は幅1cm程度で、鋸歯状の刃部に仕上げられている。また、細部調整に先行して背面には打面側からの加撃による平坦な剥離痕が複数みられる。また、鋸歯状の刃部側と相対する素材剥片の末端側の縁辺も使用されており、微細な剥離痕が不連続ながら認められる。

e) 石核転用削器(図48・50、図版16)

NG90-62次調査地のNG14層出土石器群を特徴づけるものとして石核転用の削器がある。3点が

認められた。いずれも石核として利用したのち、部分的に細部調整を施して削器としたものであるが、調整加工をした刃部以外の縁辺にも使用によって生じたとみられる微細な剥離痕が残されている場合が多い。

これらの石核の形状にはいくつかの共通点がみられる。石核の素材となった大型剥片の打面側に作業面を設定し、主剥離面の平坦なポジティブ面を取込むように剥片剥離が進められている。ただし、单一の剥離痕が残されただけで剥離があまり進んでいないものもある。基本的に打面と作業面を入れ替えず、横方向に打点をずらす並列剥離が主体的であるが、打面と作業面を入れ替える交互剥離もあわせて行われたものと考えられる。また、規則的とはいえないが、やや小ぶりな剥離痕が打面側に残されていることから、剥片剥離に先行して打面調整が行われる場合もあったようである。これらの石核から剥離された剥片は、前述のナイフ様石器や台形石器の素材剥片となりうるものである。

90CD36(図48)は大型剥片が複数の剥片に分割されたもので、その一片(最終面は背面上側のネガティヴ面である)をそのまま石核に転用したものである。長さ3.97cm、幅5.77cm、厚さ1.02cm、重さ21.3gである。石核の素材となった剥片の腹面側には主剥離面の打面部から剥離されたネガティヴ面が1面認められる。この面が剥離作業面であるが、素材となった剥片の打面部が除かれた程度で、剥片剥離はそれほど進行していない。主要刃部は石核の打面側に設定され、打面縁に沿って細部調整が不連続に施されている。この細部調整は基本的に腹面側から行われているが、石核の作業面には打点付近に背面側から施された細かな剥離痕がまとまって認められる。また、相対する末端側にも使用によって生じたとみられる微細剥離痕が残されている。

90CD46(図50)は横長剥片素材の石核を転用したものである。長さ3.92cm、幅5.23cm、厚さ0.95cm、重さ13.1gである。素材剥片は大型剥片をスライスするようにして複数枚の剥片に分割したものの1つで、90CD35と接合する。腹面はもとの大型剥片(分割される前の剥片)の主剥離面にあたる。腹面の打面側には石核の作業面であるネガティヴ面が1面残されているが、接合状態から復元されるもとの剥片形状から推定すると、複数回の剥片剥離が行われたものとみられる。主要刃部はこのネガティヴ面側にあり、打面縁に沿って細かく連続した細部調整が腹面側から施されている。この刃部に直交する縁辺にも、新欠があって分かりづらいが、使用痕とみられるごく微細な剥離痕が不連続ながら認められる。

90CD113(図48)は厚手で大型の横長剥片を石核とし、それを転用したものである。長さ3.41cm、幅8.39cm、厚さ1.24cm、重さ26.0gである。石核の素材剥片の主剥離面側に打面側から剥離された3面の剥離痕がみられる。これらが石核の剥片剥離作業面である。打面部にはこれらの剥離に先行する打面調整とみられる剥離痕もいくつか認められる。刃部は打面側と相対する他端(素材剥片の末端側)に設定され、部分的であるが、細かく連続した細部調整が施されている。長軸方向に対する両端部も刃部として使用されたようである。

f) 石核転用刃器(図49、図版17)

1点のみ認められた。90CD29はやや薄手の横長剥片を石核とし、石器に転用したものである。長さ4.28cm、幅5.73cm、厚さ0.76cm、重さ14.1gである。石核の素材となった剥片の打面側から表裏両

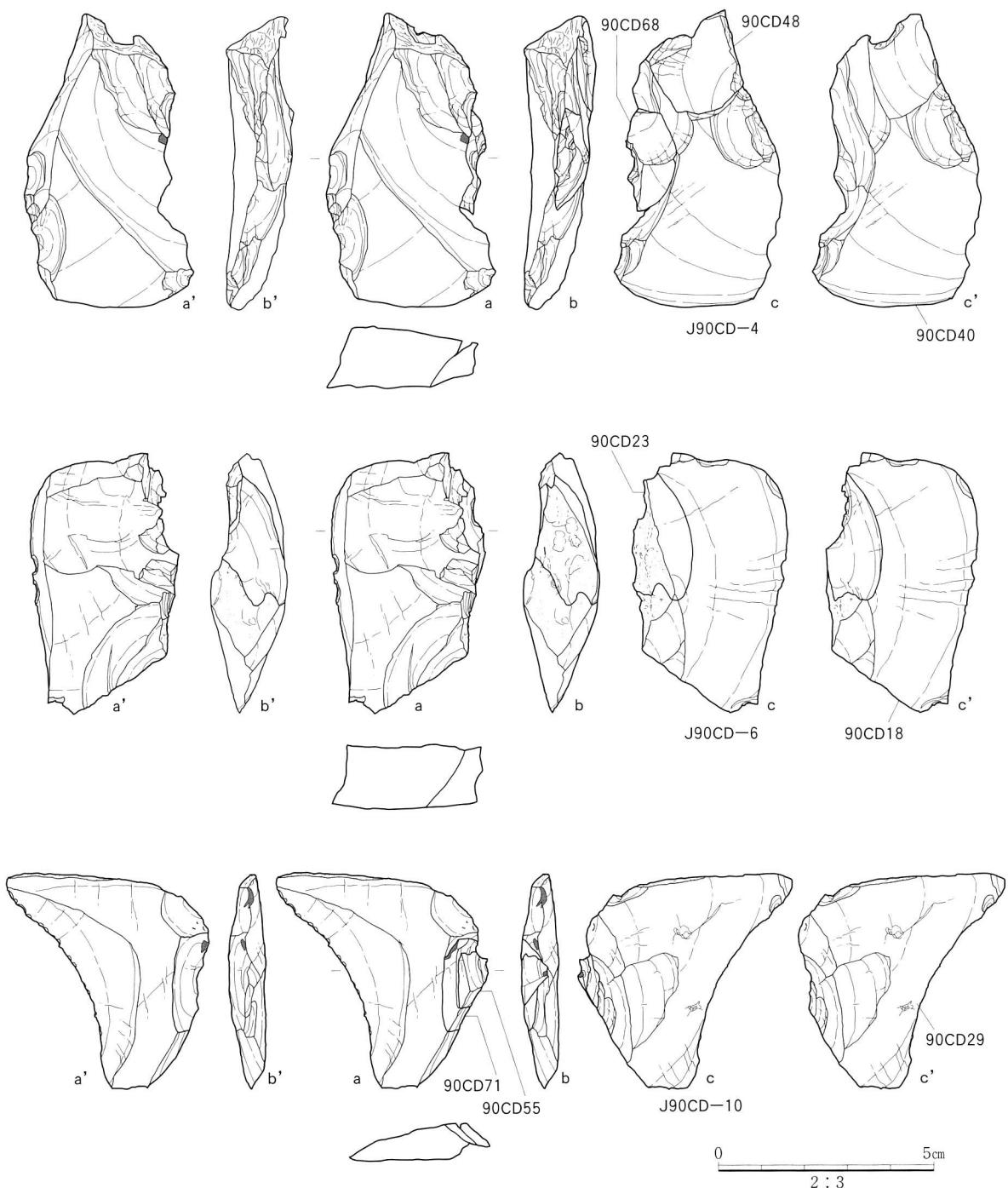


図49 NG90-62次調査地の石器(2)

面に複数回、打面と作業面を入れ替えるように剥離が加えられている。剥離された剥片はいずれもごく小型のものである。石核には90CD55・71の2枚の剥片が接合する。刃部は剥片剥離作業面と相対する他端に設けられており、内湾した縁辺に微細な剥離痕が連続して残されている。使用により生じたものとみられる。

g) 細部調整のある剥片(図48)

1点のみ認められた。90CD112(図48)は縦割れを起こした薄手で大型の短形剥片を利用したものである。長さ6.65cm、幅2.06cm、厚さ0.63cm、重さ7.8gである。剥片の末端側を鋭く尖らせるよう

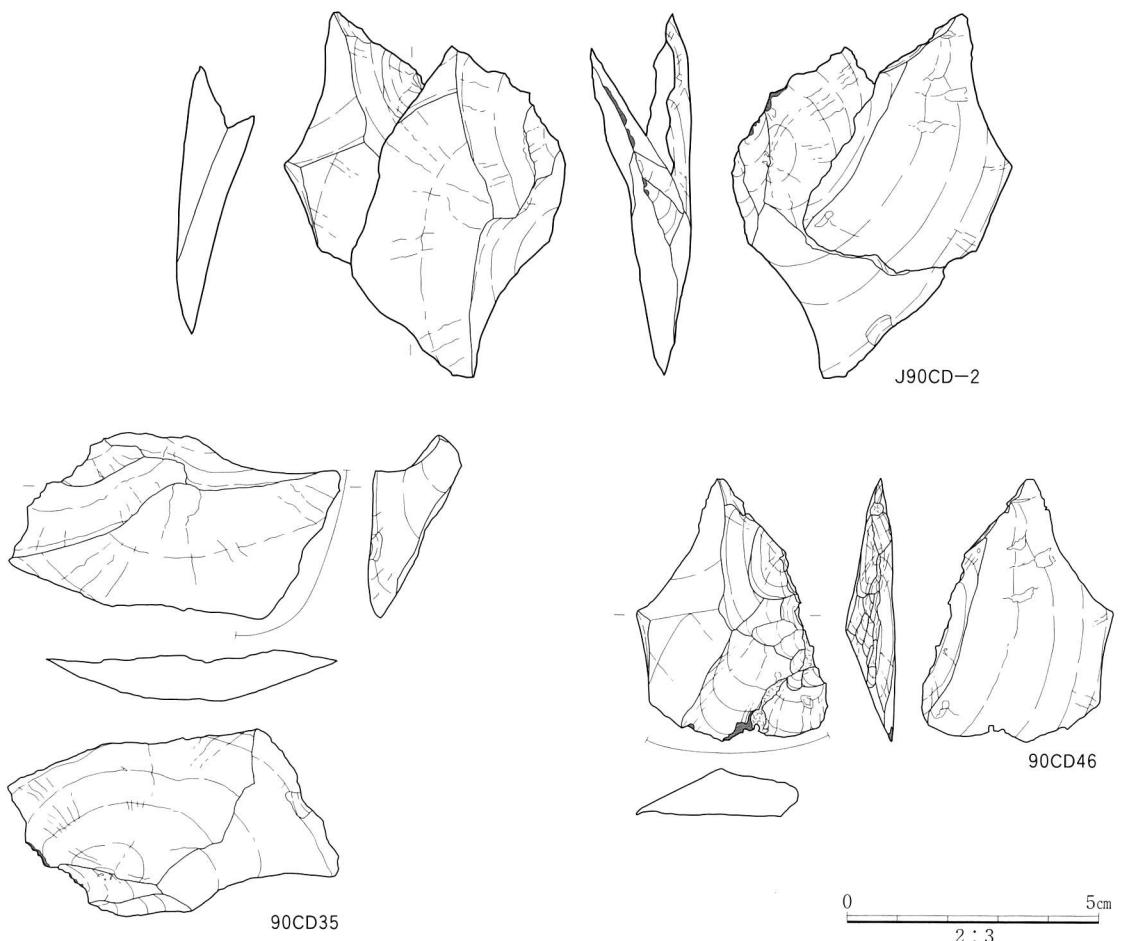


図50 NG90-62次調査地の石器(3)

に背面側から細かな調整を加えて尖頭形に整形をしている。また、縦割れを起こした側縁はそのままとし、他の側辺に背腹両面から断続的に細部調整を施している。

h) 微細剥離痕のある剥片(図50、図版16)

1点のみ認められた。90CD35は横長剥片である。石核転用削器90CD46と接合する。背面側の右辺と末端の縁辺にかけて使用によって生じたごく微細な剥離痕が認められる。長さ3.95cm、幅6.68cm、厚さ0.98cm、重さ19.2gである。

i) 石核(図49・51、図版17)

上述した石核を転用した石器である90CD29・36・46・113を除くと石核は90CD13・17・18・40・77+114(剥離時の垂直割れが接合)の5点が出土している。いずれも長さ4~5cm、幅6~7cm、厚さ1.5cm前後の厚手でやや小ぶりな板状の剥片を素材としている。ほとんどの石核が素材剥片の打面側に作業面を設定し、主剥離面の平坦面を取込むように剥片剥離が進められている。石核90CD17(図51)・40(図49)は素材剥片の打面側だけではなく、相対する末端側からも剥片剥離が行われている。

それぞれの石核の剥離痕から復元される剥離技術は、打面を横方向にずらす並列剥離であり、打面と作業面を入れ替えることはあまり行われていない。打面調整とみられる剥離痕は石核90CD17・40に残されているが、ごく部分的なものであり、他の石核には認められない。また、石核の底面の取込

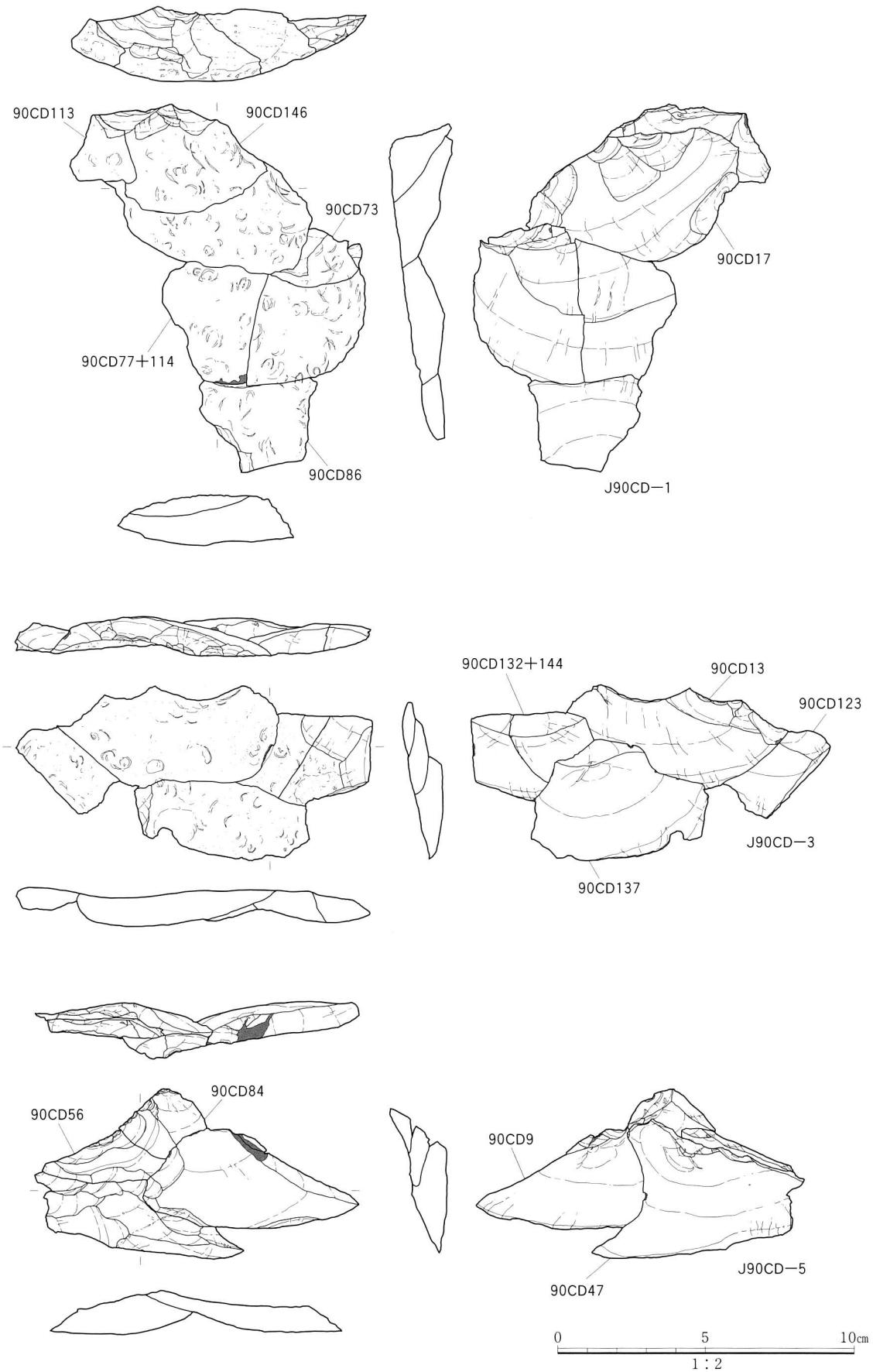


図51 NG90-62次調査地の石器(4)

みを意識した剥離も認められるが、石核90CD17・40でみられるように、腹面に沿うような平坦剥離によって薄手の剥片も剥離されている。

いずれの石核もそれほど剥片剥離を進行させていないので、不確定な部分は残るが、NG90-62次調査地の石器群にみられる剥片剥離技術は、打点を横位にずらせながら剥離を進める並列剥離を中心で、交互剥離も少ないながら認められる。打面調整はいずれも低調であり、それほど行われることはない。また、石核周縁から石核面に沿わせるような平坦剥離が行われているという特徴を指摘できる。なかでも平坦剥離による剥片剥離という特徴は、後期旧石器時代後半期の近畿地方中央部において発達した瀬戸内技法を中心とする横長剥片剥離技術の中には見い出しがたいものであり、台形石器が伴う前半期の石器群に特徴的な技術要素の一つとして指摘できる。

j) 接合資料(図49~51、図版16・17)

接合資料は10組が認められた。

J90CD-1(図51、図版17)は剥片6点(90CD17・73・77+114・86・113・146)で構成される接合資料である。そのうち90CD17と77+114が石核に利用されている。また、86は剥片77+114の打面調整剥片とみられる。原礫から厚手で大型の剥片を剥離した初期段階の剥離工程を示す接合資料である。剥片90CD73と石核90CD77+114の打面部には主剥離面に先行する剥離痕が見られることから、交互・並列剥離による剥片剥離が行われたものとみられる。

J90CD-2(図50)は剥片2点(90CD35・46)で構成される接合資料である。90CD35は微細剥離痕がある剥片、90CD46はさらに石核に利用され、その後削器に転用されている。もともと1つの大型剥片をスライスするように複数枚の剥片へ分割したものである。90CD46は背面側に残るネガティヴ面が最終的な剥離面であるが例外的に剥片として扱っておく。

J90CD-3(図51、図版17)は剥片4点(90CD13・123・132+144・137)で構成される接合資料である。原礫から剥片を剥離した初期段階の剥離工程を示す接合資料である。石核90CD13と剥片90CD132+144・137の打面には、それぞれの主剥離面に先行する剥離痕が認められることから、J90CD-1と同様、交互・並列剥離による剥片剥離が行われたようである。

J90CD-4(図49、図版17)は剥片2点(90CD48・68)と石核1点(90CD40)で構成される接合資料である。

J90CD-5(図51、図版17)は剥片4点(90CD9・47・56・84)で構成される接合資料である。90CD47・56・84の打面には主剥離面に先行する剥離痕が認められることから、交互・並列剥離が行われたものとみられる。本資料も原礫から剥片を剥離する比較的初期段階の接合資料とみられる。

J90CD-6(図49、図版17)は剥片(90CD23)と石核(90CD18)の2点で構成される接合資料である。

J90CD-7(90CD81・90)(図48、図版16)・J90CD-8(90CD28・51)(図48、図版16)はともに剥片の折れ面が接合したものである。

J90CD-9は砂岩の礫片4点(90CD42・52・64・119)が接合した資料である。叩き石とみられる。

J90CD-10(図49、図版17)は剥片2点(90CD55・71)と石核1点(90CD29)が接合した資料である。

90CD29は剥片剥離後に縁刃を刃部として使用し、石器へ転用されている。

k) 剥片・碎片

剥片と碎片は合計91点(接合後の実数: 遺物点数は94点)であった。このうち長幅とともに1cmに満たないものは碎片とした。剥片87点、碎片4点で、剥片のうち1点は石英製であるが、他はすべてサヌカイト製である。剥片の中には原礫分割の初期段階や石核調整の際に剥離された剥片や二次加工などの際に生じたとみられる小型の剥片も含まれている。そこで、ここでは剥片の大きさによる分類を行い、それぞれの剥片のもつ属性に留意しながらNG90-62次調査地から出土した剥片全体の特徴を述べておく。

図52は剥片の長幅値を示したグラフである。完形品と長幅値の計測に問題のない部分を欠損した剥片をデータとして用いた。また、石器の素材となった剥片との比較を行うため、ナイフ様石器、台形石器、石核転用削器・刃器、削器、搔器などの石器類を剥片形状にあわせて図示してある。グラフを見るとNG90-62次調査地で出土した剥片は、長幅比1:1~1:2程度の横長剥片が主体であることが分かる。剥片はその大きさからおよそ2つのグループに分かれる。すなわち、長さ4cm、幅4.5cm未満のものとそれ以上のものである。前者の小型剥片をA類、後者の大型剥片をB類として分類しておく。前者はナイフ様石器や台形石器、後者には石核、石核転用削器・刃器などと同じグループである。この分類に従い、もとの大きさが推定可能な剥片(不明品1点を除く86点)をA・B類に分類した。A類は70点(86点中)認められた。この中には石器の素材となる剥片のほかにさまざまな調整剥片が含まれている。B類は16点(86点中)である。接合資料などを参考にすると、大部分は原礫の分割といった初期段階の剥片と思われる。例えば、明らかに原石の分割過程であることを示す接合資料は、剥片末端が強いヒンジ・フラクチャーを起こしているものが目立つ。B類剥片全体の40%弱にヒンジ・フラクチャーが認められたが、A類ではごくゆるいものを含めても20%程度であった。したがって、B類の多くが原礫の分割という初期段階で得られた剥片である可能性は高い。

剥片の打面形態はA・B類で大きな差異はみられなかった。A・B類(86点中)合わせて、单剥離面打面36点(42%)、二面剥離面打面10点(12%)、礫面打面14点(16%)、点状打面5点(6%)、線状打面7点(8%)、打面が剥離時に粉碎したもの4点(5%)、不明10点(12%)である。

剥片背面に石核面(素材段階の剥離面)を残すものは45点(86点中)認められた。A類は37点が認められたが、大型剥片であるB類はその判別が困難なものが多かった。また、A類には目的剥片以外の調整剥片も多数含まれることが推定されるので、長幅値が2.5cm未満(A1類)とそれ以上のもの(A2類)に便宜的に分けておく。小型剥片には調整剥片が含まれる割合が高いと考えられるからである。剥片背面に残された石核面の剥離面構成は、ネガティヴ面であるものが13点(A1類5点、A2類6点、A1・A2類に細分できなかったもの2点)、ポジティヴ面であるものが9点(A1類4点、A2類5点)、ネガティヴ面かポジティヴ面か判断できなかったものが15点(A1類10点、A2類3点、A1・A2類に細分できなかったもの2点)であった。点数が少ないとあって、A1・A2類ともに有意な差異はみられなかった。

剥片背面に礫面を残すものはA・B類合わせて30点(86点中)であった。A類が19点(70点中)、B類が11点(16点中)で、背面の1/2以上に礫面を残すものがB類は7点、A類は10点であった。B類

が目立つのは、B類剥片の大半が原礫の分割過程や石核調整といった初期工程の中で剥離されたものであることを示している。

3)長原遺跡02-9次調査地出土石器群との比較

NG02-9次調査地から出土した石器群は、地層の検討の結果、NG90-62次調査地の石器群と同様にNG14層相当層から出土したことが分かっている。出土点数は9点とごくわずかで、細部調整がある剥片1点、剥片7点(横長剥片4点、短形剥片3点)、石核1点である。石器類がほとんどみられないことから、その編年的位置づけが容易ではないが、02AE658のような並列剥離技術を示す石核は、素材となった剥片の形状や剥離方法でNG90-62次調査地の石器群と共通する部分が多い。また、剥片の中には打面部に先行する剥離痕が残されていることから、交互剥離による剥片剥離も行われていたものと思われる。所属時期を決定できる石器類が組成に含まれていないが、出土層位や剥片剥離技術のあり方からみると、NG90-62次調査地のNG14層出土石器群と同一時期のものとみなしうる。

4)まとめ

石核、接合資料、剥片などの資料から総合的に判断すると、NG90-62次調査地のNG14層出土石器群では、ナイフ様石器や台形石器などの素材は剥片素材の横長剥片石核から剥離されているが、近畿地方中央部で後期旧石器時代後半期に普遍的にみられる有底横長剥片の剥離技術がこの時期にはまだ確立していなかったことがうかがえる。つまり、石核底面の取込みを意識した瀬戸内技法に代表される定型化した横長剥片剥離技術が充分に定着していなかったということである。また、石核の素材となる厚手の大型剥片の剥離には交互剥離が行われているが、瀬戸内技法第1工程のように効率的な

ものではなく、剥片の大きさや形状もばらつきが大きい。原石の分割と石核素材の獲得という対応がスムースではない印象を受ける。

剥片の中に占める石核底面の付着率はA類剥片全体で43%(37/70点)である(ただし、目的剥片と調整剥片の双方を含んでいる)。しかしながら、NG90-62次調査地の石器群の中では、断面が三角形・台形といった形状の整った有底剥片は非常に少ない(図48の90CD20・92などがある)。

当石器群は出土層位からみて、AT火山灰層下位の後期旧石器時代前半期に位置づけられるものである。近畿地方中央

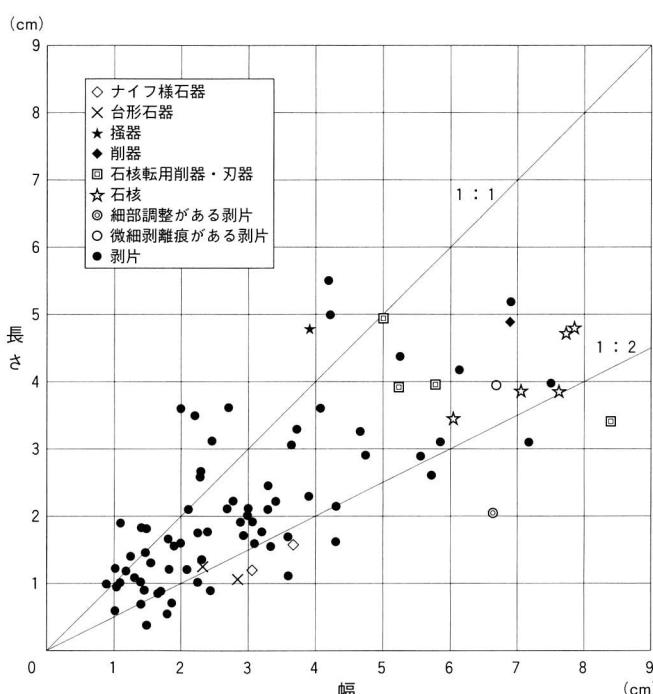


図52 剥片の長幅グラフ

部においては、同時期の石器群に奈良県峯ノ阪遺跡下層石器群[奈良県立橿原考古学研究所編1996]がある。峯ノ阪遺跡の下層石器群は有底横長剥片の出現率が低く、石器類もわずかにペン先形の台形様石器が1点伴う程度である[光石1999]。こうした特徴からみると、峯ノ阪遺跡の下層石器群はNG90-62次調査地の石器群よりも若干古い時期である可能性がある。

一方、同じAT火山灰層の下位である兵庫県板井寺ヶ谷遺跡下層の石器群[兵庫県教育委員会1991]や七日市遺跡第IV文化層の石器群[兵庫県教育委員会2004]では翼状剥片・同石核や国府型ナイフ形石器に類似する1側縁加工のナイフ形石器が出土しているが、この段階になると、ナイフ形石器の素材となる有底横長剥片を生産する剥離技術とともに素材剥片の打面を背部として腹面側から1側縁加工をおこなうナイフ形石器の製作技術が1つの組合せとなって成立していることがわかる。こうしたナイフ形石器製作の各技術要素の結合が近畿地方の後期旧石器時代後半期を支える根本的な技術単位となったのである。瀬戸内技法もこうした脈絡の中で成立したものと思われる。したがって、有底横長剥片を素材としたナイフ形石器が認められないNG90-62次調査地の石器群は、これらの遺跡の石器群よりも古い時期と考えられるのである。

以上のことから、長原遺跡におけるNG14層出土の石器群は、後期旧石器時代前半期に特徴的な刃部磨製石斧などが共伴しないものの、前半期の中でもより古い時期の石器群とみなしうる(註5)。

(絹川)

註)

- (1)今回、比較資料として紹介する長原遺跡90-62次調査地は大阪市平野区長吉川辺3丁目44に位置する。民間の開発事業に伴う発掘調査で、当協会により1990年12月17日～1991年3月18日にかけて調査が実施された。調査面積は400m²である。
- (2)これまで当協会が刊行してきた発掘調査報告書では、始良Tn火山灰を近畿地方において発見された火山灰の命名に従って平安神宮火山灰と呼称してきたが、旧石器研究においては石器群と日本列島の広域分布火山灰との関係が編年上重要な指標となることから、本稿では混乱を生じないよう始良Tn火山灰という一般的な名称に統一しておく。
- (3)NG97-12次調査地から出土した石器群の出土層準は、NG96-79・97-52次調査地の石器遺物と同様、長原遺跡標準層序のNG13Bi層に比定されている。なお、阪手火山灰の降灰層準はNG13Aii層である。
- (4)福井県三方五湖の水月湖に堆積した水成堆積物の年縞編年による。アカホヤ火山灰(K-Ah)をBP7,325年(曆年較正した年代)とすると、鬱陵隱岐火山灰(U-Oki)はBP10,350±125年前、阪手火山灰はBP20,912±524年前になるという。
- (5)これらの石器群に並行する石器群としては、兵庫県七日市遺跡第II文化層[兵庫県教育委員会1990]があげられよう。列島全体の石器群の中で位置づけるなら、後期旧石器時代前半期の中でも前半段階の石器群で、南関東地方の武藏野台地IX層下部層準出土の石器群と対比することができよう。

表7 NG90-62次調査地の石器遺物(その1-1)

遺物番号	地区	層位	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	器種	剥片形態	類型	打面形態
90CD009	北側溝	14層	10.376	3.98	7.50	0.84	22.6	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	二面剥離面
90CD013	4区	14層	10.276	3.85	7.62	0.96	29.6	サヌカイト	石核	横長剥片	B	不明
90CD017	4区	14層	10.375	4.79	7.85	1.70	57.0	サヌカイト	石核	横長剥片	B	礫面
90CD018	4区	14層	10.262	3.45	6.05	1.68	37.0	サヌカイト	石核	横長剥片	B	礫面
90CD019	4区	14層	10.409	1.15 *	0.65	0.15	0.1	サヌカイト	剥片	短形剥片?	A	不明
90CD020	4区	14層	10.403	1.05	2.05 *	0.33	0.8	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD021	4区	14層	10.374	1.95 *	1.90	0.30	0.9	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD022	4区	14層	10.400	1.40	1.35 *	0.26	0.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	A	單剥離面
90CD023	4区	14層	10.254	1.92	3.08	0.77	2.9	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD025	4区	14層	10.389	1.70	2.95	0.74	2.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD026	4区	14層	10.368	1.35	1.45 *	0.28	0.4	サヌカイト	剥片	短形剥片	A1	單剥離面
90CD027	4区	14層	10.215	1.85	2.75 *	0.73	3.1	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD028	4区	14層	10.233	2.15 *	1.33 *	0.42	0.8	サヌカイト	剥片(接合資料)	不明	A	不明
90CD029	4区	14層	10.185	4.95	5.00	0.82	14.1	サヌカイト	石核転用刀器	横長剥片	B	不明
90CD030	4区	14層	10.218	4.79	3.91	0.65	11.8	サヌカイト	搔器	短形剥片	B	二面剥離面
90CD031	4区	14層	10.208	2.50 *	1.60	0.43	1.4	サヌカイト	剥片	短形剥片	A1	礫面
90CD032	4区	14層	10.007	0.90	2.45	0.56	0.7	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	礫面
90CD033		14層	10.270	11.05 *	3.67	2.36	136.5	結晶片岩	搬入礫	-	-	-
90CD034	4区	14層	10.234	1.00 *	1.75	0.17	0.3	サヌカイト	剥片	横長剥片	A	礫面
90CD035	4区	14層	10.100	3.95	6.68	0.98	19.2	サヌカイト	微細剥離痕がある剥片	横長剥片	B	單剥離面
90CD036	4区	14層	10.239	3.97	5.77	1.02	21.3	サヌカイト	石核転用削器	横長剥片	B	不明
90CD037	3区	14層	10.480	3.55	3.75 *	0.63	7.9	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	線状
90CD038	3区	14層	10.027	1.75	2.25	0.38	1.3	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD039	4区	14層	10.046	3.07	1.20	0.70	2.1	サヌカイト	ナイフ様石器	横長剥片	A2	不明
90CD040	4区	14層	10.186	3.86	7.05	1.19	33.3	サヌカイト	石核	横長剥片	B	單剥離面
90CD041	2区	14層	10.257	2.45	3.30	0.53	3.8	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD042	4区	14層	10.078	-	-	-	-	礫岩	叩き石(接合資料)	-	-	-
90CD043	4区	14層	10.132	3.10	7.17	1.08	17.1	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	單剥離面
90CD044	2区	14層	10.206	5.51	4.19	1.65	37.5	サヌカイト	剥片	短形剥片	B	礫面
90CD045	2区	14層	10.150	1.18	1.18	0.10	0.2	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	剥離時粉碎
90CD046	3区	14層	10.046	3.92	5.23	0.95	13.1	サヌカイト	石核転用削器	横長剥片	B	不明
90CD047	3区	14層	10.001	5.19	6.89	1.16	25.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	二面剥離面
90CD048	3区	14層	10.403	2.09	2.12	0.39	1.6	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD049	2区	14層	10.132	2.11	2.70	0.68	2.8	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD050	2区	14層	10.027	1.40	1.26	0.22	0.3	サヌカイト	剥片	短形剥片	A1	礫面
90CD051	2区	14層	10.022	1.47 *	0.90 *	0.21 *	0.3	サヌカイト	剥片(接合資料)	不明	A	不明
90CD052	4区	14層	10.269	-	-	-	-	礫岩	叩き石(接合資料)	-	-	-
90CD053	2区	14層	10.047	0.82 *	0.90 *	0.34	0.3	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	不明
90CD054	3区	14層	10.297	1.35	2.30	0.37	0.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD055	4区	14層	10.391	0.89	1.46	0.19	0.2	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	点状
90CD056	3区	14層	9.965	2.15	4.32	0.69	4.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	二面剥離面
90CD057	4区	14層	10.311	1.30	1.55	0.10	0.2	サヌカイト	剥片	短形剥片	A1	点状
90CD058	4区	14層	10.209	0.59	1.01	0.07	0.1	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	線状
90CD059	3区	14層	9.970	3.39 *	4.38	0.61	6.4	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	点状
90CD060	4区	14層	10.299	1.81	1.49	0.18	0.5	サヌカイト	剥片	短形剥片	A1	剥離時粉碎
90CD061	4区	14層	10.106	2.61	5.73	0.93	11.9	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	不明
90CD062	3区	14層	10.119	2.90	4.75	0.71	7.0	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	單剥離面
90CD063	4区	14層	10.208	2.92	1.98	0.85	6.2	結晶片岩	搬入礫	-	-	-
90CD064	4区	14層	10.284	-	-	-	-	礫岩	叩き石(接合資料)	-	-	-
90CD065	4区	14層	10.214	2.24	1.93	0.76	4.2	凝灰岩	搬入礫	-	-	-
90CD066	4区	14層	10.363	2.10	3.30	0.58	3.7	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	單剥離面
90CD067	4区	14層	10.361	1.91	2.90	0.64	3.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	二面剥離面
90CD068	4区	14層	10.928	1.76	2.39	0.47	1.4	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD069	4区	14層	10.214	1.21	2.09	0.46	0.9	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	二面剥離面
90CD070	2区	14層	10.204	1.55	1.90	0.31	0.9	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	礫面
90CD071	4区	14層	10.161	1.03	2.25	0.29	0.6	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	線状
90CD072	2区	14層	10.204	4.99	4.21	1.00	20.7	石英	剥片	短形剥片	B	礫面
90CD073	2区	14層	10.222	2.11	3.01	0.59	3.7	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	二面剥離面
90CD076	3区	14層	10.161	1.77	3.20	0.68	3.9	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD077	3区	14層	10.175	4.71	4.58 *	1.08	24.2	サヌカイト	石核(接合資料)	横長剥片	B	不明
90CD078	3区	14層	10.192	1.82	1.42	0.46	1.3	サヌカイト	剥片	短形剥片	A1	二面剥離面
90CD079	3区	14層	10.151	1.02	1.40	0.18	0.2	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	線状
90CD080	3区	14層	10.147	1.32	1.18 *	0.31	0.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	A	單剥離面
90CD081	3区	14層	10.095	1.55	1.87 *	0.54	1.2	サヌカイト	剥片(接合資料)	横長剥片	A2	礫面
90CD082	3区	14層	10.175	3.69 *	1.81	0.96	5.2	サヌカイト	剥片	縦長剥片	A2	不明
90CD083	4区	14層	10.112	1.60	3.10	0.50	2.4	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD084	3区	14層	10.133	2.58	2.29	0.70	4.7	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	礫面
90CD085	3区	14層	10.130	2.71	1.95	1.36	7.7	凝灰岩	搬入礫	-	-	-
90CD086	3区	14層	10.064	3.60	4.08	0.60	9.1	サヌカイト	剥片	横長剥片?	B	不明
90CD087	4区	14層	10.267	1.69	3.61	0.54	2.8	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	礫面
90CD088	3区	14層	10.044	8.04	6.20	2.29	152.5	凝灰岩	搬入礫	-	-	-
90CD089	4区	14層	10.182	2.86	1.06	0.39	1.3	サヌカイト	台形石器	横長剥片	A2	不明
90CD090	4区	14層	10.090	1.45	1.47	0.67	1.1	サヌカイト	剥片(接合資料)	横長剥片	A2	礫面

表8 NG90-62次調査地の石器遺物(その1-2)

剥片末端の形状	欠損状態	欠損部位	素材面有無	素材面部位	礫面有無	礫面部位	原礫形状	接合資料
ヒンジ強	ほぼ完形	基部(新欠)	○(N)	全面	無	—	不明	J90CD-5
ヒンジ強	—	—	—	—	全面	—	不明	J90CD-3
フェザー	—	—	○	○	1/2未満	末端	亜円	J90CD-1
末端折れ(剥離時)	—	—	○	○	無	—	不明	J90CD-6
フェザー	1/4未満	基部	—	—	無	—	不明	
フェザー	ほぼ完形	両辺	○	末端	無	—	不明	
不明	1/4未満	末端	—	—	無	—	不明	
フェザー	1/2未満	縦割れ(左辺)	○(N)	末端	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○(P)	末端	1/2以上	基部	不明	J90CD-6
フェザー・一部ヒンジ	完形	—	○(N)	末端	無	—	不明	
フェザー	1/2未満	縦割れ(右辺)	○(N)	末端	無	—	不明	
ステップ	ほぼ完形	左辺(新欠)	—	—	無	—	不明	
フェザー	1/2未満	両辺・基部	○(N)	末端	無	—	不明	J90CD-8
フェザー	—	—	○	○	無	—	不明	J90CD-10
—	完形	—	—	—	1/2未満	右辺	不明	
不明	ほぼ完形	末端	—	—	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○	全面	無	—	不明	
—	—	—	—	—	—	—	—	
不明	1/2未満	末端	—	—	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○(N)	末端	無	—	不明	J90CD-2
ごくゆるいヒンジ	—	基部・左辺	○(N)	ほぼ全面	無	—	不明	
フェザー	1/2未満	縦割れ(右辺)	○(P) ?	末端	無	—	不明	
ステップ	完形	—	○(N) ?	右辺	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○(P)	右辺	無	—	不明	
ヒンジ強	—	—	○	○	無	—	不明	J90CD-4
ゆるいヒンジ	完形	—	—	—	ほぼ全面	—	亜円?	
—	—	—	—	—	—	—	—	J90CD-9
ゆるいヒンジ	完形	—	○(N)	末端	1/3未満	左辺	亜円	
フェザー	完形	—	○(N)	右辺	1/3未満	左辺	亜円	
フェザー	ほぼ完形	左辺(新欠)	—	—	無	—	不明	
フェザー	—	—	○	末端	無	—	不明	J90CD-2
ヒンジ	完形	—	○(N)	末端	無	—	不明	J90CD-5
フェザー	完形	—	○(P)	全面	無	—	不明	J90CD-4
ゆるいヒンジ	完形	—	—	—	全面	—	亜円?	
フェザー	完形	—	—	—	無	—	不明	
フェザー	1/2未満	両辺・基部	○(N)	末端	無	—	不明	J90CD-8
—	—	—	—	—	—	—	—	J90CD-9
フェザー	2/3以上	—	—	—	無	—	不明	
フェザー	ほぼ完形	左辺(新欠)	—	—	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○(P)	末端	無	—	不明	J90CD-10
ヒンジ強	完形	—	—	—	無	—	不明	J90CD-5
フェザー	完形	—	—	—	無	—	不明	
フェザー	完形	—	—	—	無	—	不明	
フェザー	ほぼ完形	末端	—	—	ほぼ全面	—	亜円?	
フェザー	1/2未満	左辺	—	—	無	—	不明	
フェザー	1/2未満	基部・左辺	○(N)	末端	1/3未満	左辺	不明	
ゆるいヒンジ	完形	—	○(P)	全面	無	—	不明	
—	—	—	—	—	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	—	J90CD-9
フェザー	1/2未満	右辺	—	—	1/2以上	左辺	不明	
フェザー	完形	—	○(P)	末端	1/2以上	基部	亜角	
フェザー	完形	—	○(P)	末端	無	—	不明	J90CD-4
フェザー	完形	—	○(N)	—	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○(P)	末端	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○(P)	末端	無	—	不明	J90CD-10
フェザー	完形	—	—	—	ほぼ全面	—	亜円	
フェザー	完形	—	—	—	1/3未満	末端	亜円	J90CD-1
ヒンジ	完形	—	○(N)	左辺	無	—	不明	
ゆるいヒンジ	—	—	○	○	ほぼ全面	—	亜円	J90CD-1
フェザー	完形	—	○(N)	末端・右辺	1/3未満	—	不明	
フェザー	完形	—	—	—	無	—	不明	
フェザー	1/2未満	右辺	○	左辺下半	無	—	不明	
フェザー	ほぼ完形	—	○(N)	末端	1/2未満	基部	不明	J90CD-7
フェザー	ほぼ完形	基部	○(N)	左辺	1/3未満	右辺	不明	
ヒンジ	完形	—	—	—	無	—	不明	
ヒンジ	完形	—	—	—	無	—	不明	J90CD-5
—	—	—	—	—	—	—	—	
フェザー	1/2未満	基部	—	—	ほぼ全面	—	亜円	J90CD-1
ごくゆるいヒンジ	完形	—	○(N)	全面	無	—	不明	
—	—	—	—	—	—	—	—	
フェザー	完形	—	○(P)	左辺	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○(N)	末端	1/2未満	基部	不明	J90CD-7

表9 NG90-62次調査地の石器遺物(その2-1)

遺物番号	地区	層位	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	器種	剥片形態	類型	打面形態
90CD091	4区	14層	10.123	7.89	3.81	3.44	136.5	礫岩	搬入礫	—	—	—
90CD092	4区	14層	10.035	2.22	3.42	0.50	4.0	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	線状
90CD093	4区	14層	10.063	1.65	1.81	0.39	0.8	サヌカイト	剥片	短形剥片	A1	線状
90CD094	4区	14層	10.264	2.91 *	1.51	0.34	1.7	サヌカイト	剥片	短形剥片	A2	不明
90CD095	3区	14層	10.481	0.53	0.92	0.08	0.1	サヌカイト	碎片	—	—	—
90CD096	4区	14層	10.167	2.01	3.00	0.74	4.3	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD097	4区	14層	10.237	3.49	2.21	0.59	3.4	サヌカイト	剥片	短形剥片	A2	單剥離面
90CD098	6区	14層	10.247	4.58	5.07	2.74	90.1	花崗斑岩	搬入礫	—	—	—
90CD099	6区	14層	10.236	4.87	3.58	2.51	46.1	花崗斑岩	搬入礫	—	—	—
90CD100	6区	14層	10.113	4.13	1.91	2.05	20.4	花崗斑岩	搬入礫	—	—	—
90CD101	6区	14層	10.190	2.68	2.10	1.63	9.5	凝灰岩	搬入礫	—	—	—
90CD103	4区拡張部	14層	10.378	3.61	2.71	1.12	9.3	サヌカイト	剥片	短形剥片	A2	單剥離面
90CD104	4区拡張部	14層	10.427	3.69	1.58	0.58	2.5	サヌカイト	ナイフ様石器	横長剥片	A2	不明
90CD105	4区拡張部	14層	10.414	0.88	1.70	1.03	0.1	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	剥離時粉碎
90CD106	4区拡張部	14層	10.416	1.59	2.00	0.32	1.1	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD107	4区拡張部	14層	10.400	4.90	6.88	1.01	29.7	サヌカイト	削器	横長剥片	B	—
90CD108	4区拡張部	14層	10.395	3.10	5.85	0.78	11.6	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	二面剥離面
90CD109	4区拡張部	14層	10.299	0.71	1.85	0.29	0.2	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD110	4区拡張部	14層	10.373	2.29	3.91	0.93	5.7	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	礫面
90CD111	4区拡張部	14層	10.419	0.69	1.42	0.19	0.2	サヌカイト	剥片	—	A	不明
90CD112	4区拡張部	14層下部	10.228	6.65	2.06	0.63	7.8	サヌカイト	細部調整がある剥片	縦長剥片?	B	礫面
90CD113	4区拡張部	14層	—	3.41	8.39	1.24	26.0	サヌカイト	石核転用削器	横長剥片	B	不明
90CD114	2区拡張部	14層	10.160	4.50 *	4.01 *	0.93	15.7	サヌカイト	石核(接合資料)	横長剥片	B	不明
90CD115	2区拡張部	14層	10.213	1.11	3.61	0.89	2.8	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD116	4区拡張部	14層	10.014	—	—	—	—	サヌカイト?	不明	—	—	—
90CD117	4区拡張部	14層	10.046	1.21	1.83	0.28	0.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD118	4区拡張部	14層	10.040	1.08	1.31	0.30	0.3	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	礫面
90CD119	4区拡張部	14層	10.023	—	—	—	—	礫岩	叩き石(接合資料)	—	—	—
90CD120	4区拡張部	14層	10.327	2.21	2.79	0.50	1.9	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD121	4区拡張部	14層	10.364	0.38	1.49	0.15	0.1	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	点状
90CD122	4区拡張部	14層	10.385	0.99	0.89	0.50	0.4	サヌカイト	剥片	短形剥片	A1	礫面
90CD123	4区拡張部	14層	10.378	3.59	2.00	0.95	5.5	サヌカイト	剥片	横長剥片?	B	單剥離面
90CD124	4区拡張部	14層	10.310	1.01	1.11	0.41	0.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	礫面
90CD125	4区拡張部	14層	10.398	1.89	1.10	0.25	0.4	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	剥離時粉碎
90CD126	4区拡張部	14層	10.358	0.53	0.91	0.29	0.1	サヌカイト	碎片	—	—	—
90CD127	4区拡張部	14層	10.346	1.22	1.01	0.41	0.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	A	不明
90CD128	4区拡張部	14層	10.274	2.34	1.25	0.50	1.5	サヌカイト	台形石器	横長剥片	A2	不明
90CD129	4区拡張部	14層	10.380	1.62	4.32	0.65	4.3	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD130	4区拡張部	14層	10.361	3.29	3.73	0.89	8.8	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	二面剥離面
90CD131	4区拡張部	14層	10.385	0.50 *	0.65 *	0.13 *	0.1	サヌカイト	碎片	—	—	—
90CD132	4区拡張部	14層	—	3.31 *	2.82 *	0.78	6.7	サヌカイト	剥片(接合資料)	横長剥片	B	單剥離面
90CD133	4区拡張部	14層	10.256	3.12	2.47	0.71	3.7	サヌカイト	剥片	短形剥片	A2	点状
90CD134	4区拡張部	14層	10.361	2.89	5.57	0.72	10.2	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	二面剥離面
90CD135	4区拡張部	14層	10.422	0.85	1.65	0.24	0.2	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD136	4区拡張部	14層	10.403	0.55	0.95	0.18	0.1	サヌカイト	碎片	—	—	—
90CD137	4区拡張部	14層	10.378	4.18	6.13	0.95	19.1	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	單剥離面
90CD138	4区拡張部	14層	9.955	1.25	1.05	0.12	0.1	サヌカイト	剥片	—	—	—
90CD139	4区拡張部	14層	9.985	0.75 *	1.55 *	0.14 *	0.1	サヌカイト	剥片	—	A	不明
90CD140	4区拡張部	14層	10.201	3.97	3.10	0.36	15.0	花崗斑岩	搬入礫	—	—	—
90CD141	4区拡張部	14層	10.387	0.95	1.05	0.21	0.3	サヌカイト	剥片	短形剥片	A1	線状
90CD142	4区拡張部	14層下部	10.219	3.05	3.65	0.44	4.7	サヌカイト	剥片	横長剥片	A2	單剥離面
90CD143	4区拡張部	14層下部	10.238	2.65	2.30	0.44	2.4	サヌカイト	剥片	短形剥片	A2	單剥離面
90CD144	4区拡張部	14層	10.299	3.11	3.45 *	0.84	6.5	サヌカイト	剥片(接合資料)	横長剥片	B	單剥離面
90CD145	4区拡張部	14層下部	10.245	0.55	1.78	1.34	1.5	サヌカイト	剥片	横長剥片	A1	單剥離面
90CD146	4区拡張部	14層下部	10.209	4.38	5.25	1.42	27.8	サヌカイト	剥片	横長剥片	B	單剥離面
J90CD-01	—	14層	—	12.65	10.10	2.15	141.4	サヌカイト	接合資料	—	—	—
J90CD-01-A	—	14層	—	4.71	7.73	1.08	39.9	サヌカイト	石核(接合資料)	横長剥片	B	不明
J90CD-02	—	14層	—	5.63	7.45	0.90	32.3	サヌカイト	接合資料	—	—	—
J90CD-03	—	14層	—	6.05	12.20	1.05	29.7	サヌカイト	接合資料	横長剥片	B	不明
J90CD-03-A	—	14層	—	3.26	4.67	0.88	13.3	サヌカイト	剥片(接合資料)	横長剥片	B	單剥離面
J90CD-04	—	14層	—	4.50	6.60	1.18	33.3	サヌカイト	接合資料	—	—	—
J90CD-05	—	14層	—	5.80	11.15	1.39	22.6	サヌカイト	接合資料	横長剥片	B	二面剥離面
J90CD-06	—	14層	—	3.59	6.05	1.68	40.0	サヌカイト	接合資料	横長剥片	B	礫面
J90CD-07	—	14層	—	1.55	3.35	0.54	2.3	サヌカイト	剥片(接合資料)	横長剥片	A2	礫面
J90CD-08	—	14層	—	2.15 *	2.12 *	0.36	1.2	サヌカイト	剥片(接合資料)	横長剥片	A	不明
J90CD-09	—	14層	—	19.20	6.40	3.57	415.3	礫岩	叩き石(接合資料)	—	—	—
J90CD-10	—	14層	—	5.31	4.95	0.78	14.9	サヌカイト	接合資料	—	—	—

※長さ・幅・厚さの項目で数値についた*印は欠損をあらわす(長・幅・厚の計測に影響がない場合は印をつけいてない)

※素材面有無の項目でNはネガティヴ面、Pはポジティヴ面をあらわす

表10 NG90-62次調査地の石器遺物(その2-2)

剥片末端の形状	欠損状態	欠損部位	素材面有無	素材面部位	礫面有無	礫面部位	原礫形状	接合資料
—	—	—	—	—	—	—	—	
フェザー	完形	—	○(P)	下部	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○	末端	無	—	不明	
フェザー	1/2未満	基部	○	ほぼ全面	1/3未満	右辺	不明	
—	—	—	—	—	—	—	—	
ヒンジ	完形	—	—	—	無	—	不明	
不明	ほぼ完形	末端	○(N)	右辺	無	—	不明	
—	—	—	—	—	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	—	
ごくゆるいヒンジ	完形	—	—	—	全面	—	円形	
フェザー	ほぼ完形	基部(新欠)・末端	○(N)	右辺	無	—	不明	
フェザー	ほぼ完形	基部	—	—	無	—	不明	
フェザー	ほぼ完形	左辺	—	—	1/3未満	—	不明	
フェザー	完形	—	○(N)	全面	無	—	—	
ヒンジ	完形	—	○(N)	全面	無	—	不明	
ゆるいヒンジ	完形	—	—	—	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○(P)	全面	1/3未満	右辺	亜円?	
不明	1/2以上	基部・末端	—	—	無	—	不明	
不明(ステップ?)	1/2未満	左辺	○(N)	全面	無	—	不明	
フェザー	完形	—	○(N)	末端	無	—	不明	
ゆるいヒンジ	—	—	○	○	ほぼ全面	—	亜円	J90CD-1
フェザー	完形	—	○(N)?	全面	1/2以上	末端	亜角?	
—	—	—	—	—	—	—	—	
フェザー	完形	—	○	全面	無	—	不明	
ステップ	完形	—	○	全面	無	—	不明	
—	—	—	—	—	—	—	—	J90CD-9
フェザー	完形	—	—	—	1/3未満	左辺	不明	
フェザー	完形	—	—	—	無	—	不明	
不明	ほぼ完形	末端	○	末端	無	—	不明	
フェザー	1/2以上	左辺	—	—	全面	—	不明	J90CD-3
フェザー(直角)	完形	—	—	—	無	—	不明	
フェザー	ほぼ完形	基部	○(N)	全面	無	—	不明	
—	—	—	—	—	—	—	—	
不明	1/2未満	右辺	○	全面	無	—	不明	
ごくゆるいヒンジ	ほぼ完形	先端(新欠)	○(N)	基部	無	—	不明	
フェザー	完形	—	—	—	ほぼ全面	—	円形	
フェザー	完形	—	○(P)?	末端	無	—	不明	
—	—	—	—	—	—	—	—	
ヒンジ	完形	—	—	—	1/2以上	末端	亜円	J90CD-3
フェザー	完形	—	—	—	1/2以上	末端	亜円	J90CD-1
フェザー	完形	—	○(P)	ほぼ全面	無	—	不明	
ヒンジ	完形	—	○	末端	無	—	不明	
—	—	—	—	—	—	—	—	
ヒンジ	完形	—	—	—	1/2以上	末端	亜円	J90CD-3
—	—	—	—	—	—	—	—	
ヒンジ	4/5以上	基部	—	—	不明	—	—	
—	—	—	—	—	—	—	—	
フェザー	ほぼ完形	末端(新欠)	—	—	全面	—	亜円	
ごくゆるいヒンジ	ほぼ完形	左辺(新欠)	○	—	無	—	不明	
フェザー	完形	—	—	—	ほぼ全面	—	亜円?	
ヒンジ	完形	—	—	—	1/2以上	末端	亜円	J90CD-3
フェザー	完形	—	○(N)	末端	無	—	不明	
フェザー	完形	—	—	—	1/2以上	末端	亜円	J90CD-1
—	—	—	—	—	—	—	—	90CD017+073+077+086+114+133+146
ゆるいヒンジ	—	—	○	○	ほぼ全面	—	亜円	90CD077+114
—	—	—	—	—	—	—	—	90CD035+046
ヒンジ強	—	—	—	—	全面	—	不明	90CD013+123+132+137+144
ヒンジ	完形	—	—	—	1/2以上	末端	亜円	90CD132+144
—	—	—	—	—	—	—	—	90CD040+048+068
ヒンジ強	—	基部(新欠)	○(N)	全面	無	—	不明	90CD009+047+056+084
末端折れ(剥離時)	—	—	○	○	無	—	不明	90CD018+023
フェザー	完形	—	○(N)	末端	1/2未満	基部	不明	90CD081+090
フェザー	1/2未満	両辺・基部	○(N)	末端	無	—	不明	90CD028+051
—	—	—	—	—	—	—	—	90CD042+052+064+119
—	—	—	—	—	—	—	—	90CD029+055+071

第3節 平安時代前期の長原

1)はじめに

本書第Ⅱ章第2節で報告したように、NG02－9次調査では平安時代Ⅱ期の遺構・遺物が比較的多く見つかった。これらは、盛土を行って居住区と水田とを分け、低湿な土地を定住の場としようとした人々の努力の痕跡である。同時期の資料が断片的にしか得られていない現状で、掘立柱建物・土壙・溝といった遺構と耕作地および土器などの出土遺物がまとまった集落の形で確認できたことは、この時期の長原遺跡の動きを理解するうえで重要である。本節ではこの集落を長原遺跡の平安時代を通じた開発史のなかに位置づけることによって、その性格を検討するとともに、平安時代前期に相当するⅡ期をどのように理解するかについてあらためて考えてみたい。

2)平安時代Ⅱ期とは？－これまでの成果をふまえて－

検討を行うにあたって、まずは平安時代Ⅱ期とその前後の時期について、これまでに示された理解を整理しておく。

長原遺跡の台地部を中心とした検討[佐藤1992]では、平安時代Ⅱ期は、平安時代Ⅰ期に見られた建物群や都との近い関係を示す土器・瓦などの遺物群が姿を消した後の、活動の形跡が少なく土器も簡素化する停滞の時期と位置づけた(図53)。主たる要因には長原標準層序のNG5層による灌漑システムの壊滅的打撃を挙げている。長原の地が再び開発されるのは平安時代Ⅲ期以降のことと、それによつて完成されるのが、近年まで景観を保っていた条里に基づく地割であった。

その後も台地部では長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査を中心に多くの成果が蓄積されたが、こうした理解に対して基本的に変更を迫るような成果は得られていない。しかし、1995年から始まった長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査では新たなイメージが加えられるようになる。長原遺跡のなかでも東北部の沖積平野部における各所で調査が進んだ結果、遺跡に壊滅的な被害をもたらした、と考えられてきたNG5層の分布が案外限定されることがわかつてきたのである[高橋工1999b・村元健一2003b]。また、喜連東遺跡の建物群をのぞけばあまり多くなかった奈良時代の土器や瓦、その他の遺物についてまとめた資料が得られ[大阪市文化財協会2004b]、祭祀に用いた墨画土器や、多量の瓦、硯、銅錢、鎔帶といった出土資料の性格から、農村とは異なる集落の存在が想定された[村元2003b]。東北地区のこれらの集落は、台地部が東除川水系として捉えられるのに対して、大和川の当時の本流であった平野川の左岸に形成された「六反自然堤防」に位置するものと理解されている。

上記の新たなイメージは、台地部の調査成果をもとに語られてきた長原遺跡における開発の流れが、それほど単純ではないことを明らかにした。しかし、東北地区の集落がこれまでの理解とまったく異なる動きをとったかというと、そういうわけではなく、大きく見ればやはり平安時代Ⅰ期の活況からⅡ期の停滞、Ⅲ～Ⅳ期の再開発といった動きのなかに位置づけられそうである。

供 賧 具			貯 藏 具・調理具		
平安時代一期	古	土師器皿A 土師器皿B	須恵器皿C 土師器皿D	須恵器皿E 土師器皿F	土師器皿G 土師器皿H
			土師器皿I 土師器皿J	土師器皿K 土師器皿L	土師器皿M 土師器皿N
平安時代二期	中	土師器皿O 土師器皿P	土師器皿Q 土師器皿R	土師器皿S 土師器皿T	土師器皿U 土師器皿V
			土師器皿W 土師器皿X	土師器皿Y 土師器皿Z	土師器皿AA 土師器皿BB
平安時代三期	古	土師器皿CC 土師器皿DD	土師器皿EE 土師器皿FF	土師器皿GG 土師器皿HH	土師器皿II 土師器皿III
			土師器皿JJ 土師器皿KK	土師器皿LL 土師器皿MM	土師器皿NN 土師器皿OO
平安時代四期	中	土師器皿PP 土師器皿QQ	土師器皿RR 土師器皿SS	土師器皿TT 土師器皿UU	土師器皿VV 土師器皿WW
			土師器皿XX 土師器皿YY	土師器皿ZZ 土師器皿AA	土師器皿BB 土師器皿CC
平安時代五期	古	土師器皿XX 土師器皿YY	土師器皿ZZ 土師器皿AA	土師器皿BB 土師器皿CC	土師器皿DD 土師器皿EE
			土師器皿FF 土師器皿GG	土師器皿HH 土師器皿II	土師器皿JJ 土師器皿KK
平安時代六期	中	土師器皿MM 土師器皿NN	土師器皿OO 土師器皿PP	土師器皿QQ 土師器皿RR	土師器皿SS 土師器皿TT
			土師器皿UU 土師器皿VV	土師器皿WW 土師器皿XX	土師器皿YY 土師器皿ZZ
平安時代七期	古	土師器皿XX 土師器皿YY	土師器皿ZZ 土師器皿AA	土師器皿BB 土師器皿CC	土師器皿DD 土師器皿EE
			土師器皿FF 土師器皿GG	土師器皿HH 土師器皿II	土師器皿JJ 土師器皿KK
平安時代八期	中	土師器皿MM 土師器皿NN	土師器皿OO 土師器皿PP	土師器皿QQ 土師器皿RR	土師器皿SS 土師器皿TT
			土師器皿UU 土師器皿VV	土師器皿WW 土師器皿XX	土師器皿YY 土師器皿ZZ

([佐藤隆1992]図75を転載)

図53 長原遺跡における平安時代の土器編年

3) 平安時代Ⅱ期の集落分布

次には、これまで見つかっている平安時代Ⅱ期の集落についてあらためて検討する。

図54は長原遺跡における平安時代中期の地形復元図[村元2003b]をもとに平安時代Ⅰ～Ⅲ期の集落の分布を示したものである。集落の数は平安時代Ⅱ期では限られており、Ⅲ期になって一気に増加することが見て取れる。これは以前からの理解のとおりである。平安時代Ⅱ期の集落について、その前後のⅠ期・Ⅲ期との連続性がどのようなものか、各地点別にみていく。

①には平安時代Ⅰ期～Ⅲ期の各時期の建物群がある[大阪市文化財協会1992b]。ただし、Ⅰ期では7棟であった建物がⅡ期では2棟に減り、Ⅲ期になって13棟とまた増えるという変化を見せる。遺物の質・量もそれに応じたものである。この調査地ではNG5層は存在せず、洪水の被害がⅠ期からⅡ期への動きにどのように影響を与えたかは明らかでない。

②では建物は見つかっていないが、約77mにわたり、両端が南に直角に折れる東西溝が検出されている[大阪市文化財協会1994]。飛雲文軒平瓦を含む瓦が出土するなど、建物群の周囲を方形に区画する溝であった可能性もある。平安時代Ⅱ期古段階のものと報告されているが、平安時代Ⅰ期の遺物を多く含むため、同期には機能しはじめてⅡ期古段階で埋没したと考えられる。この溝はNG5層の上位で検出されており、洪水の後につくられたことは明らかである。NG5層が平安時代Ⅰ期の集落の廃絶に大きく係わるという考えに対して否定的な例となる可能性もあるが、平安時代Ⅱ期に入ってほどなくして溝が廃絶しており、NG5層の上での開発が軌道に乗らなかったことを示しているとも考えられる。

③では500を超える柱穴・小穴が密集して検出されており、平安時代Ⅰ期とⅢ期の建物群が認められる[大阪市文化財協会1992a・村元2003b]。Ⅱ期の遺構には小穴や溝があるが、建物は復元できていない。遺構・遺物ともⅡ期のものは少なく、都との関係がうかがえる遺物もほとんどない。この調査地ではNG5層は存在せず、洪水の被害がⅠ期からⅡ期への動きにどのように影響を与えたか明らかではない。

④では平安時代Ⅱ期とⅢ期の建物群がある[大阪市文化財協会1983]。これらはNG5層の上位で検出されている。調査地ではⅠ期の顕著な遺構はないが、周辺の調査地では奈良～平安時代Ⅰ期の建物が存在する。Ⅲ期の建物は庇付きのものを含み、数も増える。遺物は平安京と共に通する土師器皿や施釉陶器などが目立って多くなる。

⑤は本書で報告した集落である。「六反自然堤防」の南辺部に位置し、NG5～6A層に対応する水成層である第5層や平安時代Ⅱ期の遺物を含む第4d層の上位に形成されている。Ⅰ期の遺構はないが、遺物はⅡ期と同じくらいあり、付近では人々が活動していたことを示す。この集落については、墨書き土器や線刻土器などの文字資料が見つかったことで注目された[松本2003]。ただし、形状のわかる土器はⅠ期からⅡ期前半のものがほとんどであり、唯一の銅鏡も和同開珎である。こうした要素はかなり早い時期に消えているようにみえる。遺物から考えられる下限は平安時代Ⅲ期であり、Ⅳ期の遺構・遺物は見られない。

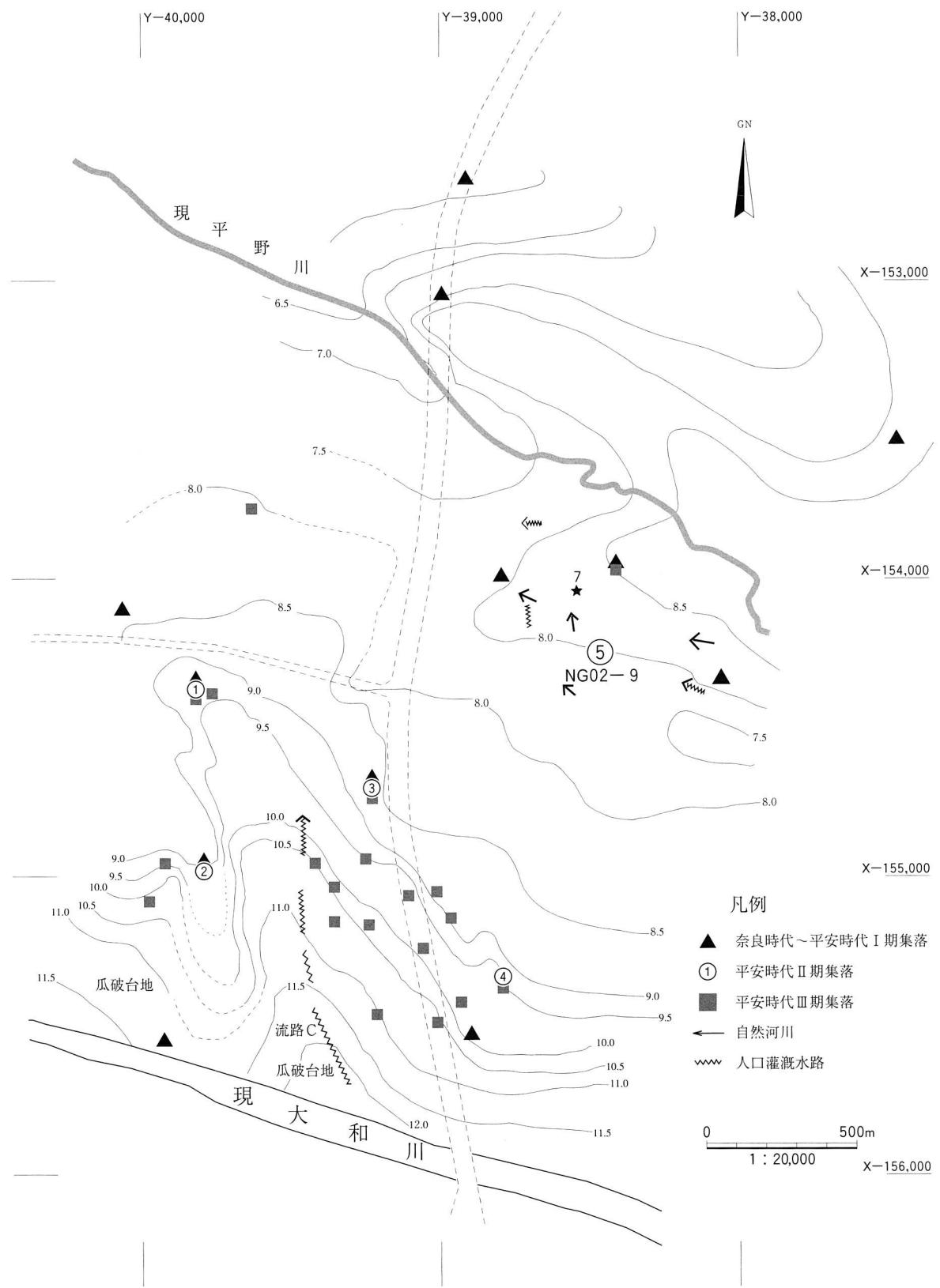


図54 長原遺跡の集落の変遷(平安時代)

地形の復元をもとに平安時代の集落について考察した村元は、NG 5層の影響が少ない「六反自然堤防」においては平安時代Ⅰ～Ⅱ期に連続して集落が存在した可能性が高いとする[村元2003b]。また同様に高橋の考察では、東北地区は平安時代Ⅱ期の遺物はやや少ないもののさほど大きな変化は見られず、NG 5層のような洪水の影響を受けずに平安時代Ⅰ期から引き続き水田経営が可能であったと考えられ、台地部の状況とは合致しないとする[高橋1999b]。

以上の見解は、どちらも集落としての連続性から平安時代Ⅰ期とⅡ期との間に大きな画期をおくことに積極的ではない。しかし、両期の差を単なる遺物の量の多寡で考えてしまうと、両期の遺物がもつ質的な差を充分に理解できない。平安時代Ⅰ期の食器は土師器杯A・皿A・皿B・椀Aおよび須恵器杯A・杯B・皿といった多彩な構成で、それに数種の壺類が加わる土器組成である。また、建物にも瓦(飛雲文系など)が用いられるといった状況で、都と近い生活様式を示している。それに比べて、Ⅱ期の大きな特徴は在地色がより顕在化した土師器椀Aと皿Bおよび黒色土器A類椀といった、きわめて単純な組成に変わることであり、そこには当時の都である平安京の土器との共通性がほとんど見出せない。

平安時代Ⅰ期には「六反自然堤防」における広範囲の耕地化が進み、大規模な溝やその他の遺構が増加するなど、台地部と共に開発の動向を示している。このことから、NG 5層の洪水で荒廃した台地部から比較的安定した沖積平野部へ開発の対象が向けられたとの考えもあり、本書で報告した⑤の集落は、こうした人々によってつくられた集落と位置づけることもできよう。しかし、単に人々が開発の場を移動させただけならば、平安京の土師器との共通性がないことや施釉陶器や瓦がきわめて少数であるといった質的な面での顕著な差は生まれない。開発事業そのものに根本的な転換があったことは確実で、それが平安時代Ⅰ期の集落との間の大きな落差となっているのである。長原の地で再び開発が行われ、人々の動きが活発となるⅢ期の遺物群に平安京との共通性が色濃く見えることも、この落差をより一層明らかなものとしている。

4) むすびにかえて

以上、本書で報告した平安時代Ⅱ期の集落に係わって、長原遺跡の集落の動向についてみてきた。くりかえしになるが、平安時代Ⅰ期からⅡ期への変化については、単に遺構が継続して見られるかどうか、遺物量が減るかどうかではなく、その質的な落差に注目する必要があることをあらためて強調しておきたい。東北地区を含めて、平安時代Ⅱ期はやはり停滞の時代であると考えられよう。

この停滞を起こした要因として、考古資料によるかぎりもっとも蓋然性が高いのはNG 5層の洪水による被害であるといえる。政治的な事情(政権内部での勢力の交替や地方行政の転換など)も加味して考えるべきではあるが、灌漑システムの崩壊により中央政権あるいは有力氏族の開発推進力が途絶え、その結果として都との関係が断たれたと考えれば、先述した遺構・遺物の質・量における大きな落差は無理なく理解することができる。

(佐藤)

第V章 総括

本書は平成14年度と平成18年度に行った長原遺跡東北地区における2箇所の調査(NG02-9・06-2次調査)の成果である。

近接した位置にある両調査では、後期旧石器時代から近世までの遺構・遺物を検出した。

特に、NG02-9次調査で出土した後期旧石器時代の石器遺物は、層序の観察と火山灰分析から2万8千年前も前に遡ることが確実な資料であることがわかった。剥片と石核のみで、石器は出土していないものの、本調査区の南、約1.5kmの地点の同じ層準で出土した石器と共に製作技法が見られた。これらのことから、両地点で出土した石器遺物は、長原遺跡の中で年代と技法の共通する石器遺物群として捉えることが可能であり、本遺跡のみならず、近畿の旧石器時代遺跡を考える上で重要な資料となるものといえよう。

また、本調査地とその周辺は、NG06-2次調査の自然流路NR401やNG02-9次調査の厚い水成層が物語るように、絶えず自然河川が影響を及ぼす地域で、氾濫が一段落しても湿地として残り、長い間、居住には適さなかった地域である。しかし、飛鳥時代以降には人がこの地に立ち入ったことが遺物から読取ることができ、積極的に定住を模索し始めるのはNG02-9次調査で見つかった遺構・遺物が示すように平安時代の前期のことである。その後、水田や畠が営まれた200年近い期間の中では、掘立柱建物も存在したことがわかつており、比較的希薄であった平安時代前半の集落の資料に新たな事例を加えることができた。こうした成果によって、長原遺跡における集落の変遷のようすはいつそう明らかなものとなってきている。

平安時代の前半以降になると建物は見られなってしまうが、これはやはり、自然河川の氾濫などの影響が大きかったせいであろう。しかし、NG06-2次調査の鎌倉時代やそれ以降の畠が物語るように、人々がこの土地を利用しようと努力してきたことが看取できる。

このように、長原遺跡の東部地域では、人々は水と戦い、居住により適した環境を求めて場所を変え、生活してきたことが、今回の両調査から読取ることができるのである。

別 表

別表1 長原遺跡東北地区の基本層序

沖 積 層 上 部 層 II	RK9A層	≤20	暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂混り粘土質シルト	→土壌・溝(97-43次)	NG97-41	8A	弥生中期
		≤18	暗灰色シルト～シルト質粘土	弥生IV様式(96-66次)	NG96-66 NG96-79	8B	
積 層 上 部 層 II	RK9B層	≤30	暗オリーブ灰色砂礫～細粒砂混り粘土	NG97-12	8Ci	~	弥生中期
		20	オリーブ黑色シルト質粘土	NG97-52	8Ci'	~	
積 層 上 部 層 II	RK9C層	≤3	綠灰色シルト	NG97-52	8Ci	~	繩文前期
		5	オリーブ黑色シルト	NG96-79	9A	~	
積 層 上 部 層 II	RK10A層	40	灰オリーブ色シルト	NG95-79	9B	~	繩文晚期
		≤5	暗オリーブ色粘土質シルト	NG95-79	9B	~	
積 層 上 部 層 II	RK10B層	40	暗オリーブ色シルト	NG95-79	9B	~	繩文晚期
		≤5	オリーブ黑色シルト	NG95-79	9B	~	
積 層 上 部 層 II	RK10C層	10	綠灰色シルト～灰色中粒砂	土器集積・炉(99-19次) →踏込み(97-41・56、99-41次)	北白川上層II～III(99-19次)	9Ci	繩文後期
		8	黑色シルト	→噴砂(99-19次)	9Ci	~	
積 層 上 部 層 II	RK11層	8	綠灰色シルト	繩文土器	NG96-79	9Ci	繩文後期
		15	黑色シルト	繩文土器(97-12次)	NG96-79	9Ci	
積 層 上 部 層 II	RK11層	15	黑褐色シルト質極細粒砂	北白川上層II(99-19次)	NG96-79 NG97-12	10・11	繩文後期
		≤250	暗オリーブ灰色粘土	北白川上層II(99-19次)	NG96-79 NG97-12	10・11	
積 層 上 部 層 II	RK12A層	≤70	暗オリーブ灰色粘土	立化 木石	4740±140SI(Gak-14942)(97-52、98-20次)	12Ai	繩文中期
		5	灰 黑色シルト	4910±140SI(Gak-14941)(97-52、98-20次)	12Ai	~	
積 層 上 部 層 II	RK12B層	10	黑色シルト質細粒砂	4910±140SI(Gak-14941)(97-52、98-20次)	12Ai	~	繩文中期
		12	オリーブ黒色シルト質細粒砂～粗粒砂	(97-52、98-20次)	12B	~	
積 層 上 部 層 II	RK12C層	15	暗褐色細粒砂質シルト	(97-52、98-20次)	12B	~	繩文中期
		30-120	綠灰色シルト～灰色粗粒砂	(97-52、98-20次)	12B	~	
積 層 上 部 層 II	RK12D層	30-40	灰黄色粘土質シルト	(97-52、98-20次)	12B	~	繩文中期
		12	灰色中～細粒砂質シルト	(97-52、98-20次)	12B	~	
積 層 上 部 層 II	RK12E層	≤90	灰色極粗粒砂～黑褐色シルト	(97-52、98-20次)	12B	~	繩文中期
		30	黑色中粒砂質シルト	(97-52、98-20次)	12B	~	
積 層 上 部 層 II	RK12F層	5	オリーブ黒色シルト質細粒砂	(97-52、98-20次)	12B	~	繩文中期
		5	黃灰色シルト質極細粒砂	(97-52、98-20次)	12B	~	
積 層 上 部 層 II	RK12G層	10	オリーブ黒色板細粒砂質シルト	(97-52、98-20次)	12B	~	繩文中期
		10-20	灰オリーブ色シルト	7230±40BP(Beta-146531)(99-41次)	12B	~	
積 層 上 部 層 II	RK13A層	5-10	灰オリーブ色火山灰質シルト	(97-52、98-20次)	12D	~	繩文早期 繩文草創期
		10-20	灰手火山灰	7230±40BP(Beta-146531)(99-41次)	12D	~	
低 位 段 丘	RK13B層	5	灰オリーブ色火山灰質粘土	石器製作址(97-12次)	13Ai	~	後期旧石器
		5	オリーブ灰色ガラス質火山灰	石器製作址(97-12次)	13B	~	
構 成 層 丘	RK13C層	10	オリーブ灰色粘土質シルト	NG97-52	13C	~	後期旧石器
		10	綠灰色砂礫混り粘土質シルト	NG97-52	13C	~	
構 成 層 丘	RK14層	20-40	綠灰色シルト～シルト質粘土	NG97-52	13C	~	後期旧石器
		100-150	灰色砂礫	NG97-52	13C	~	
構 成 層 丘	RK15A層	≥100	綠灰色シルト質極細～細粒砂	NG97-52	13C	~	後期旧石器
		20-30	暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土	NG97-52	13C	~	
構 成 層 丘	RK15B層	120	暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土	NG97-52	13C	~	後期旧石器
		10-20	暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土	NG97-52	13C	~	
構 成 層 丘	RK16A層	10	吾彦火山灰(Aso-4)	NG96-79	16B	~	中期旧石器
		40	綠灰色粘土層	NG96-79	16B	~	

(「高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳2000】を一部修正)

別表2 長原遺跡の標準層序

層序	層序概念図	岩相	層厚(cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	C.14yB.P	時代
最上部層	NG0層	現代盛土	—				近代
	NG1層	現代作土	15-25				現代
	NG2層	合細礫灰褐色～黃褐色シルト質砂	6-24	↓地表 ↓暗色带	↓小溝群・畠間 ←地表	青花・唐津・瀬戸美濃・備前など 瓦質土器・陶器	(400) 近世
	NG3層	合細礫淡黃褐色～灰色粘土質シルト	12-20			瓦器(C・IV～V期)	
	NG4A層	含細礫黃褐色中粒砂	8-15		瓦器 黑色土器	瓦器(C・IV～V期)	室町
	NG4B層	i 暗灰褐色 礫質砂～シルト ii 黄褐色砂質シルト iii 灰色砂質シルト	av.20 av.5 av.15		陶器 須恵器 土師器	陶器 須恵器 土師器	鎌倉
	NG4C層	i 10～45cm ii にぶい黃褐色シルト質砂	av.20 av.20		水田面 ↓小溝群・畠間	瓦器(C・I～II期) 瓦器(C・I～III期)	(800) 平安
	NG5A層	灰色砂礫、シルト質細砂薄層を夾在	10-80		△掘立柱建物	水田面	平安I～III期
	NG5B層	青灰色細粒～極細粒砂	2-8				奈良
	NG6A層	i 暗青灰色砂・粘土質シルト ii up. 黃褐色中粒砂～細粒砂 ii lw. 粘土質シルト薄層と極細粒砂層の互層	≤20 ≤5 av.10	タニシ	水田面		(1,300) 平城宮田
	NG6B層	i 合砂・黒褐色～暗灰色シルト質粘土 ii 黄褐色シルト・シルト・粗粒砂	≤15 ≤5	タニシ	水田面	飛鳥III	飛鳥
	NG7A層	i 含砂灰褐色粘土 ii 含砂黒褐色シルト質粘土	av.10 av.15	乾痕	水田面 ↓掘立柱建物	飛鳥I TK209	(1,400) TK10
沖積層～難波累層	NG7B層	o 明黄褐色砂礫～暗オリーブ灰色粘土質シルト i 黒褐色砂・礫質粘土・黒色シルト ii 褐色極粗粒砂・粘土質シルト互層 iii 暗褐色粘土質シルト	≤250 ≤35 ≤170 ≤5		ヒトと偶蹄類の足跡 水田面	土手	古墳後期
	NG8A層	青灰～黃灰色砂・礫～粘土	≤40		長原古墳群	埴輪V期・TK23・47～MT15	(1,600) 古墳中期
	NG8B層	暗褐色砂質シルト	av.10		水田面	埴輪II期 TK216	古墳前期
	NG8C層	i にぶい黄褐色極粗粒砂～中粒砂 ii 黄褐色シルト質粘土 ii lw. 黄褐色シルト質粘土	av.25 ≤15 av.10		△方形周溝墓・溝	布留式・庄内式・畿内第V様式	(1,700) 弥生後期
	NG9A層	黒褐色砂・シルト質粘土	3-15	乾痕	自然流路の堤	畿内第I様式・長原式・石塚	弥生中期
	NG9B層	i 黒オリーブ～黒褐色砂礫 ii 暗灰黄色シルト質粘土・植物片多含 iii 黒オリーブ色シルト質粘土 iv 黒オリーブ色シルト・砂 v 黒オリーブ色シルト・砂	≤90 10-40 3-14 8-50 10-35		土偶 石棒	畿内I様式・堅杵	(2,300) 繩文晚期
	NG9C層	i 黒褐色～褐色含シルト質粘土 ii 黄褐色シルト質粘土・砂礫 iii up. オリーブ黒～暗褐色シルト・粗粒砂質粘土 iii lw. 暗灰色シルト・粘土質粗粒砂	2-8 2-10 7-25 av.5	アラガシ イスガヤ 乾痕	△石器製作址 △土器棺墓 △堅穴住居・貯藏室	長原式・石斧の柄・弓 滋賀里IV式 円基式石塚	(3,000) 繩文後期
	NG10層	綠灰～暗褐色シルト質粘土	≤80	地震			北白川上層II～III式
	NG11層	灰色シルト質粘土	≤16	乾痕			-4,740±140SI (GaK-14942)
	NG12A層	i 腐植質黒褐色細粒質粘土～シルト ii オリーブ黒～オリーブ色シルト質砂・礫混り	≤15 ≤20			里木II式・北白川C式・石塚	-4,900±140SI (GaK-14941)
上部層	NG12B層	i 暗褐色細粒砂質シルト ii 暗黃灰色シルト～暗色礫混り砂 iii 黑灰色シルト～オリーブ黒色シルト質粘土 iv 黄灰色砂礫～灰色シルト質粘土	av.20 av.10 av.10 ≤15		地震? （火山灰の2次堆積あり） シカ・トリの足跡 △土壤	船元II式	繩文中期
	NG12C層	i 黒褐色～オリーブ黒色シルト～粘土 ii 黒褐色～灰色粗粒砂 iii 黑褐色シルト質粘土・植物片多含 iv オリーブ黒色シルト v 黄灰色砂・一部シルト質 vii 黄灰色シルト質火山灰	≤25 5～10 av.10 ≤20 ≤30 ≤5		甲殻類の巣穴の化石 横大路火山灰層(Ah)	押型文土器 凹基式石塚	-4,900±100C (GaK-14941)
	NG12D層	i オリーブ黒色細粒砂質シルト ii 灰色礫混り砂・シルト薄層を挟む	20-30 ≤60		大疊	押型文土器	繩文早期
	NG13A層	i 黑色細粒シルト ii 黄～灰白色細粒シルト（火山灰質）	≤5 av.7	暗色帶 乾痕	△石器製作址	削器・ナイフ形石器・剥片・石核	繩文草創期 (15,000)
低位段丘構成層	NG13B層	i 黄褐色～灰褐色シルト質粘土 ii 黄灰色粗粒シルト質火山灰	≤5 ≤5			剥片・石核	後期旧石器
	NG13C層	暗灰黃～暗褐色シルト質粘土	av.12	↓乾痕			
上部	NG14層	up. 灰白～緑灰色シルト質砂・質粘土 lw. 黄褐色砂・砂質シルト	20-80			剥片	
	NG15層	up. 黄褐色～緑色粘土～砂礫 lw. シルト・砂礫	150-450		△石器製作址	搔器・ナイフ形石器・細部調整剥片石器	
中位段丘構成層	NG16A層	暗灰～青灰色シルト・礫混り砂互層	≤150		ヒメツハダ		
	NG16B層	i 暗褐色泥炭質粘土・沼沢地性層 ii 黄褐色火山灰質粘土・シルト：河成～沼沢地性層 iii 細粒色粗粒砂質シルト：河成層	≤20 ≤25 ≤260		ナウマンゾウの足跡 化石林、ナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石 吾彦火山灰層準準（A.s.o.4）		-87,000
	NG17A層	オリーブ灰色砂質粘土：古土壤	av.10		北花田火山灰層準（KTz）		-91,000
	NG17B層	i オリーブ灰色砂混り粘土質シルト：沼沢地性層 ii 細粒色粗粒砂質シルト：河成～沼沢地性層 iii 緑灰色板粗粒砂・細礫：河成層	av.20 av.10 av.10		ナウマンゾウ臼歯（ラメラ片）	中期旧石器	
	NG18層	綠灰色砂質シルト～綠灰色砂礫	av.65		ゾウの足跡状の凹み		
下部	NG19層 (下限未詳)	暗綠灰色砂質粘土・綠灰色砂礫 綠灰色砂混り粘土質シルト、下部で粗粒になる	av.50 35<				

→; 上面検出遺構 ↓; 下面検出遺構 ▽; 地層内検出遺構 Cb; 炭 S; 土壌
〔趙哲済2001〕に一部加筆

※なお、ATの年代については、本当では曆年較正年代による28,000年前を使用している。

引 用・参 考 文 献

大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978、「IV 長吉六反(推定・城山古墳跡)試掘調査」:『平野遺跡群試掘調査報告書』、pp.12-16

大阪市文化財協会 1978、『長原遺跡発掘調査報告』

1979a、『大阪市下水道管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書』

1979b、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書』

1979c、『関西電力管路埋設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG17)略報』

1980、『大阪市下水管渠築造工事(到達竖穴)に伴う長原遺跡発掘調査計画書』

1981a、『大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-1)略報』

1981b、『八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-2)略報』

1982、『長原遺跡発掘調査報告』II

1983、『長原遺跡発掘調査報告』III

1984a、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報』

1984b、『大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83-5)略報』

1984c、『大阪市平野区長吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-22)略報』

1984d、『大阪市出戸六反地区幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-43)略報』

1984e、『仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-54)略報』

1984f、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-63)略報』

1984g、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-65)略報』

1985a、『六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-4)略報』

1985b、『長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-18)略報』

1985c、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-49)略報』

1985d、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)略報』

1986、『大阪市土木局カルバート建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-17)略報』

1988、『長吉中学校増築に伴う長原遺跡発掘調査(NG87-67)略報』

1989、『(株)ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88-6)略報』

1990、『長吉長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG89-86)略報』

1992a、『長原遺跡発掘調査報告』V

1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』III

1993、『長吉長原東市営住宅(第2期)建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG92-39)略報』

1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』VII

1996a、『大阪市都市整備局による長吉長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-36)略報』

1996b、『大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-77)略報』

1997、『平成8年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-79)略報』

- 1998a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』I
- 1998b、『平成9年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG97-41)完了報告書』
- 1999、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』II
- 2000a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』III
- 2000b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV
- 2001a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』IV
- 2001b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI
- 2002a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』V
- 2002b、『長原遺跡発掘調査報告』VII
- 2003a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VI
- 2003b、『平成14年度大阪市住宅局による長吉六反住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG02-9)完了報告書』
- 2004a、『長原遺跡発掘調査報告』XI
- 2004b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VII
- 2004c、『平成15年度大阪市住宅局による長吉出戸南住宅工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG03-5)完了報告書』
- 2005a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VIII
- 2005b、『長原遺跡発掘調査報告』XII
- 2006a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』IX
- 2006b、『平成17年度長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査その2(NG05-3)完了報告書』
- 2006c、『長原遺跡発掘調査報告』XV
- 2007、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』X
- 2008a、『長原遺跡発掘調査報告』XVII
- 2008b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XI
- 大阪文化財センター1980、『亀井・城山』
- 1986a、『城山(その1)』
- 1986b、『城山(その2)』
- 1986c、『城山(その3)』
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.315-327
- 旧石器文化談話会編2007、『旧石器考古学辞典』(三訂版) 学生社
- 古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』I
- 小山正忠・竹原秀雄1996、『新版 標準土色帳』17版 日本色研事業株式会社
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.102-114
- 佐藤宏之1988、「台形様石器研究序論」：『考古学雑誌』第73巻第3号、pp.1-37
- 1992、『日本旧石器文化の構造と進化』 柏書房
- 高橋工1999a、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」：大阪

- 市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』II、pp.79－106
- 1999b、「奈良時代以降の長原遺跡東北地区」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』II、pp.123－127
- 高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳2000、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』III、pp.10－11
- 竹岡俊樹1989、『石器研究法』 言叢社
- 趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』VIII、pp.41－44
- 2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI、pp.7－28
- 2007、「火山灰分析」：大阪市文化財協会編『瓜破遺跡発掘調査報告』V、pp.61－64
- 辻美紀2005、「ウシを納めた穴」：大阪市文化財協会編『葦火』114号、p.5
- 奈良県立橿原考古学研究所1996、「三郷町峯ノ阪遺跡発掘調査概報」：『奈良県遺跡調査概報』1995年度
- 兵庫県教育委員会1990、「七日市遺跡(1)－旧石器時代遺跡の調査」：『兵庫県文化財調査報告書』第72－1冊
- 1991、「多紀郡西紀町板井寺ヶ谷遺跡－旧石器時代の調査」：『兵庫県文化財調査報告書』第96－1冊
- 2004、「七日市遺跡(Ⅲ)旧石器時代の調査－近畿自動車道敦賀線(吉川～福知山)建設事業(春日JC T)に伴う発掘調査報告書－」
- 福沢仁之1995、「天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼年稿堆積物」：『第四紀研究』第34卷第3号、pp.135－149
- 町田洋・新井房夫2003、『新編 火山灰アトラス 日本列島とその周辺』 東京大学出版会
- 松本啓子2003、「文字のあるくらし」：大阪市文化財協会編『葦火』107号、pp.4－5
- 光石鳴巳1999、「奈良県峯ノ阪遺跡の石器群」：近畿旧石器交流会編『櫃石島技法の再検討』第23回近畿旧石器交流会資料集
- 村元健一2003a、「長原遺跡東部地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VI、pp.9－18
- 2003b、「長原遺跡とその周辺における古代の様相」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VI、pp.86－100
- 八尾市文化財調査研究会2000a、「V 太子堂遺跡第7次調査(TS97-7)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.59－73
- 2000b、「VI 太子堂遺跡第8次調査(TS98-8)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.75－93
- 吉川周作1976、「大阪層群の火山灰について」：『地質学雑誌』8、pp.497－515
- 1981、「堆積物中の火山ガラスの研究－大阪平野の更新～完新統について－」：『第四紀研究』第20卷第2号、pp.75－87
- 吉川周作・井内芳郎1991、「琵琶湖高島沖ボーリングコアの火山灰層序」：地学団体研究会編『地球科学』45、pp.81－100
- 1993、「琵琶湖高島沖ボーリング火山灰からみた中期更新世～完新世の噴火活動史」：地学団体研究会編『地球科学』47、pp.97－109
- 吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和1986、「近畿地方中央部に分布する後期更新世～完新世の火山灰層について」：地学団体研究会編『地球科学』第40卷1号、pp.18－38

あとがき

ここに長原遺跡の発掘調査報告書を上梓することができました。1978年以来、当協会が編集・発行して参りました『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告』シリーズとしては第16番目の刊行となります。この間の30年という年月で、私どもは多くの歴史的事実を明らかなものとし、大阪の歴史を復元する作業の重要な役割を担ったものと自負しております。これもひとえに関係者・関係諸機関、および近隣の皆様の支えとご理解の賜物と、心より感謝しております。

今回の調査でも、2万8千年以上も前の後期旧石器時代前半期に、確実に位置づけることのできる石器遺物が見つかったことや、本遺跡の集落変遷の中で、今まで資料の乏しかった時期である平安時代前期の良好な遺構・遺物を検出したことなどは、より具体的に歴史的景観を再現し得る資料として、特筆すべきことでしょう。

これらの資料を広く一般に活用していただけよう、努力して参りますので、今後とも皆様のご協力・ご支援を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

(積山 洋)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- い 生駒西麓産 38, 39
か 瓦器 49, 50, 57, 93, 100,
102, 104
火山ガラス 61, 63~71, 75, 105
火山灰 8, 12, 13, 16, 18, 19,
21, 47, 61, 63, 66, 68~
71, 73~75, 86, 87, 97,
102, 105
灰釉陶器 45
け 畦畔 8, 28, 36, 37, 52, 55
こ 黒色土器 17, 35, 36, 38, 39, 44~
46, 50, 93, 96
後期旧石器時代 1, 2, 4, 5, 21, 47, 73,
74, 77, 79, 84, 86, 87,
97, 101, 102
さ 阪手火山灰 70, 71, 74, 75, 87, 101
サヌカイト 20, 21, 24, 47, 73, 74,
77, 85, 88, 90, 101
し 地震 6, 15~18, 61, 102
す 水田 2, 4~6, 8, 9, 11, 12,
17, 25~29, 35, 36, 39,
44~48, 52, 92, 97, 100
~102
せ 製塩土器 5, 35, 45
青花 49, 58, 102
石刃技法 74
石核 20~24, 47, 76, 77, 79~
82, 84~88, 90, 97, 102
石器遺物 4, 8, 14, 17~23, 47,
61, 62, 64, 73~77, 87~
91, 97, 101
瀬戸内技法 73, 74, 84, 86, 87
瀬戸美濃陶器 49, 58
- 線刻 27, 35, 38, 39, 44, 45,
94
た 台形石器 73, 76, 77, 79, 80, 84~
86, 88, 90
て 手培形土器 57
な ナイフ様石器 76, 77, 79, 80, 85, 86,
88, 90
は 畠 5, 9, 11, 25, 27, 36,
39, 44, 46~48, 97, 100,
102
剥片 4, 20, 21, 23, 24, 47,
76, 77, 79~82, 84~91,
97, 102
ひ 肥前磁器 46, 49, 58
平安神宮火山灰 8, 21, 47, 61, 70, 71,
87, 101, 102
平安時代Ⅰ期 35, 36, 38, 46, 92~96,
100, 102
平安時代Ⅱ期 27, 35, 36, 38, 39, 46,
47, 57, 92~96, 100,
102
平安時代Ⅲ期 38, 46, 47, 92~96, 100,
102
平安時代Ⅳ期 56, 57, 92~94, 100
ほ 墨書(土器) 36, 44, 45, 57, 58, 94
掘立柱建物 2, 4, 5, 27, 29~32, 92,
97, 100, 102
よ 横大路火山灰 61, 70, 71, 101, 102
横長剥片 21, 77, 79, 80, 82, 84~
88, 90
り 流路 2, 4~6, 8, 15, 49, 50,
52, 59, 60, 97, 100
わ 和同開珎 5, 45, 94

〈地名・遺跡名など〉

- い 板井寺ケ谷遺跡 87, 105
う 瓜破遺跡 1, 103~105
な 長原遺跡 1, 2, 4, 5, 9, 11, 15,
16, 18, 19, 49, 59, 71,
73~75, 86, 87, 92, 93,
- 95~97, 100, 102~105
七日市遺跡 87, 105
み 峯ノ阪遺跡 87, 105
や 八尾南遺跡 1, 73, 75
ろ 六反自然堤防 92, 94, 96

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XVI

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in fiscal 2002 and 2006

March 2008

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

- SA : Palisade or fence
- SB : Building
- SD : Ditch
- SE : Well
- SK : Pit
- SP : Pit or Posthole
- SR : Paddy field balk
- SX : Other feartures
- NR : Natural Stream

CONTENTS

S.1 Tephrochronological analysis	61
1) Introduction	61
2) Sampling and Method	61
3) Results	62
i) Samples of V1	
ii) Samples of V2	
4) Correlation of Tephra	70
i) Correlation of Tephra from V1	
ii) Correlation of Tephra from V2	
S.2 Lithic Industry unearthed under Aira Tn Tephra stratum in Nagahara Site	73
1) Introduction	73
2) Lithic concentration of stratum14 in Nagakhara NG90-62 area	74
i) Stratigraphic position	
ii) Horizontal Distribution	
iii) Outline of lithic concentration	
3) Comparison with lithic concentrations of in Nagahara NG02-9 area	86
4) Conclusion	86
S.3 Nagahara Site in the early Heian Period	92
1) Introduction	92
2) Features and finds of the early Heian Period	92
3) Settlements in the early Heian Period	94
4) Conclusion	96
Chapter V Report Conclusion	97
References and Bibliography.....	103
Postscript and Index	
English Contents and Summary	
Reference Card	

ENGLISH SUMMARY

Outline of the investigation

In this Volume, we report results of the 2 excavations at the northeastern sector of the Nagahara site in fiscal 2002 (NG02-9) and 2006 (NG06-2), prior to the development of the Municipal Apartmenthouse complex. The both sites are very near by and located at Nagayoshi-Rokutan area in the Hirano Ward in the southeastern sector of Osaka city, Japan.

Results of the investigation

1. The Late Paleolithic Age

In the excavation NG02-9, we found the concentration of stone artifacts in the stratum 14, which is under Aira TN Tephra stratum which is dated before more than 28,000 years from now.

2. Early Heian Period

In the excavation NG02-9, we found lots of features and finds. There are remains of agricultural ditches, baulks of wet rice fields, postholes of buildings and pits, which would have consisted some part of settlement in early Heian Period. During the early Heian Period (in the end of the 8th and the 9th century) the agricultural ditches and wet rice fields were maintained while the buildings were not so long time available. The center of this settlement might have moved to another place from this area.

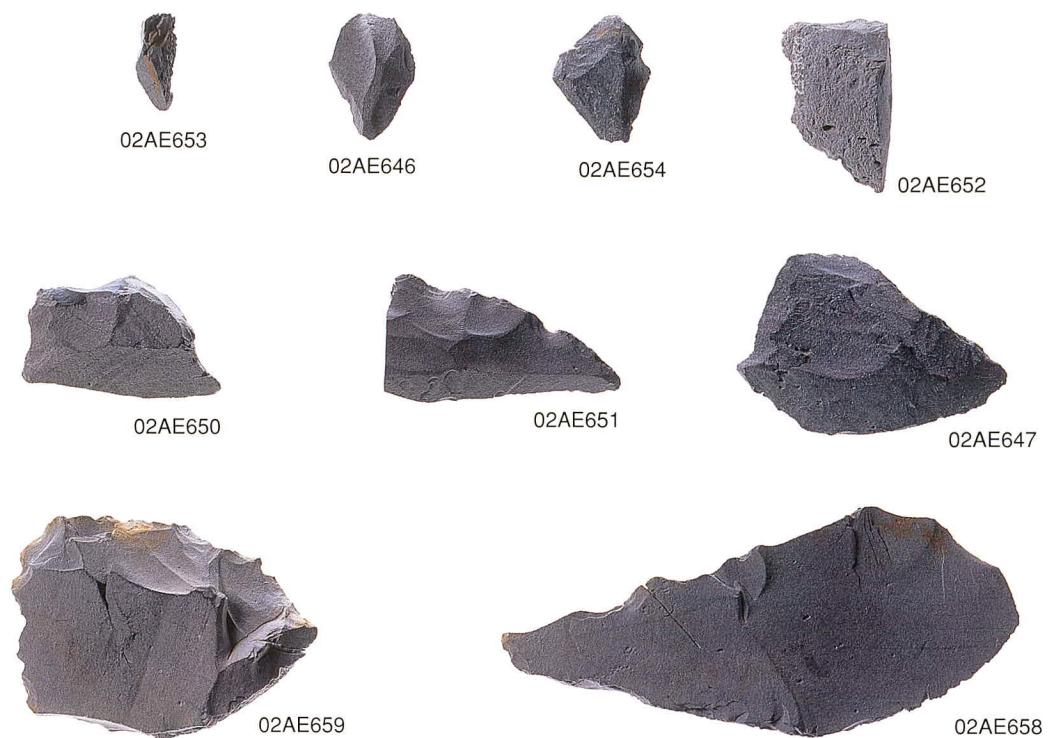
3. Kamakura Period

In the excavation NG06-2, we also found many agricultural ditches during Kamakura Period.

報 告 書 抄 錄

原 色 図 版

原色図版一
NG02—9次調査（一）



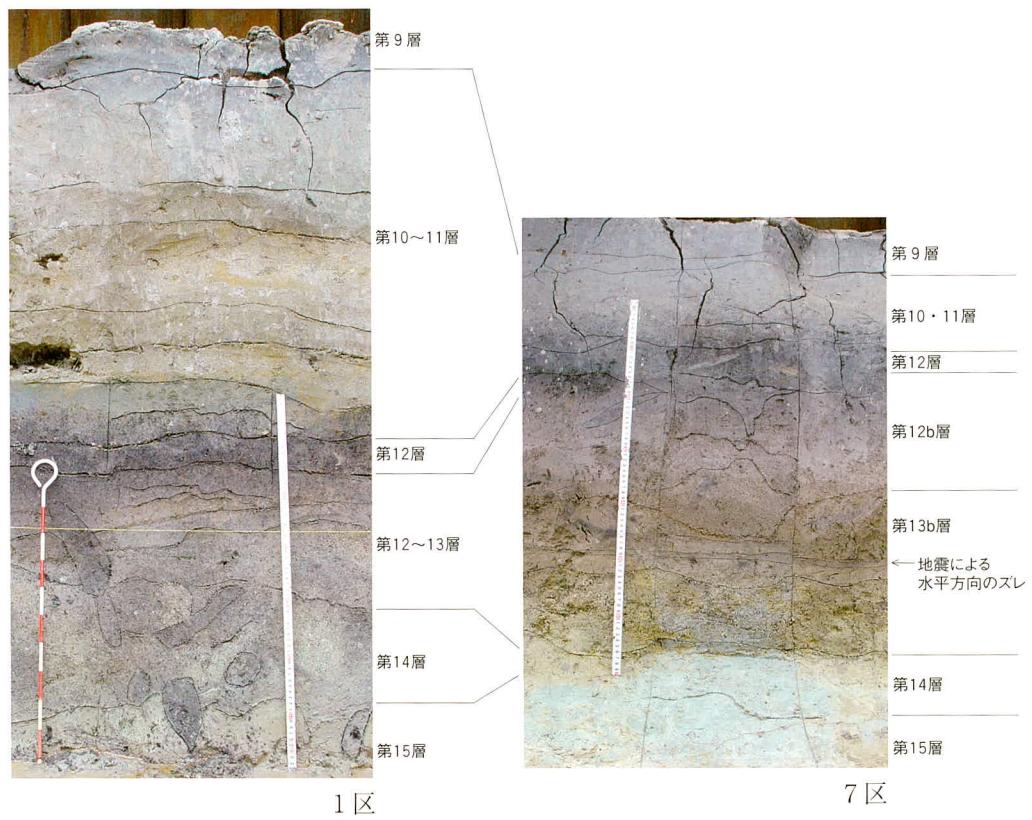
NG02—9次調査出土の石器



NG02—9次調査出土の平安時代の土器



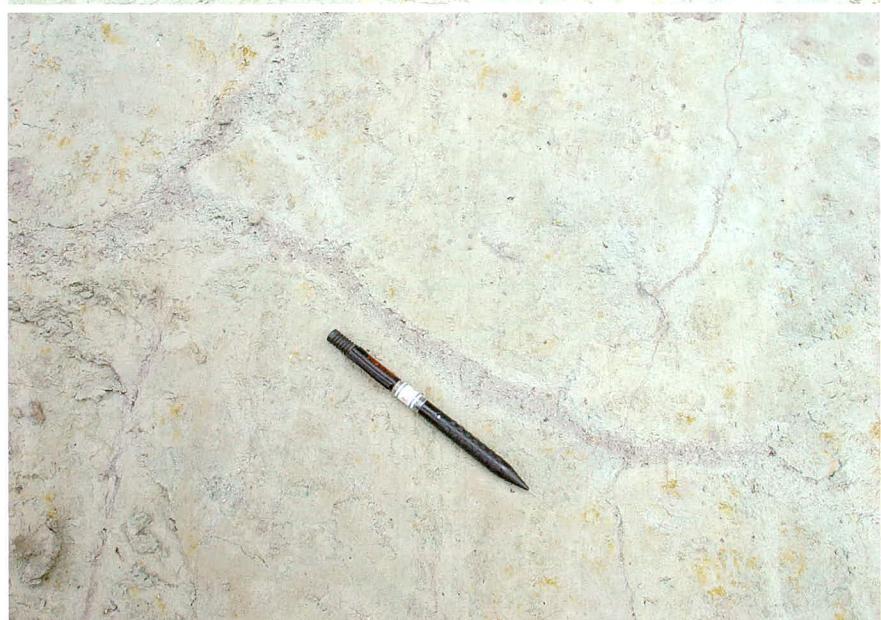
NG02—9次調査南壁(第9層以下)



7区地震の痕跡
(南壁)



乾痕(第14層上面)



生痕(南壁第10・11層)



図 版

南壁断面1
(北から、7区第6層)



南壁断面2
(北から、7区第7層)

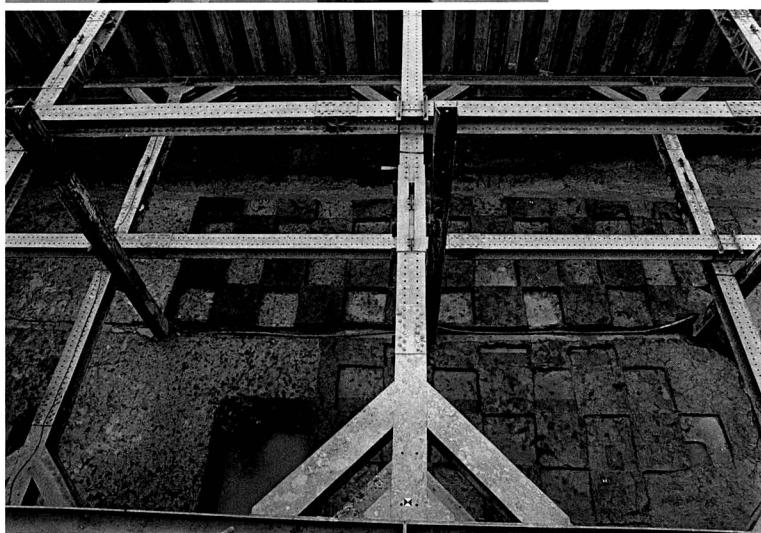


南壁断面3
(北から、7区第9層
以下)





第15層上面検出状況
(西から)



旧石器の調査
(北から)



石器出土状況
(北東から)

図版三 NG02-9次調査 平安時代の遺構（一）

第3層上面全景
(西から)



第3層上面の遺構(南西から)



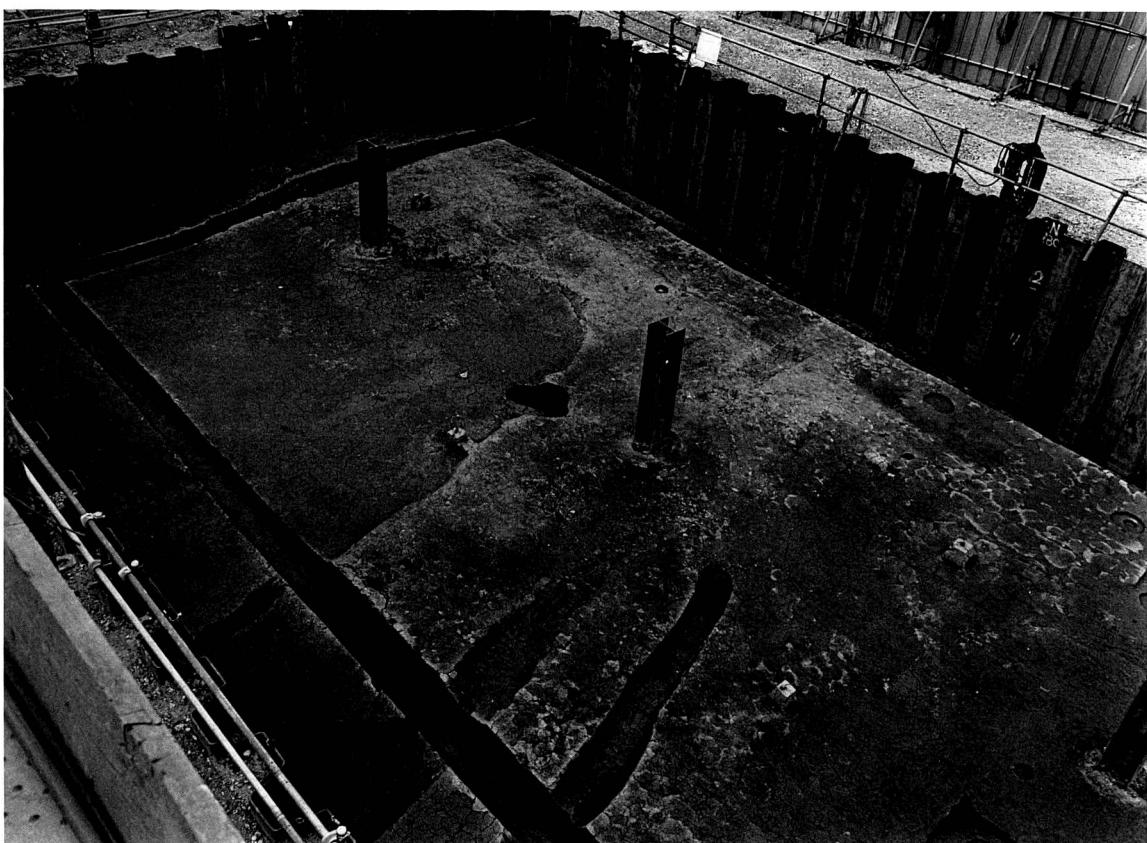
平安時代の建物SB301(南から)



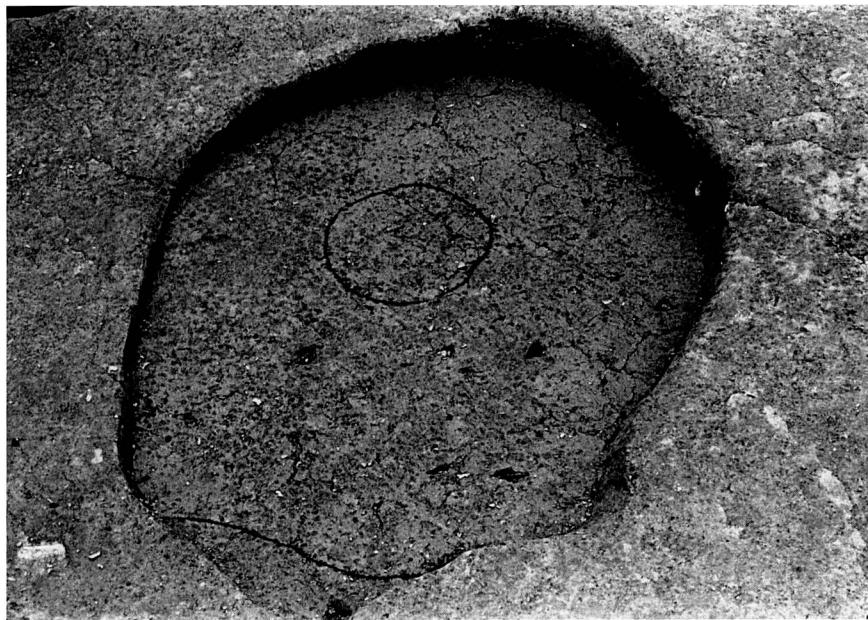
平安時代の建物SB302・303(南から)



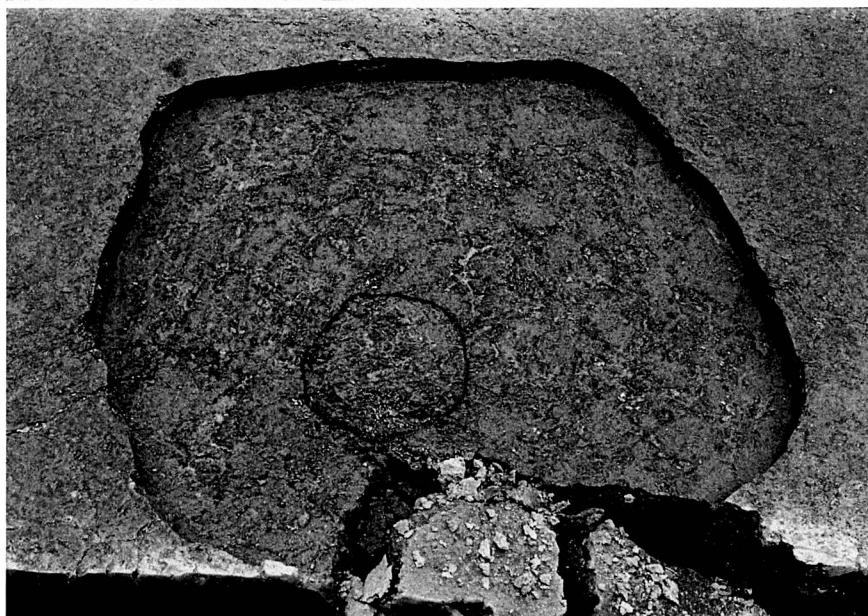
平安時代の水田SX301・401(南西から)



平安時代の水田SX302・402(南東から)



建物SB301の柱穴
SP313
(南から)



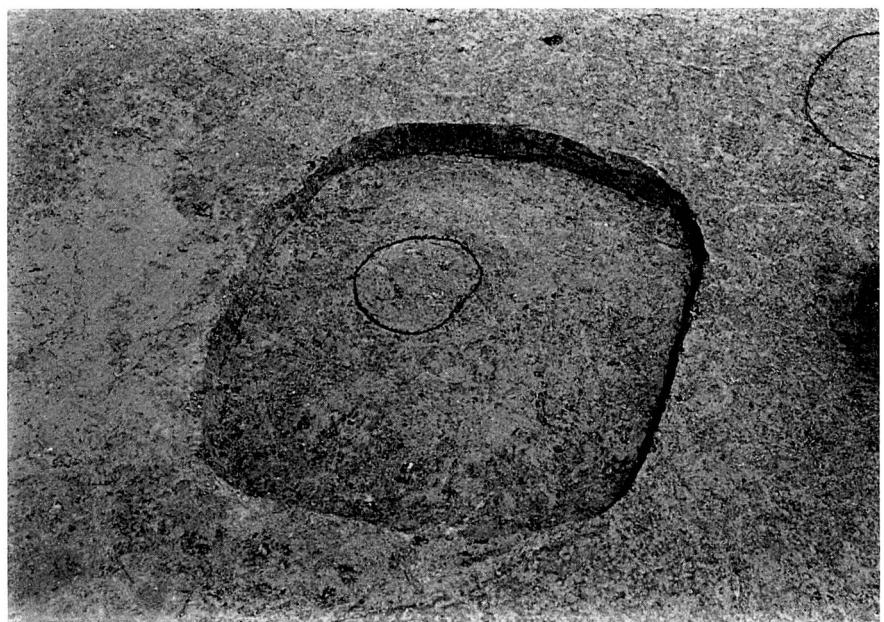
建物SB301の柱穴
SP332
(南から)



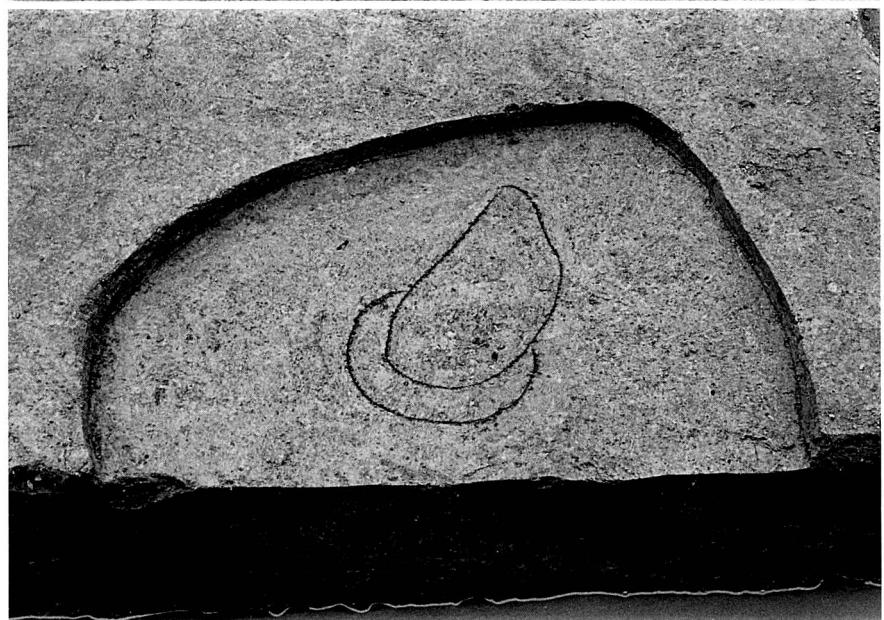
建物SB301の柱穴
SP326
(西から)

図版七 NG02-9次調査 平安時代の遺構（五）

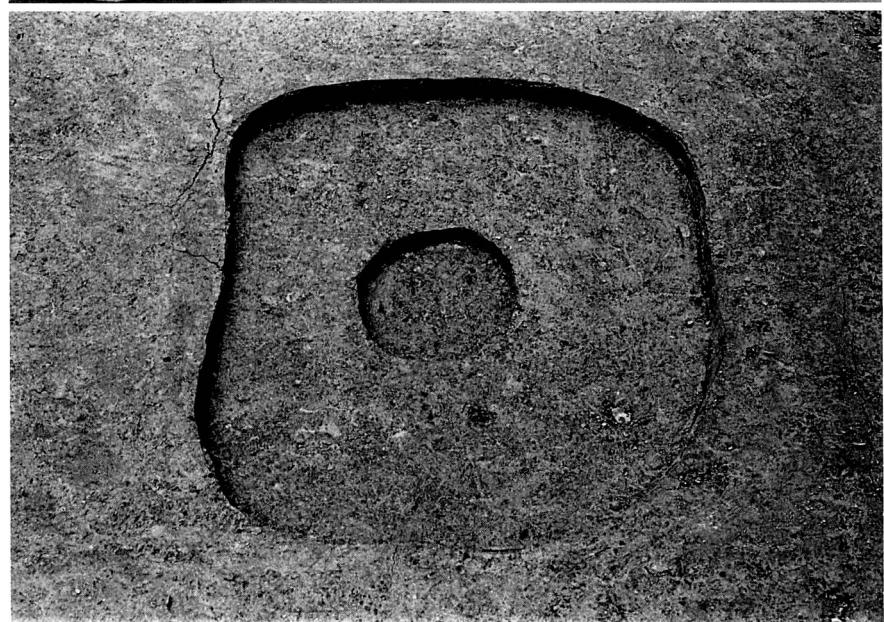
建物SB301の柱穴
SP311
(南から)

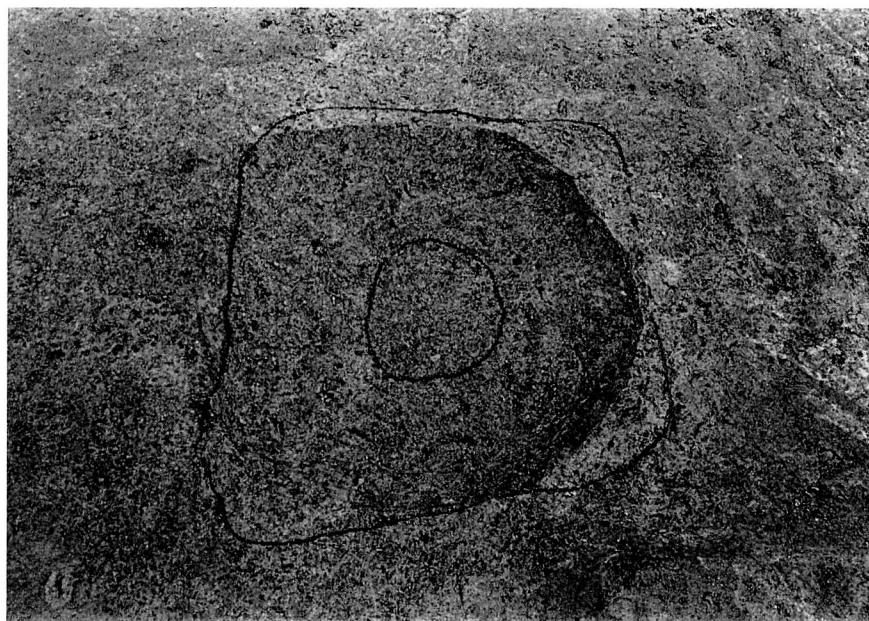


建物SB301の柱穴
SP337
(南から)

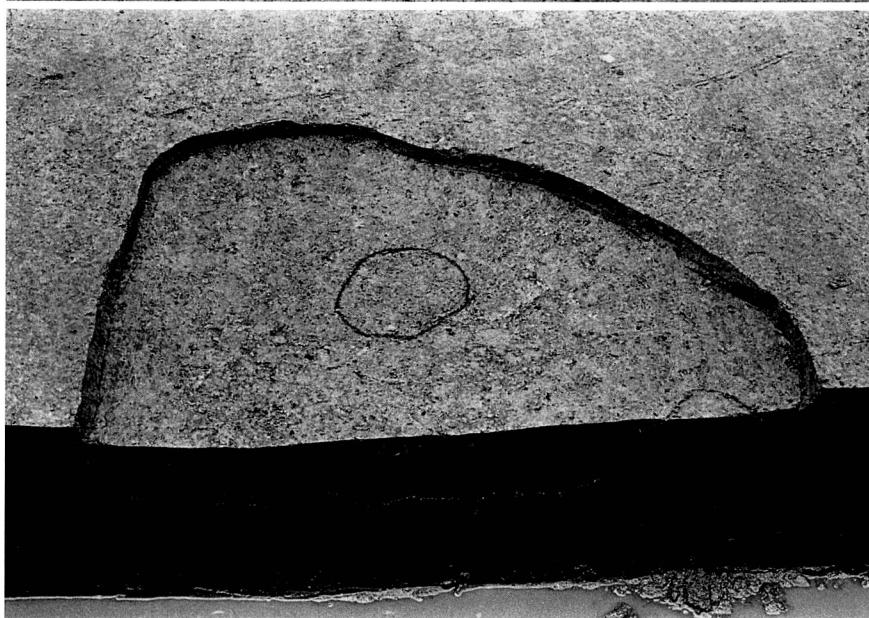


建物SB301の柱穴
SP330
(西から)





建物SB301の柱穴
SP310
(南から)

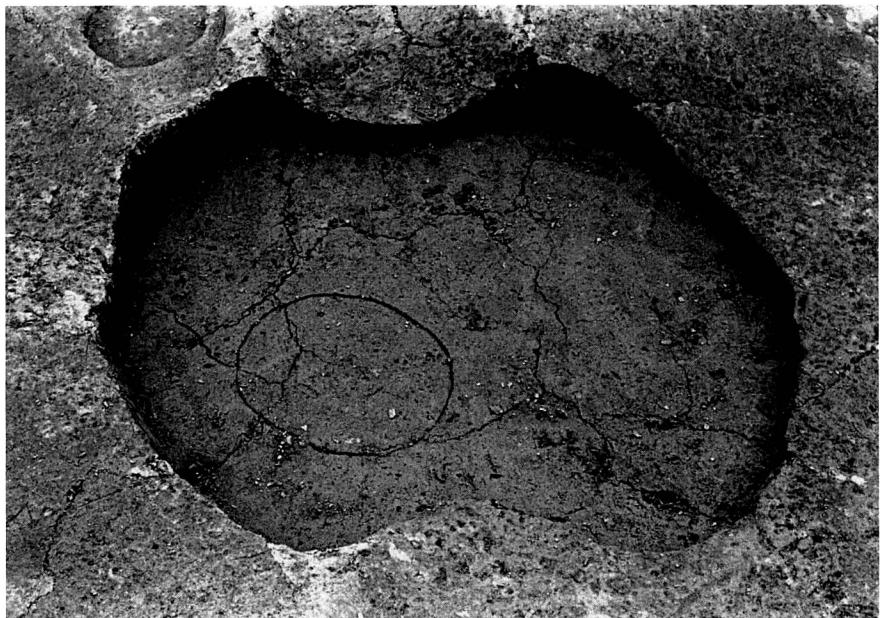


建物SB301の柱穴
SP339
(南から)

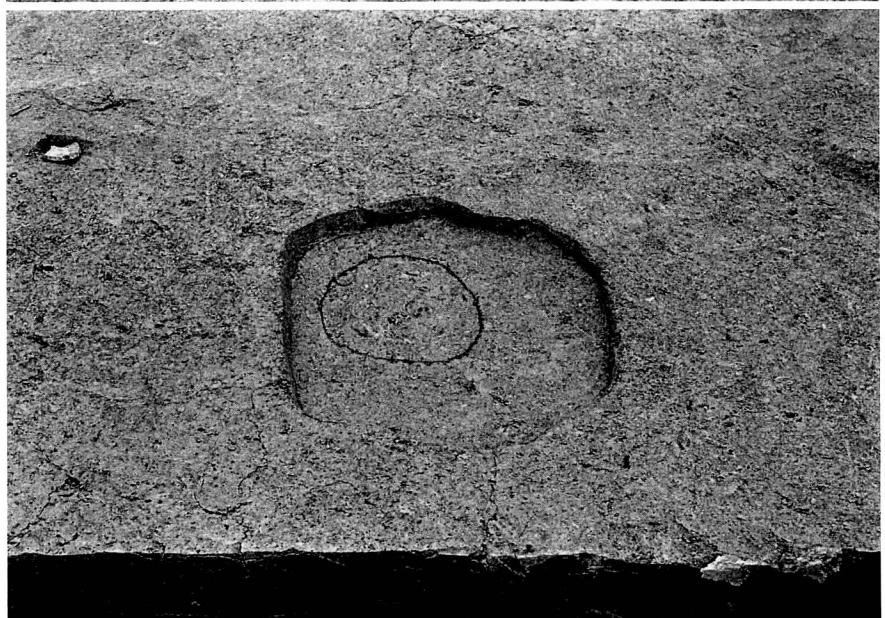


建物SB301の柱穴
SP331
(西から)

建物SB301の柱穴
SP335
(南から)

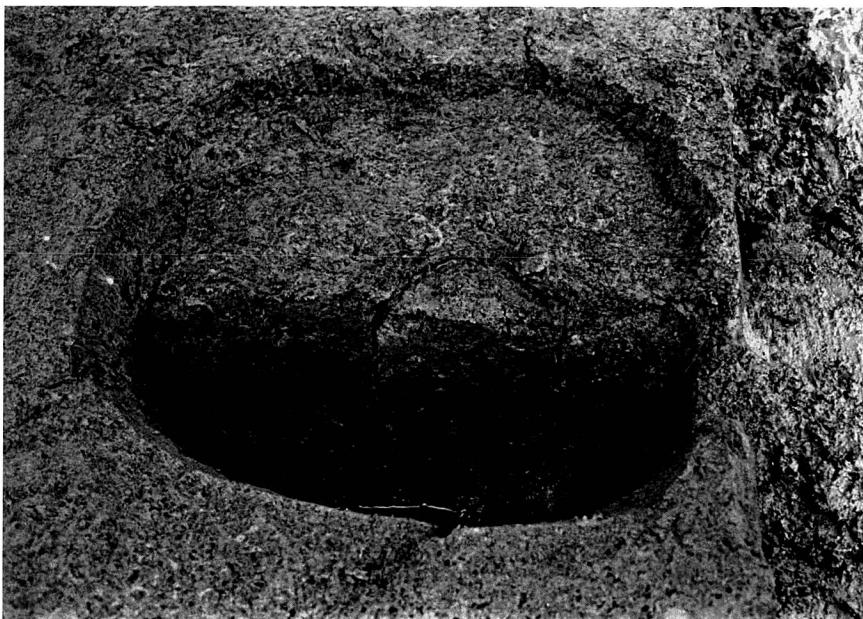


建物SB301の柱穴
SP340
(南から)

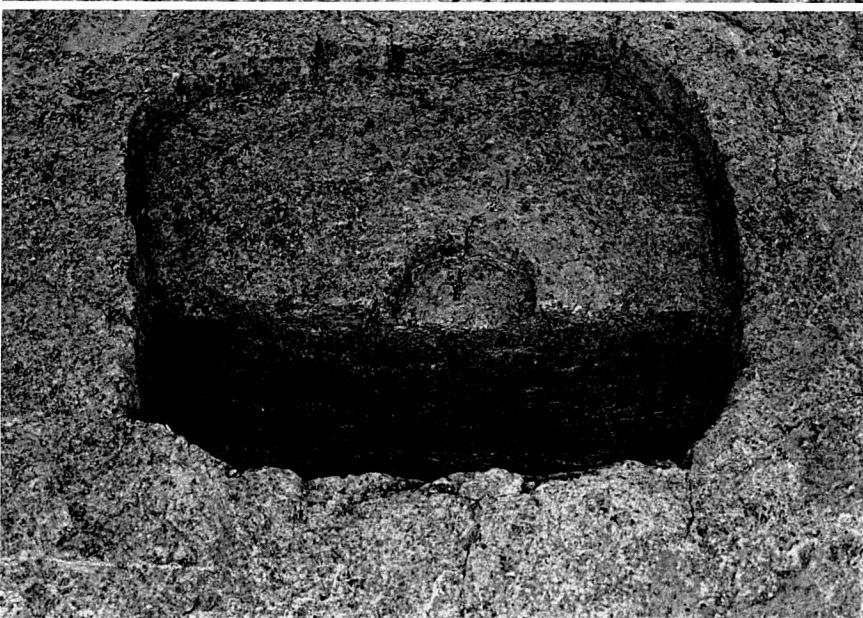


建物SB301の柱穴
SP333
(西から)

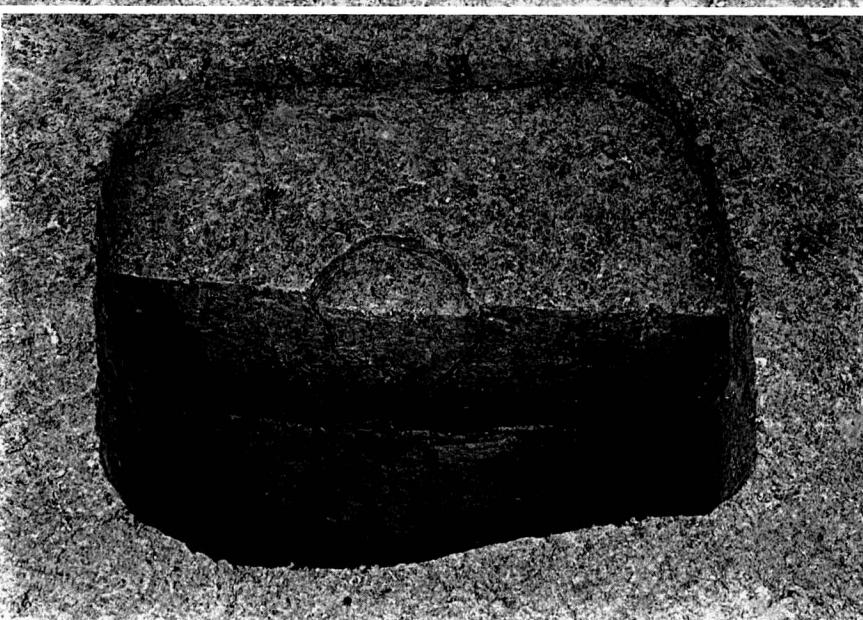




建物SB302の柱穴
SP353
(北から)



建物SB302の柱穴
SP354
(北から)



建物SB302の柱穴
SP355
(北から)

建物SB302の柱穴
SP358
(北から)



建物SB302の柱穴
SP360
(北から)

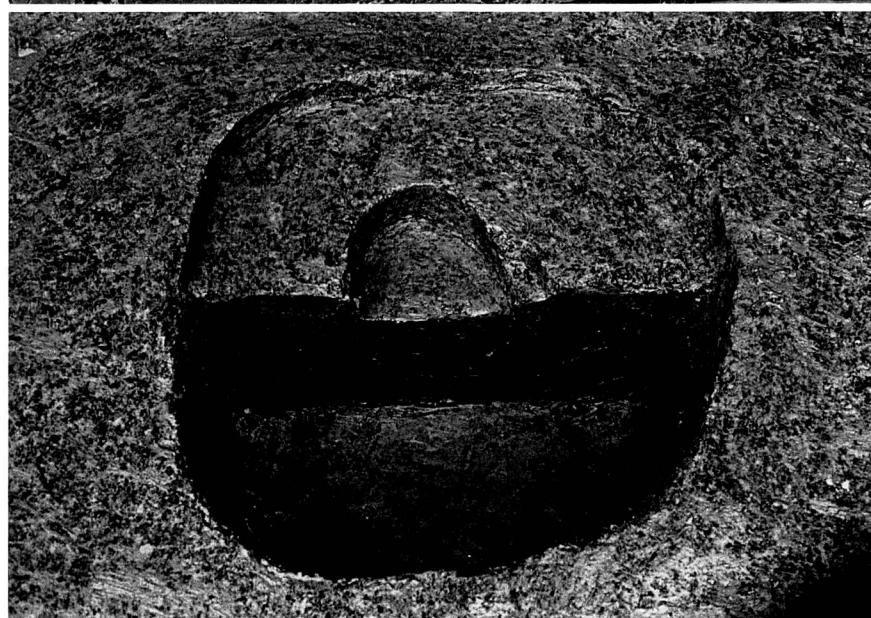


建物SB302の柱穴
SP356
(北から)

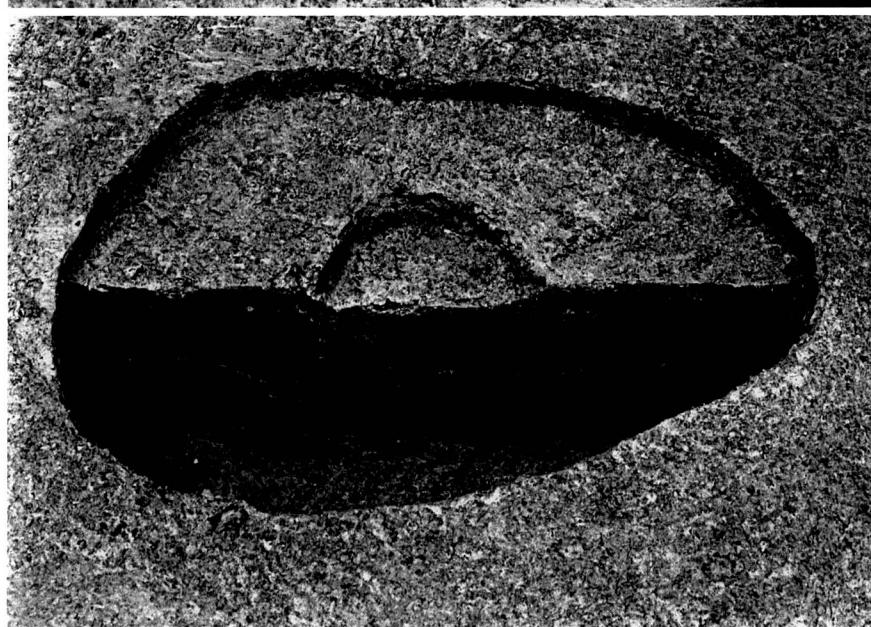




建物SB302の柱穴
SP357
(北から)



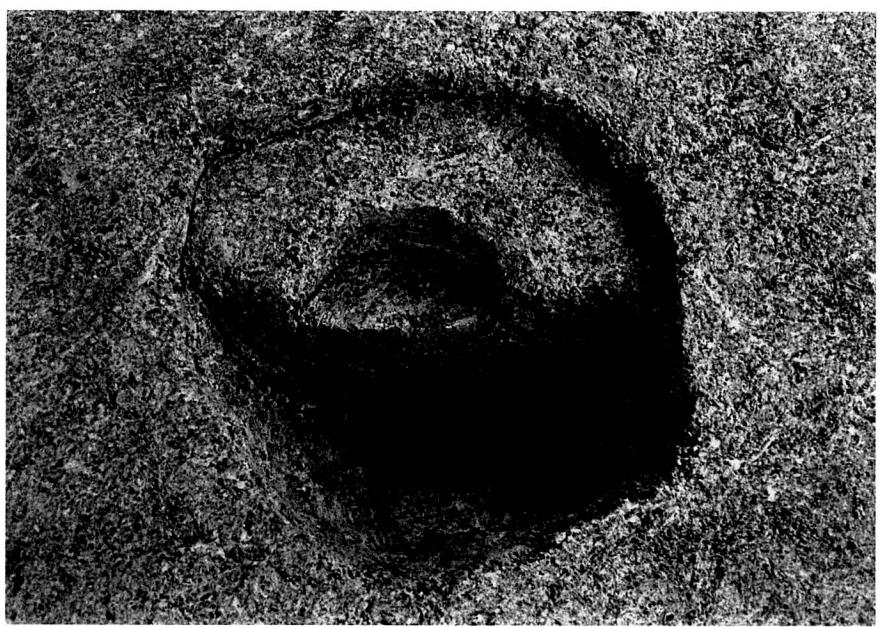
建物SB303の柱穴
SP317
(北から)



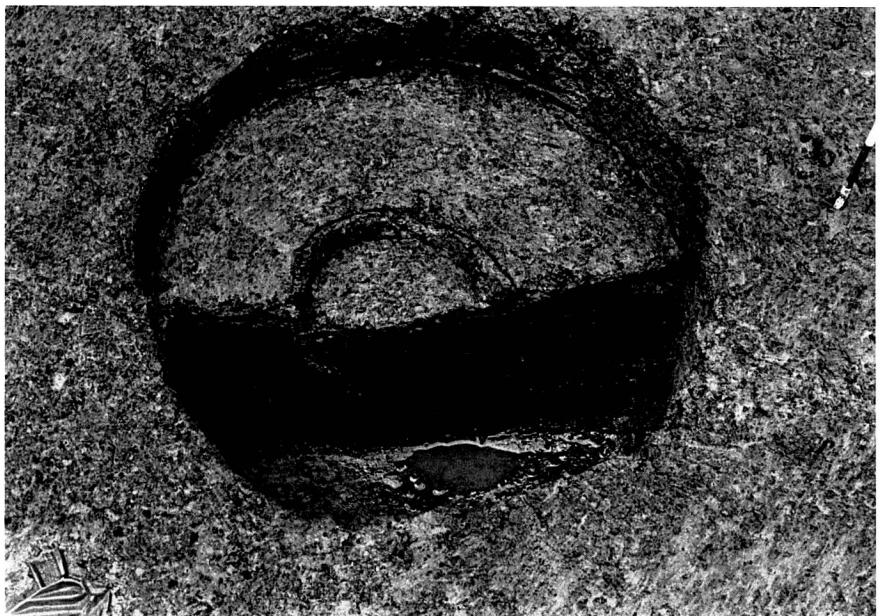
建物SB303の柱穴
SP344
(北から)

図版一三 NG02—9次調査 平安時代の遺構（一一）

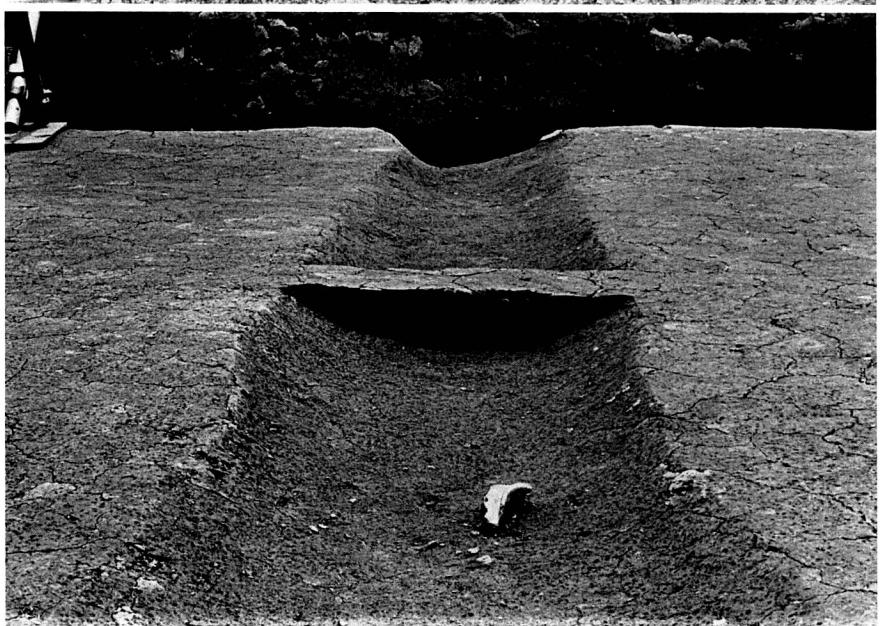
建物SB303の柱穴
SP319
(南から)



建物SB303の柱穴
SP343
(北から)



溝SD307
(南から)



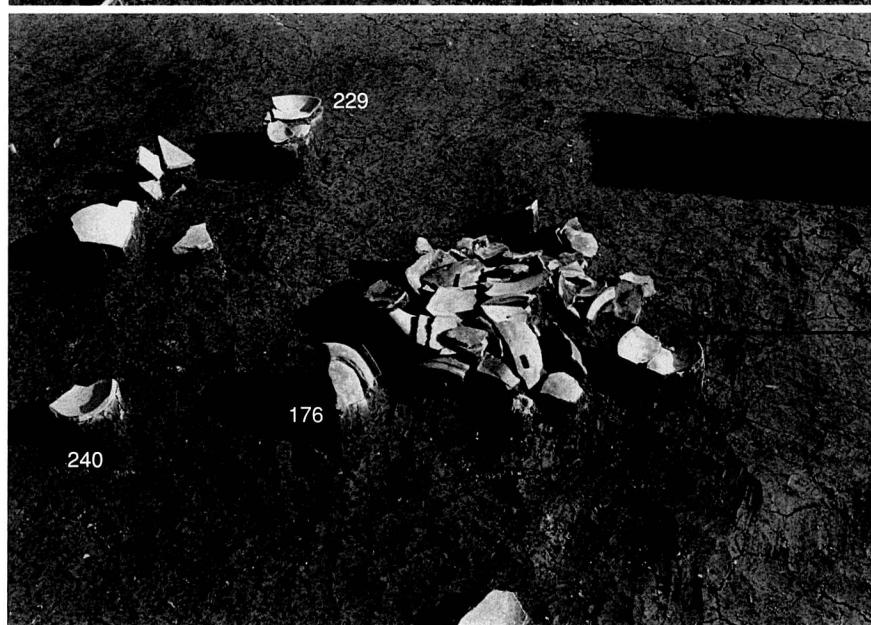


第3b層遺物出土状況
(1)
(北から)



第3b層遺物出土状況
(2)
(北から)

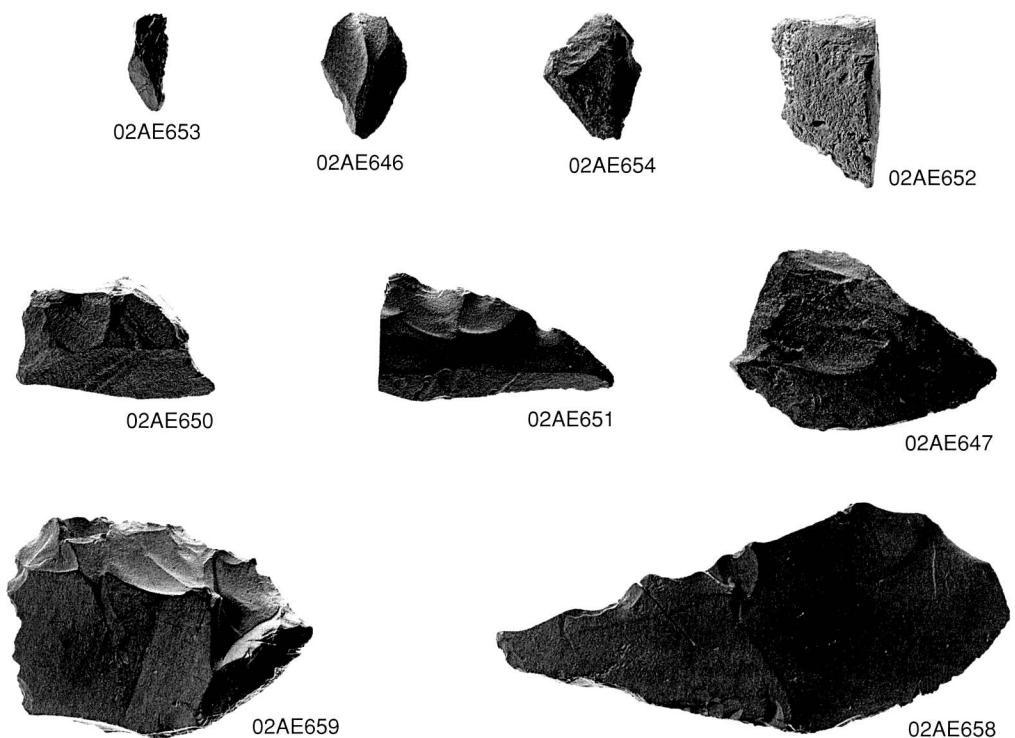
138・141・142
143・147・149
150・153・155
164・165・172
173・174・177
178・180・183
199・205



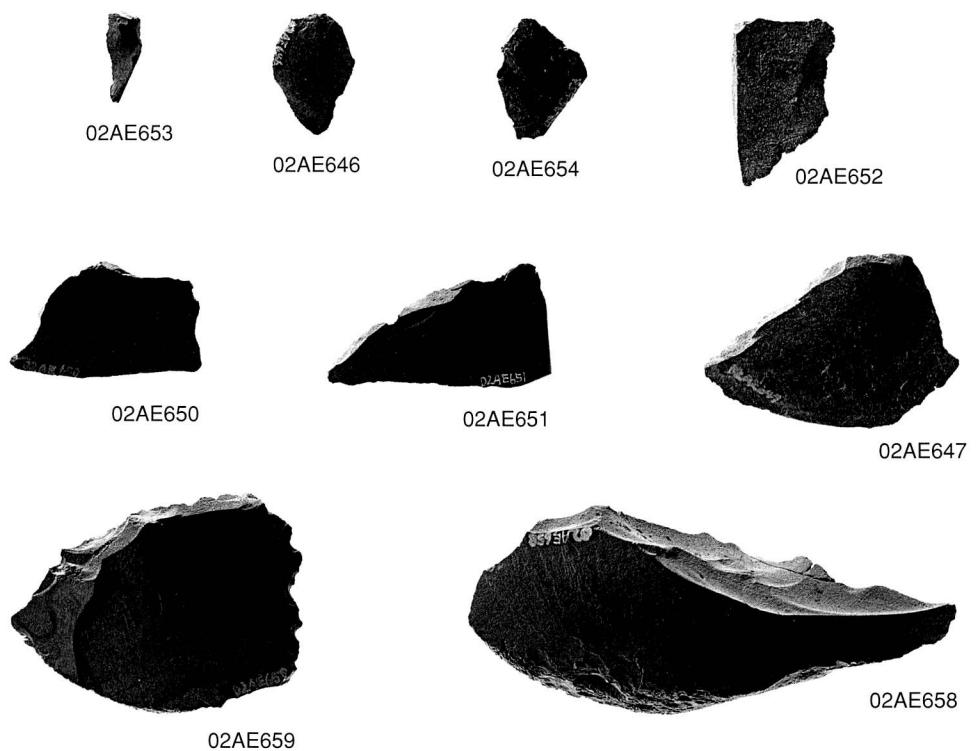
第3b層遺物出土状況
(3)
(北から)

138・141・142
143・147・149
150・153・155
164・165・172
173・174・177
178・180・183
199・205

図版一五 NG02-9次調査 後期旧石器時代の遺物

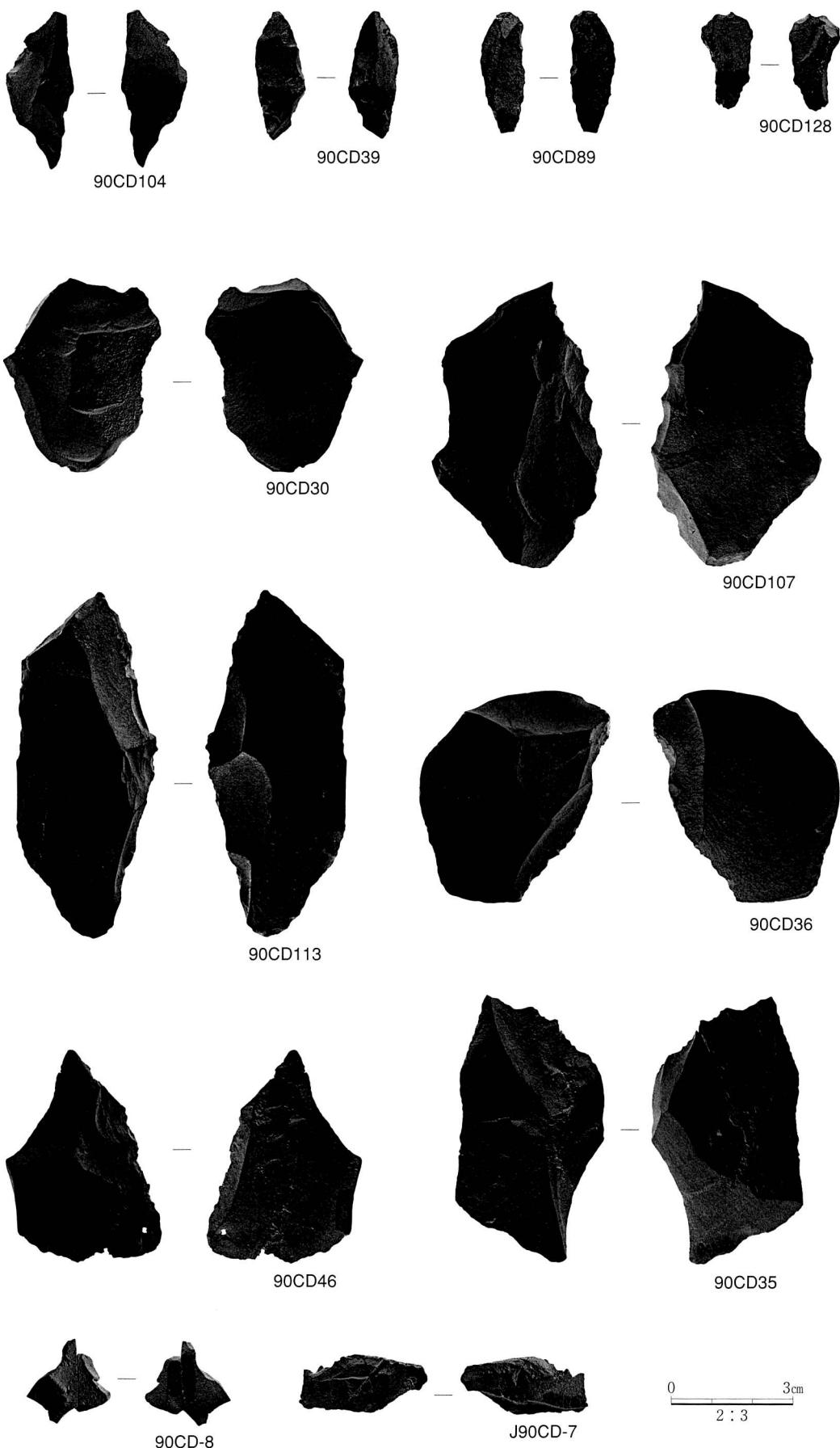


NG02-9 出土石器遺物(表面)

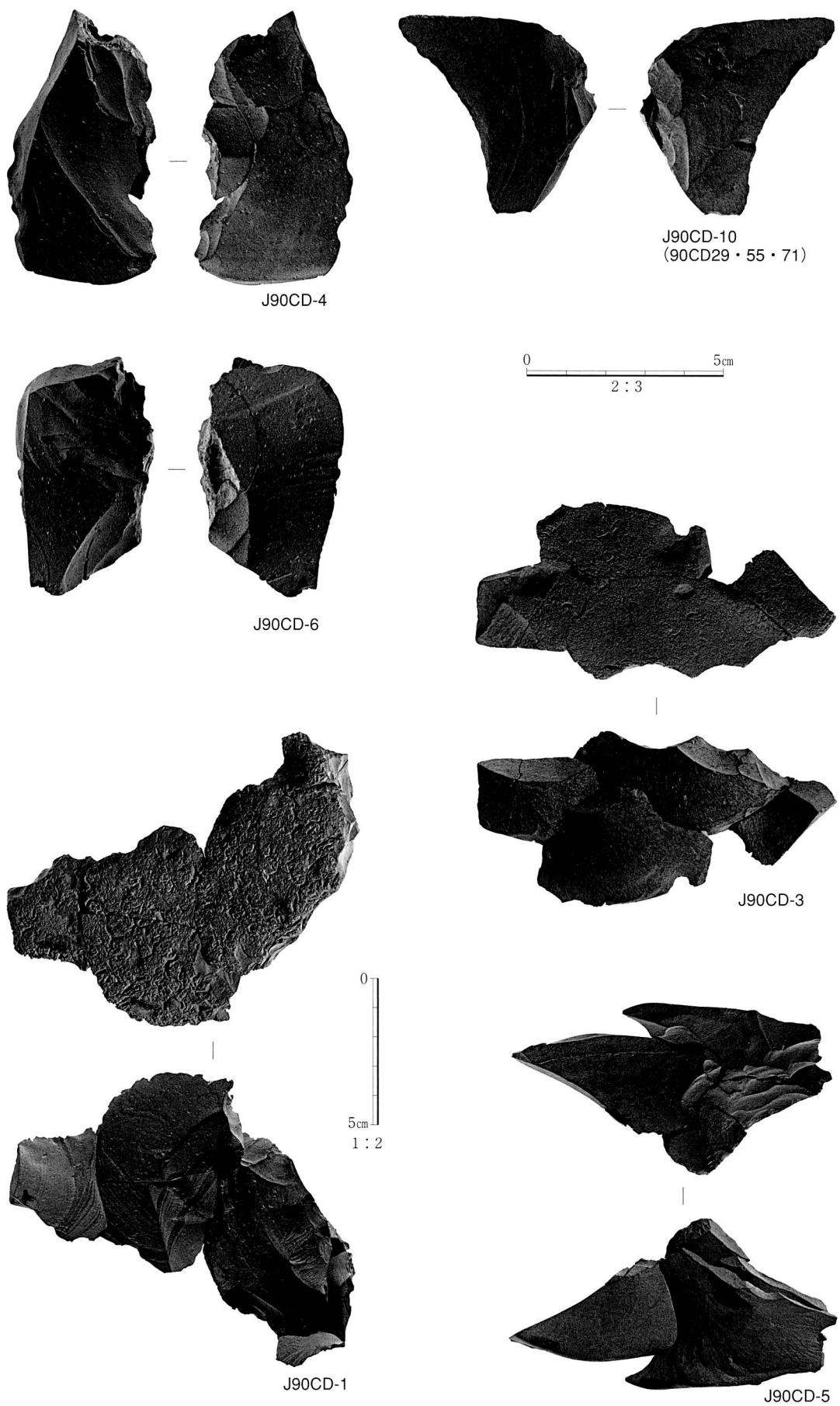


NG02-9 出土石器遺物(裏面)

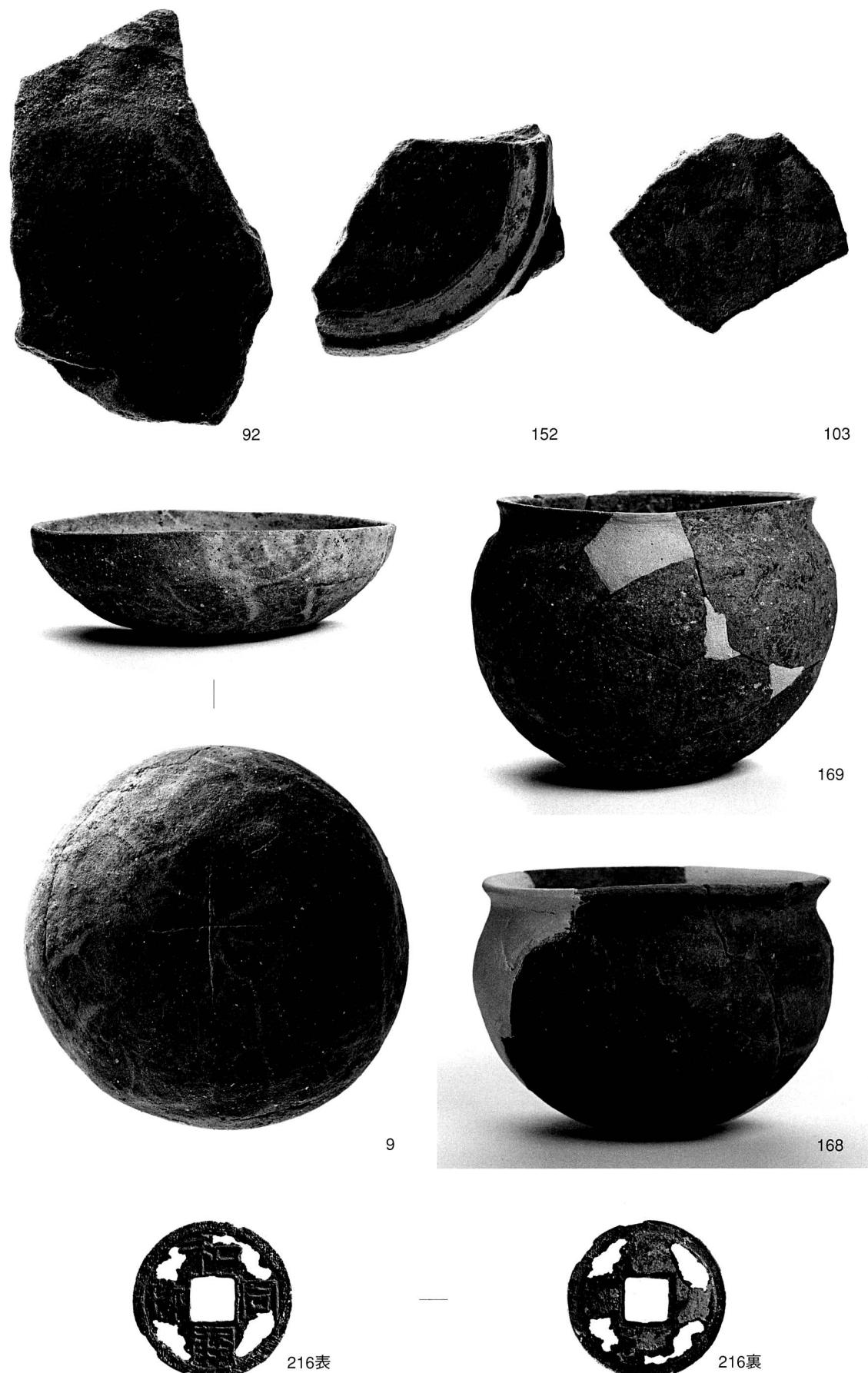
図版一六 後期旧石器時代の遺物（参考資料一）



図版一七 後期旧石器時代の遺物（参考資料二）



NG90-62次調査地の接合資料



第4d層(92)、第4b・c層(103)、第3b・c層(152・168・169・216)、SP356(9)

図版一九 NG02—9次調査 平安時代の遺物（二）



100



101



99



220



177



140



229



154



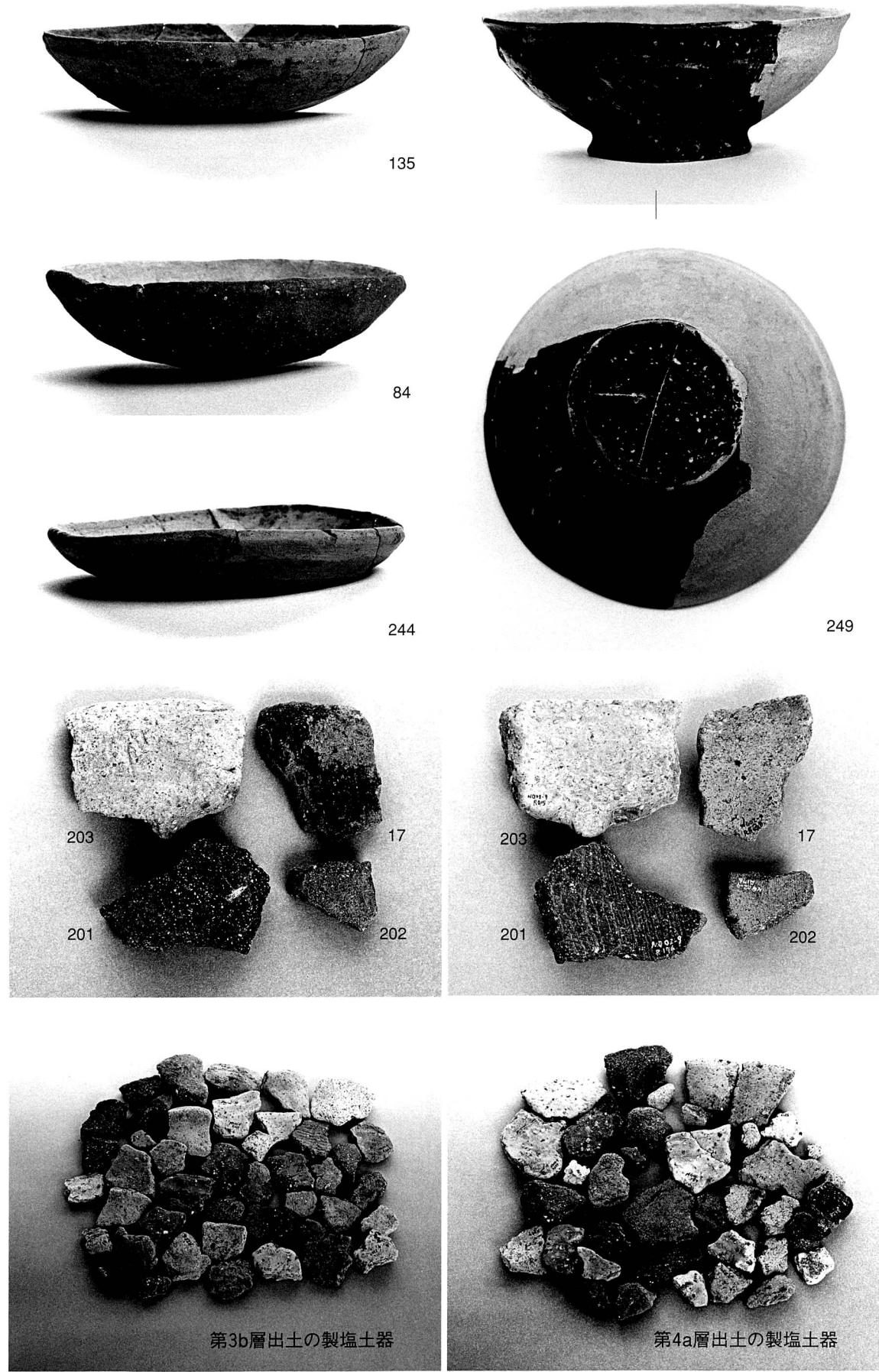
193内面



193外面

第4b・c層(99・100・101)、第3b・c層(140・154・177・193)、第3a層(220)、第2b・c層(229)

図版一〇 NG02-9・06-2次調査 平安時代の遺物(三)



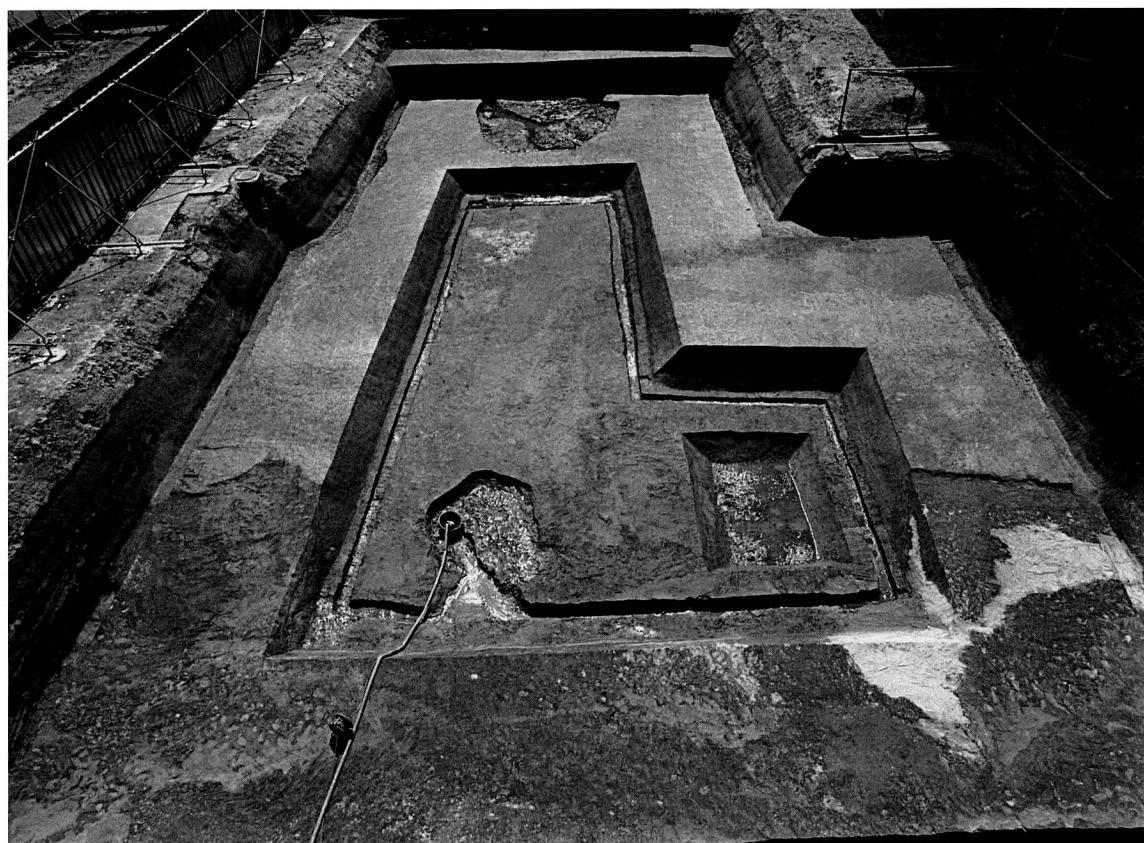
第4d層(84)、NR401(249)、第3b・c層(135・201・202・203)、SP360(17)、SP407(244)



調査区東壁地層断面(南西から)



調査区東壁NR401断面(西から)



中央トレンチ第6層上面検出状況(北から)



第4bi層上面遺構検出状況(北西から)



第4a層上面遺構検出状況(北から)



第2b層下面・第3b層上面遺構完掘状況(北から)

大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告 XVI

ISBN 978-4-86305-006-8

2008年3月31日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

<http://www.occpa.or.jp/>

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0041 大阪市中央区北浜 2-1-14

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XVI

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in fiscal 2002 and 2006

March 2008

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XVI

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in fiscal 2002 and 2006

March 2008

Osaka City Cultural Properties Association